續國譯漢文大成

文學部　六十五の下

309
65

ス

始

續國譯漢文大成

文學部　第六十五册（第十七帙の下ノ一）

蘇東坡詩集　六の一

吉田静郎氏　寄贈本

309
65

蘇東坡詩集 第六卷 目次

卷四十二

古今體詩

和陶游斜川……一
子由生日……三
以黃子木拄杖爲子由生日之壽……六
上元夜過赴儋守召獨坐有感……八
過於海舶得邁寄書酒作詩遠和之皆粲然可觀……一〇
和陶郭主簿……一三
海南人不作寒食而以上巳上冢……一七
往年宿瓜步夢中得小絕錄示謝民師……二〇
五色雀……二二
和陶乞食……二五
和陶和胡西曹示顧賊曹韻……二六
和陶乙巳歲三月爲建威參軍使都經錢溪……二八
和陶擬古九首……三一
和陶癸卯歲始春懷古田舍二首……四五
和陶辛丑七月赴假還江陵夜行塗中作口號……四九
和陶庚戌歲九月中于西田穫早稻……五一
和陶丙辰歲八月中于下潠田舍穫……五三
答海上翁……五六

貧家淨掃地……五七
新居……五八
和陶與殷晉安別……六〇
和陶王撫軍座送客……六二
和陶答龐參軍……六四
次韻子由贈吳子野先生二絕句……六六
被酒獨行徧至子雲威徽先覺四黎之舍三首……六八
過黎君郊居……七一
和陶示周續之祖企謝景夷三郎游城東學舍作……七二
和陶連雨獨飲……七四
和陶贈羊長史……七八
和陶五月旦日作和戴主簿……八一
和陶怨詩楚調示龐主簿鄧治中……八三
倦夜……八四
用過韻冬至與諸生飲酒……八六
縱筆三首……八九
夜燒松明火……九三

卷四十三　古今體詩

庚辰歲人日作時聞黃河已復北流二首……九五
庚辰歲正月十二日天門冬酒熟……九九
追和戊寅歲上元……一〇二
和陶雜詩十一首……一〇四
和陶始作鎮軍參軍經曲阿……一一八
和陶桃花源……一二一
和陶歸去來兮辭……一二七
歸去來集字十首……一三五
題過所畫枯木竹石三首……一四四
眞一酒歌……一四七
汲江煎茶……一五三
贈李兕彥威秀才……一五五
戲贈孫公素……一五八
儋耳……一五九
余來儋耳得吠狗曰烏觜甚猛而馴……一六〇
澄邁驛通潮閣二首……一六三
泂酌亭……一六四
六月二十日夜渡海……一六七
自雷適廉宿於興廉村淨行院……一六八
雨夜宿淨行院……一七〇
廉州龍眼質味殊絕可敵荔支……一七一
合浦愈上人以詩名嶺外將訪道南岳……一七三
梅聖俞之客歐陽晦夫使工畫茅菴……一七四
歐陽晦夫惠琴枕……一七六
琴枕……一七七
留別廉守……一七八
餅笙……一八〇
歐陽晦夫遺接䍦琴枕戲作此詩謝之……一八二

卷四十四　古今體詩

次韻王鬱林……一八七
藤州江上夜起對月贈邵道士……一八九
徐元用使君與其子端常邀僕與小兒過……一九一
送鮮于都曹歸蜀灌口舊居……一九三
書堂嶼……一九五
送邵道士彥肅還都嶠……一九六
書韓幹二馬……一九八
觀大水望朝陽巖作……一九九
將至廣州用過韻寄邁迨二子……二〇一
贈鄭淸叟秀才……二〇四
和孫叔靜兄弟李端叔唱和……二〇六
廣倅蕭大夫借前韻見贈復和答之二首……二〇七
周教授索枸杞因以詩贈錄呈廣倅蕭大夫……二一〇
跋王進叔所藏畫……二一二
徐熙杏花……二一三
趙昌四季……二一四
和黃秀才鑒空閣……二一七
韋偃牧馬圖……二二〇
題靈峰寺壁……二二三
廣州何道士衆妙堂……二二四
題馮通直明月湖詩後……二二六
次韻鄭介夫二首……二二七
昔在九江與蘇伯固唱和……二三〇
追和沈遼贈南華詩……二三三
曹溪夜觀傳燈錄燈花落一僧字上口占……二三四
南華老師示四韻事忙姑以一偈答之……二三五
次韻韶守狄大夫見贈二首……二三六
次韻韶倅李通直二首……二三九
狄韶州煮蔓菁蘆菔羹……二四三
李伯時畫其弟亮工舊隱宅圖……二四四
東坡居士過龍光求大竹作肩輿得兩竿……二四六
贈嶺上老人……二四七
贈嶺上梅……二四九
余昔過嶺而南題詩龍泉鐘上……二四九
過嶺二首……二五一
過嶺寄子由……二五四

卷四十五

古今體詩

留題顯聖寺……二五七
予初謫嶺南過田氏水閣……二五八
寄題潭州徐氏春暉亭……二六〇
乞數珠贈南禪湜老……二六一
鬱孤臺……二六三
虔守霍大夫監郡許朝奉見和復次前韻……二六五
贈虔州術士謝晉臣……二六七
虔州景德寺榮師湛然堂……二六九
次韻陽行先……二七一
再用數珠韻贈湜老……二七三
和猶子遲贈孫志擧……二七六
南禪長老和詩不已故作六蟲篇答之……二八〇
明日南禪和詩不到故重賦數珠篇以督之二首……二八三
用前韻再和霍大夫……二八六
用前韻再和許朝奉……二八八
用前韻再和孫志擧……二九〇
崔文學甲攜文見過……二九四
戲贈虔州慈雲寺鑒老……二九八

畫車二首……三〇〇
虔州呂倚承事年八十三讀書作詩不已……三〇二
王子直今又相逢贛上戲用舊韻作詩留別……三〇四
次韻江晦叔二首……三〇六
次韻江晦叔兼呈器之……三〇八
寒食與器之游南塔寺寂照堂……三〇九
器之好談禪不喜游山山中筍出作此詩……三一一
永和清都觀道士童顏鬢髮問其年生於丙子……三一三
贈詩僧道通……三一五
張競辰永康所居萬卷堂……三一七
劉壯輿長官是是堂……三一九
絕　句……三二二
夢中絕句……三二三
予昔作壺中九華詩其後八年復過湖口……三二四
次韻郭功甫觀予畫雪雀有感二首……三二六
次韻法芝舉舊詩一首……三二八
次舊韻贈清涼長老……三二九
睡起聞米元章冒熱到東園送麥門冬飲子……三三〇
夢中作寄朱行中……三三一
答徑山琳長老……三三二

卷四十六

今　體　詩

春帖子詞……三三五
皇帝閣六首……三三五
太皇太后閣六首……三三九
皇太后閣六首……三四三

皇太妃閣五首……三四七
夫人閣四首……三五一
端午帖子詞……三五三
皇帝閣六首……三五三
太皇太后閣六首……三五七
皇太后閣六首……三六一
皇太妃閣五首……三六五
夫人閣四首……三六八
興龍節集英殿宴敎坊詞致語口號……三七一
興龍節集英殿宴敎坊詞致語口號……三七七
坤成節集英殿宴敎坊詞致語口號……三八三
齋日口號……三八九
集英殿春宴敎坊詞致語口號……三九二
紫宸殿正旦敎坊詞致語口號……三九八
集英殿秋宴敎坊詞致語口號……四〇二
黃樓致語口號……四〇七
趙倅成伯母生日致語口號……四一〇
王氏生子致語口號……四一二
寒食宴提刑致語口號……四一五

卷四十七

古　今　體　詩

老翁井……四一九
送蜀僧去塵……四二二
和人回文五首……四二三
送淡公二首……四二七

黃州……四三一
古風……四三三
無題……四三五
古意……四三七
雷州八首……四三八
申王畫馬圖……四四七
老人行……四五一
又贈老謙……四五六
送公爲游淮南……四五七
池上二首……四五九
贈仲素寺丞致仕歸隱潛山……四六一
揚州以土物寄少游……四六三
再過泗上二首……四六五
驪山……四六八
次韻謝子高讀淵明傳……四七二
滄洲亭懷古……四七四
戲詠子舟畫兩竹兩鸜鵒……四七五
贈山谷子……四七六
昭陵六馬唐文皇戰馬也琢石象之立昭陵前……四七九
題盧鴻一學士堂圖……四八二
李白謫仙詩……四八五
飲酒四首……四八七
游山呈通判承議寫寄參寥師……四九一
轆轤歌……四九四
白鶴吟留鍾山覺海……四九六
次韻張甥棠美述志……四九八

卷四十八

古今體詩

觀開西湖次吳左丞韻……五〇三
戲題巫山縣用杜子美韻……五〇四
答晁以道索書……五〇六
陳伯比和回字復次韻……五〇六
與道源游西莊過齊道人同往草堂爲齊書此……五〇八
答子勉三首……五〇九
和子由次王鞏韻如囊之句可爲一噱……五一三
元祐癸酉八月二十七日於建隆章淨館書……五一四
東園……五一五
藏春塢……五一七
次韻參寥寄少游……五一七
贈仲勉子文……五一九
講武臺南有感……五二一
移合浦郭功甫見寄……五二二
題懷素草帖……五二三
僕年三十九在潤州道上過除夜作此詩……五二四
萬州太守高公宿約游岑公洞……五二七
送柳宜歸……五二九
謝都事惠米……五三〇
絕句三首……五三一
睡起……五三三
秋思寄子由……五三四
俟灘……五三五
火星巖……五三六
謝惠貓兒頭筍……五三七
題淨因壁……五三七

題淨因院……五三八
同景文詠蓮塘……五三九
竹枝詞……五四〇
寄歐叔弼……五四一
和黃龍淸老三首……五四三

卷四十九

古今體詩

戲足柳公權聯句……五五九
送　別……五六一
寄周安孺茶……五六二
頭　閣……五七三
夢　雪……五七六
戲贈田辨之琴姬……五七七
書黃筌畫翎毛花蝶圖二首……五七八
過土山寨……五四六
跋姜君弼課冊……五四七
惠崇蘆雁……五四九
和陶擬古九首……五五〇
次晁无咎韻閻子常攜琴入村……五五六
寒食夜……五八〇
和寄天選長官……五八一
次韻張甥棠美晝眠……五八五
陸蓮菴……五八六
書寄韻……五八七
謁敎詩先生因留一絕……五八八
絕句二首……五八九

春　夜……五九一
醉睡者……五九四
數日前夢人示余一卷文字大略若論馬者……五九五
四十年前元夕與故人從游得此句……五九六
題李景元畫……五九七
謝宋漢傑惠李承晏墨……五九八
又答氈帳……五九九
壽陽岸下……六〇〇
春日與閒山居士小飲……六〇一
村醪二尊獻張平陽……六〇二
失　題……六〇五
題王維畫……六〇七
安平泉……六一一
和張均題峽山……六一二
題女唱驛……六一三
溪堂留題……六一四
新葺小園二首……六一五
與李彭年同送崔岐歸二曲馬上口占……六一八
二月十六日與張李二君遊南溪……六一九
送虢令趙薦……六二二
亡伯提刑郎中挽詞二首……六二三
謝張太原送蒲桃……六二五
讀晉史……六二六
讀王衍傳……六二七
讀後魏賀狄干傳……六二八
入　館……六二九
贈蔡茂先……六三〇
送司勳子才丈赴梓州……六三一
送宋君用遊輦下……六三七
詠怪石……六四三

題西湖樓……六四八
題雙竹堂壁……六五〇
風水洞聞二禽……六五〇
法惠小飲以詩索周開祖所作……六五一
次韻陳時發太博雙竹……六五三
周夫人挽詞……六五四
天聖二僧皆蜀人不見留二絕……六五五
會飲有美堂答周開祖湖上見寄……六五七
和吳少卿絕句……六五八
題沈氏天隱樓……六五九
和人登海表亭……六六〇
會雙竹席上奉答開祖長官……六六一
次韻答開祖……六六二
北山廣智大師回自都下過期而歸……六六四
欲往湖州見孫莘老……六六五
富陽道中……六六六
贈青灘將謝承制……六六七
過灘州驛……六六九

卷五十

古今體詩

黃州春日雜書四絕……六七一
晚遊城西開善院泛舟暮歸二首……六七三
和人雪晴書事……六七五
奉酬仲閔食新麪湯餅……六七六
讀仲閔詩卷因成長句……六七八
送酒與崔誠老……六七九
與郭生遊寒溪……六八〇
戲作切語竹詩……六八二
山行見月四言……六八四
憶黃州梅花五絕……六八五
訪散老不遇……六八八
和王定國……六八八
試院觀伯時畫馬絕句……六八九
出局偶書……六九一
覓俞俊筆……六九二
鼠鬚筆……六九三
琴 枕……六九四
書李宗晟水簾圖……六九六
書龍馬圖……六九六
皎然禪師贈吳憑處士詩云……六九七
燈花一首贈王十六……六九八
王晉卿得破墨三昧又嘗聞祖師第一義……六九九
和芝上人竹軒……七〇〇
戲贈秀老……七〇一
和晁美叔老兄……七〇二
暮 歸……七〇三
待 旦……七〇四
約吳遠游與姜君弼喫蕈饅頭……七〇六
除夜訪子野食燒芋戲作……七〇七
北歸度嶺寄子由……七〇八
鳴泉思思君子也君子抱道且殆……七〇八
豐年有高廩詩……七一一
萬菊軒……七一三
韓幹馬……七一四
送煮菜贈包安靜先生……七一五
沿流館中得二絕句……七一六

夢中賦裙帶……七一八
王定國自彭城往南都……七一九
司命宮楊道士息軒……七二〇
贈黃州官奴……七二二
六言樂語……七二三
題領巾絶句……七二四
書裙帶絶句……七二五
虎跑泉……七二六
端硯詩……七二七
張無盡過黃州……七三一
銅陵縣陳公園雙池二首……七三三
詠檳榔……七三四
正月八日招王子高飮……七三五
醉中題鮫綃詩……七三六
無　題……七三八
葛延之贈龜冠……七四〇
別海南黎民表……七四一
雅安人日次舊韻二首……七四二
和代器之……七四五
自題金山畫像……七四六
歸來引送王子立歸筠州……七四八
黃泥阪詞……七五二
淸溪詞……七五七
上淸詞……七六〇
山坡陀行……七六九
醉翁操……七七四
次韻借觀睢陽五老圖……七七九
題金山寺回文體……七八〇
贈姜唐佐……七八二
水月寺……七九三

半月泉……七八四
游何山……七八五
自題臨文與可畫竹……七八七
寶墨亭……七八八
雙井白龍……七八九
瑞金東明觀……七九一
題淸淮樓……七九二
西湖絶句……七九三
戲答佛印……七九三
失題三首……七九四
來鶴亭……七九六
劉顗宮苑退老於廬山石碑菴（詩闕）……七九七
龍山補亡……七九八
牡　丹……八〇三
進……八〇三
西湖壽星院明遠堂……八〇四
牡丹和韻……八〇六
慈雲四景……八〇七
甘露泉……八〇七
白雲居……八〇八
娑羅樹……八〇八
鸚鵡院……八〇九
過金山寺一首……八〇九
失題二首……八一〇
雪詩八首……八一三
失題二首……八一七
無題七絶一首……八一九
送馮判官之昌國……八一九

蘇東坡詩集　卷四十二

文學博士　久保天隨　譯解

古今體詩　五十一首

和陶游斜川、正月五日、與兒子過出游作

陶の斜川に游ぶに和す。正月五日、兒子過と出游の作

謫居澹無事。(一)何異(二)老且休。　謫居、澹として事なし、何ぞ異しまむ老いて且つ休するを。

雖過(三)靖節年。未失斜川游。　靖節の年を過ぐと雖も、未だ失はず斜川の游。

春江(四)淥未波。人臥船自流。　春江、淥んで未だ波だたず、人、臥して、船、自ら流る。

我本無所適。汎汎隨鳴鷗。　われ本と適くところなく、汎汎として鳴鷗に隨ふ。

流遇(五)洑洄。捨舟步(六)層邱。　中流、洑洄に遇ひ、舟を捨てて層邱を步す。

有口可與飲。何必逢我儔。　口あり、與に飲むべし、何ぞ必ずしも我が儔に逢はむ。

(七)過子詩似翁。我唱而輒酬。　過子、詩、翁に似たり、われ唱ふれば輒ち酬ゆ。
未知陶彭澤。頗有此樂不。　未だ知らず、陶彭澤、頗る此樂ありや不や。
(八)問點爾何如。不與聖同憂。　問ふ、點、爾何如、聖と憂を同じうせず。
問翁何所笑。不爲(九)由與求。　問ふ、翁、何の笑ふところ、由と求との爲ならず。

【字解】〔一〕何興　何ぞ怪まむといふ意。〔二〕老且休　年を取つた爲に何事をも爲さずに居る。〔三〕靖節年　靖節は陶淵明の諡、その斜川に游んだのは、丁度五十歳の時で、その詩に、開歳倏五十、吾生行歸休とある。〔四〕悠未波　悠は水の奇麗に澄み切つて居ること。〔五〕洑洄　水の渦巻く處。〔六〕層邱　高い岡。〔七〕過子　末子、名は過。〔八〕問點　曾點、卽ち曾參の父、仲由・冉求等と孔子の前に侍して、各〻その志を言ひしこと、論語に見ゆ。〔九〕由與求　仲由と冉求。

【題義】この詩は、陶淵明集に見えた游斜川の詩に次韻して、正月五日、末子の過と共に出游したことを敍したので、その月日が、偶ま同じ處から、特に此に及んだのである。

【詩意】予は、目下謫居の身、澹然として一事なく、年を取つた爲に、何も爲さずに居るのは、少しも不思議でない。予は今年六十三、陶淵明の五十といつたのに比すると、餘程、過ぎて居るが、かの斜川の游を爲すに就いて、決して、その期を逸することはない。今しも春江は、水澄んで波だたず、人が船中に臥した儘、船は自然と流れ下る長閑さ。われは、本と何處といふ目的もなく、唯だ汎汎として、鳴く鷗に隨つて水に浮んで居るだけである。やがて、中流に渦まく處があつて、進行が困難に成つたから、舟を棄てて、高き岡に登つて見た。すでに口ある上は、共に酒を飲むべく、何も必ずしも、相手に逢ふことを待つには及ばない。末子の過の詩は、乃翁に似て居て、予が唱ふれば、いつでも之に酬いて和することを例として居る。しかし、陶彭澤には、かくの如き樂があつたか如何、むかし、曾點は、春服すでに成りし後、沂に浴し、舞雩に風して歸らむといつて、聖人と憂を同じうしなかつたが、そは、どういふ了見であつたか、今、予は、その曾點の狂を笑つて、いささか共鳴の想を爲すので、何も仲由の不遜、冉求の謙に過ぐるを笑ふのではない。

【餘論】紀昀は「自然の樂あり、形神、倶に陶公に似たり」といつて居る。

子由生日

子由の生日

上天不難知。好惡與我一。　上天、知り難からず、好惡、われと一。
方其未定間。人力破陰騭。　その未だ定まらざるの間に方つて、人力、陰騭を破る。
小忍待其定。報應眞可必。　小しく忍んで、その定まるを待てば、報應、眞に必すべし。
(二)季氏生而仁。(三)觀過見其實。　季氏、生まれて仁、過を觀て、その實を見る。
端如(四)柳下惠。焉往不三黜。　端に柳下惠の如く、焉に往くとして、三黜されざらむ。

天有レ時而定。壽考未レ易レ畢。　天、時あつて定まる、壽考、未だ畢り易からず。
兒孫七男子。次第皆逢レ吉。　兒孫七男子、次第に皆吉に逢ふ。
遙知設レ羅門。獨掩レ縣レ磬室。　遙に知る、羅を設くるの門、獨り、磬を縣くるの室を掩ふを。
回思十年事。無レ愧篋中筆。　回思す十年の事、篋中の筆に愧づるなし。
但願白髮兄。年年作二生日一。　但だ願ふ、白髮の兄、年年、生日を作すを。

【字解】〔一〕陰騭　書經の洪範に「惟だ天、下民を陰騭す」とあつて、その註に「騭は定なり、天、言はずして下民を默定するなり」とある、卽ち下民に對して不言の中に賞罰を爲すこと。〔二〕季氏　子由を云ふ。〔三〕觀過　論語に「過を觀て、その仁を知る」とあるに本づく。〔四〕柳下惠　魯の賢者、その三たび黜けられしこと、論語に見ゆ。〔五〕七男子　東坡の自註に「子由、三子四孫」とある。〔六〕逢吉　目出たき運命に逢ふ、書經の洪範に「身其れ康强、子孫其れ吉に逢ふ」とある。〔七〕設羅門　門前寂寞として雀羅を設けられる。翟公の故事、前に次韻楊褒の詩に注して置いた。〔八〕縣磬室　左傳僖公二十六年に「齊侯曰く、室は縣磬の如く、野に靑草なく、何を恃んで恐れざらむ」とあつて、全然無一物なるをいふ。縣は懸と通用したのである。〔九〕篋中筆　杜甫の詩に篋中有二舊筆一。情至時復援とある。〔一〇〕白髮兄　東坡自ら稱して云ふ。

【題義】この首は、東坡が子由の誕生日に賦して贈つたのである。子由は、仁宗の寶元二年己卯二月二十日に生まれたから、今茲元符元年には、丁度、六十であつた。

【詩意】上天の意向は、決して知り難いものではなく、その好惡は、全く我と同一である。唯だ天の未だ定まらざる時に方つては、人力を以て、冥冥の中に定まつて居る其賞罰を破ることが出來て、惡人が却つて榮えるといふ樣なこともあるが、しばしの間、忍んで天の定まるを待てば、その報應は、まことに、覿面にして、誤ることなく、隨分、あてにすることが出來る。わが末弟の子由は、生まれながらにして仁、過失を觀て、その實を知ることが出來る。子由の人物は、丁度、古しへの柳下惠の如く、從つて、末世の今に容れられず、何處へ往つても、續けて黜けられる。しかし、天は時あつて定まることがあつて、その壽命は、未だ盡きず、加ふるに、三子四孫は、次第に目出たき運命に逢ひ、今後多幸なることは、言ふまでもない。雀羅を設くる樣に門前は寂しくとも、ひとり、何も物なき室を掩うて、心しづかに行ひ澄まして居るであらう。ここに、最近十年の事を回想すると、居然、身を持すること正しく、決して、篋中の舊筆に愧づることなく、白髮頭の此兄も、それにつれて生き延び、汝の爲に、年年、誕生の祝をしたいと祈つて居るだけである。

【餘論】乾隆御批に「諸語朴摯、乃弟を祝頌するの體、故と當に是の如くなるべし」とある。然るに、紀昀が「これ太だ板腐」といつて、一擊の下に薙ぎ倒したのは、いささか苛酷に失するの嫌がある。なほ、この詩には、子由の和作があつて、卽ち左の通りである。

弟兄本三人。懷抱喪二其一一。頎然仲與レ叔。耆老天所レ騭。師心每獨往。可否輒自必。折レ足非レ所レ恨。
所レ恨覆二鼎實一。上賴二吾君仁一。義止海濱黜。悽酸念二母氏一。此時何時畢。平生質二孟博一。苟生不レ謂レ吉。

歸心天若許。定卜老泉室。淒涼百年後。事付何人筆。於今兄獨知。言之泣生日。

以黃子木拄杖爲子由生日之壽

黃子木の拄杖を以て、子由生日の壽を爲す

靈壽扶孔光。菊潭飮伯始。　靈壽、孔光を扶け、菊潭、伯始に飮ましむ。
雖云閒草木。豈樂蒙此恥。　閒草木と云ふと雖も、豈に此恥を蒙るを樂しまむや。
一時偶收用。千載相瘢痕。　一時、偶ま收用、千載、相瘢痕。
海南無嘉植。野果名黃子。　海南に嘉植なし、野果、黃子と名づく。
堅瘦多節目。天材任操倚。　堅瘦、節目多く、天材、操倚に任ふ。
嗟我始翦裁。世用或緣此。　嗟す、我、始めて翦裁、世用、或は此に緣る。
貴從老夫手。往配先生几。　老夫の手より、往いて先生の几に配するを貴ぶ。
相從歸故山。不愧仙人杞。　相從つて、故山に歸らば、仙人の杞に愧ぢず。

【字解】【一】靈壽　杖の名、漢書に「孔光、太師たり。太后詔して曰く、國の將に興らむとする、師を尊んで傅を重んず。其れ太師をして朝するなからしめよ、と。靈壽杖を賜ふ」とある。【二】菊潭　盛宏之の荊州記に「菊水は、穰縣に出づ、芳菊、崖に被り、水、極めて甘香、谷中、この水を飮む、上壽百二十七、八十の者は、猶ほ以て夭となす。太尉胡廣、風疾を患へ、休沐南歸、常に此水を飮み、後、疾遂に瘳ゆ、年八十二、乃ち薨ず」とある。廣、字は伯始。【三】蒙此恥　王註に「孔光、胡廣、二人皆畏懦諂諛の人、故に草木恥を蒙ると云ふ」とある。【四】瘢痕　說文に「瘢は痍なり」「痕は𤴯傷なり」とある、ともに創。【五】黃子　番禺雜篇に「黃子は交州子に類す、橘の屬なり、淡黃色なり」とある。【六】仙人杞　東坡の自註に「本草、枸杞、一名仙人杖」とある。査註に「抱朴子、枸杞、一名仙人杖、或は云ふ、西王母杖、或は天精と名づけ、或は却老と名づけ、或は地骨と名づけ、或は枸杞と名づくるなり」とある。

【題義】この首は、黃子といふ柑橘類の幹で造つた杖を、誕生日の祝として、子由に贈るに就いて作つたのである。

【詩意】靈壽杖は、孔光を扶け、菊潭の水は、胡廣に飮ましめた。生憎、この二人は、下らぬ人物であつた爲に、兩者、ともに閒草木ではあるが、少からぬ恥辱を蒙つたのは、不愉快の至。一時、偶然、彼輩に收用されたばツかりに、千載の下、なほ癒えやらぬ創を殘したのは、氣の毒千萬の事である。わが海南には、格別の名木もなく、唯だ黃子と名づくる野果があつて、その枝幹は、堅く瘦せて、節くれ立つて居る處から、天然の材として、人の之を操つて身を倚するに堪へる。予は、始めて、この材を翦裁して杖としたが、世間で之を用ふるのも、或は此事に因つたのであらう。今、これを子由に贈るので、老夫の手から移つて、先生の牀几の近くに配置せられるのは、その物に取つても、有り難

いことであらう。やがて、相從つて、故山に歸る樣な事があつたならば、仙人の枸杞に比較しても、決して劣ることはあるまいと思ふ。

【餘論】紀昀は「起し得て極めて濶遠、又極めて緊切」といひ「貫の字、寫し得て身分あり、老夫、先生の字、ともに極めて鄭重、起處孔胡と箭鋒相直す」といひ、乾隆御批にも「夫子の手より先生の几に配す、嗟余寡兄弟、四海一子由、この語、老いて益す信」とある。

上元夜、過赴儋守召、獨坐有感

上元の夜、過、儋守の召に赴く、獨坐、感あり

（一）使君置酒莫相違。使君、酒を置く、相違ふなかれ、
（二）守舍何妨獨掩扉。舍を守る、何ぞ妨げむ、獨り扉を掩ふを。
靜看月窗盤（三）蜥蜴。靜に看る、月窗、蜥蜴を盤するを、
臥聞風幔落（四）伊威。臥して聞く、風幔、伊威を落つ。
燈花結盡吾猶夢。燈火、結び盡して、吾、猶ほ夢み、
香篆消時汝欲歸。香篆、消ゆる時、汝、歸らむと欲す。
搔首淒涼十年事。首を搔く、淒涼十年の事、
（五）傳柑歸遺滿朝衣。柑を傳へて、歸遺、朝衣に滿つ。

【字解】【一】使君　地方長官の尊稱、ここでは儋州守を指す、查註には、その人を張中としてある。【二】守舍　家で留守をして居る。【三】蜥蜴　やもり、爾雅に「草に在るを蜥蜴といひ、壁に在るを蝘蜓といふ」とある。【四】伊威　蟲の名、前に與顧係泛舟の詩中に注して置いた。【五】傳柑歸遺　東坡が翰林に居た時、上元侍飲の詩に、猶有傳柑遺細君とある。

【題義】この首は、上元の夜、倅の過が儋州太守張中に呼ばれて、その宅に赴き、東坡、ひとり留守をして居た時に作つたのである。

【詩意】折角、太守が御馳走をすると云つて、招待したのであるから、その厚意に違はぬが宜しく、予は、ひとりで扉を掩うて、留守をして居ても、構はない。靜に看れば、月の照らす窓には、やもりがくツ付いて居るし、風の吹き入る戸ばりから、伊威蟲の落ちる音が聞こえた。やがて、夜ふけて、燈心に丁子の結び盡す時、われは、夢路をたどり、篆字なす香の煙の消える頃、汝は歸つて來るであらう。ここに、白髮頭を搔きつつ、寂しくも、十年前の事を思ふと、その時分、丁度都に居て、上元の夜、宮中に侍飲し、細君に贈る爲に、最後に柑子を賜はつたのを朝衣に隱して、持ち歸つたことがある。

【餘論】馮應榴の案に「末聯は、時節に因つて、同安君を念ふなり」とあつて、同安君は、即ち東坡の正妻、この時、すでに物故して居たのである。

過於海舶得邁寄書酒作詩遠和之皆粲然可觀子由有書相慶也因用其韻賦一篇并寄諸子姪

過、海舶に於て邁の寄書と酒を得、詩を作りて遠く之に和す、皆粲然として觀るべし。子由、書あり、相慶せるなり。因つて其韻を用ひて一篇を賦し、并せて諸子姪に寄す

我似老牛鞭不動。　われは、老牛に似て、鞭てども動かず、
雨滑泥深四蹄重。　雨は滑に、泥は深く、四蹄重し。
汝如黃犢走却來。　汝は、黃犢の如く、走つて却つて來り、
海濶山高百程送。　海は濶く、山は高くして、百程送る。
庶幾門戶有八慈。　庶幾す、門戶に八慈あるを、
不恨居鄰無二仲。　恨みず、居鄰に二仲なきを。
他年汝曹笏滿牀。　他年、汝曹、笏、牀に滿つ、
中夜起舞踏破甕。　中夜起舞、踏んで甕を破る。

【字解】【一】黃犢　子牛。【二】八慈　後漢書に「荀淑、子八人あり、儉・緄・靖・燾・汪・爽・肅・專、並に名ありて稱せらる。時人、八龍といふ。爽、字は慈明。穎川、これが語を爲して曰く、荀氏八龍、慈明無雙」とあつて、その註に高士傳を引き「靖、字は叔慈、すなはち八人皆慈を以て字となすことを知るべし、故に後漢の贊に、二方則を承け、八慈塵を繼ぐと云ふなり」とある。【三】二仲　前に和二郎同年の詩中に注して置いた。蔣詡元卿、兗州太守たりしが、王莽居攝の時、病を以て官を免じ、鄕里に居り、臥して戶を出でず、舍中竹下に於て三徑を開き、惟だ羊仲求仲、これに從つて游んだといふので、二仲は皆挫廉逃名の士。【四】笏滿牀　唐書崔琳傳に「歲時、家に宴する每に、一榻を以て笏を置き、なほ其上に重積す」とある。【五】踏破甕　王註に「俗說、貧人あり、止だ能く隻甕を販ふの資を辦す。夜、甕中に宿し、心計して曰く、この甕、これを買ふ若干、これを賣る若干、その息、すでに倍す。われ倍息を得、遂に二甕を販ふべし、二甕より化して四となり、四甕より化して八となり、轉買轉賣、得るところの倍利、窮まりなし、と。遂に喜んで舞ひ、

會當洗眼看騰躍。　會ず當に、洗眼、騰躍を看るべく、
莫指癡腹笑空洞。　癡腹を指して、空洞を笑ふ莫れ。
譽兒雖是兩翁癖。　兒を譽む、これ兩翁の癖と雖も、
積德已自三世種。　德を積む、すでに自ら三世種う。
豈惟萬一許生還。　豈に惟だ萬一生還を許すのみならむや、
尙恐九十煩珍從。　尙ほ恐る、九十、珍從を煩はすを。
六子晨耕簞瓢出。　六子、晨耕、簞瓢出で、
衆婦夜績燈火共。　衆婦、夜績、燈火共にす。
春秋古史乃家法。　春秋古史、乃ち家法、
詩筆離騷亦時用。　詩筆離騷、亦た時用。
但令文字還照世。　但だ文字をして還た世を照らさしむれば、
糞土腐餘安足夢。　糞土腐餘、安んぞ夢みるに足らむ。

甕の破るるを覺えずと。これは是れ戯論、先生、これを用ひ、以てその希望するところのもの此に類するを言ふ」とある。【六】譽兒

唐書王勃傳に「父福畤、かつて諸子を韓思彥に誇す。思彥曰く、武子、馬癖あり、君、兒を譽むるの癖あり、王家、何ぞ癖多きや、と。勃をして、その文を出さしむ。思彥曰く、子を生む、是の若し、誇るべきなり」とある。【七】珍從　禮記の王制に「九十の者、天子、問ふあらむと欲すれば、その室に就いて、珍を以て從ふ」とある。珍物。【八】古史　查註に「子由、司馬遷、史記を作り、淺近疎略なるを以て、故に遷の書に因つて古史を作る」とある。

【題義】末子の過が、渡海の船に於て、長子邁から態態送つて寄越した手紙と酒とを得たるに因り、詩を作つて、遠く之に和したが、各首ともに文彩粲然として觀るべきものがあつた。すると、子由から、手紙で其事を慶賀して來たから、その韻を用ひて、一篇を賦し、先づ子由に答へ、幷せて諸子姪輩に寄せた。

【詩意】予は老いたる牛の如く、いくら鞭てども動かず、雨は滑に、泥は深くして、四蹄が重い。これに反して、汝子姪輩は、子牛の如く、走つては又還り來り、海濶く山高き百里の道程も、容易に送り過ごす。願ふところは、わが一家、古しへの荀氏の如く、門戶の中に慈を字とした八子がありたいといふ一事であつて、さうすれば、近鄰に、羊仲・求仲の如き隱逸の士が居なくても宜しい。他年、汝等は、立身して、祝日などには、笏を牀上に積み重ねるであらうが、世間の事は、兎角あてが外れ易く、中夜、喜びの餘りに、起つて舞はむとし、覺えず、足で唯だ一つしかない大甕を踏み破るといふことが常であるから、篤と注意せねばならぬ。もとより、目を洗ひ淸めて、汝等の勢よく騰躍するを見るであらうが、汝等は、癡人の腹中、空洞にして、一物なきを笑はれる樣なことがあつてはならぬ。倅どもを譽めるのは、われ等、兩翁の癖であるが、德を積んで善根を種ゑたことは、すでに三代に及んだのであるから、決して、落ちぶれることなどあらう筈はない。ただ萬一の場合に、生きて都に還ることを許されるばかりでなく、やがて、九十の高壽に達すれば、天子が態態お出でになつて、珍物を以て從へられることであらう。汝等六子は、朝早く野に仕事をする爲に、簞瓢を攜へて出かけ、多くの嫁どもは、夜、絲を績ぎつつ、一穗の燈火を共にして居る。子由が春秋時代の事を紀述した古史といふ著述は、即ち家法に本づいたものであるし、離騷を學んだ詩文も、亦た時の用に立つものである。そこで、われ等の文字が世を照らして、大に行はれたならば、まことに滿足の至で、糞土の腐敗した樣な、この世間の事は、夢みるに足らず、謂はゆる富貴などは、何とも思つて居ない。

【餘論】紀昀は「語語緊健」といつて、この詩を推稱して居る。

和二陶郭主簿一

陶の郭主簿に和す

淸明日、聞三過誦二書、聲節閒美、感二念少時一、悵焉追二懷先君宮師之遺意一、且念三淮德二幼孫一、無三以自遣一、乃和二淵明二篇一、隨レ意所レ寓、無三復倫次一也。

【訓讀】清明の日、過の書を誦するを聞く、聲節閒美、感念少時、悵焉として、先君宮師の遺意を追懷し、且つ淮德の二幼孫を念ひ、以て自ら遣るなし、乃ち淵明の二篇に和す、意の寓するところに隨つて、復た倫次なきなり。

今日復何日。高槐布(一)初陰。　今日、復た何の日、高槐、初陰を布く。

(二)良辰非虛名。淸和盈我襟。　良辰、虛名に非ず、淸和、わが襟に盈つ。

(三)孺子(四)卷書坐誦詩。如皷琴。　孺子、書を卷いて坐し、詩を誦する、琴を皷するが如し。

(五)却去四十年。(六)玉顏如汝今。　却去四十年、玉顏、汝の今の如し。

閉戶未嘗出。出爲鄰里欽。　戶を閉ぢて、未だ嘗て出でず、出でては、鄰里に欽せらる。

家世事(七)酌古。百史手自斟。　家、世、酌古を事とし、百史、手自ら斟む。

當年(八)二老人。喜我作此音。　當年二老人、わが此音を作すを喜ぶ。

(九)淮德入我夢。(一〇)角羈未勝簪。　淮德、わが夢に入り、角羈、未だ簪するに勝へず。

孺子笑問我。君何念之深。　孺子、笑つて我に問ふ、君、何ぞ之を念ふの深き。

【字解】【一】初陰　新らしい木かげ。【二】良辰　清明の節を云ふ。【三】孺子　小倅、漢書張良傳に「孺子教ふべし」とある。【四】卷書　書物を繰り廣げる。【五】却去　一本には却念に作つてあるが、その方が分かり易い。【六】玉顏　文選宋玉の神女賦に「苞溫潤之玉顏」とあつて、つやつやしき顏色。【七】酌古　古い事を研究する。【八】二老人　東坡の父洵と其兄渙とを併稱す。【九】淮德　淮上の德州。【一〇】角羈　禮記に「髮を翦つて髻となす、男は角、女は羈」とあつて、その註に「夾囟を角といひ、午達を羈といふ」とある、まだ髮を結ばずして、切り放しにしてあること。

【題義】小序の意味は——清明の日に、末子過の書物を讀んで居るのを聞いて居ると、その音節が、如何にも美はしかつたので、おのが少年の時の事を感念し、悵然として、亡父光祿寺丞の遺意を思ひ出し、又淮上の德州に居る二人の幼孫を念うて、自ら遣る便なく、深き物思に沈んだ。そこで、陶淵明の郭主簿に贈つた二篇に和して、この詩を作つたが、意の寓するままにして、もとより、順序もない——といふのである。

【詩意】今日は、又如何なる日であるか、高く聳えたる槐樹は、葉が出揃つて、新しき影を布き、打見る景色は、如何にも長閑で、清明といふ名に負かざる良辰といふべく、清和の氣は、自然に吹いて、わが襟に滿つるばかりである。折しも、小倅は、書物を繰り廣げて坐し、古詩を誦する其聲は、音節圓美、さながら、琴を鼓するが如くである。おもへば、四十年の前、われも、つやつやしき顏をして、丁度、今の汝の如く、平生、戶を閉ぢて外出せず、時たま外出すると、あれが蘇氏の子で、やがて出世をするであらうと、鄰り近處から、羨まれて居た。わが家は、代代學問を爲し、古い事を研究する

處から、予も、種種の歴史類を獨りで渉獵し、その時、父と伯父との二老人は、わが聲高く書を讀むのを喜んで居られた。今しも、淮上の德州に居る幼孫どもは、わが夢に入り、日夜戀しくて堪まらぬが、何をしても子供の事、まだ髮を切りッ放しで、簪を差すことも出來ぬ位。すると、小伜は、笑ひながら、如何なれば、かほどまで、孫達の事を思はれるのかといつた。

雀鷇含淳音。竹萌抱靜節。　雀鷇、淳音を含み、竹萌、靜節を抱く。

誦我先君詩。肝肺爲澄澈。　わが先君の詩を誦して、肝肺、爲に澄澈。

猶如鳴鶴和。未作獲麟絶。　猶ほ鳴鶴の和するが如く、未だ獲麟の絶を作さず。

願因騎鯨李。追此御風列。　願はくは、騎鯨の李に因つて、この御風の列を追はむ。

丈夫貴出世。功名豈人傑。　丈夫、出世を貴ぶ、功名、豈に人傑。

家書三萬卷。獨取服食訣。　家書三萬卷、ひとり服食の訣を取る。

地行卽空飛。何必挾日月。　地行は卽ち空飛、何ぞ必ずしも日月を挾まむ。

【字解】【一】雀鷇　雀の雛鳥。【二】竹萌　卽ち筍。【三】先君詩　東坡の自註に「この兩句は、先君少時の詩、その全首を失ふ」とある。【四】鳴鶴和　易に「鳴鶴陰に在り、その子、これに和す」とある。【五】獲麟　孔子が春秋を筆削し、その筆を獲麟に絶ちしこと。【六】騎鯨李　李白が鯨に跨つて昇仙したといふので、前に次韻譚杜詩の詩中に注して置いた。【七】御風列　莊子に「列子の風に御して行く、泠然として善きなり」とあつて、前に宿題仙都觀の詩中に注して置いた。【八】出世　世間を脱出する。【九】服食訣　仙家に於ける服餌の祕傳。【一〇】地行　昇天は出來ないが地上だけでは飛行自在なること。【一一】挾日月　日月を兩脇に挾む。

【詩意】雀の雛は、淳古の音聲を含み、筍は、早くも虛心の靜節を抱いて居るといふ亡父の詩句を吟誦すると、肺肝までも澄み渡る樣な氣がするのみか、彷彿として、鳴鶴之に和するが如く、これが終りだといつて止めることが出來ない。願はくは、われも、李白の如く、鯨に跨つて、かの列禦寇の如く、風に御して天上を飛行して居られる亡父の跡を追ッかけて行きたいものである。世に丈夫と稱せらるるものは、區區の聲譽を求めずして、世間を脱出するが善いので、功名を立てたものが人傑といふ譯でもない。わが家には、三萬卷の藏書があるが、予の就いて研究するのは、道家服食の祕傳であつて、もし幸に地行の仙となることが出來たならば、取りも直さず、空中を飛行し得るので、何も必ずしも、日月を兩脇に挾んで、雲井はるかに立ち去るにも及ばない。

海南人不作寒食而以上巳上冢予攜一瓢酒尋諸生皆出矣、獨老符秀才在因與飲至醉符蓋儋人之安貧守靜者也

海南の人、寒食を作さず、而して上巳を以て冢に上る。予、一瓢酒を攜へて、諸生を尋ぬれば、皆出でたり。獨り老符秀才在り、因つて與に飲んで醉に至る。符は蓋し儋人の貧に安んじ靜を守る者なり

老鴉銜[一]肉紙[二]飛灰。　老鴉、肉を銜んで、紙、灰を飛ばす、
萬里家山安在哉。　萬里の家山、安くに在る。
[三]蒼耳林中太白過。　蒼耳林中、太白過ぎ、
[四]鹿門山下德[五]公回。　鹿門山下、德公回る。
[六]管寧投老終歸去。　管寧、老に投じて終に歸り去り、
[七]王式當年本不來。　王式、當年、本と來らず。
記取城南上巳日。　記取す、城南上巳の日、
[八]木綿花落刺[九]桐開。　木綿、花落ちて、刺桐開く。

【字解】【一】銜肉　肉を口にくはへる。【二】紙飛灰　紙は紙錢、錢の形に剪つた紙で、祭をする時などに墓前で燒く、その灰が飛ぶといふこと。【三】蒼耳　詳しくは蒼耳子といふ、藥草の名。李太白の詩集に「城北の范居士を尋ね、道を失うて、蒼耳中に落ち、范が置酒して蒼耳を摘むを見て作る」といふ一首がある。【四】鹿門山　襄沔記に「峯道驛に鹿門廟あり、廟門に二石鹿あり、これを夾む、故に鹿石山となす」とある。【五】德公　卽ち龐德公、鹿門山に隱れて居た。その詳は、前に寄題刁景純、及び賦藏山園の詩中に注して置いた。【六】管寧　三國志、魏の管寧傳に「亂を避けて遼東に居る、文帝卽位、徵して郡に還らしむ」とあつて、その註に「寧、遼東に在つて三十七年を積み、乃ち歸る」とある。その詳は前に和陶答龐參軍の詩中に注して置いた。【七】王式　漢書の本傳に「詔して、除して博士となす。すでに至つて、舍中に止まる。會ま諸博士、ともに酒食を持して式を勞ふ。江公、心に式を嫉み、歌吹の諸生に謂つて曰く、驪駒を歌へ、云云と。式、これを恥ぢ、諸生を謂めて曰く、われ本と來るを欲せず、諸生、強ひて我に勸め、竟に豎子に辱しめらる、と。遂に病を謝して免じ歸る」とある。【八】木綿　番禺雜編に「木綿樹、高さ二三丈、切に桐木に類す。二三月の間、花さく、すでに謝して、蘂、綿となる、かの人、これを績いで毯となす、潔白雪の如く、溫暖比なし」とある。【九】刺桐　番禺雜編に「刺桐樹は、青桐に似て短し、三四月の時、紅芳樹に滿つ。禁煙の時、士女競うて花陰に憩ふ、亦た曲江の偶なり」とあり、南方草木狀に「刺桐は、その木、材となる、三月三日、葉を布いて繁密、後に花あり、赤色、間ま葉間に生じ、他物を旁照し、皆朱殷然たり。三五房凋めば、三五復た發す、かくの如きもの竟歲」とある。

【題義】海南の人は、寒食には別に何も爲さず、三月三日、卽ち上巳の日を以て、お墓參りをする。予も一瓢の酒を攜へて、諸生を尋ねた處が、皆外出して、不在であつたが、ひとり、老いたる符秀才のみが在宅して居たから、ともに酒を飲んで一醉し、仍つて、この詩を作つた。符は、儋人中、貧に安んじ、靜を守るところの有道の士であるといふのである。王註には、符林秀才といひ、瀛奎律髓には「昌黎、潮州に謫されずんば、後世、豈に趙德あるを知らむや。東坡、海南に落ちざれば、後世、豈に符林あるを知らむや」とあつて、符秀才の名を林といふことが分かる。

【詩意】今日は、どこの家でも、先塋に參詣して、お祭をするので、老鴉は供への肉を口にくはへて啼き叫び、紙錢は、灰となつて飛んで居るが、予は、遷謫の身、萬里を隔てた故郷は、何處とも分からない。そこで、符秀才を訪ふと、幸に在宅して居たが、さながら、李白が蒼耳の藪に落ちて、范居士

の家に至りしが如く、龐德公が折よく鹿門山に歸つて來た樣なものである。秀才は、かつて外に出たこともあつたが、年老いて、その鄕に居るのは、むかし、管寧が遼東に終る積りの處を、晩年、徵されて郡に還りしと同じく、又王式が、長安に來ることなく、仍つて辱を蒙らなかつた樣なものである。ここ城南の地、上巳の日に際し、木綿の花が散つて、刺桐が赤く咲き出て居るのは、長しへに思ひ出の種となるであらう。

【餘論】紀昀は「四の人名を用ふ、格を礙ぐ」といつて居るが、成程、故事の疊用は、一寸煩はしい樣な氣がする。

往年宿瓜步夢中得小絶錄示謝民師

往年、瓜步に宿し、夢中に小絶を得たり、錄して謝民師に示す

吳塞蒹葭空碧海。　吳塞の蒹葭、空しく碧海、

隋宮楊柳只金堤。　隋宮の楊柳、只だ金堤。

春風自恨無情水。　春風、自ら恨む無情の水、

吹得東流竟日西。　東流を吹き得て、竟に日西なり。

【字解】〔一〕金堤　丈夫な堤といふ義、卽ち汴河の堤、隋書食貨志に「板渚より河を引いて、淮海に達す、これを御河といふ、河畔、御道を築き、樹うるに柳を以てす」とある。

【題義】前年、瓜步に宿した時、夢中に絶句を作つたが、今おもひ出せしに因り、これを錄して、謝民師に示したといふのである。謝民師は、獨醒雜志に「東坡、嶺南より歸るや、謝民師、書及び舊作を袖して進り謁す。東坡、これを覽て、大に稱賞せられ、民師に謂つて曰く、子の文は、上等の紫磨黃金の如し、須らく、子に十七貫五百を還すべし、と。遂に留めて語ること終日。民師、著述極めて多し。今、その族、坡の語を摘み、名づけて上金集といふもの、蓋し其一なり」とあり、宋詩紀事に「謝擧廉、字は民師、新喩の人、政和の間、進士を以て南康に知とし、知を東坡に受け、藍溪集あり」と記してある。

【詩意】よし葦の生ひ茂れる吳國の城塞も、空しく變じて碧海となり、楊柳を種ゑた隋代の離宮も、荒廢、すでに久しく、今は唯だ隄を餘すだけである。春風は、しづ心なく、東に流るる水を恨むが如く、終日、水面をそよ吹いて、やがて、日西に斜なる夕暮となつた。

【餘論】紀昀は「後二句、沈痛の至」といひ「便ち玉溪生の意味あり」といつて居る。

五色雀

五色の雀

海南有五色雀、常以兩絳者爲長、進止必隨焉、俗謂之鳳凰云、久旱而

見輒雨、潦則反、是吾卜居儋耳城南、嘗一至庭下、今日又見之進士黎子雲及其弟威家、既去、吾舉酒祝曰、若爲吾來者、當再集也、已而果然、乃爲賦詩。

【訓讀】海南に五色の雀あり、常に兩絳者を以て長となし、進止、必ず隨ふ。俗、これを鳳凰と謂ふと云ふ。久旱にして見はるれば輒ち雨ふり、潦には、これに反す。吾、儋耳城南に卜居す、かつて、一たび庭下に至る。今日、又、これを進士黎子雲及び其弟威の家に見る。既に去り、吾、酒を擧げて祝して曰く、もし吾が爲に來るならば、當に再び集まるべきなり、と。すでにして果して然り、乃ち爲に詩を賦す。

(一)粲粲五色羽。炎方(二)鳳之徒(三)。　粲粲たる五色の羽、炎方、鳳の徒。
青黃縞元服(四)。翼衞兩紱朱(五)。　青黃縞元の服、翼は衞る兩紱の朱。
仁心知閔農。常告雨霽符。　仁心、農を閔むを知り、常に雨霽の符を告ぐ。
我窮惟四壁。破屋無瞻烏(六)。　わが窮、惟だ四壁、破屋、烏を瞻るなし。
惠然此粲者。來集(七)竹與梧。　惠然たり、この粲者、來つて竹と梧とに集まる。
鏘鳴(八)如玉佩。意欲相嬉娛。　鏘鳴、玉佩の如く、意、相嬉娛せむと欲す。
寂寞兩黎生。食菜眞臞儒。　寂寞たり、兩黎生、菜を食ふ、眞に臞儒。
小圃散春物(九)。野桃陳雪膚。　小圃、春物を散じ、野桃、雪膚を陳す。
舉杯得一笑。見此紅鸞雛。　杯を擧げて、一笑を得たり、この紅鸞の雛を見る。
高情如飛仙。未易握粟呼(一〇)。　高情、飛仙の如く、未だ粟を握つて呼ぶに易からず。
胡爲去復來。眷眷豈屬吾。　胡すれぞ、去つて復た來る、眷眷として、豈に吾に屬せむや。
回翔天壤間。何必懷此都(一一)。　天壤の間に回翔し、何ぞ必ずしも此都を懷はむや。

【字解】【一】粲粲　美しき貌。【二】炎方　南方炎熱の地。【三】鳳之徒　韓愈の詩に丹穴五色羽、其名爲鳳凰とあるに本づく。【四】青黃縞元服　縞は白色、元は玄、卽ち黑色。【五】兩紱朱　紱は綬、翼のふちが赤い、卽ち序中に在る兩絳者を指して云ふ。【六】無瞻烏　詩經に瞻烏爰止、于誰之屋とあるに本づく。【七】來集　集はとまる。【八】鏘鳴　鏘然として鳴る、左傳に鳳凰于飛、和鳴鏘鏘とあり、番禺雜編に「五色雀、一名晉擊鳥、樂作る每に、聲、鼓の如きもの、塤のごときもの、笛のごときもの、阪のごときものあり、滿山嘈囋、久しうして自ら罷む」とある。【九】春物　春の時候の物。【一〇】握粟呼　詩經に交交桑扈、率場啄粟、握粟出卜、自何能穀とあるに本づく。【一一】懷此都　賈誼の弔屈原文に歷九州而相其君兮、何必懷此都とあるに本づき、その下に鳳翔千仞とあるから併帶して用ふ。

【題義】海南に五色の雀といふ鳥があつて、いつでも、兩翼のふちの赤いものを長となし、進退必ず

之に隨ふことになつて居て、世俗、これを鳳凰と稱して居る。旱が續いた時に見はれると、雨が降り、長雨の時に見はれると、晴天になる。予は、儋耳城南に卜居すると、かつて一度、その五色の雀が庭下に來たことがあつたが、今日又ぞろ、進士黎子雲及び其弟威の家で、この鳥を見た。その飛び去りし後、予は、酒を擧げて祈りつつ、もし、この鳥が、予の爲に來たものならば、再び來て集まるだらうといふと、果して、その通りであつたから、やがて、この詩を作つたといふのである。

【詩意】粲粲として、五色の羽の極めて見事なる雀は、炎熱の地に產し、卽ち鳳凰の同類である。その鳥は、靑黃白黑の服を著けて居るが、その頭領たるものは、翼のふちが赤く、丸で綬を付けた樣である。この鳥は、仁心を有して、農夫を憫むを知り、毎毎、雨天晴天の符驗を告げる爲に、重んせられて居る。予は此地に竆居し、四壁山立、あばらやに居て、鳥を仰ぎ見ることもないのに、粲たる此鳥のみは、惠然として來り、庭上なる梧竹に集まつたことがある。その鏘然として和鳴する聲は、さながら、玉佩を響かすが如く、どうやら、予と喜んで游びたい樣に見える。黎氏兄弟は、寂寞として、その貧に安んじ、平生、菜のみを食つて居るのは、まことに臞せた儒者と稱すべきものである。今しも、狹い裏畑には、春の季節の草木が散點し、中にも、野桃は白く咲き出でて、雪の膚を延べた樣である。その時、又しても、この紅鸞の雛を見たから、杯を擧げて、覺えず一笑した。この鳥は、高情、飛仙の如く、粟を握つて呼んだ處で、仲仲やつて來ないが、如何なれば、一たび去つた後、再び立ち還つて來たのであるか、眷眷として、さも懷いて居る樣に見えるが、決して、予に屬して居る譯ではなく、宜しく、天地の間に回翔すべく、何も區區として、この土地を離れ難く思つて居る譯ではあるまい。

【餘論】紀昀は「仁心の二句、平純」といつて居る。

和陶乞食

陶の食を乞ふに和す

（一）莊周昔貸粟。猶欲舂脫之。　莊周、むかし、粟を貸る、猶は舂いて之を脫せむと欲す。
（二）魯公亦乞米。炊煮尙不辭。　魯公、亦た米を乞ひ、炊煮、尙は辭せず。
淵明端乞食。亦不避嗟（三）來。　淵明、端に食を乞ひ、亦た嗟來を避けず。
嗚呼天下士。死生寄一杯。　嗚呼、天下の士、死生、一杯に寄す。
斗水何所直。遠汲苦姜（四）詩。　斗水、何の直するところ、遠汲、姜詩を苦む。
幸有餘薪米。養此老不才。　幸に餘薪米あり、この老不才を養ふ。
至味久不壞。可爲子孫貽。　至味、久しく壞れず、子孫の貽と爲すべし。

【字解】【一】莊周　粟を監河侯に借らむとせしこと、前に莫笑銀杯小の詩中に注して置いた。【二】魯公　前に、次韻過陳

紀暢の詩中に注して置いた。【三】嗟來 禮記に「齊、大に饑う。黔傲、食を路に爲り、以て餓者を待つ。餓者あり、來る、黔傲、左に食を奉じ、右に飮を執つて曰く、嗟、來り食へ、と。その目を揚げてこれを視て曰く、予、惟だ嗟來の食を食はず、以て斯に至るなり」とある。【四】姜詩 前に留二題峽州甘泉寺一の詩中に注して置いた。

【題意】說明に及ばぬ。

【詩意】むかし、莊周は、米を借りた時、舂いて精げたのが善いと思つて居たし、魯公も、亦た米を乞ふた時、これを炊ぐ位の賤役は決して厭はなかつた。淵明も、正しく食を乞ひ、サアサア御出でといつて呼ばはるをも避けずして、早く腹を盈たしたいと思つて居た。嗚呼天下の士といはるるものも、その窮甚しき時に當つては、死生、唯だ一椀の飯に繋がつて居る。一斗ばかりの水は、いかほどの價値もないが、親が欲しいと云つたばかりに、姜詩を煩はして、遠く之を汲ましめた。今や、餘る程の薪と米があつて、この老いたる不才の吾を養つて居るのは、まことに有り難い仕合。その味は、年を經ても、決して變はらぬから、その儘、殘して置いて、子孫への贈り物にしたいものである。

【餘論】紀昀は「これ佳處なし」といつて、ひどくけなして居る。

和陶和胡西曹示顧賊曹韻

陶の、胡西曹の顧賊曹に示すの韻に和するに和す

（一）長春如稚女。（二）飄颻倚輕飔。
長春は稚女の如く、飄颻として輕颸に倚る。

（三）卯酒暈（四）玉頰。（五）紅綃卷（六）生衣。
卯酒、玉頰を暈し、紅綃、生衣を卷く。

低顏香自斂。含睇意頗微。
顏を低れて、香、自ら斂まり、睇を含んで、意、頗る微なり。

寧（七）當娣黃菊。未肯姒（八）戎葵。
寧ろ當に黃菊を娣とすべけむや、未だ肯て戎葵を姒とせず。

誰言此弱質。閱世觀盛衰。
誰か言ふ、この弱質、世を閱して盛衰を觀ると。

（九）頩然疑薄怒。（一〇）沃盥未可揮。
頩然として薄怒かと疑ふ、沃盥、未だ揮ふべからず。

（一一）瘴雨吹（一二）蠻風。凋零豈容遲。
瘴雨、蠻風を吹き、凋零、豈に遲きを容さむや。

老人不解飮。短句餘淸悲。
老人、飮を解せず、短句、淸悲を餘す。

【字解】【一】長春 査註に「按ずるに、本草、金盞草、一名長春花、久しきに耐ゆるを言ふなり。但し、金盞花は深黃、今詩に卯酒暈二玉頰一紅綃卷二生衣一と云へば、乃ち是れ紅色、當に別に是れ、一種なるべし」とあるが、長春は薔薇の異名、その方が適切では無いかと思はれる。【二】飄颻 輕げに動く貌。【三】卯酒 卯の刻は今の朝六時、卽ち朝酒の義。【四】暈玉頰 暈はぼかす。【五】紅綃 とき色のもみ。【六】生衣 初めて著下した衣裳。【七】當娣 爾雅に「長婦、稚婦を謂うて娣となし、娣婦、長婦を謂うて姒となす」とあつて、娣は妹、姒は姉と略ぼ同義。【八】戎葵 爾雅翼に「蜀葵、戎葵と名づけ、亦た胡葵と名づく。夏小正に云ふ、四月小滿後五日、胡葵、華さくと、卽ち此」とある。【九】頩然 つんと澄ましたる貌。【一〇】沃盥 左傳に「晉の公子重耳、秦に之く。秦伯、女を納る、五人匜を奉じて沃盥す、すでにして之を揮ふ」とある。【一一】瘴雨 瘴は毒熱の氣。【一二】蠻風

南方僻地の熱風。

【題義】陶淵明集に、胡西曹が顧賊曹に示した詩韻に和したといふ作があつて、この詩は、卽ち其韻を用ひたのであるが、內容は、長春花を詠じたのである。

【詩意】長春花は、年若き娘の如く、飄颻として、輕風に倚りかかつて居る處は、極めて風情がある。その花の色は、朝酒を飮んで、玉なす頰が、ほうツとぼかされたるが如く、新に著下した紅いもみの衣裳を卷いた樣である。そして、顏を低れて居ると、香氣は自ら斂まり、ながし目を爲して、その意は、極めて微妙である。されば、その花品は、黃菊を妹とすることは出來すとも、戎葵を姉とする譯にも行かず、つまり、兩花の中間に在るといつて善い。おもひきや、この弱質を持ちながら、世を閱して、盛衰の有樣を目睹せむとは。そこで、つんと打澄まして、聊か怒れるかと疑はれ、その妝を繕ふ必要上、盥漱の器など、まだ揮ひ去ることが出來ない。今しも、瘴雨は蠻風を吹いて、荒れすさぶ折から、その花の散ることは、決して遲きを許さない。年寄りの予は、これを見て、愁に堪へざれども、生來酒が飮めぬ處から、いささか短句を賦して、淸き悲哀の情を寫し出した次第である。

【餘論】紀昀は「結び得て悽惋」といつて居る。

和陶乙巳歲三月、爲建威參軍、使都經錢谿、游城北謝氏廢園作

陶の乙巳歲三月、建威參軍と爲り、都に使して錢谿を經るに和す。城北の謝氏の廢園に游びて作る

喬木卷蒼藤。浩浩崩雲積。
謝家堂前燕。對語悲宿昔。
仰看桄榔樹。元鶴舞長翮。
新年結荔子。主人黃壤隔。
溪陰宜館我。稍省薪水役。
相如賣車騎。五畝亦可易。
但恐鵩鳥來。此生還蕩析。
誰能插籬槿。護此殘竹柏。

喬木、蒼藤を卷き、浩浩として崩雲積む。
謝家堂前の燕、對語して宿昔を悲む。
仰ぎ看る桄榔の樹、元鶴、長翮を舞はしむ。
新年、荔子を結び、主人、黃壤隔つ。
溪陰、宜しく我を館すべし、稍や薪水の役を省かむ。
相如、車騎を賣り、五畝、亦た易ふべし。
但だ恐る、鵩鳥來り、この生、還た蕩析するを。
誰か能く籬槿を插んで、この殘竹柏を護せむ。

【字解】【一】謝家堂前燕　劉禹錫の詩に舊時王謝堂前燕、飛入尋常百姓家とあるを暗用したのであらう。【二】宿昔　過ぎし昔の事。【三】元鶴　元は玄、卽ち黑い鶴、その詩は前に次韻子由彈琴の詩中に注して置いた。【四】黃壤　黃土に同じ。【五】相如　前に再和梅花の詩中に注して置いた。【六】可易　易は變易、卽ち取りかへる。【七】鵩鳥　賈誼が長沙に居た時、鵩鳥が其

座隅に止まつたといふことで、前に狄償、孔長源及び應逢道を挽する諸詩中に注して置いた。【八】插籬槿 垣根近くに插木にした木槿。

【題義】 この詩は、矢張、陶淵明の詩に次韻したのであるが、その内容は、儋州城北なる謝氏の廢園に遊んだことを敍したのである。

【詩意】 喬木には蒼藤が卷きつき、浩浩として崩雲が積れる樣である。謝家の堂前に居る燕は、雙雙相對し、呢喃相話して、ありし昔を悲む樣である。仰ぎ見れば、桄榔樹は高く聳え、黑い鶴は、長い翼を羽ばたいて、その上で舞つて居る。春に成つて、茘子は新に實を結んだが、主人は、すでに物故して、黃土を隔て、最早、ここに歸つて來ることはない。この溪陰の小亭に予を館して呉れれば、まことに好都合で、少しは、薪水の勞を省くことも出來やうし、もし當年の司馬相如の如く、車騎を賣り拂つて、いささかの金だにあらば、五畝の田園は、容易に交換することが出來やう。しかし、恐るるところは、不吉なる彼の鵩鳥が座隅に來て、わが身生が又ぞろ、流浪する樣に成るといふ其事で、何時どうなるか分からぬから、それも、致し兼ねる始末。それにしても、誰が垣根の邊に木槿の插木をして、ここに殘れる竹柏の類を保護する樣にするであらうか。

【餘論】 紀昀は「起し得て緊切」といつて居る。

和陶擬古九首

陶の擬古九首に和す

有客叩我門。繫馬門前柳。 客あり、わが門を叩き、馬を繫ぐ門前の柳。
庭空鳥雀散。門閉客立久。 庭は空しくして鳥雀散じ、門、閉ぢて、客、立つこと久し。
主人枕書臥。夢我平生友。 主人、書を枕して臥し、わが平生の友を夢む。
忽聞剝啄聲。驚散一杯酒。 忽ち剝啄の聲を聞いて、驚き散ず一杯の酒。
倒裳起謝客。夢覺兩愧負。 裳を倒にし、起つて客に謝し、夢覺、兩つながら愧負。
坐談雜今古。不答顏愈厚。 坐談、今古を雜へ、答へざれば、顏、愈よ厚し。
問我何處來。我來無何有。 われに問ふ、何處より來ると、われは無何有より來る。

【字解】【一】剝啄聲 人の足音を云ふ。【二】倒裳 衣を裳がへしに著る。【三】無何有 莊子に「今、子、大樹あつて、その用ふるなきを患ふ、何ぞ之を無何有の鄕、廣莫の野に樹ゑ、彷徨として其側に爲すなく、逍遙として其下に寢臥せざる」とある。

【題義】 陶淵明に擬古九首があつて、これは、それに次韻したのである。馮應榴の案に「明の焦竑外集の序に云ふ、この九首は、本と子由の作と。今按するに、子由は、自ら次韻の詩九首あり、焦氏の云ふところ、未だ確ならず。但だ蘇籀の雙溪集、欒城集中、和陶擬古九首を指して、亦た坡、公に代つて作り、今、すでに列して、他集に入れ、互に卷末に見ゆといふ。或は、先生の此九首、子由の

代作たり、子由の九首、先生の代作たるも、未だ知るべからざるなり」といつて居るが、ここでは、矢張、東坡の自作として置く。

【詩意】客があつて、わが門を叩き、馬を門前の柳に繋いで、しきりに、呼び音なうて居る。折から、庭には人もなく、鳥雀すでに散じ盡し、門は閉ぢた儘、客は、久しい間、そこに立つて居た。主人は、何をして居たかといへば、書物を枕にして寐そべりながら、平生の親友を夢に見て居たが、忽ち人の足音を聞いて驚き醒めたから、折角飲んだ一杯の酒も、すッかり消えて無くなつて仕舞つた。そこで、大あわてに、衣を裏がへしに著たまま、出でて客に挨拶し、寐ても、醒めても、兩つながら、愧ぢ入るばかりの失態。坐談に今古を交へて、榛榛の事を語り合つたが、答へなければ、愈よ厚顏と見られるであらう。その時、客は予に向つて、何處から來たかと問ふたから、予は打澄まして、無何有の鄕から來ましたといつて答へた。

【餘論】紀昀は「結二句、調、劉隨州を用ふ、然れども、劉の語は峭拔を覺え、これは俳に近きを覺ゆ。古人淳厚の氣象に非ざるは、全篇に由る」といつて居る。

酒盡君可起。我歌已三(二)終。　酒盡きて君起つべし、わが歌、すでに三たび終る。

由來竹林人。不數濤與戎。(三)　由來、竹林の人、濤と戎とを數へず。

有酒從孟公。(三)愼勿從揚雄。　酒あれば孟公に從はむ、愼んで揚雄に從ふ勿れ。

崎嶇(四)頌沙麓。(五)塵埃汙西風。(六)　崎嶇、沙麓を頌し、塵埃、西風に汙る。

昔我未嘗達。今者亦安窮。　むかし、われ未だ嘗て達せず、今は亦た窮に安んず。

窮達不到處。我在阿堵中。(七)　窮達、到らざる處、われは阿堵中に在り。

【字解】【一】三終　説苑に「孔子、陳蔡の境に遭ひ、兩柱の間に歌ふ、子路、干を執つて舞ひ、三終して出づ」とある。【二】濤與戎　山濤と王戎、顏延之の五君詠にも、ことさらに、この二人を除いてあるので、その評は、前に李誠之挽詞の詩中に注して置いた。【三】孟公　陳遵の字、前に偶與客飮、及び和蘇州太守の詩中に注して置いた。【四】崎嶇　崎嶇する貌。【五】頌沙麓　漢書元后傳に「后幾乎、王莽、揚雄に詔して、誄を作らしむ。曰く、太陰之精、沙麓之靈、作合於漢、配元生成」とある。【六】塵埃汙西風　庾亮、字は元規。その勢を得るや、王導、內、平かなる能はず、かつて、西風、塵起るに遇ひ、扇を擧げて自ら蔽ひ、徐に曰く、元規の塵人を汙す、と。【七】阿堵中　晉書顧愷之傳に「傳神寫照、正に阿堵中に在り」と見ゆ、この中といふに同じ。

【詩意】酒、すでに盡きたれば、君は起つて歸るべく、われは歌うて、すでに三たび曲を終つた。元來、竹林七賢の中、山濤と王戎とは除外されるを例とし、鹿爪らしく構へて居る人は、どうも好ましくない。酒あらば、陳孟公に從つて飮むべく、注意して、揚雄と一處にならぬ方が善い。その揚雄は、

碌碌用ひられぬ癖に、沙麓の靈といつて、太后の誄を作つたことがあるし、王導は、庾亮をいぶせく思つて、西風の時、塵埃の人を汚すに比した位。從來、予は決して立身せず、今でも、矢張、貧窮に安んじて居る。さはれ、窮達ともに相關せざる安心立命の境こそ、まことに尊いので、予は、現に其中に居るのである。

【餘論】紀昀は、これを前首に比較して「體格同じからざるなり」といつて居る。

客去室幽幽。鵩鳥來座隅。　客去つて、室幽幽、鵩鳥、座隅に來る。
引吭伸兩翅。太息意不舒。　吭を引いて、兩翅を伸べ、太息、意、舒びず。
吾生如寄耳。何者爲吾廬。　わが生、寄の如きのみ、何者か吾が廬となす。
去此復何之。少安與汝居。　ここを去つて、復た何くにか之く、少安、汝と居る。
夜中聞長嘯。月露荒榛蕪。　夜中、長嘯を聞く、月露、榛蕪荒る。
無問亦無答。吉凶兩何如。　問ふなく、亦た答ふるなし、吉凶、兩つながら何如。

【字解】(一)吉凶　賈誼の鵩鳥賦に野鳥入處兮、主人將去、請問于服兮、予去何之、吉乎告我、凶言其菑とある。

【詩意】客、すでに去つて、室中ほの暗き時、鵩鳥が座隅に來り、吭を引き、兩の翅を伸ばし、太息しつつ、その意、まことに舒びざるが如く見えた。人の一生は、寄寓して居る樣なもので、何が吾が廬とも分らず、ここを去つて、何處に往くといふあてもないから、すこしく心を安んじ、汝鵩鳥と一處に居るのである。夜中に、その鵩鳥の長嘯する聲が聞こえ、折から、月下露滿ちて、榛蕪は荒れはてて見える。われと汝と、問ひもせず、答へもせぬが、わが前途の吉凶は、果して如何であらうか。

【餘論】紀昀は「用ひ得て變化、便ち超妙を覺ゆ」といつて居る。

少年好遠游。蕩志隘(一)八荒。　少年、遠游を好み、蕩志、八荒を隘しとす。
(二)九夷爲藩籬。四海環我堂。　九夷を藩籬となし、四海、わが堂を環る。
(三)盧生與若士。何足期渺茫。　盧生と若士と、何ぞ渺茫を期するに足らむ。
稍喜海南州。自古無戰場。　稍や喜ぶ、海南の州、古しへより、戰場なきを。
奇峯望(四)黎母。何異(五)嵩與邙。　奇峯、黎母を望む、何ぞ異ならむ嵩と邙と。
(六)飛泉瀉萬仞。舞鶴雙低昂。　飛泉、瀉ぐこと萬仞、舞鶴、雙んで低昂。
(七)分汴未入海。膏澤彌此方。　分汴、未だ海に入らず、膏澤、この方に彌る。

（八）芋魁儻可飽、無肉亦奚傷。　芋魁、もし飽くべくんば、肉なきも、亦た奚ぞ傷まむ。

【字解】【一】八荒　天地を云ふ。【二】九夷　論語に見ゆ。後世の註家は、詳しく其名を擧げて居るが、實は根據ないことで、九は大數と見れば善い。【三】盧生與若士　ともに神仙の名、神仙傳に「若士、盧敖に謂つて曰く、吾、方に汗漫と九垓の外に期す、久しく住まるべからず、と。乃ち身を竦して雲中に入る」とある。【四】黎母　山の名、名勝志に「山は、瓊州府定安縣南に在り。一に云ふ、むかし、雷、一蛇卵を攝して山中に在り、一女を生む、交趾蠻あり、海を過ぎて香を采り、因つて與に野合す、その後、子孫衆多、これを黎人の祖となす、故に黎母といふ」とある。【五】嵩與邙　嵩山と北邙山。【六】飛泉　昌江を云ふ。瓊州志に「昌化縣の城南十里に在り、源は五指山より侯村に至り、南北二派に分れ、南江は西流し、赤坎村を經、海潮に會して瀦を成す。北江は、縣を繞つて南流し、西、泥浦に至り、潮と相匯して徑に海に入る」とある。【七】分汙　說文に「汙は、古しへの流の字なり」とある。【八】芋魁　芋がしら、即ち里芋の類。

【詩意】予は、少年の頃より、遠遊を好み、志を縱にして天地を狹しとし、九夷を藩籬と考へ、四海が我が堂を環つて居るとさへ思つて居た位。盧敖と若士とは、九垓の外に期したから、久しく、この世に留まつて居ることが出來ぬといつて居つたといふが、この二人は、まだまだ、渺茫の外に相約して會することは出來まい。やや喜ぶべきは、海南の儋州であつて、むかしから、戰爭の無い處。黎母の奇峰を望むと、さながら、洛陽から嵩山や北邙を望んだ樣な氣がする。昌江は、ここより發し、飛泉は勢をなして、萬仞の谷に注ぎ、仰ぎ見れば、二羽の鶴が相竝んで、一高一低、舞をなす樣の珍らしさ。この川は、二つに分流して、未だ海に入らざる間は、田畝を灌漑して、膏澤は、この地方に遍ねき程で、地味の肥沃は、勿論の事である。そこで、芋がしらを飽食して足れりとすべくんば、肉がなくても、決して、心配するには及ばない。

【餘論】紀昀は「これ亦た朴老」といつて居る。

（一）馮冼古烈婦、翁媼國于茲。　馮冼は古しへの烈婦、翁媼、ここに國す。
策勳梁武後、開府隋文時。　勳を策す梁武の後、府を開く隋文の時。
三世更險易、一心無（二）磷緇。　三世、險易を更ふるも、一心、磷緇なし。
（三）錦繖平積亂、（四）犀渠破餘疑。　錦繖、積亂を平らげ、犀渠、餘疑を破る。
（五）廟貌空復存、碑版漫（六）無辭。　廟貌、空しく復た存し、碑版、漫にして辭なし。
我欲作銘誌、慰此父老思。　われ銘誌を作り、この父老の思を慰めむと欲す。
遺民不可問、僂句（七）莫予欺。　遺民、問ふべからず、僂句、予を欺く莫し。
（八）爆牲（九）菌雞卜、我當一訪之。　爆牲、菌雞の卜、われ當に一たび之を訪ふべし。
銅鼓壺盧（一〇）笙、歌此送迎詩。　銅鼓、壺盧の笙、この送迎の詩を歌へ。

【字解】【一】馮冼　北史列女傳に「譙國夫人冼氏、世、南越の首領たり。父母の家に在つて部衆を撫循し、能く諸越を壓服す。海南儋耳、歸附するもの千餘洞。梁の大同の初、高涼太守馮寶、聘して以て妻となす。高州刺史李遷仕、反す、夫人、これを擊つて大に捷つ。寶の卒するに及びて、嶺表大に亂る。夫人、百越を懷集し、數州宴然たり。陳の永定二年、廣州刺史歐陽紇、反す。夫人、兵を發して境を拒ぐ、詔して、節を持し、夫人を册して、高涼郡太夫人と爲さしめ、一に刺史の儀の如し。陳亡ぶ、隋の文帝、嶺外を安撫するや、晉王廣、陳主を遣して、書を遺らしめ、諭すに歸化を以てし、犀杖兵符を以て信となす。夫人、驗知して盡日慟哭す。夫人を册して、宋康郡夫人となす。王仲宣の反、夫人、兵を進めて、南海に至り、親ら甲を披き、介馬に乘じ、錦傘を張りて、彀騎を領す。詔して、裴矩をして諸州を巡撫せしめ、嶺南悉く定まり、譙國夫人に封ぜらる。賜物各〻一庫に藏し、歲時、大會ごとに、皆庭に陳し、以て子孫に示して曰く、われ三代の主に事へ、惟だ一好心を用ふ、今賜物具に存す、これ忠孝の報」とある。【二】無磷緇　すこしも汚損せざること。【三】錦繖　即ち錦傘。【四】犀渠　國語に「文犀の渠を奉ず」とあつて、註に「甲なり」とある。即ち犀の皮で造つた鎧。【五】廟貌　祠廟の模樣。【六】漫無辭　磨滅して文辭が見えない。【七】僂句　裸體で立ち騷ぐ貌。【八】犧牲　牛を犧牲とする。【九】雞卜　小さな雞の骨を燒いて、その裂け工合で卜を爲すこと。【一〇】壺盧笙　瓠を削いて造つた笙。

【詩意】馮太守に嫁した冼氏は、古しへの烈婦であつて、蠻地の翁媼輩は、ここに國を爲して居た。冼氏は、梁の武帝の後に於て功勳を策し、隋の文帝の時、府を開き、梁陳隋、三世の間、險易數ば更はれども、一心すこしも汚化することなく、錦傘の下に、彍騎を從へて、積れる爭亂を平定し、犀甲を著けて、餘疑を破り、蠻民は、皆中國に心服する樣に成つた。その功績、異常なるが故に、祠廟の模樣は、依然として今に存すれども、歲月の久しき、碑版は磨滅して、文辭も無い位。そこで、予は銘辭を作つて、父老の思を慰めやうと思つて居る。遺民は何處に居るか、今や血族が混淆して、區別することが出來ず、野蠻の狀を爲して、予を驚かすものもない。ただ牛を犧牲としたり、雞骨を焚いて卜筮を爲したりする風俗だけは、殘つて居るから、予も、是非一度、尋ねて見たいと思つて居る。その時は、銅鼓と瓠笙とを用意させて、冼氏の神靈を送迎する此文辭を歌はせやうと思つて居る。

【餘論】紀昀は「これは則ち平鈍」といつて居る。

沈香作庭燎。甲煎粉相和。　沈香を庭燎となし、甲煎、粉相和す。

豈若炷微火。縈煙嫋清歌。　豈に若かむや、微火を炷し、煙を縈つて清歌を嫋するに。

貪人無飢飽。胡椒亦求多。　貪人、飢飽なく、胡椒、亦た多きを求む。

朱劉兩狂子。隕墜如風花。　朱劉の兩狂子、隕墜、風花の如し。

本欲渴澤漁。奈此明年何。　本と澤を渴かして漁せむと欲す、この明年を奈何。

【字解】【一】沈香　水沈といふ木を粉末にした香料。【二】庭燎　庭上に燒く大きな篝火。【三】甲煎　本草注に「甲煎は、諸藥及び美果花の燒灰を以て、蠟に和して治成す、口脂と作すべし、蓋し結すれば脂となり、散ずれば粉となる。故に甲煎粉といふ」とある。そして、この句は、紀聞に、隋の　帝が除夜に火山を設け、盡く沈香の木根、火光暗ければ、甲煎を以て之に沃ぐとあるのを併せて晴用したのであらう。【四】胡椒　唐の元載の事、前に歐陽叔弼見訪の詩中に注して置いた。【五】朱劉兩狂子　東坡の自註に「朱初平・劉誼、黎人を冠帶にし、以て水沈を取らむと欲するのみ」とあつて、この二人が無知な黎人を敎化したのは、至極宜しい

樣であるが、實は香料たる水沈を取らしめ、そして自分が其間に在つて私利を擅にせむとするのであるといつて、ひどく二人を斥けたのである。但し、通鑑長編を見ると、この二人は、瓊州の地方官が香を買ひ入れる弊害を痛論したもので、東坡の自註と全然合はない。そこで、馮應榴は「姑らく存して考を俟つ」といつて居る。【六】竭澤漁　沼を涸らして、すツかり魚を漁し去るといふ意。呂氏春秋義賞篇に「晉の文公、楚人と城濮に戰ふ。雍季曰く、澤を竭して漁す、豈に獲得せざらむや、しかも、明年は無し」とある。

【詩意】沈香の材を集めて、庭上に大篝を焚やし、少しでも火の勢が惡くなると、甲煎の粉を沃ぎかける。まことに、富貴の殊相を極めたものであるが、考へて見れば、勿體なく、且つ馬鹿げたことであつて、それよりも、沈香を微かな火に焚き、立ちのぼる煙の邊で、清歌を婉かに唱へさせる方が、はるかに趣がある。貪慾を以て性となせる人は、飢飽に關せず、何でも物を澤山に貯へたがるので、かの元載の如きは、胡椒を百斛も倉の中に仕舞ひ込んで置いたといふ話。ここに、朱初平・劉誼の二人、ともに狂癡子と稱すべく、その權勢を失つて落ちぶれた有樣は、さながら、風に吹き飛ばされた落花の如くである。彼等は、もと沼澤を涸らして、殘らず魚を獲やうとしたのであるが、さうすれば、明年以後、一も得るところなく、謂はゆる大慾は無慾に近しといふ樣なことに成るのを知らなかつたのである。

雞(一)窠養鶴(二)髮。及與唐人游。　雞窠、鶴髮を養ひ、唐人と游ぶに及ぶ。
來(三)孫亦垂(四)白。頗識李(五)崖州。　來孫亦た垂白、頗る識る李崖州。

再逢盧(六)與丁。閱世眞東流。　再び盧と丁とに逢ふ、世を閱す、眞に東流。
斯人今在亡。未遽掩(七)一邱。　斯人、今在ること亡し、未だ遽に一邱を掩はず。
我師吳(八)季子。守節到晚周。　わが師、吳の季子、節を守つて、晚周に到る。
一見春(九)秋末。渺焉不可求。　一たび春秋の末に見はれ、渺焉、求むべからず。

【字解】【一】雞窠　雞の巣、錢希白の洞微志に「太平興國中、李守忠、承旨となり、使を南方に奉じ、海を過ぎて瓊州の界に至る。道に一翁に逢ふ、自ら楊遐舉と稱す、年八十一。守忠を邀へて、居るところに至り、その父に見えしむ、曰く、叔連、年一百二十二、又その祖に見えしむ、曰く、宋卿、年一百九十五。語次、梁上の雞窠中に、ヽ小兒あり、頭を出して下に視るを見る。宋卿曰く、吾が前代の祖なり、語らず、食はず、その年の朔望を知らず、子孫の列拜を取下するのみ」とある。【二】鶴髮　白髮。【三】來孫　爾雅に「曾孫の子を元孫となし、元孫の子を來孫となす」とある。【四】垂白　白髮を垂れる。【五】李崖州　唐の李德裕、大中二年に崖州司戸參軍に貶せられた。【六】盧與丁　盧多遜と丁謂、ともに宋史に傳があつて、盧は太平興國の初、丁は仁宗即位の後、ともに罪を得て、崖州司戸參軍に謫せられた。【七】掩一邱　漢書楊惲傳に「古と今とは、一邱の貉の如し」とあつて、死後は、賢奸ともに區別なきを云ふ。【八】吳季子　吳の季札。【九】春秋末　左傳哀公十年に「冬、楚の子期、陳を伐つ。吳の延州來の季子、陳を救ふ。子期に謂つて曰く、二君、德を務めずして諸侯を力爭す、民、何の罪かある。われ請ふ、退いて以て子の名を成さむ、德を務めて民を安んぜよと。乃ち還る」とあつて、この時、季子は年九十餘であつた。

【詩意】楊家の先祖と稱するものは、白髮頭で、雞の巣の中に養はれ、唐代の人と遊んだといふ話。その來孫でさへも、白髮を垂れて、餘程よく李德裕を面識して居り、後には、又ぞろ、盧多遜・丁謂等

にも逢つたといふので、水の東流するが如き世の有様を閲し盡したものと見える。これ等の人人は、すでに死んで仕舞つて今は居らぬが、未だ遽に一邱を掩ふに及ばず、賢奸の評判は、とりどりである。わが師とするところの呉の季子は、耿介の節を守つて、周の衰世に當り、そして、一たび春秋の末に顯はれ、陳を救つたことがあるが、その後、いかに成りしか、その跡は、渺焉として分からない。つまり、何も爲すなくして長生をしたところで、格別、貴い譯でもなく、苟くも、一かどの事を成し遂げた上は、たとひ死んだ處で、その人は、千古に不朽である。

【餘論】 紀昀は「後の四句未詳」と云つて居るが、上の如く解釋すれば、その意味は、略ば疏通することと思はれる。

城南有荒池。瑣細誰復採。　城南に荒池あり、瑣細、誰か復た採らむ。
幽姿小芙蕖。香色獨未改。　幽姿小芙蕖、香色、獨り未だ改めず。
欲爲中州信。浩蕩絶雲海。　中州の信を爲さむと欲するも、浩蕩として雲海を絶つ。
遙知玉井蓮。落蘂不相待。　遙に知る玉井の蓮、落蘂、相待たず。
攀躋及少壯。已失那容悔。　攀躋、少壯に及べ、すでに失すれば、那ぞ悔ゆべけむや。

【字解】【一】瑣細　こまごましき植物。【二】中州　中原に同じ、ここでは汴京を指す。【三】玉井　華山の絶頂に在る池。

【詩意】 城南に小さな池があつて、そこに生えて居る下らぬものは、誰も採らないが、姿やさしき蓮の花のみは、ひとり挺然として、香色ともに容易に衰へない。ここに、都の方を望んで、音信を通せむとするも、雲の海は、浩蕩として、はてもない位。おもへば、華山の玉井に生ずる蓮と雖も、花は散り落ちて、決して、待つて居て與れない。華山に躋攀して、その花を摘まむとならば、筋力壯なる少壯の時に限るので、すでに時期を失した上は、いかに後悔したところで、今更、致し方もないことである。

【餘論】 紀昀は「この首、純乎たる古音、絶えて本色なし、これを曲江・正字の間に置くも、復た辨ずべからず」といつて居る。曲江は張九齡、正字は陳子昂、ともに唐人で、感遇の作を以て知られて居る。

黎山有幽子。形槁神獨完。　黎山に幽子あり、形槁れて神ひとり完し。
負薪入城市。笑我儒衣冠。　薪を負うて城市に入り、わが儒衣冠を笑ふ。
生不聞詩書。豈知有孔顏。　生まれて詩書を聞かず、豈に孔顏あるを知らむや。

(五)翛然獨往來。榮辱未易關。　翛然として、ひとり往來、榮辱、未だ關し易からず。

日暮鳥獸(六)散。家在孤雲端。　日暮、鳥獸散じ、家は孤雲の端に在り。

問答了不通。歎息(七)指屢彈。　問答、了に通ぜず、歎息して、指、屢ば彈ず。

似言君貴人。草莽栖龍鸞。　言ふに似たり、君は貴人、草莽に龍鸞を栖ましむと。

遺我(八)古貝布。海風今歲寒。　われに古貝布を遺る、海風、今歲寒。

【字解】【一】黎山　前に見えた黎母山であらう。【三】幽子　幽人に同じ、俗塵を脫した隱者。【三】形槁　形容枯槁、瘦せて澤なき貌。【四】孔顏　孔子と顏回。【五】翛然　超然に同じ。【六】鳥獸散　鳥獸の如く散じて歸る。【七】指屢彈　斥け去るの意。【八】古貝布　舊唐書南蠻傳に「婆利國、古貝草あり、その花を緝して以て布を作り、粗なるものを白氎と名づく」とあり、番禺雜編に「嶺南邕容、皆古貝樹あり、語訛して劫貝となる。その花蘂、茸絲に似たり　綿碢子を以て之を績いで織つて布となす」とある。又古は吉の訛、即ち吉貝布だといふ說もある。

【詩意】黎山に幽人があつて、形容は枯槁して居るが、精神のみは、ひとり全く、さすがに、道を體得したものである。この人は、生まれて詩書を聞かぬ位だから、薪を齎負うて城中に入り、予が儒者の衣冠を著けて居るのを笑つて居る。この人は、生まれて詩書を聞かぬ位だから、どうして、孔子・顏回の有りしことを知るべきぞ。そして、翛然として、唯だ一人で往來し、世間の榮辱など、容易に心に關するに及ばない。日暮になると、鳥獸の如く散じて歸るが、その家は、孤雲たなびく其端に在る。そこで、この人と問答して見た處が、まことに、意志が通せぬところから、歎息して爪彈きをしたい位。彼は、貴君は高貴の人であつて、ここに居るのは、草むらに龍や鸞凰が栖んで居る樣なものだといふ樣であつて、やがて、予に白氎の布を贈つたが、今しも歲の暮、海風いとも嚴しき折から、防寒には持つて來いといふもので、その志だけは、まことに有り難く感じた。

【餘論】紀昀は「對照を以て意を見はし、感慨は言外を以て之を寓す」といつて居る。

和陶癸卯歲始春懷古田舍二首

陶の癸卯の歲、始春、田舍に懷古すの二首に和す

儋人黎子雲兄弟、居城東南、躬農圃之勞、偶與軍使張中同訪之、居臨大池、水木幽茂、坐客欲爲釀錢作屋、予亦欣然同之、名其屋曰載酒堂、用淵明始春懷古田舍韻作二首。

【訓讀】儋人黎子雲兄弟、城の東南に居り、農圃の勞を躬らす。偶ま軍使張中と同じく之を訪ふ、居は大池に臨み、水木幽茂、坐客、爲に錢を釀して屋を作らむと欲す、予、亦た欣然これに同じくし、その屋を名づけて載酒堂といひ、淵明の始春田舍に懷古するの韻を用ひて、二首を作る。

退居有成言、垂老竟未踐。　退居、成言あり、垂老、竟に未だ踐まず。
何曾淵明歸、屢作敬通免。　何ぞ曾て淵明の歸る、屢ば敬通の免を作す。
休閒等一味、妄想生愧靦。　休閒、等しく一味、妄想、愧靦を生ず。
聊將自知明、稍積在家善。　聊か自知の明を將て、稍や在家の善を積む。
城東兩黎子、室邇人自遠。　城東の兩黎子、室は邇くして人は自ら遠し。
呼我釣其池、人魚兩忘反。　われを呼んで其池に釣らしめ、人魚、兩ながら反るを忘る。
使君亦命駕、恨子林塘淺。　使君、亦た駕を命ず、恨む、子が林塘の淺きを。

【字解】【一】成言　格言に同じ、老子に「功成り、身退くは天の道なり」とあるの類。【二】敬通　後漢書馮衍傳に「字は敬通、出でて曲陽令となる。功を論じて、封に當するや、讒毀を以ての故に、賞、行はれず。帝、將に召し見むとす、王護等排問し、これに由つて罪を得たり。顯宗卽位、又多く衍を短するに、文、その實に過ぐるを以てし、遂に家に廢せらる」とある。【三】自知明　老子に「人を知るものは智、自ら知るものは明」とある。【四】兩黎子　黎子雲及び其弟威を云ふ、前に屢ば見ゆ。【五】使君　地方長官の尊稱、儋州の守張中を指す、亦た前に見ゆ。

【題義】儋耳の人、黎子雲及び威の兄弟は、州城の東南に居て、自分で田畑を耕して居る。ある時、偶然にも、軍使張中と一處に、これを訪問した。その家は、大きな池に臨んで、水木幽茂、仲仲趣がある。そこで、坐客は錢を醵出して、そこに家を作らせることを相談したから、予も亦た欣然として之に贊成し、その出來る家を名づけて載酒堂とすることに決定し、陶淵明の始春懷古田舍の詩に次韻し、この二首を作つて、その人に贈つたといふのである。

【詩意】隱遁するに就いては、格言があつて、一かどの功績を成し遂げた後、身退くこと、然るべきであるが、予は、老に垂んとして、まだ之を實踐することが出來ない。どうして、淵明が鄉里に還つた樣に致されやうか、却つて、馮敬通の如く、屢ば免官になつた位。しかし、官を罷めるのも、閒職に居るのも、畢竟、同一の氣分であつて、さまざまの妄想を起すのは、まことに、愧づべきことである。されば、聊か自己の身の上を考へ、家に居て、善を積むことを追追心がけて居る。州城の東南に居る黎氏兄弟は、その宅こそ近いが、人物は、自然浮世ばなれがして居て、まことに、欽慕すべく、われを呼んで、その池に釣らしめ、釣をして居る間は、人と魚と、兩つながら還るを忘れる位。すると、太守も亦た駕を命じて、來り過ぎ、この場所は仲仲善いが、林塘淺くして、城市に近接して見えるのが、稍や物足らぬ樣であると申された。

【餘論】妄想生愧靦の下に、東坡は、自註を施して「淵明、本と緬の字を用ふ、今、聊か同音の字を取る」といつて居る。

茅（一）茨破不補。嗟子乃爾貧。　茅茨、破るるも補はず、嗟す、子が乃ち爾く貧なるを。

菜肥人愈瘦。竈閒井（二）常勤。　菜、肥えて、人、愈よ痩せ、竈、閒にして、井、常に勤む。

我欲致薄（三）少。解衣勸坐人。　われ薄少を致さむと欲し、衣を解いて坐人に勸む。

臨池作虛堂。雨急瓦聲新。　池に臨んで虛堂を作り、雨、急にして瓦聲新なり。

客來有美（四）載。果熟多幽欣。　客、來つて美載あり、果、熟して幽欣多し。

丹荔破玉膚。黃柑溢芳（五）津。　丹荔、玉膚を破り、黃柑、芳津を溢す。

借我三畝地。結茅爲子鄰。　われに三畝の地を借さば、茅を結んで、子の鄰とならむ。

鴃（六）舌儻可學。化爲黎（七）母民。　鴃舌、もし學ぶべくんば、化して黎母の民とならむ。

【字解】【一】茅茨　かやぶきの家。【二】井常勤　馮應榴の案に「貧、惟だ水を飲むのみと謂ふに似たり」とある。【三】薄少　いささかの贈り物。【四】美載　結構なる持參品。【五】芳津　甘き液汁。【六】鴃舌　孟子に南蠻鴃舌之人といつて、蠻夷の言語。【七】黎母　山名、前に見ゆ。

【詩意】あばらやが破れても修覆せず、黎氏兄弟が、かばかり貧乏であるかと思ふと、まことに、お氣の毒である。畑に菜は肥えて居るが、人は愈よ痩せ、竈は用ふること少く、井戸のみ常に勤むるのを見ると、水ばかり飲んで居るものらしい。そこで、予は、いささか出金せむとし、衣を脫ぎすて、打ち解けて、坐上の人に勸めると、その案が成立し、やがて池に臨んで虛堂を建て、それが出來上ると、俄雨の時など、瓦を打つ音が勇ましく聞こえる。客が來訪すると、結構な肴核を持參するを常とし、殊に果物の熟する折から、喜ぶべきものが多く、荔枝の赤くなつたのは玉膚を破り、黃柑は甘い汁が溢るるばかり、各〻打集うて、ここに雅會を催すのである。もし、予に三畝程の地を借して與れたならば、茅屋を構へて、黎氏の鄰家となるべく、又南方の言語が出來さへすれば、この儘、ここに居付いて、黎母山下の人となりたいと思ふ位である。

和陶辛丑七月、赴假還江陵、夜行塗中作口號、郊行步月作

陶の辛丑七月、假に赴いて江陵に還り、夜行塗中の作の口號に和す。郊行、月に歩して作る

缺（一）月不早出。長林踏靑（二）冥。　缺月、早く出でず、長林、靑冥を踏む。

犬吠主人怒。愧此閭里情。　犬、吠えて主人怒る、この閭里の情に愧づ。

怪我夜不歸。茜（三）袂窺柴（四）荊。　我が夜歸らざるを怪んで、茜袂、柴荊を窺ふ。

雲間與地上。待我兩友生。　雲間と地上と、われを待つ兩友生。

驚鵲再三起。樹端已微明。　驚鵲、再三起ち、樹端、すでに微明。
白露淨原野。始覺邱陵平。　白露、原野を淨くし、はじめて邱陵の平かなるを覺ゆ。
暗蛩方夜績。孤螢亦宵征。　暗蛩、夜に方つて績ぎ、孤螢、亦た宵征。
歸來閉戶坐。寸田且默耕。　歸り來つて戶を閉ぢて坐し、寸田、且つ默耕。
莫赴花月期。免爲詩酒縈。　花月の期に赴く莫れ、詩酒の縈を爲すを免れむ。
詩人如布穀。聒聒常自名。　詩人は布穀の如し、聒聒、常に自ら名いふ。

【字解】（一）缺月　圓ならぬ月、ここでは下弦の月を指す。（二）青冥　青黑い色、卽ち木影を指して云ふ。（三）茜袂　赤い色の袂、下婢を指す。（四）柴荊　片折戶。（五）宵征　夜飛んで行く。（六）布穀　鳥の名。

【題義】說明に及ばぬ。但し、赴假とは、請暇を得たこと、塗中は卽ち途中。

【詩意】下弦の月は、仲仲早く出でず、そこで、林に徬うて、靑黑い木かげを踏んで散步して居た。犬が吠えると、その家の主人が怒つて叱りつけるので、閭里相知の情を流石に辱く思つた。予が夜になつても、容易に歸らざるを怪み、赤い袂の下婢は、片折戶の外を覗いて待つて居る。されば、雲間の月と地上の人と、わが歸るを待つて、二人の友が居る譯である。やがて、塒の鳥が驚いて、兩三度、飛び起つを訝かしと見れば、今しも、月が上つて、木の端が少し明るく見えた。白露は、淨く原野に置き餘つて、さながら煙れるが如く、邱陵も平になつた樣に見える。きりぎりすは、頻りに鳴いて、絲を績ぐが如く、一つの螢は、暗い處をすうと飛んで行く。この時、予は、はじめて歸り來り、戶を閉ぢた儘、默然として獨坐し、方寸の心に耕し、專ら精神の鍛錬を試みつつある。おもへば、花月の約などには赴かぬ方が善いので、さうすれば、詩酒に纏ひつけられる煩累を免れるであらう。元來、詩人と稱する手合は、丸で布穀の鳥の如く、かしましく、每每自ら名のつて出るので、風流な樣ではあるが、その實、俗氣紛紛、殊に賤むべきものである。

【餘論】紀昀は「犬吠の十字、眞に至る」といひ、又結二句を賞して「激語覺住に妙、遂に甚だ露はならず」といつて居る。

和陶庚戌歲九月中于西田穫早稻

陶の庚戌の歲九月中、西田に早稻を穫るに和す

蓬頭三獠奴。誰謂愿且端。　蓬頭の三獠奴、誰か謂ふ、愿にして且つ端と。
晨興灑掃罷。飽食不自安。　晨に興きて灑掃罷み、飽食、自ら安んせず。
願治此圃畦。少資主游觀。　願はくは、この圃畦を治め、少しく主の游觀に資せむと。

晝功不自覺。(四)夜氣乃潛還。
(五)早韭欲爭春。(六)晚菘先破寒。
人間無正味。美好出艱難。
蚤知農圃樂。豈有(七)非意干。
尚恨不持鉏。未免(八)騂我顏。
此心苟(九)未降。何適不(一〇)間關。
(一一)休去復歇去。菜食何所歎。

晝功、自ら覺えず、夜氣、乃ち潛に還る。
早韭、春を爭はむと欲し、晚菘、先づ寒を破る。
人間、正味なく、美好、艱難に出づ。
蚤く農圃の樂を知らば、豈に非意干むるあらむや。
なほ恨む、鉏を持せず、未だ我が顏を騂くするを免れず。
此心、苟くも未だ降らざれば、何くに適くとして間關たらざらむ。
休み去り、復た歇め去る、菜食、何の歎ずる所。

【字解】【一】蓬頭　髮を梳らずして、蓬の如く亂れたるを云ふ。【二】獠奴　獠は蠻族の名。【三】愿且端　謹愼にして且つ端正なること。【四】夜氣　夜に方つて物を長ずる氣。【五】早韭　韭は、にら、葱の類。【六】晚菘　菘は青菜。【七】非意干　詰まらぬ物を考へて他に求むること。【八】騂我顏　騂は赤色。【九】未降　落ち付かぬ。【一〇】間關　流浪する。【一一】休去復歇去　休も、歇も、仕事なくして休息して居ること。傳燈錄に「石霜和尙、僧あり、室に入る、石霜云ふ、休去、歇去、古廟香爐去、一條白練去」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】髮亂れたる三人の獠奴は、謹愼端正ではないが、なかなか有爲進取的である處から、朝早く起きて、掃除がすツかり濟むと、飽食して居るだけでは、あまり勿體ないから、この畑の世話をして、蔬菜を作り、いささかなりとも、主人の游觀に資する樣にしたいといつて、せツせと骨を折つて働いた。そこで、晝の仕事は、格別目立たないが、夜氣が知らぬ中に還つて、之を生育するものと見え、作り物は、すべて、出來がよく、わせの葱は、春を爭はむと欲し、奧手の菜は、寒を破つて勢が善い。元來、人間には正味といふものなく、美好なるものは、すべて艱難の中より出るのである。もし、農圃の樂が、かばかりの者であるといふことを、もツと早くから知つたならば、何も、それを詰まらぬものとして、外に求める樣なことは無かつたであらう。ただ自分が鋤鍬を持たぬ癖に、一日畑にばかり居る處から、日に燒けて、顏の色の赤黑くなつたのは、いささか殘念であるが、それも仕方がない。何にせよ、この心が落ち付いて居ない限りは、何處に往つたとて、衝突の爲に流浪することを免れない。今しも稍や悟つた處から、專ら休歇を事とし、無爲以て生を爲し、菜食を至極結構だと思つて居る。

【餘論】紀昀は、「人間無正味」の四句を評して「常語、却つて深至を極む」といつて激賞して居る。

和陶丙辰歲八月中于下潠田舍穫

陶の丙辰の歲八月中、下潠の田舍に穫るに和す

(一)聚糞西垣下。鑿泉東垣隈。　糞を聚む西垣の下、泉を鑿つ東垣の隈。
勞辱何時休。宴安不可懷。　勞辱、何の時か休まむ、宴安、懷ふべからず。
天公豈相喜。雨霽與意諧。　天公、豈に相喜ばむや、雨霽、意と諧ふ。
(二)黄菘養土膏。老楮生(三)樹雞。　黄菘は、土膏に養はれ、老楮に、樹雞を生ず。
未忍便烹煮。繞觀日百回。　未だ便ち烹煮するに忍びず、繞觀、日に百回。
(四)跨海得遠信。(五)冰盤鳴玉哀。　海に跨つて遠信を得たり、冰盤、鳴玉哀し。
(六)茵陳點(七)膾縷。照坐如花開。　茵陳、膾縷を點ずれば、坐を照らして花の開くが如し。
一與(八)蜑叟醉。蒼顏兩摧頽。　一たび蜑叟と醉ふ、蒼顏、兩つながら摧頽。
齒根日浮動。自與(九)粱肉乖。　齒根、日に浮動、自ら粱肉と乖く。
食菜豈不足。呼兒(一〇)拆雞棲。　菜を食うて、豈に足らざらむや、兒を呼んで雞棲を拆く。

【字解】【一】聚糞　糞は肥料。【二】黄菘　菘の若若しい芽、その聊か黄色を帶びたるより云ふ。【三】樹雞　本草に「木耳は樹雞と名づく」とある、卽ち木くらげ。【四】跨海　海を超えて來たといふ意。【五】冰盤　白磁の盆。【六】茵陳　杜甫の詩に茵陳春藕香とあつて、その小註に「蒿の類、陳苗に因つて生ず、故に名づく」とある。蒿はよもぎ、その若い芽を取つて食ふのであらう。【七】膾縷　膾はなます、卽ち魚肉を細かに切つたもの、縷は線の細きを形容して云ふ。【八】蜑叟　蜑は蠻種の名。【九】粱肉　美穀と肉。【一〇】拆雞棲　とやを開いて雞を出して遣る。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】西垣の下に溜めを造つて、肥料を貯へて置き、井戸を東垣の邊に掘つて、灌漑に便した。おのが身分に拘はらず、勞働することは、何時止むともなく、決して、のらりくらりと、無爲に優游することは出來ない。天道樣とて、宴安を喜ばれる筈はないので、雨が降つても、晴天であつても、わが意と相協つて、爲すべき仕事は、絶えず有る。若菜は、土膏に養はれて生育し、物古りたる楮樹には、木くらげを生じた。かういふ物を直に取つて烹て食ふには忍びないので、一日に百度も、その處を繞つて眺めて居た。近ごろ、遠地よりの音信が海を跨つて至り、白磁の大皿を手に入れたが、これを扣けば、玉を鳴らす樣な涼しい響がする。その皿に、よもぎのひたし物を盛り、その間に、線の如きなますをあしらふと、極めて趣がある樣で、坐間を照らして、さながら花の咲いた樣である。ここに、年よりの蜑人を相手にして一醉したが、二人とも、澤のない青白い顏は、愈よ衰へて見える。殊に、予は、齒莖が浮き出て、折角の粱肉さへ碌碌食へない位、そこで、菜食のみして居ても、物足らぬことは無いので、飼つてある雞も、しめ殺すには及ばぬ處から、倅を呼び、とやを明けて、廣い處に出して遣つた。

答海上翁

海上の翁に答ふ

（一）山翁不復見新詩。　山翁、復た新詩を見さず、

疑是（二）河南石壁曦。　疑ふらくは、是れ河南石壁の曦。

海水豈容鯨飲盡。　海水、豈に鯨飲し盡すべけむや、

（三）然犀何處覓瓊枝。　然犀、何の處にか瓊枝を覓めむ。

【字解】【一】山翁　一に仙翁に作る、その方が宜しいかとも思はれる。【二】河南石壁曦　石壁の陰に成つて碌碌見えぬ朝日、馮應榴は「歐陽公神清洞の事を用ふるに似たり」といひ、前に送范景仁の詩中に注してある。【三】然犀　溫嶠が牛渚に於て、犀を燃やして水底を照らせしこと、前に仙游潭の詩中に注して置いた。

【題義】海邊に居る隱者から、手紙でも寄越したから、それに答へたのであらう。

【詩意】その後、仙翁は、新詩を示されぬが、たとへば、河南石壁の陰にかぎらふ朝日の樣である。更に譬ふれば、海底に在る玉の枝の如く、海水は、到底、鯨飲しても之を盡すことが出來ぬから、犀を燃やして照らし見る外はないが、何處といつて、見當が付かぬ次第である。

【餘論】全首、要するに海上の仙翁が詩を寄せぬことを怨じたので、二つの譬喩を合せて出來たものらしい。馮應榴は、結末を評して「二句、窮め盡すべからざるの意を喩ふるに似たり」といつて居るし、查初白は、全篇を評して「この詩、何を謂ふかを解せず」といつて居る位で、穿鑿も無益であらうと思はれる。

貧家淨掃地

貧家、淨く地を掃ふ

貧家淨掃地。貧女好梳頭。　貧家、淨く地を掃ひ、貧女、好く頭を梳く。

下士晩聞道。聊以拙自修。　下士、晩に道を聞き、聊か拙を以て自ら修す。

叩門有佳客。一飯相邀留。　門を叩く、佳客あり、一飯、相邀へて留む。

春炊勿草草。此客（一）未易揄。　春炊、草草たる勿れ、この客、未だ揄くし易からず。

愼勿用（二）勞薪。感我（三）如薰蕕。　愼んで、勞薪を用ふる勿れ、我を感ずること、薰蕕の如し。

（四）德人抱（五）衡石。（六）銖黍安（七）可廋。　德人、衡石を抱く、銖黍、安んぞ廋すべけむや。

【字解】【一】未易揄　揄は薄、粗末にする。【二】勞薪　晉書荀勗傳に「かつて、武帝の坐に在つて、飯を進む。坐に在るの人に謂つて曰く、これは是れ勞薪の炊ぐところ、と。咸な未だ之を信ぜず。帝、膳夫に問はしむ。乃ち云ふ、實は故車の脚を用ふ、と。擧世、その明識に服す」とある。【三】如薰蕕　左傳僖公四年に「晉のト人曰く、一薰一蕕、十年尙ほ臭あり」と見ゆ。一本の香草と一本の臭草とを、共に一器の中に入れて置くと、香氣は早く盡き、臭氣だけが十年の後までも依然として存在するといふ義。【四】德人　至德の人、前に葉待制の詩中に注して置いた。【五】衡石　秤をいふ、前に送孫勉の詩中に注して置いた。【六】銖黍　銖は黍の十分の一、ともに極めて少しばかりの重量。【七】可廋　廋は藏す。

【題義】詩の起句を取つて、假りに題を署したので、いくらも例のあることである。

【詩意】貧家では、奇麗に地を掃除するし、貧女は、頭だけは見よげに梳つて居る。これ等は、外面

を修飾するものである。下劣の士人でも、晩年になつて、初めて道を聞くと、拙いながらも、自分で工夫して修養するので、内部を空乏ならしめざることは、第一に肝要である。偶ま佳客が門を叩いて來訪したから、相迎へて之を引き留め、やがて、一飯を馳走しやうとした。それに就いては、米を舂いたり炊いだりすることを草草にせぬが善いので、この客に對して、粗末にしては、まことに宜しくない。そこで、注意して、謂はゆる勞薪などは用ひてはならぬので、もし客が氣に入らぬ時には、いつまでも、その事が氣に成るに相違ない。世に至德の人と稱せらるるものは、さながら、秤を抱いて持つて居るが如く、銖黍の微細なるものも、直に判別するから、どうして隱すことが出來やう。

【餘論】乾隆御批に「起一語、空を暼して入る、これ詩家の典體」とある。

新居

朝陽入北林。竹樹散疎影。
短籬尋丈間。寄我無窮境。
舊居無一席。逐客猶遭屛。
結茅得茲地。翳翳村巷永。
數朝風雨涼。畦菊發新穎。
俯仰可卒歲。何必謀二頃。

新居

朝陽、北林に入り、竹樹、疎影を散す。
短籬、尋丈の間、わが無窮の境を寄す。
舊居、一席なく、逐客、なほ屛に遭ふ。
茅を結んで、この地を得たり、翳翳として、村巷永し。
數朝、風雨涼しく、畦菊、新穎を發す。
俯仰、歲を卒ふべし、何ぞ必ずしも二頃を謀らむ。

【字解】【一】舊居　子由の撰せる墓志に「昌化に安置す、初め官屋を僦し、以て風雨を庇す、有司、以て不可となす、すなはち地を買ひ、室を築いて屋三間を爲る」といひ、本集中、程全父に與ふる尺牘に「はじめて至り、官屋數椽を僦す、近ごろ、復た迫逐に遭ふ」とある。【二】翳翳　樹木などの影の爲に暗く見ゆること。【三】新穎　新しい芽。【四】二頃　わづかばかりの田、前に三賢畫像の詩中に注して置いた。

【題義】施註に「東坡、儋耳軍に至る、張中をして、館を行衙に請はしめ、又別に官舍を飾つて安居の計をなす。朝廷、湖南提舉常平董必といふものに命じて、廣西を察訪せしむ。使臣を遣して、海を過ぎらしめ、中ごろ、坐黜して死し、雷州の監司、悉く秩を鐫す。遂に地を買ひ、室を築いて、屋五間を爲る。潮人王介石、儋に客となり、泥水の役を躬らし、その勞、家隸よりも甚し、故に詩に、舊居無一席、逐客猶遭屛の句あり」と見え、又同じ事が通鑑長編に出て居る。東坡の儋耳に謫居せし時、はじめは官舍に入つた處が、役人が來て追ひ立てたから、地を買つて新居を建てたので、その出來たのは、紹聖四年の冬であるから、この詩は、實は前卷に入るべきものである。

【詩意】朝日は北林にさしこみ、竹樹は各〻疎影を搖すつて居る。ここに丈の低い垣根で圍まれた狹い宅地の間に於て、わが無窮の境を寄せて居る次第。これまで、官舍に居たが、落ち付くべき一席も

なく、逐客の此身は、更に追ひ立てられ、止むを得ず、この地を得て、茅ぶきの家を造つたので、その場所は、人家の立て込んだほの暗い田舍の町中に當つて居る。この頃、數日の間、風雨、いとも涼しく、畦なる菊も、新しい芽を吹き出した。ここに居れば、俯仰優游、以て歲月を卒へることが出來るので、何も必ずしも、二頃の田を耕すことを考へずとも宜しい。

【餘論】乾隆御批に「幸に一廛を得、蕭條高く寄す、仁智樂むところ、娛夷散賞に勝へず、夫の懷を澄まし、道を觀るに非ざれば、曷ぞ克く此あらむ」とあり、紀昀は「查云ふ、神、杜陵に似たりと。予謂ふ、正に韋柳の間に在るのみ」といつて居る。

和陶與殷晉安別、送昌化軍使張中

陶の殷晉安と別るるに和す。昌化軍使張中を送る

孤生知永棄。末路嗟長勤。　孤生、永く棄てらるるを知り、末路、長勤を嗟す。

久安儋耳陋。日與雕題親。　久しく、儋耳の陋に安んじ、日に雕題と親む。

海國此奇士。官舍我東鄰。　海國、この奇士、官舍、わが東鄰。

卯酒無虛日。夜碁有達晨。　卯酒、虛日なく、夜碁、晨に達するあり。

小甕多自釀。一瓢時見分。　小甕、多く自ら釀し、一瓢、時に分かたる。

仍將對牀夢。伴我五更春。　仍は對牀の夢を將て、わが五更の春に伴ふ。

暫聚水上萍。忽散風中雲。　暫く水上の萍を聚め、忽ち風中の雲を散ず。

恐無再見日。笑談來生因。　恐らくは、再び見るの日、笑うて、來生の因を談するなからむ。

空吟清詩送。不救歸裝貧。　空しく、清詩を吟じて送るも、歸裝の貧なるを救はず。

【字解】【一】孤生　單獨の生活。【二】儋耳陋　陋は風俗の野卑なること。【三】雕題　額に入れ墨をなして居る。【四】卯酒　朝酒、前に見ゆ。【五】對牀夢　前に數ば見ゆ。

【題義】九域志に「廣南西路昌化軍は、唐の儋州昌化郡、本朝熙寧六年、廢して軍となし、宜倫縣に治す。東、瓊州に至る二百十里。西、海に至る十里。南、崖州に至る四百八十里」とあつて、その地は、餘程の僻境と見える。查註に「按ずるに、張中の平生、詳かならず、特に先生の故を以て官を罷め、甚しきは、斥死に至る。その人、知るべし。宜なり、送行の詩、再に至り、三に至り、惓惓として釋かざるや」とある。張中は、儋州の太守であつて、東坡をいたはり過ぎたといふ廉を以て、左遷の意味で、昌化軍使に轉せられたから、東坡は、これを送つて、この詩を作つたのである。

【詩意】君は、單獨の生活を爲して、永く棄てらるるに甘んじ、老境になつて、いつまでも、御苦勞

を成されるのは、まことに、お氣の毒である。これまで、風俗野卑なる儋耳の地に居て、額に入墨をした蠻人と親んで居られた。さすがに、君は、一代の奇士を以て、この海國に居り、その官舍は、わが東鄰に當る處から、毎日、ともに朝酒を飲み、夜、碁を圍んで翌朝に及ぶことさへあつた。君は、平生、小甕に自ら酒を釀し、時時、一瓢を分かたれた。されば、春の夜の五更、牀を對して夢を結び、決して相離れぬ位も親密であつた。さきに、この地に相會せしは、水上の浮草の暫く聚まりしが如く、今日、ここに別るるは、風中の雲の散るが如くである。この先、恐らくは、再び相遇うて、笑ひながら來世の因縁を話し合ふ樣な場合はなかるべく、これが最後の御別れと成るかも知れぬ。そこで、清超なる詩句を吟じて、君の行を送るが、君の歸裝の不足勝なるを救ふことの出來ないのは、まことに、愧ぢ入る次第である。

【餘論】　紀昀は「情、眞なれども、語、未だ超拔せず」といつて居る。

和陶王撫軍座送客再送張中

陶の王撫軍の座、客を送るに和す。再び張中を送る

胸中有佳處。海瘴不能腓。　胸中に佳處あらば、海瘴も腓ましむる能はず。

三年無所愧。十口今同歸。　三年、愧づるところなく、十口、今同じく歸る。

汝去莫相憐。我生本無依。　汝去つて相憐むなし、わが生、本と依るなし。

相從大塊中。幾合幾分違。　相從ふ、大塊の中、幾たびか合し、幾たびか分違する。

莫作往來相。而生愛見悲。　往來の相を作す莫れ、しかも、生きながら愛せられて悲を見る。

悠悠含山日。炯炯留清輝。　悠悠たり山に含むの日、炯炯として清輝を留む。

懸知冬夜長。恨不晨光遲。　懸に知る、冬夜の長きを、恨むらくは、晨光遲からざるを。

夢中與汝別。作詩記忘遺。　夢中、汝と別れ、詩を作つて忘遺を記す。

【字解】　【一】海瘴　海邊毒熱の氣。【二】不能腓　腓は、詩經、百卉具腓の鄭箋に「病むなり」とある。【三】大塊　この世界。【四】往來相　相は想、維摩經に「人をして往來の想あらしめず」とある。【五】晨光　太陽。

【題義】　説明に及ばぬ。前に已に張中を送る詩があつたが、言ひ殘した氣味があるので、更に又一首作つたのである。

【詩意】　胸中に悟り澄ました佳處あらば、海上毒熱の氣も、これを病ましむることが出來ない。君は、三年の間、儋州の太守となつて居て、治平を旨とし、決して心に愧づるところもなかつたが、時の廻り合せで、今、昌化軍使となり、十人の家族を引連れて、愈よその地に赴くのである。君は躊躇せず、直に去つて、少しも氣の毒とも思はぬらしいが、わが生、もとより依るところなく、君に往かれると、

少からず困り入る次第である。君と予と、この世界に於て出合ひ、幾たびか合ひ、又幾たびか離れ、その彼此往來するに就いては、別にくよくよ思つて居らぬが、生きて居る間、愛されたに因つて、悲哀の情を禁じ得ないのは、尤も千萬の事である。悠悠として山に含まる夕日を見れば、炯炯として清光を留めて居る。冬の夜の長いことは、もとより知つて居るが、別離に際して、情話盡きず、朝の日の出の今少し遲からぬを怨むばかり。ここに、夢心地で君と別るるに當り、又ぞろ、この詩を作つて、忘れて居たことどもを書き綴つたのである。

【餘論】紀昀は「腓、原と病の字と作して解す、然れども、病の字に代ふれば不可」といひ、又「この首、眞至」といつて居る。

和陶答龐參軍三送張中

陶の龐參軍に答ふるに和す。三たび張中を送る

留燈坐達曉。要與影晤言(一)。　燈を留め、坐して曉に達し、影と晤言するを要す。

下帷(二)對古人。何暇復窺園(三)。　帷を下して古人に對す、何の暇か復た園を窺はむ。

使君本學武。少誦十三篇(四)。　使君、本と武を學び、少にして誦す十三篇。

頗能口擊賊(五)。戈戟(六)亦森然。　頗る能く、口、賊を擊ち、戈戟、亦た森然。

才智誰不如。功名歎無緣。　才智、誰にか如かざらむ、功名、緣なきを歎ず。

獨來向我說。憤懣當奚宣。　ひとり來つて、我に向つて說く、憤懣、當に奚をか宣ぶべき。

一見勝百聞(七)。往壓皐蘭山(八)。　一見は百聞に勝れり、往いて皐蘭山に壓せよ。

白衣挾三矢(九)。趁此征遼年。　白衣、三矢を挾み、この征遼の年を趁へ。

【字解】【一】晤言　逢つて語る、詩經に「彼美淑姬、可與晤言」とある。【二】下帷　學者として徒に敎ふること。【三】窺園　董仲舒が三年園を窺はなかつたといふことがあつて、前に「送安惇」の詩中に注して置いた。【四】十三篇　孫武の兵法、即ち今謂ふところの孫子。史記の本傳に「兵法を以て闔閭に見ゆ、闔閭曰く、子の十三篇、吾盡く之を觀る、小を以て試に兵を勒すべきか」とある。【五】口擊賊　口の先で賊を退治する樣なことを言ふ、晉書朱伺傳に「楊珉曰く、朱將軍、何を以て言はざる。伺曰く、諸人は舌を以て賊を擊つ、伺は惟だ力を以てせむのみ」とあり、唐書高祖諸子傳に「韓王亘、入對して旨に合ふ。楊國忠、亘に謂つて曰く、比來、人、多く口に賊を打つ、君は爾らざるか」とある。【六】戈戟　晉書裴楷傳に「常に鍾會を目して、武庫の森森たるを觀るが如く、但だ矛戟前に在るを見るのみといふ」とある。【七】一見勝百聞　漢書趙充國傳に「百聞は一見に如かず、兵は隃えて度り難し、願はくは、馳せて金城に至り、圖して方略を上ちむ」とある。【八】皐蘭　山の名、漢書霍去病傳に「短兵を合せて、皐蘭の下に鏖にす」とある。【九】白衣挾三矢　唐書薛仁貴傳に「天子、遼を征す。仁貴、白衣を著けて自ら標顯し、向ふところ披靡す」又九姓の衆、來つて戰を挑む、仁貴、三矢を發して輒ち三人を殺す」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】燈火を消さずに殘し置きつつ、坐して曉に達したが、そは名殘を惜んで、君の影とでも面談

したいと思つたからである。予は帷を下して古人に對し、日夕、文史を研究して、おのが庭園を窺ふ暇だに無い位。君は、本來、武を學び、少年の頃、すでに、孫子の十三篇を誦し、口の先で賊を擊つといふばかりでなく、その人物は、戈戟森然たるが如くであつて、その才智は、誰にも負けぬ程であるのに、功名を立てる緣なきを歎息して居るのは、まことに、お氣の毒なことである。そこで、獨り來つて、予に向つて色色話をされたが、滿腔の憤慨は、如何にして宣べることが出來やう。むかしから、一見は百聞に勝れりといふ位、君にして、昌化軍に赴かれたならば、かの霍去病が皐蘭山下に於て賊兵を鏖にしたるが如く、邊境の蠻族どもを殘りなく退治し、又薛仁貴が遼を征する時、人の目につく樣に白衣を著け、唯だ三本の矢で、賊を感服した樣に、自ら陣頭に立つて、天晴、大功を立てられむことを希望する次第である。

【餘論】紀昀は「この首、淺近」といつて、ひどくけなして居る。

次韻子由贈吳子野先生二絕句

子由の吳子野先生に贈る二絕句に次韻す

馬跡車輪滿四方。　馬跡車輪、四方に滿つ、

若爲閉著小茅堂。　若爲ぞ、閉著す小茅堂。

【字解】〔一〕左元放　後漢書に「左慈、字は元放。曹操坐上に因つて之を殺さむと欲す、慈、乃ち卻いて壁中に入る。或は市に見はるれば、又之を捕ふ、而して、市人皆形を變じて慈と同じく、誰が是なるを知るなし。後、人、慈に陽城山頭に逢ひ、因つて復た之を逐ふ、遂に羊群に入つて、取るところを知るなし」とある。〔二〕顧長康　晉書の本傳に「顧愷之、字は長康。初め、愷之、桓溫の府に在り、常に云ふ、愷之は、體中癡黠各〻半す、合して之を論ずれば、正に平を得むのみと。故に俗傳、愷之三絕あり、才絕、畫絕、癡絕」とある。

安心欲捉左元放。　安心、捉へむと欲す左元放、

癡疾還同顧長康。　癡疾、還た同じ顧長康。

【題義】施註に「吳子野、名は復古、一字は遠游、潮州の人。東坡、ともに游ぶこと二十餘年。南遷して眞揚の間に至るや、子野を見る、一語の得喪休戚の事に及ぶなし、ひとり坡に告げて曰く、邯鄲の夢、猶ほ妄を破つて眞に歸するに足る、目見て、身これを履む、亦た以て少しく悟るべし、と。未だ幾ならずして南歸し、東坡を惠に訪ひ、子由を循に訪ふ。坡の儋耳に徙る、子野、又これに從ふ、爲に遠游菴の銘を作る。坡の北歸を送り、疾に遇つて殂す」とある。子野の循州に子由を訪ひし時、子由が絕句を贈つたから、後に東坡が次韻したのである。但し、子由の原作は三首であるのに、ここに二首としてあるのは、その一首を失つたものかも知れぬ。

【詩意】馬跡車輪をして四方に滿たしむるは、男兒の本懷であるのに、如何なれば、君は小さな茅堂を閉ぢて、循州の田舍に滯留して居るか。君は、安心して仙を志し、かの左慈を捉へて、道術を稽古したいと思つて居る位で、その癡絕なることは、翻つて、顧愷之と同じである。

(一)江令蒼苔圍故宅。　江令、蒼苔、故宅を圍み、
(二)謝家(三)語燕集華堂。　謝家、語燕、華堂に集まる。
先生笑說江南事。　先生、笑つて說く江南の事、
只有青山繞(四)建康。　只だ青山の建康を繞るあり。

【字解】【一】江令蒼苔　施註に「江淹、青苔賦の序、余、山徵を鑿つて室を爲る、苔あり」云云とあるが、王註には「江令は江總なり、劉禹錫の金陵五題、その一、江令宅に云ふ、南朝詞臣北朝客、歸來惟見秦淮碧、池臺竹樹三畝餘、至今人道江家宅」とある。すると、青苔との關係は泛設になるが、大體は、的確である。【二】謝家　謝安の一族。【三】語燕　燕は宴。【四】建康　今の南京。

【詩意】江總の故宅は、既に物古りて、青苔に圍まれ、謝安の一族が宴坐談笑して會同した華堂も、その跡を留めない。君は、笑つて江南の事を說き、舊物の存せざるは、すべて此通り、唯だ青山のみは、依然として、建康の地を繞つて居るといはれたが、滄桑の變、俯仰感慨に堪へざるは、まことに仰せの通りである。

【餘論】紀昀は、この首を評して「亦た是れ、窠臼の語」といつて居る。

被酒獨行徧至子雲威徽先覺四黎之舍三首

酒を被りて獨行し、徧く子雲・威・徽・先覺、四黎の舍に至る　三首

半醒半醉問諸黎(一)。　半醒半醉、諸黎を問ふ、
竹刺藤梢(二)步步迷。　竹刺藤梢、步步迷ふ。
但尋牛矢(三)覓歸路。　但だ牛矢を尋ねて歸路を覓む、
家在牛欄(四)西復西。　家は牛欄の西復た西に在り。

【字解】【一】諸黎　黎氏の一族。【二】竹刺藤梢　刺ある竹、眞直に垂れて居る藤蔓。【三】牛矢　牛糞。【四】牛欄　牛小屋。

【題義】黎氏の一族中、子雲・威の二人は前に見えたが、その外に、徽といひ、先覺といふものが居たと見える。この詩は、醉後、ひとり出でて、四黎の家を順次に尋ねた時に作つたといふのである。

【詩意】半ば醒め半ば醉つた樣な善い心持で、ひとり閒行しつつ、黎氏の一族を訪問せむとすると、あらぬ方に迷ひ入り、竹や藤が茂り合つて通れぬ位。そこで、牛糞に因つて歸路を求め、やッと、藪を通り拔けたが、果然、諸黎の家は、牛小屋の西復た西の遙かなる處に在つて、やッと見つかつた。

【餘論】紀昀は「牛矢の字、俚甚し」といつて居る。

(一)總角黎家三四童。　總角黎家の三四童、
(二)口吹葱葉送迎翁。　口に葱葉を吹いて、翁を送迎す。
莫作天涯萬里意。　作す莫れ、天涯萬里の意、

【字解】【一】總角　小兒の髮を二個所で束ねて、丁度角の如きを云ふ。前に和賈市の詩中に注して置いた。【二】口吹葱葉　馮應榴の案に

鎔邊自有舞雩風。　鎔邊、自ら舞雩の風あり。

「虚文洲曰く、黄云ふ、葱葉を吹くとは、即ち小兒、葱葉を吹いて聲を作し、以て戯となすのみ。劉克莊の詩、幼吹葱葉還堪聽、老畫葫蘆却未工、證すべし」とある。【三】舞雩風　曾點の語に「沂に浴し、舞雩に風し、詠じて歸らむ」とあつて、論語に見ゆ。舞雩は、雨を祈る土壇。

【詩意】あげまきの黎家の子供三四人は、口に葱の葉を吹きつつ、予を送迎した。ここ儋耳に居ても、天涯萬里、孤客の想を為さぬが、善いので、鎔邊には、舞雩の様な風が吹き度り、これに詠じて歸るも、亦た一興である。

【餘論】紀昀は「末句亦た腐氣」といつて居る。

符老風情奈老何。　符老の風情、老を奈何、
朱顏減盡鬢絲多。　朱顏減じ盡して、鬢絲多し。
投梭每困東鄰女。　梭を投じて每に困む東鄰の女、
換扇惟逢春夢婆。　扇を換へて惟だ逢ふ春夢の婆。

【字解】【一】風情　文選孔德璋の北山移文に風情張日とあり、白居易の夢得に答ふる詩に風情離老未全消とある。【二】鬢絲　鬢邊の白髮。【三】東鄰女　宋玉の好色賦に、東鄰の女が臣を窺ふこと三年とある、前に百歩洪の詩中に注して置いた。【四】換扇　東坡の自註に「この日、復た符林秀才を見る、換扇の事を言ふ」とある。換扇とは、自己の詩でも題した團扇を交換することと思はれる。【五】春夢婆　趙德麟の侯鯖錄に「東坡、昌化に在り、かつて大瓢を負うて田間に行歌す。老婦あり、年七十、坡に謂つて曰く、内翰、昔日の富貴、一場の春夢、と。坡、これを然りとす、里人、この媼を呼んで春夢婆となす」とある。

【詩意】符林秀才は、むかしながらの風情を存すれども、年を取つたのは、まことに仕方がないので、朱顏も褪せ盡して、鬢邊の白髮が殖えて來た。むかしは、東鄰の女をして、梭を投じて起たしめ、奔命に疲れしめた位であつたが、今日、予と團扇を交換せむとしたが、例の春夢の婆に逢つたから、過ぎにし方の歸らぬことを言はれることであらう。

過黎君郊居　黎君の郊居を過ぐ

半園荒草沒佳蔬。　半園の荒草、佳蔬なし、
煮得占禾半是藷。　占禾を煮得たり、半ば是れ藷。
萬事思量都是錯。　萬事思量、すべて是れ錯る、
不如還叩仲尼居。　如かず、還た仲尼の居を叩かむには。

【字解】【一】占禾　前に白塔鋪の詩中に注して置いた、味の善くない米。【二】仲尼居　孔子の家。

【題義】黎君は例の黎子雲。この詩は、前に續いて、愈よ黎氏の村居に到達した時に作つたのであらう。

【詩意】半園は、荒草に沒して、よき菜も生長せず、米を煮て居るといふが、その實、半分は藷を交ぜたので、黎君は、かなり見じめな生活をして居る。世間萬事、考へれば、錯誤だらけで、有道の士が貧に困むのは如何なる故か、孔子の如き聖人の居を叩いて、篤と問ひ質す外はあるまい。

【餘論】紀昀は「これ更に腐」といつて居る。

和陶示周續之祖企謝景夷三郎游城東學舍作

陶の周續之・祖企・謝景夷、三郎に示すに和す。城東の學舍に游びて作る

聞有古學舍。竊懷淵明欣。(一)　聞く古學舍ありと、竊に淵明の欣を懷く。

攝衣造兩塾。(二)窺戶無一人。　衣を攝して兩塾に造り、戶を窺へば一人なし。

邦風方杞夷。(三)廟貌猶殷因。(四)　邦風、方に杞夷、廟貌、猶ほ殷因。

先生饌已缺。弟子散莫臻。　先生、饌、すでに缺け、弟子、散じて臻るなし。

忍飢坐談道。嗟我亦晩聞。(五)　飢を忍んで、坐して道を談ず、嗟す我亦た晩聞。

永言百世祀。未補平生勤。　永く百世の祀を言ふも、未だ平生の勤を補はず。

今此復何國。豈與陳蔡鄰。(六)　今、これ復た何の國、豈に陳蔡と鄰らむや。

永愧虞仲翔。(七)絃歌滄海濱。　永く愧づ虞仲翔、絃歌す、滄海の濱。

【字解】【一】淵明欣　淵明の自ら作れる五柳先生傳に「讀書を好めども、甚しく解するを求めず、意に會するある每に、便ち欣然として食を忘る」とある。【二】兩塾　禮記に「凡そ學、家には塾あり、黨には庠あり、術には序あり」と見ゆ。塾は敎室。【三】杞夷　左傳僖公二十三年に「杞の成公卒す、書して子といふ、杞は夷なればなり」とあり、二十七年に「杞の桓公來朝、夷禮を用ふ、故に子といふ」とあり、襄公二十五年に「晉女叔侯曰く、杞は夏の餘なり、しかも卽ち東夷」とある。【四】殷因　殷の緣故。【五】晩聞　おそく道を聞く。【六】陳蔡　孔子、陳蔡の間に厄せらる、二國の人は道を知らぬといふ義。【七】虞仲翔　三國志、吳の虞翻傳に「翻、字は仲翔、交州に徙る、罪放に處ると雖も、しかも講學倦まず、門徒常に數百人」とある。

【題義】この首は、城東なる學校に游び、その不振の實況を見て作つたのである。

【詩意】儋州に古い學校があるといふことを聞いて、ひそかに陶淵明の如く、欣然として喜び、衣を卷くり上げて急行し、二つ敎室ある其學校に至り、一寸戶の間から覗いて見ると、こはそも如何に、一人の生徒だに居ない。儋州の邦風は、丁度、東夷を以て稱せられた春秋時代の杞國と同じであるが、孔子の廟は、殷の後裔だといふ處から、それに因んだと見え、物物しく出來て居る。先生は、俸給が不十分で、食事さへ缺乏するといふ位だから、就職する人もなく、從つて、學生は、今まで居たのも散去して、復た此に至らぬ次第。飢を忍びつつ、坐して道を談ずるといふのは、吾吾晩學の者に限ること で、若い者には、到底望まれない。孔子の廟は、儼然として百世の祀を爲すとも、こんな事では、平生勤學の補足にはならぬ。今の時に當り、ここは何の國であるか、よもや陳蔡に鄰して居る譯ではあ

るまいに、これは又どうしたことか。かの虞翻が罪放の身なるに拘はらず、滄海の濱に於て絃歌し、敎學に盡力したことは、長しへに感服すべく、到底、後人の及ばぬことである。

和陶連雨獨飮

陶の連雨獨飮に和す

吾謫海南、盡賣酒器、以供衣食、獨有一荷葉杯、工製美妙、留以自娛、乃和淵明連雨獨飮二首。

【訓讀】われ、海南に謫せられ、盡く酒器を賣り、以て衣食に供す、ひとり、一の荷葉杯あり、工製美妙、留めて以て自ら娛む、乃ち淵明の連雨獨飮に和す、二首。

平生我與爾。(一)擧意輙相然。平生、われと爾と、意を擧げて輙ち相然り。

豈止磁石鍼。雖合猶有間。豈に止だ磁石と鍼と、合ふと雖も猶ほ間あるごとくならむや。

此外一子由。出處同(二)偏僊。この外、一子由、出處同じく偏僊。

(三)晩景最可惜。分飛海南天。晩景、最も惜むべし、分飛す海南の天。

(四)糾纏不吾欺。寧此憂患先。糾纏、われを欺かず、むしろ、此憂患を先とせむや。

顧引一杯酒。誰謂(五)無往還。顧みて、一杯の酒を引く、誰か往還なしと謂はむ。

寄語(六)海北人。今日爲何年。語を寄す海北の人、今日、何の年と爲す。

醉裏有(七)獨覺。夢中無雜言。醉裏に獨覺あり、夢中に雜言なし。

【字解】【一】擧意輙相然　おもふ事は、殘らず一致する。【二】偏僊　馮應榴の案に「未だ出づるところを詳にせず、按ずるに、下に分飛の字あり、或は卽ち蹁躚に同じきなり」とある、蹁躚は踊つて移る。【三】晩景　暮年に同じ。【四】糾纏　紀昀は「二句未詳」といつて居るが、あざなへる繩、卽ち禍福。賈誼の鵩賦に、禍之與福、何異糾纆」とある。【五】無往還　效果なきこと。【六】海北人　子由を指して云ふ。【七】獨覺　ひとりで悟つて居ること。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】平生、予と汝卽ち杯とは、何事につけても、意見が一致して、磁石と針とが相合うて、猶ほ且つ間隙のあるに勝つて居る。この外には、弟の子由があつて、出でて仕へる時でも、留まつて引込んで居る時でも、その擧止を同じうして居る。顧みれば、人の暮年は、まことに名殘惜しいものであるのに、われは獨り分れて、海南の天に飛び、弟とは千里相離れて居る。禍福は、糾ふる繩の如しといふが、まことに、その通りで、何も此處に居て、憂患が常に先に立つのでもなく、顧みて一杯の酒を酌むと、決して、效果が無い譯でもない。ここに、遙に海北に居る子由に寄語するが、今日は如

何なる時であるか、決して、むざむざと徒に過ごしてはならぬ。予は、世の艱難を經て來ただけあつて、醉中でも、ひとり覺つたことがあるし、夢中でも、決して、下らぬ寐言をいふことはない。

【餘論】 紀昀は「この首、殊に收拾し難し、かくの如きの結法、遂に諷刺を化して忠厚ならしむ」といひ「子由を插入す、極めて平にして極めて奇」といつて居る。

(一)阿堵不解醉。誰歟此頽然。　阿堵、醉ふを解せず、誰ぞや此に頽然たる。

誤入(二)無功鄕。掉臂(三)嵇阮間。　誤つて無功の鄕に入り、臂を掉ふ嵇阮の間。

(四)飮中八仙人。與我倶得仙。　飮中の八仙人、われと倶に仙を得たり。

淵明豈知道。醉語忽談天。　淵明、豈に道を知らむや、醉語、忽ち天を談ず。

偶見此物眞。(五)遂超天地先。　偶ま此物の眞を見、遂に天地の先に超ゆ。

醉醒可還酒。此覺無所還。　醉、醒むれば、酒に還るべし、此に覺る、還るところなし。

清風洗(六)徂暑。(七)連雨催豐年。　清風、徂暑を洗ひ、連雨、豐年を催す。

牀頭(八)伯雅君。此子可與言。　牀頭の伯雅君、この子、ともに言ふべし。

【字解】 【一】阿堵　前に和陶擬古の詩中に注して置いた。このといふ義、東坡自ら指して云ふ。【二】無功　王績の字。績は酒が好きで、醉鄕記を著した人、前に次韻趙令鑠の詩中に注して置いた。【三】嵇阮　嵇康と阮籍、竹林七賢に列し、矢張、酒が好きであつた。【四】飮中八仙人　杜甫に飮中八仙歌があつて、賀知章・汝陽王璡・李適之・蘇晉・崔宗之・李白・張旭・焦遂の八人を併稱して居る、前に謝蘇自之の詩中に注して置いた。【五】遂超天地先　淵明の獨飮詩に、故老贈予酒、乃言飮得仙、試酌百情遠、重觴忽忘天、天豈去此哉、任眞無所先とある。【六】徂暑　ゆく暑さ。【七】連雨　打續いて降る雨。【八】伯雅君　大杯の名、魏の文帝の典論に「劉表の子、酒を好みて、三爵を爲る。大を伯雅といひ、七升を受く。次を仲雅といひ、五升を受く。次を季雅といひ、三升を受く」とある。

【詩意】 この老人は、醉ふことを解せず、醉ひ潰れたものを見れば、誰かといつて詰問したい位であつたが、一たび誤つて、王無功の謂はゆる醉鄕に入りし後は、臂を掉つて嵇康・阮籍の間に立ち交り、かの飮中八仙人も、われと共に仙し去つたといふ位。顧みれば、陶淵明の如き、いかで道を知るべき、それにも拘はらず、醉後天を談じたが、そは偶然にも、酒てふ此物の眞を見、それを飮んで、魂を天地剖判の前に馳せたからである。醉が醒めれば、又元に還つて、酒を飮めば善いが、もし更に覺つて、酒を詰まらぬものとすると、今度は、還るところがない。清風は、ゆく暑さを洗つて、新涼、心地よく、しきりに降る雨は、豐年を催す折から、牀頭なる大杯こそ、與に語るに足るべきもので、今、酒を飮まなければ、いつといつて飮む時も無からう。

【餘論】 紀昀は、この首の結末を稱して「本位に繳還して完密」といつて居る。

和陶贈羊長史

陶の羊長史に贈るに和す

得鄭嘉會靖老書、欲于海船載書千餘卷見借、因讀淵明贈羊長史詩、云、愚生三季後、慨然念黃虞、得知千載事、上賴古人書、次其韻、以謝鄭君。

【訓讀】鄭嘉會靖老の書を得たり、海船に書千餘卷を載せて借されむと欲す。因つて、淵明の羊長史に贈るの詩を讀むに、云ふ、愚は三季の後に生まれ、慨然として黃虞を念ふ、千載の事を知るを得るは、上、古人の書に賴ると。その韻に次し、以て鄭君に謝す。

我非皇甫謐(一)、門人如摯虞。　われは皇甫謐に非ざれども、門人は摯虞の如し。
不持兩鴟酒(二)、肯借一車書。　兩鴟の酒を持せず、肯て一車の書を借す。
欲令海外士、觀經似鴻都(三)。　海外の士をして、經を觀て鴻都に似せしめむと欲す。
結髮事文史、俯仰六十踰。　結髮、文史を事とし、俯仰、六十に踰ゆ。
老馬不耐放、長鳴思服輿(四)。　老馬、放たるるに耐へず、長鳴、輿に服せむことを思ふ。
故知根塵(五)在、未免病藥俱。　故と知る、根塵のあるを、未だ免れず、病藥の俱にするを。
念君千里足、歷塊(六)猶踟躕。　念ふ、君が千里の足、歷塊、猶ほ踟躕。
好學眞伯業(七)、比肩可相如。　好學、眞の伯業、比肩、相如くべし。
此書久已熟、救我今荒蕪。　この書、久しく、すでに熟す、わが今の荒蕪を救ふ。
顧慚桑楡迫(八)、久厭詩書娛。　顧みて慚づ、桑楡の迫るを、久しく厭ふ詩書の娛。
奏賦(九)病未能、草元(一〇)老更疎。　賦を奏せむとして、病んで未だ能はず、元を草して、老、更に疎なり。
猶當距楊墨(一一)、稍欲懲荊舒(一二)。　猶ほ當に楊墨を距ぐべく、稍や荊舒を懲らさむと欲す。

【字解】【一】皇甫謐　晉書の本傳に「自ら表し、武帝に就いて書を借る。帝、一車を送つて之を與ふ。門人摯虞等、皆晉の名臣なり」とある。【二】兩鴟酒　邵注に「古語、書を借るには一瓻、書を還すには一瓻。韻註、瓻、通じて鴟に作る、酒を盛るの器、卽ち鴟夷なり」とある。【三】鴻都　後漢書靈帝紀に「熹平四年、諸儒に詔して、五經の文字を正さしめ、石に刻して太學門外に立つ」とあり、又蔡邕傳に「碑、始めて立つに及びて、その觀視し、及び摹寫するもの、車乘、日に千餘兩、街陌に塡塞す」とある。【四】服輿　馬の引くべき輿を付けて貰ふ。【五】根塵　根は六根。【六】歷塊　土塊を踏む。【七】伯業　三國志の註に「袁遺、字は伯業、紹の從兄。張超、常にその籤箱を包羅し、百氏を綜練し、これを今日に求むるに、邈焉として儔寡きを讚む。魏の太祖稱す、長大にして能く勤學するものは、惟だ吾と袁伯業とのみ」とある。【八】桑楡迫　日、桑楡に迫る、追追死に近づくこと、前に送周朝議の詩中に注して置いた。【九】奏賦　漢書揚雄傳に「上に甘泉に從ひ、還つて賦を奏して以て風す。哀帝の時、太玄を草し、以て自ら守るあること、泊如たり」とある。【一〇】草元　元は玄、卽ち太玄經、上に見ゆ。【一一】距楊墨　揚子法言に「能く言うて楊墨を距ぐものは、聖人の徒なり」とある。【一二】荊舒　施註に「毛詩、戎狄是膺、荊舒是懲。王安石、初め荊國公に封ぜら

れ、後、舒王に封ぜらる」といひ、紀昀も「結、半山を指す」といつて、荊舒、卽ち王安石として居るが、これは穩當でなく、宜しく、馮應榴の案に「荊舒を以て海南の人に喩ふるなり」とあるに從ふべきであらう。

【題義】鄭嘉會、字は靖老、どういふ經歷の人か分からぬが、元祐六年三月十一日、東坡の半月泉題名に「蘇軾、曹輔・劉季孫・鮑朝懋・鄭嘉會・蘇堅同游」とあるを見れば、もとより、風交があつたものと見える。その鄭嘉會が手紙を寄越し、自分の藏書千餘卷を海上の商船に積み載せて、借して遣るとのことであつた。折しも、陶淵明の羊長史に贈る詩を讀んだ處が、「愚生三季後、慨然念黃虞、得知千載事、上賴古人書」とあつて、丁度、相應しいから、その詩に次韻して鄭君に謝したといふのである。

【詩意】予は、皇甫謐に非ざれども、門人の鄭嘉會は、さながら摯虞の如く、おまけに、一杯の酒だに酬いざるに、車に一ぱいの書物を借して與れ、海外未開の人民をして、鴻都門外に至り、蔡邕の書いた石經を見物する樣に爲さしめむとし、まことに、有り難いことである。顧みれば、予は結髮以來、文史に沒頭し、俯仰すれば、すでに六十の阪を踰えたのであるが、老馬は、放たれて爲すなきに耐へず、長鳴して、車を引きたいといふ樣に、矢張、書物と離れたくない。そは、六根の塵が殘つて居て、悟り切らぬ爲でもあるが、書物は、自分に取つて、病ともなり、又藥ともなるものである。君は、千里の逸足でありながら、土塊に打つかツて、しばらく跼蹐し、意を仕進に絕ち、その學を好むの篤きは、眞の袁伯業と肩を幷べて相比することが出來る。これ等の書籍は、君は既に幾度も讀んで熟して居られ、今は全く不用だといふので、遠く寄せ來つて、我が心中の荒蕪を救はれた。顧みれば、予は、日、すでに桑楡に迫り、追追老境に入つて、久しく、詩書の娛をさへ厭うて居た位、賦を作つて、天子に獻せむとするも、病に因つて出來ず、太玄經を起稿しやうと思つても、老來愈よ疎懶である。しかし、楊朱墨翟の如き異端を拒いで、聖人の道を發揮し、荊舒に比すべき海南の蠻人を懲らして、中國の文化を宣傳したいといふ志は、依然として殘つて居るから、君の書籍を讀んで、今後、一層力を盡すことに致さう。

和陶五月旦日作和戴主簿　陶の五月旦日の作、戴主簿に和するに和す

海南無冬夏。安知歲將窮。　海南、冬夏なく、安んぞ歲の將に窮まらむとするを知らむ。
時時小(一)搖落。榮悴俯仰中。　時時、小搖落、榮悴、俯仰の中。
上天信包荒(二)。佳植無由豐。　上天、信に包荒、佳植、豐なるに由なし。
(三)鉏耰代肅殺。有擇非霜風。　鉏耰、肅殺に代へ、擇ぶあり、霜風に非ず。
手栽蘭與菊。侑我淸宴終。　手づから蘭と菊とを栽ゑ、わが淸宴を侑めて終る。
(四)擷芳眼已明。飮酒腹尚(五)冲。　芳を擷すれば、眼、すでに明かに、酒を飮めば、腹、尚は冲。

草去土自隤。井深牆愈隆。　草去つて土自ら隤れ、井、深くして、牆、愈よ隆。

勿笑一畝園。蟻垤齊衡嵩。　笑ふ勿れ、一畝の園、蟻垤、衡嵩に齊し。

【字解】【一】小搖落　搖落は、秋、落葉すること。【三】包荒　易の泰卦九二に見え、その疏に「能く荒穢を包含す」とある。【三】鉏耰　鋤を入れる。【四】擇刀　花を摘む。【五】敗衝冲　老子に「冲氣以て和となす」とある。【六】蟻垤　蟻塚、即ち蟻の塔。【七】衡嵩　衡山と嵩山、ともに五嶽に列す。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】海南の儋州は、四時炎熱、絶えて、冬夏の別なく、歳の將に窮まらむとする樣なこともないが、時時、野分の如き荒れがあつて、榮悴、俯仰の中に變することがある。上天は、能く荒穢を包含すれども、これでは、折角の善い花卉を生育させることが出來ない。そこで、鍬を入れて、土を軟にし、粛殺に代へて、大切に保護するので、擇ぶところは、霜氣を帶びた風ではない。手づから植ゑた蘭や菊は、秋ならぬに、咲き出でて、わが淸宴の興を助け、花を摘めば、見る目も、はツきりする位。これに對して酒を飮めば、腹の加減さへ善い。しかし、雜草を抜くと、土は自然頽れ易く、井を深くすれば、くえ入る心配があるから、周圍を踏ませぬ爲に、牆を愈よ高くせねばならぬ。この狹い一畝の園中に於て、蟻塚が衡嵩二山の如く、巍然として聳えて居るのは、不似合ではあるが、どうも、仕方がないことである。

和陶怨詩楚調示龐主簿鄧治中

陶の怨詩楚調、龐主簿・鄧治中に示すに和す

當歡有餘樂。在戚亦頽(一)然。　歡に當つて餘樂あり、戚に在つて亦た頽然。

淵明得此理。安處故有年。　淵明、この理を得、安處、故と年あり。

嗟我與先生。所賦眞奇(二)偏。　嗟、われと先生と、賦するところ、眞に奇偏。

人間少宜適。惟有歸耘田。　人間、宜適少く、惟だ歸耘の田あり。

我昔墮(三)軒冕。毫釐(四)眞市(五)廛。　我、むかし、軒冕に墮ち、毫釐、眞に市廛。

困來臥重(六)裀。憂愧自不眠。　困み來つて、重裀に臥し、憂愧、自ら眠らず。

如今破茅屋。一夕或三遷。　今の如き、破茅屋、一夕、或は三遷。

風雨睡不知。黄葉滿枕前。　風雨、睡つて知らず、黄葉、枕前に滿つ。

寧當出怨句。慘慘如孤煙。　寧ろ當に怨句を出すべけむや、慘慘として孤煙の如し。

但恨不早悟。猶推淵明賢。　但だ恨む、早く悟らざるを、猶ほ淵明の賢を推す。

【字解】【一】頽然　悲哀の極、容儀を壞するること。【二】奇偏　人と異にして片よつて居る。【三】墮軒冕　官職に就いたこと。

【四】毫釐　極めて微細なる間隙。【五】市塵　市朝に同じ。【六】重裀　かさねた布團。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】歡喜の折には餘樂があるし、憂戚に際して悲慟形を變ずるといふのは、世間普通の事で、陶淵明は、この道理を知つて居て、これに應じたから、安穩に年を過ごすことが出來たのである。予と淵明とは、天賦の性が、兎角、人並み外れて、片よつて居る處から、この世に居ても、意に適うて宜しとするところ少く、惟だ歸つて耕すに足る田畑あるが爲に、まさかの時にも、聊か心強い次第である。むかし、予は、官職に就き、わづかの間隙でも、市朝を離れることなく、弱り切つた揭句には、破れたる茅屋の中に在つて、重ねたる布團の上に臥し、半ば憂へ、半ば愧ぢて、すやすや眠ることも出來なかつた。今では、破れたる茅屋の中に在つて、一夜の中に三四回も場處をかへることがある。そこで、幸に善く眠ると、風雨の來りしをも知らず、やがて起きて見ると、黃色い落葉が枕頭に一ぱいに成つて居るといふ始末。この時に當つて、怨がましい詩句を拈出した處で、仕方がないので、わが生の慘澹たるは、さながら孤煙の如くである。ここに至つて、早く人生を悟らなかつたことを殘念に思ひ、翻つて、陶淵明が厭世より一轉して樂天的に成つたのは、流石に偉らいといふことを知つた。

倦夜

倦夜

倦枕厭長夜。小窗終未明。

孤村一犬吠。殘月幾人行。

衰鬢久已白。旅懷空自淸。

荒園有絡緯。虛織竟何成。

倦枕、長夜を厭ふ、小窗、終に未だ明かならず。孤村、一犬吠え、殘月、幾人か行く。衰鬢、久しく已に白く、旅懷、空しく自ら淸し。荒園に絡緯あり、虛織、竟に何をか成す。

【字解】【一】倦枕　眠りつかずして枕をして居る。【二】絡緯　炙轂子雜錄に「莎雞、古今註に一名促織、一名絡緯」とある。はたおりといふ蟲。【三】虛織　本當に機を織るのではなく、その聲のみ似たるを云ふ。庾信の奮美人歌に絡緯無機織とあり、孟東野の樂府に晴登有虛織とある。

【題義】倦夜は、退屈な夜、あかし兼ねた長き夜、卽ち冬夜である。

【詩意】寐ね兼ねし枕を擁して、長い夜が、つくづく厭になつたが、小さい窓は、まだ暗くて、容易に明るくならない。孤村には、一犬の吠えるのが聞こえるが、殘月の下に、幾個の人が步いて居るのであらうか。わが衰鬢は、白くなつて、すでに久しく、旅中の心は、何おもふとしもなく、自然に淸淸しい。荒園の中に、機おり蟲が頻りにすだいて居るが、から機を、いくらせッせと、織つた處で、何も出來ぬのは、まことに、傷ましいことである。

【餘論】乾隆御批に「虛廓寂寥、愈よ妙境に臻る」とあり、查初白は「通首、ともに少陵の神味を得たり」といひ、紀昀は「結、意致あり、遂に通體をして倶に歸宿あらしむ、若し此に非ざれば、空調

を成さむ」といつて居る。

用過韻冬至與諸生飲酒　過の韻を用ひ、冬至、諸生と酒を飲む

(一)小酒生(二)黎法。乾糟瓦盎中。　小酒、黎法に生じ、糟を乾かす瓦盎の中。
芳辛知有毒。滴瀝取無窮。　芳辛、知る毒あるを、滴瀝、取つて窮まりなし。
凍醴寒初泫。春醅暖(三)更饛。　凍醴、寒、初めて泫ひ、春醅、暖、更に饛たり。
華夷兩尊合。醉笑一歡同。　華夷、兩尊合し、醉笑、一歡同じ。
(四)里閈(五)峩山北。田園(六)震澤東。　里閈、峩山の北、田園、震澤の東。
歸期那敢說。安訊不曾通。　歸期、那ぞ敢て說かむ、安訊、かつて通せず。
鶴鬢驚全白。(七)犀圍尚半紅。　鶴鬢、全く白きに驚き、犀圍、尚は半ば紅なり。
愁顏解(八)符老。(九)壽耳鬭(一〇)吳翁。　愁顏、符老に解き、壽耳、吳翁と鬭ふ。
得穀鵝初飽。亡貓鼠益豐。　穀を得て、鵝、初めて飽き、貓を亡うて鼠、益す豐なり。
黃薑收土芋。蒼耳斫霜叢。　黃薑、土芋を收め、蒼耳、霜叢を斫る。
兒瘦緣儲藥。奴肥爲種菘。　兒瘦す、藥を儲ふるに緣り、奴肥ゆ、菘を種うるが爲めなり。
頻頻非竊食。(一一)數數尚乘風。　頻頻として、食を竊むに非ず、數數として、尚は風に乘ず。
(一二)河伯方夸若。(一三)靈媧自舞(一四)馮。　河伯、方に若に夸り、靈媧、自ら馮を舞ふ。
歸途陷泥淖。炬火燎茅蓬。　歸途、泥淖に陷り、炬火、茅蓬を燎く。
膝上(一五)王文度。家傳(一六)張長公。　膝上の王文度、家傳の張長公。
和詩仍醉墨。(一七)戲海亂羣鴻。　和詩、仍は醉墨、海に戲れて、羣鴻を亂る。

【字解】【一】小酒　宋史食貨志に「廣南東西路、春より秋に至るまで、醞成れば、卽ち鬻ぐ、これを小酒といふ」とあり、寰宇記に「生黎、酒を釀す、麴櫱を用ひず。木あり、嚴樹といふ、その皮葉を取り、搗いて後、淸水に之を浸し、粳釀を以て之に和す、香甚しく、能く人を醉はしむ。又石榴あり、亦た花葉を取り、釀に和して之を釀す、數日、酒を成す、熟すれば竹筒を以て之を吸ふ」とある。小酒は早造りの酒。【二】黎法　黎人の釀法、黎人は儋州山嶺の間に住む種族の名。【三】暖更饛　饛は器に滿つる貌。【四】里閈　里閭に同じ。【五】峩山　卽ち峨眉、蜀中の名山。【六】震澤　常州に在る、東坡は嘗に田を常州に買つて置いた。【七】犀圍　犀の皮帶、施註に「故事、謫散官、別駕司馬と雖も、皆封賜、故の如し。故に、宋衛書、郞時に在るの詩に云ふ　緩時不巾幘、猶更佩金魚」と。先生、時に瓊州別駕に謫ぜらる、故に犀圍尚半紅の句を用ふ」とある。【八】符老　卽ち符林秀才。【九】壽耳　藝文類聚に樊氏相法を引いて「人の耳圍、長さ寸三分は壽百二十歲、一寸は壽百歲」とある。【一〇】吳翁　卽ち吳子野。【一一】數數　莊子逍遙游に列禦寇の事を敍し「彼、世に於ける未だ數數然たらざるなり」とある。【一二】河伯　莊子に「河伯、望洋、若に向つて歎じて曰く、野語に之あり、道を聞くこと百、以て己に若くものなしと爲すとは、我の謂なり」とある。若は海若。【一三】

靈媧　女媧氏をいふ。【二四】 舞馮　馮は馮夷、楚辭の遠游に「使湘靈鼓瑟兮、海若舞馮夷」とある。【二五】 王文度　名は坦之、父述、これを愛し、長大の後も、なほ抱いて膝上に置いたといふので、前に「送劉道原」の詩中に注して置いた。【二六】 張長公　史記に「張釋之、廷尉となり、阿らずして法を守る。景帝、時に太子たり、釋之、公車に下らざるを劾す。後、景帝に事へ、歳餘、淮南王の相となる、なほ御ふるに前過を以てするなり。釋之卒す、その子を摯といふ、官、大夫に至つて免ず、竟に容を當世に取る能はざるを以て、故に終身仕へず」とある。【二七】 戯海　隋の曾果師が王羲之の書を評して「羣鴻の海に戯るるが如し」といつた。

【題義】 この詩は、冬至の日、諸生を集めて酒を飲み、末子過の韻を用ひて作つたので、その體は、即ち五言排律である。

【詩意】 早造りの酒は、黎人の釀法に本づき、糟を取り出して瓦盆の中に乾かして置く。その酒は、甘からくして、毒あるが如く、滴瀝として、いくら取つても盡きない。寒造りの分は、初め浸み出す樣であるが、春造つたのは、器中に滿ち湛へて居る。今、この酒を酌むと、華夷ともに打解けて、兩㰜相合し、醉うて笑ふさまは、一樣に喜ばしげに見える。わが故鄉は、峨眉山の北であるし、田園は、常州、即ち震澤の東に在るが、いつ歸るといふ期限も分からず、音信も通じない。鬢は鶴の如く、全く白くなつたのに驚かされ、貶謫の身ながら、なほ前官の禮遇を賜はつて、犀皮の帶は、なほ半ば紅色を帶びて居る。愁顏は、符林秀才に逢つた爲に解け、福福しい耳たぶは、吳子野と孰れかといつて較べて見た。わが住居の有樣はといへば、鵝が初めて肥え、貓が居なくなつて、鼠が非常に殖えた。里芋は、蘘荷と共に收藏し、霜を帶びた草むらから、蒼耳の藥草を取つて來た。子供の瘦せて居るのは、藥草を儲藏ばかりして、滅多に用ひぬからであるし、家僕の肥えて居るのは、菜を作つて、食物が豐富だからである。頻頻として、外に出るのは、食を盜むが爲に非ず、世に於ては數數然たれども、なほ風に乘せむことを願つて居る。世間見ずで、自分ひとり偉らいと思つて居ることは、河伯が海若に向つて誇りしが如く、しかし、その下を馭することは、女媧が自然に馮夷を舞はしめた樣に有りたいと思つて居る。そこで、歸途には、ぬかるみの泥中に陷り、茅や蓬を束ねて炬となし、やツと歸るといふ始末。わが子を愛することは、むかし、王述が其子の文度を愛して、長大の後も、之を膝上に置きしが如く、傳家の風として、世に阿らぬ爲に、立身せぬことは、張釋之の子の長公が、終身仕へざりしと同じである。ここに、和詩を作つて、つまらぬ繰り言を述べ、やがて、醉筆一揮、これを書きなぐると、その書は、羣鴻の亂れて海に戯るるが如く、聊か自慢の氣味である。

【餘論】 紀昀は「馮夷の馮、皮氷の反、東韻に入るるは誤れり」といつて居るが、東坡の才を以てして、なほ時に訛誤を免れぬものと見える。

縱筆三首　　縱筆三首

寂寂東坡一病翁。　寂寂たり、東坡の一病翁、

白須蕭散滿霜風。　白須蕭散、霜風に滿つ。

小兒誤喜朱顏在。　小兒、誤つて喜ぶ、朱顏の在るを、

一笑那知是酒紅。　一笑、那ぞ知らむ、是れ酒紅。

【題義】縱筆は、筆に任かせて書くといふ義。

【詩意】東坡と號する一病翁は、さも寂しげに見え、白い鬚は、蕭颯として、霜を帶びた寒風に吹き靡かされて居る。子供等は、赤い顏をして居て、いかにも丈夫さうに見えるのを誤つて喜んで居るが、誰か知るべき、そは酒を飲んだ爲に紅くなつたに過ぎなかつた。

【餘論】容齋隨筆に「樂天の詩に云ふ、醉貌如二霜葉一、雖レ紅不二是春一」と。坡は則ち曰く、「小兒誤喜朱顏在、一笑那知是酒紅」と。舊公案を采つて、機杼一新、前に古人なく、ここに於て至れりと爲す」とあつて、卽ち奪胎の妙を稱したのである。なほ紀昀は「老を嘆ずるの意、かくの如く之を出す、語、天下に妙」といつて居る。

父老爭看烏角巾。　父老、爭ひ看る烏角巾、

應緣曾現宰官身。　應に曾て宰官の身を現ずるに緣るべし。

溪邊古路三叉口。　溪邊の古路三叉口、

獨立斜陽數過人。　獨り斜陽に立つて、數ば人を過ごす。

【字解】【一】烏角巾　黑色の角ある頭巾。【二】宰官　主宰有官の人。【三】三叉　路の三つに分れる處。【四】數過人　數ば人を遣り過ごす。

【詩意】父老どもは、爭ひ聚まり、わが烏角巾を戴けるを見て、敬意を表して居るので、そは、予が曾て宰官となつたことがあるからであらう。しかし、予は、そんなことに拘はらず、溪邊の古道の三つに分れる處に至り、ひとり、斜陽の中に立つて、數ば人を遣り過ごし、低徊良や久しくして居る。

【餘論】紀昀は「情を含んで盡きず」といつて居る。

北船不到米如珠。　北船到らず、米、珠の如く、

醉飽蕭條半月無。　醉飽蕭條、半月無し。

明日東家當祭竈。　明日、東家、當に竈を祭るべし、

隻雞斗酒定膰吾。　隻雞斗酒、定めて吾に膰せむ。

【字解】【一】北船　北方から來る商船。【二】膰吾　膰は祭肉など贈り來ること。

【詩意】北方の商船が著港せぬ爲に、米が拂底になつて、その高價なること、さながら珠の如く、今まで醉飽して居たのが、俄に寂しげになり、半月も續かなかつた。明日は、東鄰の家で竈を祠るといふから、定めて、お下りの隻雞斗酒を送り來るだらうと、いささか心待にして居る。

【餘論】紀昀は「眞に得て好し」といつて居る。

夜燒松明火

歳暮風雨交。客舍悽薄寒。
夜燒松明火。照室紅龍鸞。
快燄初煌煌。碧煙稍團團。
幽人忽富貴。蕙帳芬椒蘭。
(一)珠煤綴屋角。(二)香湝流銅槃。
坐看(三)十八公。俯仰灰燼殘。
(四)齊奴朝爨蠟。(五)萊公夜長嘆。
(六)海康無此物。燭盡更未闌。

夜、松明火を燒く

歳暮、風雨交はり、客舍、薄寒悽たり。
夜、松明の火を燒く、室を照らす紅龍鸞。
快燄、初めは煌煌、碧煙、稍く團團。
幽人、忽ち富貴、蕙帳、椒蘭芬たり。
珠煤、屋角に綴り、香湝、銅槃に流る。
坐に見る十八公、俯仰、灰燼殘るを。
齊奴、朝に蠟を爨し、萊公、夜長嘆。
海康、この物なく、燭盡きて、更、未だ闌ならず。

【字解】【一】珠煤　珠の如く聚まる煤。【二】香湝　東坡の自註に「松湝なり、本草注に出づ」とあつて、卽ち松やに。【三】十八公　松の異名、前に和二張耒一の詩中に注して置いた。【四】齊奴　晉書に「石崇、小字は齊奴、かつて蠟を以て薪に代ふ」とある。【五】萊公　歐陽修の歸田錄に「寇萊公、少年より富貴、油燈を點ぜず、寢と雖も亦た燭を然やして且に達す。官を罷めて去る毎に、後、人、官舍に至れば、厠溷の間、燭淚地に在り、往往堆を成すを見る」とある。【六】海康　雷州に屬する郡名、寇萊公ここに貶せられて終る。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】歳の暮に風雨交も至り、客舍悽然として、薄寒を覺ゆる折から、夜、松明の火を燃やすと、紅色の龍鸞が室を照らすかと疑はれた。勢よく燃え立つ焰は、初め煌煌として居たが、その內に、靑白い煙が團團として起つた。世すて人も、今は富貴になつた樣に見え、蕙花を薰ゆらした帳中で、椒蘭の名香を焚くと一般。やがて、珠なす煤は、屋根裏の片すみに連り、香ばしき松脂は、銅盤の中に流れ入り、折角の十八公は、俯仰の間に、灰燼までも無くなつて仕舞つた。むかし、石崇は、朝に蠟を以て薪に代へ、寇萊公は、謫居中、長嘆しつつ、燭を燃やしたといふが、これに較べては如何。但し、萊公の居た海康は、松が乏しく、夜未だ闌ならざるに、燭早く盡きたらうが、もし松明があつたならば、定めて、喜ばれたことであらう。

【餘論】紀昀は「瑣屑の題、寫し得て大に雅」といつて居る。

蘇東坡詩集 卷四十三

古今體詩 五十二首

庚辰歲人日作、時聞黃河已復北流、老臣舊數論此、今斯言乃驗、二首

庚辰の歲、人日の作、時に聞く黃河已に復た北流すと、老臣、舊と數〻此を論ず、今斯言、乃ち驗あり 二首

老去仍棲隔海村。 老去、仍ほ棲む隔海の村、
夢中時見作(一)詩孫。 夢中、時に見る、詩を作るの孫。
天涯已慣逢人日。 天涯、すでに慣れたり人日に逢ふに、
歸路猶欣過(二)鬼門。 歸路、猶ほ欣ぶ、鬼門を過ぐるを。
三策已應思(三)賈讓。 三策、すでに應に賈讓を思ふべし、

【字解】【一】作詩孫 陸放翁の說に「蜀に在つて、蘇山に藏する公の墨跡を見る、暴韻竹詩の後に題して云ふ、寄作詩孫符」とあつて、このも、矢張東坡の孫で、名を符と云つた人であらうといふこと。蘇符は宋史に專傳なきも、建炎以來繫年

要籙に略ぼ見えて居る。【二】鬼門　關の名、山水志に「廣南西路、容宰二州の界に鬼門關あり、諺に曰く、若度二鬼門關一十去九不レ回」とある。【三】買讓　漢の人、黄河の水利を論じ、その詩は溝洫志に見えて、前に與二葉淳老一の詩中に注して置いた。【四】虞翻　三國志に「虞翻、性疎直、數ば酒失あり、孫權、怒を積み、これを交州に放ち、南に在ること十餘年」とある。【五】河源　惠州志に「南齊の時、龍川縣を析いて河源縣を置く、縣の東北に三河の源あるを以ての故に名づく」とある。【六】新篘　篘は酒を漉す具。

孤忠終未赦虞翻。　孤忠、終に未だ虞翻を赦さず。
典衣剩買河源米。　典衣、剩して買ふ河源の米、
屈指新篘作上元。　指を屈して新篘、上元を作す。

【題義】元祐三年、東坡が翰林學士に任せられし時、箚子を上つて「先帝、河の西北に行かむと欲するを知るや久し。今、都水使者王孝先、乃ち北京の南に於て孫村河を開き、河身を奪ひ、以て故道に復せむと欲す。これ豈に獨り一方の安危のみならむや、天下の休戚なり。臣、衆論を采察し、以爲へらく、この役、罷めざるべからず。もし三千萬の物料を將つて、分作數年、水行くところの地に因つて、稍や隄防を立つれば、數年の後、必ず漸く安流、何を苦んで、必ず行ふべからざるの役を興さむや」といつた。しかし、その言は用ひられずして、この工事は、遂に實施されたが、格別の効果もなかつた。この詩は、元符三年の人日、即ち一月七日に作つたので、その時、黄河が再び北流して、從前の工事は徒勞に歸したといふことを聞き、東坡は、曩に數ば此事を論じたが、今に至つて果して其驗があつたのは、まことに、困つたことだといふので、詩中に、これに關する感慨を併敍したのである。しかし、人日が主で、黄河の事は、ほんの付けたりであるから、題意の主客を混同してはならぬ。紀昀も亦た「時聞以下の十九字は、應に注して三策の句の下に在るべし。もし題中に標すれば、この事の爲に作るに似て、題と詩と相應せず」といつて居る。

【詩意】身は、已に老い去り、ここ中原と遙に海を隔てて遠き儋州の寒村に住んで居て、詩を作る我が孫を夢に見ることがある。天涯に在つて人日に過ひしことは、すでに幾度もあつて、もとより、慣れて居るから、格別驚きもせず、歸路をたどつて、鬼門關を過ぎたならば、定めて、喜ばしいことであらう。黄河の修治に就いては、古しへの賈讓の如く、かつて、三策を上つたこともあつたが、わが孤忠、さながら虞翻の如く、南方に放逐されて、未だ罪を赦されざるは、まことに遺憾の至である。ここに、衣類を質に置いたから、その剩餘の錢を以て、ここらで一番善いといふ河源の米を買ひ、指を屈すれば、上元の佳節の近きまま、新に酒を釀したいと思つて居る。

【餘論】紀昀は「五句、自ら擧むるの語に非ず、乃ち幸を冀ふの語なり、故に忠厚の旨を失はず」といつて居る。

不用長愁挂月村。　用ひず、長く愁ふ月を挂くるの村、
檳榔生子竹生孫。　檳榔は子を生じ、竹は孫を生ず。

【字解】【一】長愁挂月村　杜甫の東屯月夜の詩に月挂客愁村とあるに本づく。【二】竹生孫　東坡の自

新巢語燕還窺研。　新巢語燕、還た研を窺ひ、
舊雨來人不到門。　舊雨來人、門に到らず。
春水蘆根看鶴立。　春水蘆根、鶴の立つを看、
夕陽楓樹見鴉翻。　夕陽楓樹、鴉の翻るを見る。
此生念念隨泡影。　この生、念念、泡影に隨ふ、
莫認家山作本元。　家山を認めて、本元と作す莫れ。

【詩意】月を挂くる異鄕の寒村に在つて、長しへに愁ふる必要もなく、ここ儋州の地に於て、檳榔は實を結び、竹は孫を生じ、炎熱甚しきだけに、生意は極めて盛である。新巢の燕は、囀りつつ、又しても、舞ひ下つて硯を窺ひ、邊僻の處だけに、舊友も滅多に音づれぬ物靜かさ。春の水の浸したる蘆べには、鶴が立つて居るし、入り日に映ゆる楓樹の陰には、歸る鳥の翻るのが見える。この一生は、念念の間、すべて泡影に隨つて消滅しつつあるので、何も故鄕が本元だといつて、いつまでも之を慕ふに及ばず。どこでも、到る處、その土に安んじて居る方が善い。

【餘論】紀昀は「末、亦た無聊自ら寬にするの語、禪悅を以て之を視ること勿れ」といつて居る。

註に「海南の勒竹、毎節枝を生ず、竹筆の如く大、蓋し竹孫なり」とある。

【三】舊雨　舊友に同じ。

庚辰歲正月十二日、天門冬酒熟、予自漉之、且漉且嘗、遂以大醉、二首

庚辰の歲正月十二日、天門冬酒熟し、予自ら之を漉す、且つ漉し且つ嘗め、遂に以て大に醉ふ　二首

自撥牀頭一甕雲。　自ら撥す、牀頭一甕の雲、
幽人先已醉濃芬。　幽人、先づ已に濃芬に醉ふ。
天門冬熟新年喜。　天門冬は熟して、新年に喜び、
麴米春香竝舍聞。　麴米春は香ばしく、竝舍に聞こゆ。
菜圃漸疏花漠漠。　菜圃、漸く疏にして花漠漠、
竹扉斜掩雨紛紛。　竹扉、斜に掩うて雨紛紛。
擁裘睡覺知何處。　裘を擁して、睡覺む、知る何の處、
吹面東風散纈紋。　面を吹くの東風、纈紋を散ず。

【字解】【一】牀頭　白居易の詩に、南山入舍下、酒甕在牀頭とある。

【二】濃芬　芬は香氣。

【三】麴米春　東坡の自註に「杜子美の詩に云ふ、聞道雲安麴米春と。蓋し、酒名なり」とある。

【四】纈紋　しぼりの紋、前に數ば見ゆ。

【題義】天門冬酒の釀法に就いては、山居要錄に「醇酒一斗、六月六日、麴麥一升、好糯米五升を飯

に作り、天門冬は五升を煎る。米は須らく淘し訖つて曬乾すべく、天門冬の汁を取つて浸す。先づ酒を將て麴を浸すこと常法の如く、炊飯の寒溫に適するを候ひ、用つて煎じて和飲し、相入れしめて、これを釀す。秋夏は七日、勤看して熱せしむる勿れ、秋夏は十日にして熟す」とある。この詩は、元符三年、庚辰正月十二日に、天門冬酒が熟せしに因り、自分で之を漉し、漉しながら飲み、遂に大醉し、仍つて作つたといふのである。

【詩意】われ親ら、牀頭に据ゑ置いた酒甕の中なる沈澱物を漉し去らむとし、逸早く濃かなる香氣に醉つた。天門冬酒の熟せしは、新年に際して、まことに喜ぶべく、殊に、古しへの麴米春に比すべき香氣は、家なみに匂つて居る位。眺めやれば、菜の花は漠漠として、畑なるは次第に摘まれて疏になり、紛紛たる雨の中に、斜に竹の戶ばそを掩うて居る。そこで、甕を擁した儘、醉つて睡つたが、いつしか覺めると、東風は、黃綠を交へた滿地の纈紋を散じて、やがて、わが顏を吹く心地よさ。

【餘論】乾隆御批に「花雨、醉中に於て之を見る、別に情趣饒し」とあり、紀昀は「三句太だ質」といつたが、極めて的中して居る。

載酒無人過子雲。　酒を載せて、人の子雲を過ぐるなく、

年年家醞有奇芬。　年年、家醞、奇芬あり。

醉鄕杳杳誰同夢。　醉鄕杳杳、誰か夢を同じうす、

睡息齁齁得自聞。　睡息齁齁、自ら聞くを得たり。

口業向詩猶小小。　口業、詩に向つて猶ほ小小、

眼花因酒尚紛紛。　眼花、酒に因つて尚ほ紛紛。

點燈更試淮南語。　燈を點じて、更に試む淮南の語、

汎溢東風有縠紋。　汎溢す東風、縠紋あり。

【字解】【一】子雲　揚雄の字、客が酒を載せて之を訪ひしことは、前に會客有美堂の詩中に注して置いた。【二】家醞　手造りの酒。【三】醉鄕　王績に醉鄕記がある。【四】齁齁　いびきの聲。【五】口業　口の造す罪業。白居易の詩に、猶殘口業未拋詩、芟然口業何詩新、等の句がある。【六】眼花　目がかすむ。杜甫の飲中八仙歌に　眼花落井水底眠　とある。【七】淮南語　東坡の自註に「淮南子に云ふ、東風至つて酒汎溢と。許愼の註に云ふ、酒汎は清酒」とあり、又高誘の註に「酒汎は米麴をいふ、麴の汎ぶもの、風至つて沸動す」とあつて、東風吹き至れば、酒が熟して、麴が上に浮んで沸動するといふ意味であらう。

【詩意】閑居寂寞、酒を載せて人の訪ふなきことは、揚子雲の宅よりも甚しいが、去年來、釀造した家醞が熟して、えならぬ香氣を發して居るのは、まことに喜ばしい。われ獨り醉うて睡り、杳杳たる醉鄕、誰も夢を同じうするものなく、齁齁たるいびきは、自ら聞くのみである。詩で口業を爲すことは、小小の事であつて、取り立てて言ふにも足らず、酒の爲に目がかすんで、あらゆる物は紛紛として見える。そこで、燈火を點じて、淮南子を見ると、熟したばかりの酒が東風に吹かれると、縠紋を散らした樣だといふ文句があつたので、まことに、よく事情を悉くしたものと思つて、ひどく感服し

た。

【餘論】紀昀は「胸胸の字、雅ならず」といつて居る。

追和戊寅歳上元　戊寅の歳、上元に追和す

(一)賓鴻社燕巧相違。　賓鴻社燕、巧に相違ふ。
(二)白鶴峰頭白板扉。　白鶴峰頭、白板扉。
(三)石建方欣洗牏廁。　石建、方に欣ぶ、牏廁を洗ふを、
(四)姜龐不解歎蠨蛸。(五)　姜龐、解せず、蠨蛸を歎ずるを。
一龕京口嗟春夢。　一龕京口、春夢を嗟し、
萬炬錢塘憶夜歸。　萬炬錢塘、夜歸を憶ふ。
(六)合浦賣珠無復有。　合浦、珠を賣る、復た有るなし、
當年笑我泣牛衣。(七)　當年、笑ふ、我が牛衣に泣くを。

【字解】【一】賓鴻社燕　秋、賓として北より來る雁、春の社日頃、北より來る燕。【二】白鶴峰　惠州に在つて、東坡は、その山麓に新居を建てた。【三】石建　漢書石奮傳に「萬石君の家、孝謹を以て聞こゆ。長子建、郎中令たり、五日洗沐する毎に、歸つて親に謁して子舍に入り、竊に侍者に問ひ、親の中裙廁牏を取つて、身、自ら浣洒す」とある。廁牏は中衣。【四】姜龐　前に峽州甘泉寺の詩中に注して置いた。【五】蠨蛸　蠨蛸と伊威、ともに詩經東山の詩に見え、その詩は、夫、家に在らずして、寂寞に居るを歎じたのである。【六】合浦　下を見よ。【七】牛衣　漢書に「王章、疾病、被なくして牛衣中に臥し、妻と訣れて涕泣す。その妻、これを呵怒して曰く、仲卿、京師の尊貴、朝廷に在るの人、誰か仲卿に踰ゆるものぞ、今、疾病、困厄し、自ら激卬せず、乃ち反つて涕泣するは、何ぞ鄙なるや、と。後、章、仕官して京兆を歷、封事を上らんと欲す。妻、之を止めて曰く、獨り牛衣中に涕泣せし時を忘るるか、と。書上る、果して獄に下つて死す。妻子、合浦に徙つて珠を采り、產、數百萬を致す」とある。牛衣は、牛體に被らする蓑衣。

【題義】この詩は、戊寅の歳、卽ち元符元年の上元に誰か作つたのに追和したので、惠州から儋州に移つたばかりの事だから、白鶴峰の新居に併せて、亡妻を思慕したのである。

【詩意】雁と燕とが、毎毎入り違ひに成つて相逢はぬと同じく、白板扉新しき白鶴峰の家は、折角出來たが、這入つて住むことも出來なかつた。わが子供は、丁度古しへの石建の如く、喜んで、親の巾衣さへ洗濯して具れるから、われは、姜龐の如く、伊威の詩を歎ずるに止まらぬ。京口の焦山に於ては、かつて、一龕の佛を拜して、世事の春夢に似たるを歎じ、錢塘に於ては、上元の夜、萬炬煌煌たるが中に、おそく歸つたことを記憶して居る。王章の妻は、夫の死後、合浦の珠を賣つて、見事に財產を造り上げたといふが、われは、すでに妻に死なれ、むかし、病んで牛衣に泣いたことを笑ふのみである。

【餘論】紀昀は「語、亦た愷至」といつて居る。

和陶雜詩十一首　陶の雜詩、十一首に和す

斜日照孤隙。始知空有塵。　斜日、孤隙を照らし、はじめて空に塵あるを知る。

微風動衆竅。誰信我忘身。　微風、衆竅を動かし、誰か我が身を忘るるを信せむ。

一笑問兒子。與汝定何親。　一笑、兒子に問ふ、汝と定めて何をか親む。

從我來海南。幽絕無四鄰。　わが海南に來りしより、幽絕、四鄰なし。

耿耿如缺月。獨與長庚晨。　耿耿として缺月の如く、ひとり、長庚と晨なり。

此道固應爾。不當怨尤人。　この道、固より應に爾るべし、當に怨尤の人たるべからす。

【字解】【一】衆竅　竅は孔穴。【二】長庚　太白星。【三】怨尤　天を怨み人をとがめる。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】斜なる夕日が、狹き隙間を照らすとき、はじめて空中に塵埃あるを知るべきも、微風が、多くの孔穴に吹き入つて聲を爲すとき、誰か我が既に此身を忘れたるを信ずべき。笑つて倅等に向ひ、われと、汝とは、どうして、親しいのかといつた。ここに儋州に來りしより、村居幽絕、鄰近所の家だになく、耿耿として缺月の如き彼の太白と共に、朝早く起きるを例として居る。この道は、もとより必然的であつて、わが浮沈も、前以て定まつたことであるから、決して、天を怨み人をとがめてはならぬ。

【餘論】紀昀は「十一首、ともに渾然深厚、陶公に逼近すれども、字句偶ま本色を露はす、謂はゆる形骸の外」といつて居る。

故山不可到。飛夢隔五嶺。　故山、到るべからず、飛夢、五嶺を隔つ。

眞游有黃庭。閉目寓兩景。　眞游、黃庭あり、目を閉ぢて兩景を寓す。

室空無可照。火滅膏自冷。　室、空しくして照らすべきなく、火、滅して膏自ら冷かなり。

披衣起視夜。海濶河漢永。　衣を披いて起つて夜を視れば、海濶くして河漢永し。

西窗半明月。散亂梧楸影。　西窗、半明の月、散亂す梧楸の影。

良辰不可繫。逝水無留騁。　良辰、繫ぐべからず、逝水、留騁なし。

我苗期後枯。持此一念靜。　わが苗、後れて枯るるを期す、これを持して一念靜かなり。

【字解】【一】五嶺　前に嶺中九峰の詩中に注して置いた。【二】黃庭　黃庭經注に「脾は中央、卽ち黃庭の宮、常存といふ」とある。【三】兩景　黃庭經に見えた內外の景を云ふ。

【詩意】故鄉は蜀であるから、遠くして到るべからず、飛ぶ夢だに、險しき五嶺に隔てられて、その先へは往くことが出來ぬ。人は、向內的省察を專とすべく、一身の中心たる脾は、黃庭として、眞に心を遊ばすに足るし、目を閉づれば、景は內外を分ち、外に在るものは、卽ち虛妄に過ぎぬ。室內に

物なくして空虛なれば、照らすべき必要もなく、火が消えると、齋も自然冷かになる道理である。そこで、衣を引ッかけ、起つて夜色を見れば、海水濶くして天の河は永く、西の窓に映れる半ば明るき月は、梧楸の影を地上に亂して居る。良辰は、繋ぐことが出來ず、歲月は行く水の如く、決して走ることを止めない。平生、あらゆる手段を盡くして居る處から、わが培植する苗は、枯れるにしても、一番後だと、かういふ考を持つてさへ居れば、一念靜かにして、安心立命を爲すことが出來る。

【餘論】紀昀は「情、景中に在り」といつて居る。

眞人有妙觀。俗子多妄量。　眞人、妙觀あり、俗子、妄量多し。

區區勸粒食。此豈知子房〔一〕。　區區として粒食を勸む、これ豈に子房を知らむや。

我非徒跣〔二〕相。終老懷未央〔三〕。　われは徒跣の相に非ず、終老、未央を懷ふ。

〔四〕兎死縛淮陰。狗功指平陽〔五〕。　兎、死して淮陰を縛し、狗功、平陽を指す。

哀哉亦何羞。世路皆羊腸〔六〕。　哀しいかな、亦た何をか羞ぢむ、世路、皆羊腸。

【字解】【一】子房　張良の字、史記留侯世家に「辟穀を學び、道引して身を輕くす、呂后、留侯を德とし、乃ち强ひて之に食ましむ」とある。【二】徒跣　漢書蕭何傳に「相國となり、廷尉に下し、數日にして赦されて出づ。何、徒跣して入つて謝す」とある。【三】未央　漢書高帝紀に「七年、蕭何未央宮を治む、上、從つて長安に都す」とある。【四】兎死　漢書韓信傳に「上、武士をして縛して、後車に載せしむ。信曰く、果して人の言の若し狡兎死して良狗烹らる、と。遂に信を械して雒陽に至らしめ、赦して以て淮陰侯となす」とある。【五】平陽　漢書蕭何傳に「上曰く、今諸君、徒に能く走つて獸を得るのみ、功狗なり。蕭何の如きに至つては、發蹤指示、功人なり、と。列侯、畢く已に封を受けて、位次を奏す。皆曰く、平陽侯曹參、第一たるべし、と。上、鄂千秋の言を善しとし、何をして第一たらしむ」とある。【六】羊腸　もと地名、酈道元の水經註に「羊腸阪は、晉陽の西北に在り、石磴縈委、羊腸の若し、故に取つて名づく」とある。

【詩意】眞人には、妙絕なる世界觀があるが、俗子には、あて推量が多い。區區として、粒食を勸めたのは、決して、張良の眞意を知つたものではない。かの蕭何の如き、もとより徒跣して罪を謝すべき樣な人相ではなく、未央宮を長安に建てたのは、まことに忘るべからざる大事業であつた。しかし、韓信は貶せられて淮陰侯となり、兎死して狗烹らるといふ歎を爲すを免れず、さうかと思へば、功狗の第一として、曹參が推されたこともあつて、人の考へは、全く顚倒して居る。されば、世路は羊腸の險に比して更に甚しく、どんな事になつたとて、決して、羞づるには及ばない。

〔一〕相如偶一官。嗤鄙蜀父老。　相如、偶ま一官、嗤鄙す蜀の父老。

不記犢鼻時。滌〔二〕器混傭保。　記せず、犢鼻の時、器を滌うて傭保に混せしを。

著書曾幾何。渴肺〔三〕灰土燥。　著書、かつて幾何、渴肺、灰土燥く。

琴臺有遺魄。笑我歸不早。　琴臺、遺魄あり、笑ふ我が歸ること早からざるを。
作書遺故人。皎皎我懷抱。　書を作つて故人に遺る、皎皎たり我が懷抱。
餘生幸無愧。可與君平道。　餘生、幸に愧づるなくんば、君平と道ふべし。

【字解】【一】相如　漢書司馬相如傳に「文君と俱に臨卭に之き、盡く車騎を賣つて酒舍を買ひ、乃ち文君をして壚に當らしめ、相如、身自ら犢鼻褌を著けて、傭保と雜作し、器を市中に滌ふ。後、節を建てて蜀に使するや、縣令、弩矢を負うて先驅す、蜀人以て寵となす」とある。【二】渴肺　相如は常に消渴の疾があつた。消渴は糖尿病であらう。【三】灰土燥　酒壚久しく用なく、たきの灰土が乾燥し切つて居る。【四】琴臺　九域志、成都府古跡に司馬相如の琴臺あり、王褒の益州記に「相如の宅、笮橋の北に在り。李膺云ふ、市橋の西二百步、相如の舊宅を得たり。南に琴臺の故墟あり」と記してある。【五】君平　漢書列傳四十二の序に「蜀に嚴君平あり、成都の市に卜筮す。以爲へらく、卜筮は、賤業なれども、以て衆人を惠むべし、と。邪惡非正の問あらば、蓍龜に依つて爲に利害を言ふ」とある。君平、名は遵。

【詩意】司馬相如が偶然一官を得て蜀に使せし時は、大得意で、父老どもを賤み、さきに、犢鼻褌を著けて、雇人と共に、器を市中に滌ひしことを忘れて仕舞つた樣であつた。相如は、書を著したが、あまり澤山も出來ぬ內に、消渴の疾が嵩じて遂に死し、酒壚の灰土は、燥いた儘、頽れて仕舞つた。今でも、琴臺には、その魂魄が留まつて居て、予が官位未だ達せず、歸ることの遲いのを笑つて居るであらう。予は手紙を書いて蜀中の故人に遺つたが、この懷抱は、耿耿として、かりそめにも、道を枉げぬ積り。もし餘生幸に愧づることなくんば、當年の嚴君平と共に道ふことが出來るであらう。

【餘論】紀昀は「かくの如く落下す、奇絕の筆」といつて居る。

孟德黠老狐。姦言嗾鴻豫。　孟德は、老狐より黠なり、姦言、鴻豫を嗾す。
哀哉喪亂世。梟鸞各騰翥。　哀いかな、喪亂の世、梟鸞各〻騰翥。
逝者知幾人。文擧獨不去。　逝くもの、知る幾人、文擧、ひとり去らず。
天方斲漢室。豈計一郗慮。　天、方に漢室を斲る、豈に一郗慮を計らむや。
昆蟲正相齧。廼比藺相如。　昆蟲、正に相齧む、廼ち比す藺相如。
我知公所坐。大名難久住。　われ、公の坐するところを知る、大名、久しく住まり難し。
細德方險微。豈有容公處。　細德、方に險微、豈に公を容るる處あらむや、
既往不可悔。庶爲來者懼。　既往は悔ゆべからず、庶はくは、來者の爲に懼れむ。

【字解】【一】孟德　曹操の字。【二】嗾　けしかける。【三】鴻豫　郗慮の字、その詳は後に見ゆ。【四】梟鸞　小人と君子とに比す。【五】逝者　曹操に殺されしものを云ふ。【六】文擧　孔融の字。【七】斲漢室　漢の帝室を段段に削つて滅亡せしめる。【八】郗慮　後漢書孔融傳に「曹操、融の正議を忌み、大業を傾がむことを慮る。山陽の郗慮、風旨を承望し、融の官を免ぜむことを奏し、因つて、讎怨を顯明す。操、故らに書もて融を激厲して曰く、廉藺は小國の臣、なほ能く相下る、國家東遷、文擧、盛に鴻豫の名實相副ふを嘆じ、鴻豫、亦た文擧の奇逸博聞を稱す。まことに怪む、今や始めと相違ふと。操、すでに嫌忌を積み、郗慮、復た

其罪を構成す、遂に路粹をして、狀を枉げて融を奏せしめ、獄に下して棄市す」とある。【九】藺相如　前に引いた曹操の書中に孔融が藺相如に、郗慮が廉頗に比せしを云ふ。

【詩意】曹孟徳は、老狐よりも狡黠である處から、姦言を以て郗慮をけしかけ、孔融の罪案を構成せしめた。喪亂の世は、まことに傷むべく、小人と君子とが、各〻飛び上つて衝突し、その爲に、死んだものは幾人あつたか、殆んど數へ切れぬ位。孔融のみは、ひとり、居殘つてゐたが、折から、天は將に漢室を亡さむとして居たから、一人の郗慮の如きは、物の數でもない。たとへば、昆蟲が齧み合ふ如くであるのに、曹孟徳は、孔融を藺相如に比して、これをおだてた。孔融の罪に坐した所以は、大名の下、久しく住まり難きに起因し、まして、險惡陰儆なる凶德のみが行はれる時に方つては、この人を容るるところなく、そこで、慘禍を免れなかつたのである。おもへば、既往の事は、悔ゆとも及ばず、庶はくは、來者の爲に懼るべく、正義を標榜する人は、篤と注意せねばならぬ。

【餘論】紀昀は「孔融を以て自ら比す」といひ「結、主意を出す」といつて居る。

博大古眞人。老聃關尹喜。　博大古眞人、老聃・關尹喜。

獨立萬物表。長生乃餘事。　ひとり、萬物の表に立ち、長生は乃ち餘事。

稚川差可近。倘有接物意。　稚川、差や近かるべく、もしくは物に接するの意あらむ。

我頃登羅浮。物色恐相値。　われ頃ろ羅浮に登る、物色、恐らくは、相値はむ。

徘徊朱明洞。沙水自清駛。　徘徊す朱明の洞、沙水、自ら清駛。

滿把菖蒲根。歎息復棄置。　滿把菖蒲の根、歎息して復た棄置す。

【字解】【一】博大　莊子の天下篇に「關尹・老聃は、古しへの博大眞人なるかな」とある。【二】稚川　葛洪の字、前に數ば見ゆ。【三】羅浮　山の名、前に數ば見ゆ。【四】物色　さがし求める。【五】朱明洞　羅浮山中に在る、前に數ば見ゆ。【六】沙水　杜甫の詩に天寒沙水清とある、沙川の清淺なるをいふ。【七】滿把　手に一ぱい。【八】菖蒲　仙藥になるので、前に數ば見ゆ。

【詩意】古しへの博大眞人は誰かといふと、老聃と關令尹喜と、この二人に限られて居る。彼等は、超然として、ひとり萬物の表に立ち、長生の仙術などは、その餘事に過ぎぬ。後に成ると、葛洪のみ、差や之に近かるべきも、どうやら、物に接する意志があつて、やや下つて居る樣である。頃ろ、予は羅浮山に登つたが、物色して尋ねれば、或は遇ふことが出來たかも知れない。朱明洞の邊を徘徊すると、沙川の流が清く走つて居る。そこで、手に一ぱい摘んで來た菖蒲根を打ち棄てて、長太息するを禁せざりし次第である。

藍喬近得道。常苦世褊迫。　藍喬、近ごろ道を得たり、常に世の褊迫に苦しむ。

西游王屋山。不踐長安陌。　西、王屋の山に游んで、長安の陌を踐ます。

爾來寧復見。鳥道度(四)太白。　爾來、寧ろ復た見はれむや、鳥道、太白を度る。
昔與吳遠游。同藏一瓢窄。　むかし、吳と遠游し、同じく一瓢の窄きに藏る。
潮陽隔雲海。歲晚倘見客。　潮陽、雲海を隔て、歲晚、もしくは客たるを見む。
伐薪供養火。看作棲鳳宅。　薪を伐つて、火を供養し、看て棲鳳の宅と作さむ。

【字解】【一】藍喬　英州鄭總の作つた傳に「喬、字は子升、循州龍川の人、母陳氏、羅浮山に禱つて孕む。年十二、すでに能く詩文を爲り、道書を求めて之を讀む。潮州の人、吳子野、これに京師に遇ひ、はじめて喬が已に道を得たるを知り、遂に與に鑿を執る。人に語つて曰く、吾は羅浮の仙人なり、これより天に升らむ、と。一日、風雷を躡んで上征す、宮中歷歷として笙簫の聲の猶ほ長吟するがごときを聞く」とある。【三】偪迫　意地わるくしてせせこましいこと。【二】王屋山　茅君內傳に「王屋山の洞、周回萬里、名づけて小有清虛の天といふ」とある。【四】太白　山名、前に數ば見ゆ。

【詩意】藍喬といふ人は、近ごろ、仙道を得たが、平生、世間の意地わるくして、こせこせしたのに苦み、西の方、王屋山に游び、決して都の町中に足を入れなかつた。その後、どうして再び世間に出て來やうか、險しき鳥道をたどつて、太白山を渡つたといふこと。あるとき、吳子野と遠游し、同じく窄い一瓢の中に隱れて居たといふ話。潮州は、雲海を隔てて遠いけれども、ひよッとすると、晚年、その地なる吳子野の家に客に成つて居たかも知れぬ。もし然らば、予も、其處に往き、薪を伐つて、丹爐の火を供養し、そして、これを鳳凰の棲む仙家として見るであらう。

(一)南榮晚聞道。未肯化庚桑。　南榮、晚に道を聞き、未だ肯て庚桑を化せしめず。
(二)陶頑鑄强獷。枉費塵與糠。　頑を陶し、强獷を鑄らむとし、枉げて、塵と糠とを費す。
(三)越子古成之。(四)韓生教休糧。　越子古成之、韓生、休糧を敎ふ。
(五)參同得靈鑰。(六)九鎖啓伯陽。　參同、靈鑰を得、九鎖、伯陽を啓く。
(七)鵝城見諸孫。(八)貧苦我爲傷。　鵝城、諸孫を見、貧苦、われ爲に傷む。
空餘(九)焦先室。不傳(一〇)元化方。　空しく焦先の室を餘し、元化の方を傳へず。
遺像似李白。一奠臨江觴。　遺像、李白に似たり、一たび奠す臨江の觴。

【字解】【一】南榮　名は趎、下の庚桑楚と共に莊子に見えて居る。【二】陶頑鑄强獷　頑冥强梗の者を陶鑄する、即ち訓化する。莊子に「これ、その塵垢粃糠、猶ほ堯舜を陶鑄せむとするものなり」とある。【三】越子　越人といふに同じ。【四】古成之　惠州府志に「字は亞奭、河源の人、地を蛤城に避け、かつて廬を羅浮山に結び、力學怠らず、端拱の初登第。はじめ、成之、道、潮州より、異人韓泳に遇ふ、誘ふるに仙術を以てす。答へて曰く、親老いて祿仕す、長生は願ふところに非ざるなり、と。登第するに及び、泳、復た之を誘ふ、爲に動かず。ここに至りて歎じて曰く、今親沒す、何ぞ仕ふるを以て爲さむと。慨然として羅浮を思ふの詩を賦し、未だ幾ならずして官に卒す、人、以て仙と爲す。四世の孫革、紹聖の初、進士に登り、瓊州に敎授し、擢んでられて潮州に守たり」とある。【五】參同　神仙傳に「魏伯陽、神仙元學の理を得、撒篇闡幽、參同契三卷を著す」とある。【六】九鎖　施註に「靈丹經、金液九鼎、九轉丹法あり、篇は書を藏する所以なり」とある。九篇とは、九個處に錠を下してあるといふことで、九鎖も同義であらう。【七】鵝城　惠州を云ふ。【八】諸孫　古成之の子孫、卽ち名を革といふ人であらう。【九】焦先　古しへの仙人、前に

和致仕張郎中」の詩中に注して置いた。【一〇】元化　後漢書華陀傳に「字は元化、方藥に精し。曹操、收めて獄に付して之を殺す。死に臨んで一卷の書を出して獄吏に與へて曰く、これ以て人を活かすべし、と。吏、法を畏れて、敢て受けず。陀、火を索めて之を燒く」とある。

【詩意】南榮趎は、晩く道を聞いて、未だ其至るところを究めなかつた爲に、庚桑楚を十分に訓化することが出來ず、頑冥强獷の者を陶鑄する爲に、枉げて塵垢粃糠を費して、少からず骨を折つた。越人に古成之といふものがあつて、韓泳は之に勸むるに、糧を絶つて仙を修むることを以てしたといふが、その祕書たる魏伯陽の參同契を取り出して與へたものらしく、やがて、成之は、登仙したと稱せられて居る。惠州には、その子孫が居たが、貧苦の狀態は、まことに氣の毒な位。焦先に比すべき仙人の居た處だといつて、その家だけは、殘つて居たが、華陀の如き藥方を傳へなかつたのは、まことに遺憾の至。その遺像を見ると、李白に似て、さすがに偉い人であらうと思はれる處から、江に臨んで、かつて一杯の酒を手向けたことがある。

餘齡難把玩。妙解(一)寄筆端。　餘齡、把玩し難く、妙解、筆端に寄す。

常恐抱永歎。不及邱明遷(二)。　常に恐る、永歎を抱いて、邱明・遷に及ばざるを。

親友復勸我。放心餞華顚(三)。　親友、復た我に勸め、放心、華顚を餞せしむ。

虛名非我有。至味知誰餐。　虛名、わが有に非ず、至味、知る誰か餐せむ。

思我無所思。安能觀諸緣。　おもふ、我が思ふところなきを、安んぞ能く諸緣を觀む。

已矣復何歎。舊說易兩篇(四)。　已んぬ、復た何をか歎せむ、舊說易の兩篇。

【字解】【一】妙解　おもしろい解義。【二】邱明遷　左邱明と司馬遷。【三】華顚　白髮頭。【四】易兩篇　東坡自著の易傳を指す。

【詩意】年老いて、餘齡幾ばくもなく、なかなか、暢氣に構へて居ることは出來ず、平生研究の結果、妙解を得れば、これを書き留めて置く必要がある。唯だ恐るるところは、歎息ばかりして居て、仕事が一向捗らず、かの左丘明・司馬遷が不朽の大著を殘した樣に出來ないといふ一事である。すると、親友は、予に勸め、そんなに刻苦するよりも、白髮頭を送る爲に、心を縱にしたら善からうと云つた。げにや、虛名は我が有に非ず、本當の結構な味は、果して、誰が食ふか。畢竟著述などは、何にも成らぬことである。しかし、予にして、思ふところなくんば、榛榛の機緣は、どうして看極めることが出來やう。已まむかな、何も歎息するにも及ばない、さきに著した我が易傳は、自得の要領を書き留めて、聊か不朽を期するものである。

(一)申韓本自聖。陋古不復稽。　申韓、本と自ら聖、古を陋として復た稽へず。
(二)巨君縱獨慾。借經作(三)巖崖。　巨君、獨慾を縱にし、經を借りて巖崖を作る。
遂令(四)青衿子。(五)珠璧人人懷。　遂に青衿の子をして、珠璧、人人懷かしむ。
(六)鑿齒井蛙耳。信謂天可彌。　鑿齒は井蛙のみ、信に謂ふ、天は彌るべしと。
大道久分裂。破碎日愈離。　大道、久しく分裂、破碎して日に愈よ離る。
我如終不言。誰悟(七)角與羈。　われ如し終に言はざれば、誰か悟らむ角と羈と。
吾琴豈得已。昭氏有(八)成虧。　吾が琴、豈に已むを得むや、昭氏に成虧あり。

【字解】(一)申韓　史記老莊申韓列傳に「申不害は京人なり、その學、黃老に本づいて、刑名を主とす。韓非は、韓の諸公子なり、刑名法術の學を喜びて、その歸、黃老に本づく」とある。(二)巨君　王莽の字。(三)巖崖　堅固なる障壁。(四)青衿子　學生。(五)珠璧　左傳桓公十年に「匹夫罪なし、璧を懷いて其れ罪あり」といふに本づく。(六)鑿齒　姓は習、前に「送楊傑」の詩中に注して置いた。(七)角與羈　禮記內則に「三月の末、日を擇び、髮を翦つて鬌となす、男は角、女は羈」とある。角は、兩角相對し、羈は隻、縱橫各一相交つて通達して居る。(八)成虧　莊子に「成と虧とあり、故に昭氏の琴を鼓するなり。成と虧となし、故に昭氏の琴を鼓せざるなり」とある。琴を鼓すれば、すでに聲あり。成と虧とを對すれば、すでに第二義に落つ、第一義は、蹤迹なく、琴を鼓せず、鼓せざれば聲なく、五音、自ら全しといふ意。

【詩意】申不害・韓非の二人は、自ら聖なりと思ひ、古しへを陋として、決して之を研究せず。王莽は、おのが慾を縱にし、經書を借りて、堅固な障壁を築いた。そこで、學生どもをして、わづかばかりの才學を自負して、珠を懷中に抱く想を爲さしめ、又習鑿齒の如きは、井蛙の了見を以て、天は度ることが出來ると考へて居た。顧みれば、大道は、久しい前から分裂し、それが破碎すれば、日日に愈よ世と離れて行くのである。そこで、予にして終に言はざれば、擧世、角と羈との區別さへ知らぬ樣になるであらう。昭氏が琴を彈じたのは、成虧兩つながら存し、すでに第二義に落ちたものであるにも拘はらず、予が今日、その眞似をするのは、又實に止むを得ざる次第である。

【餘論】紀昀は「これ荆公を刺るなり」といつて居るが、なる程と思はれる。

我昔登(一)朐山。出日觀(二)滄涼。　われ、むかし朐山に登り、出日、滄涼を觀る。
欲濟東海縣。恨無(三)石橋梁。　東海の縣に濟らむと欲す、恨むらくは、石橋梁なきを。
今茲(四)黎母國。何異(五)于公鄉。　今茲黎母の國、何ぞ于公の鄉に異ならむ。
(六)蠔浦既黏山。暑退亦飛霜。　蠔浦、すでに山に黏し、暑、退いて亦た飛霜。
所欣非自(七)調。不怨道里長。　欣ぶところは、自ら調するに非ず、道里の長きを怨みず。

【字解】(一)朐山　太平寰宇記に「大海は、海州城東十五里に在り、南は朐山縣界に接し、北は懷仁縣界に接す」朐山は、城南

二里に在り。始皇東巡、石を東海上朐界中に立て、以て秦の東門となす」とある。【二】滄涼　列子に「日初めて出づ、滄滄涼涼、その日中に及べば、湯を探るが如し」とある、すがすがしき貌。【三】石橋梁　前に雁蕩山圖及び西新橋の詩中に注して置いた。【四】黎㑲國　黎人の居る處、卽ち儋州を云ふ。【五】于公鄉　于公は于定國、漢書に本傳がある。なほ海州志に「孝婦の冢は、郯城に在り、孝婦は竇氏。于公は郯人、郡の決曹となり、孝婦の獄を爭ふを以て、疾を辭して去る、故居は、東海城北十里に在り、于公浦と名づく」とある。【六】蠔浦　番禺雜編に「蠔殼は、卽ち牡蠣なり、中に肉あり、その房の大小に隨つて、高さ四五尺の者あり、水底に之を見れば、山岸の如し、呼んで蠔山となす」とあり、韓退之の初南食に蠔相黏爲山とある。【七】自謂　語ふる。

【詩意】われ曩に朐山に登りし時、朝日は、淸淸しくして心地よく、東海縣に濟らうと思つたが、石橋の完成せぬのが殘念であつた。今年、黎人の國に來て居るが、さながら、古しへの于公の鄉里の樣である。浦中には、牡蠣の殼が積んで山を成し、暑氣が退くと、早くも霜が降る。喜ぶところは、その土俗の淳朴に在るので、決して、法螺を吹く譯でもなく、又遠く故鄉を隔てて、道里の長きをも厭はない。

和陶始作鎭軍參軍經曲阿

陶の始めて鎭軍參軍と作りて曲阿を經るに和す

(一)虞人非其招。欲往畏(二)簡書。　虞人は、その招に非ざれば、往かむと欲するも簡書を畏る。

(三)穆生責醴酒。先見我不如。　穆生は、醴酒を責め、先見、われ如かず。

(四)江左古弱國。(五)權臣擅(六)天衢。　江左の古弱國、權臣、天衢を擅にす。

淵明墮詩酒。遂與功名疎。　淵明、詩酒に墮ち、遂に功名と疎なり。

我生値良時。(七)朱金義(八)當紆。　わが生、良時に値ひ、朱金、義、當に紆らすべし。

天命適如此。幸收廢棄餘。　天命、適ま此の如く、幸に收めらる廢棄の餘。

獨有愧此翁。大名難久居。　ひとり此翁に愧づるあり、大名、久しく居り難し。

不思(九)犧牛龜。兼取熊掌(一〇)魚。　おもはず犧牛と龜と、熊掌と魚とを兼取するを。

(一一)北郊有大賚。南冠解囚拘。　北郊に大賚あり、南冠、囚拘を解く。

眷言羅浮下。(一二)白鶴返故廬。　眷として言に羅浮の下、白鶴、故廬に返らむ。

【字解】【一】虞人　獵り場に奉仕する者、今でいへば主獵官の屬僚。その招に非ざれば赴かずといふことは、孟子に見え、前に李杞見和の詩中に注して置いた。【二】簡書　詩經に豈不懷歸、畏此簡書とあつて、ここでは、宣告の文書。【三】穆生　楚の元王の師。元王歿後、嗣王、醴酒を具へず、その待遇の前の如くならざるを見、禍を懼れて楚を去つたといふので、その評は漢書楚元王傳に見え、前に次韻滕師放魚の詩中に注して置いた。【四】江左古弱國　卽ち東晉を云ふ。【五】權臣　劉裕を指す。【六】天衢　朝廷。【七】朱金　朱紱と金印。【八】當紆　紆はまとふ。【九】犧牛龜　莊子の列禦寇に「子、かの犧牛を見たるか、衣するに文繡を以てし、食はすに芻菽を以てす、その牽いて太廟に入るるに及んで、孤犢たらむを欲するも、其れ得べけむや」とあり、秋水に「楚に神龜あり、死して已に三千載、王、巾笥して之を廟堂の上に藏す、この龜たるもの、むしろ、其れ死して、留骨と爲つて貴からむか、

むしろ、其れ生きて、尾を塗中に曳かむか。二大夫曰く、むしろ、生きて尾を塗中に曳かむ。莊子曰く、往け、吾、將に尾を塗中に曳かむとす」とある。【一〇】熊掌魚　二者ともに味の美なるもの。孟子に見ゆ。【一一】北郊有大赦　宋史徽宗本紀に「元符三年庚辰正月、卽位。二月、はじめて政を聽く。四月、范純仁等、官觀を復官し、蘇軾等、內郡に徙る。この年、未だ嘗て郊祀の典を擧げず。明年辛巳、建中靖國と改元す。十一月、天地を圜丘に祀る。時に先生、すでに殁す」とあつて、新君卽位、例として當に郊祀恩赦あるべしといふ意。【一二】白鶴　卽ち白鶴峰。惠州に在つて、東坡が新居を構へし處。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】虞人は、正當な事を以て招かるるに非ざれば、簡書の刑罰を恐れて、決して往かない。穆生は、醴酒の具へられざりしを見、楚王の敬意の衰へしを知つて、その地を去つて禍を免れたといふが、その先見は、われ及ぶところではない。むかし、東晉が衰へて、劉裕が朝廷に在つて權を專にせしとき、陶淵明は、詩酒の間に落ち、遂に功名と疎濶に成つたのも、まことに故あることである。われ生まれて、太平の御世に値ひ、義として、朱綬を帶び、金印を懷にして、一たび出仕したが、天命、適ま此の如く、今や廢棄の餘を收錄されて、遠地の微官を得、ひとり、淵明に對して、愧づるところがある。げにや、大名の下には久しく居ることが出來ず、身は、犧牲の牛や、筒中に藏せられた龜骨の如く、熊掌と魚とを兩つながら得やうといふ樣に、慾ばつた處で仕方がない。今や天子新に卽位せられ、近い中に、北郊で天地を祀り、恆例として大赦を行はれ、南冠したる楚囚どもも、拘繫を赦されるとのことであるが、さうすれば、なつかしき惠州なる羅浮山の麓に往つて、白鶴峰の新居に歸休したいと思つて居る。

【餘論】紀昀は「これ未だ渾圓ならず」といつて居る。

和陶桃花源

陶の桃花源に和す

世傳桃源事、多過其實、考淵明所記、止言先世避秦亂來此、則漁人所見、似是其子孫、非秦人不死者也、又云殺雞作食、豈有仙而殺者乎、舊說、南陽有菊花水、甘而芳、民居三十餘家、飲其水皆壽、或至百二三十歲、蜀青城山老人村、有見五世孫者、道極險遠、生不識鹽醯、而溪中多枸杞、根如龍蛇、飲其水、故壽、近歲道稍通、漸能致五味、而壽亦益衰、桃源蓋此比也歟、使武陵太守得而至焉、則已化爲爭奪之場久矣、嘗意天壤間、若此者甚衆、不獨桃源、予在穎州、夢至一官府、人物與俗間無異、而山川清遠、有足樂者、顧視堂上、榜曰仇池、覺而念之、仇池武都氏故地、楊難當所保、予何爲居之、明日以問客、客有趙令畤德麟者、曰、公

何問此、此乃福地小有洞天之附庸也、杜子美蓋云、萬古仇池穴、潛通小有天、他日工部侍郎王欽臣仲至、謂予曰、吾嘗奉使過仇池、有九十九泉、萬山環之、可以避世如桃源也。

【訓讀】世、桃源の事を傳ふ、多く其實に過ぐ。淵明の記するところを考ふるに、止だ言ふ、先世、秦の亂を避けて、此に來る、と。すなはち、漁人の見るところは、是れ其子孫たるに似たり、秦人の死せざるものに非ざるなり。又云ふ、雞を殺して食を作ると、豈に仙にして殺すものあらむや。舊說、南陽に菊花水あり、甘にして芳、民居三十餘家、その水を飲んで皆壽、或は百二三十歲に至る。蜀の青城山の老人村、五世の孫を見るものあり。道極めて險遠、生まれて鹽醯を識らず、而して、溪中枸杞多く、根、龍蛇の如し、その水を飮む、故に壽。近歲、道稍や通じ、漸く能く五味を致す、而して壽、亦た益す衰ふ。桃源、蓋し此比なるか。武陵太守をして得て至らしむれば、すでに化して爭奪の場となること久しからむ。かつて意ふ、天壤の間、かくの若きもの、甚だ衆し、ひとり桃源のみならず。予、潁州に在り、夢に一官府に至る、人物、俗間と異なるなし、しかも、山川淸遠、樂むに足るものあり、顧みて堂上を視るに、牓して仇池と云ふ。覺めて之を念ふ、仇池は武都氏の故地、楊難當の保つところ、予、何すれぞ之に居ると。明日、以て客に問ふ。客に趙令時德麟といふものあり、曰く、公、何ぞ此を問ふ、これ乃ち福地小有洞天の附庸なり、杜子美、蓋し云ふ、萬古仇池の穴、潛に通ず小有天と。他日、工部侍郎王欽臣仲至、予に謂つて曰く、われ嘗て使を奉じて仇池を過ぐ、九十九泉あり、萬山これを環ると、以て世を避くること、桃源の如くなるべきなり。

凡聖無異居、清濁共此世。凡聖、居を異にするなく、清濁、この世を共にす。

心閑偶自見、念起忽已逝。心閑にして偶ま自ら見る、念起るも、忽ち已に逝く。

欲知眞一處、要使六(一)用廢。眞一の處を知らむと欲すれば、六用をして廢せしむるを要す。

桃源信不遠、杖藜可小憩。桃源、信に遠からず、杖藜、小憩すべし。

躬耕任地力、絕(二)學抱天(三)藝。躬耕、地力に任かせ、絕學、天藝を抱く。

臂(四)雞有時鳴、尻(五)駕無可稅。臂雞、時あつて鳴く、尻駕、稅すべきなし。

苓(六)龜亦晨吸、杞(七)狗或夜吠。苓龜、亦た晨に吸ひ、杞狗、或は夜吠ゆ。

耘樵得甘芳、齕齧謝炮(八)製。耘樵、甘芳を得、齕齧、炮製を謝す。

子(九)驥雖形隔、淵明已心詣。子驥、形隔つと雖も、淵明、すでに心詣る。

高山不難越、淺水何足厲(一〇)。高山、越え難からず、淺水、何ぞ厲するに足らむ。

不如我仇池。高擧復幾歲。　如かず我が仇池、高擧、復た幾歲。
從來一生死。近又等癡慧。　從來、一生死、近ごろ、又癡慧を等しうす。
〔一一〕蒲澗安期境。羅浮稚川界。　蒲澗、安期の境、羅浮、稚川の界。
夢往從之游。〔一二〕神交發吾蔽。　夢に、往いて之に從つて游ぶ、神交つて吾が蔽を發す。
桃花滿庭下。流水在戶外。　桃花、庭下に滿ち、流水、戶外に在り。
却笑逃秦人。〔一四〕有畏非眞契。　却つて笑ふ、秦を逃るるの人、畏るるあるは、眞契に非ず。

【字解】【一】六用　六根、卽ち眼耳鼻舌身意の作用。【二】絕學　學問を全廢する。【三】天藝　自然に備はりたる技藝。【四】臂彈　莊子に「予の左臂を化して雞と爲さば、予、因つて以て時夜を求めむ」とある。【五】尻駕　尻を以て駕となす、前に[illegible]衰膝の詩中に注して置いた。【六】苓龜　文選の七啓に「寒芳苓之巢龜」とあつて、苓は蘦と同じく、又蓮に同じ。史記龜策列傳に「龜千歲、乃游於蓮葉之上」とある。【七】杞狗　羅浮山葛異歸記に「麻姑壇に枸杞樹あり、時に赤犬あつて樹下に見はる。或は天晴朗なるとき犬の吠ゆる聲を聞く」とある。【八】炮製　火で煮たり炙つたりして調理する。【九】子驥　陶淵明の桃花源記に「南陽の劉子驥は高尙の士なり、これを聞いて、欣然として往くことを規る」とある。【一〇】足蹶　蹶は衣裳を摯くり上げること。【一一】蒲澗　東坡の自註に「廣州に在り」と見ゆ、嶺表錄異に「菖蒲澗は、廣州城東十五里に在り、澗中、菖蒲を生ず、多くは是れ一寸十二節、山中に菖蒲觀あり、水に跨つて玉鶯閣あり、卽ち安期生上昇の地」とあり、その餘は、前に廣州蒲澗寺の詩中に注して置いた。【一二】羅浮　山記に「葛稚川、羅浮に入つて丹を煉る、弟子、これに從ふもの五百餘人、觀四所を置く、今、丹存す」とある。【一三】神交　精神上の交通。【一四】有畏　心に畏るるところがある、淵明の桃花源記に「先世、秦時の亂を避け、妻子邑人を率ゐて、この絕境に來り、復た出でず」とある。

【語義】　引の意味は——世間で桃花源の事を傳へて居るのは、事實以上に誇張したことが多い。陶淵明の記するところを考へると、唯だ先祖が秦の始皇の亂を避けて、此地に來たといふだけ、すると、漁人の逢つたのは、その子孫であつて、死なずに居た秦代の人ではない。又記中に雞を殺して御馳走をしたとあるが、仙人ともあらうものが、物を殺すといふ筈はない。舊說に、南陽には菊花水といふものがあつて、甘くして香ばしく、その地の住民三十餘戶、その水を飮んで長生し、或は百二三十歲に至るものがあるといふこと。蜀の靑城山の老人村でも、長生をして五世の孫を見るものがある。そこへ往く道は、極めて險阻で且つ遠く、その住民は、鹽や酢を知らず、そして、谷の中には枸杞が多く、その根は龍蛇の形をなし、その水を飮むから、長壽であつたが、近年、道路が通じ、次第に五味を持つて來る樣になると、壽命が益す短縮したといふことで、桃花源といふのも、蓋し此類であらう。もし武陵の太守が、そこに往くことが出來て、この世と交通したならば、とツくの昔に、爭奪の場と成つて居たであらう。かつて考ふるに、天地の間、かくの如き處は、隨分多く、ひとり桃源のみではない。予、さきに潁州に在りし時、夢に一官府に往つたが、人物は、この世と格別異ならず、しかし、山川淸遠にして、樂むに足るべきものがあつた。そこて、顧みて、その堂上を見ると、仇池といふ額が懸つて居た。覺めて後に、つくづく考へるには、仇池は武都の氏族の故地、楊難當の守つて居た處で、予は、

どうして其處に往つたのであらうか。そこで、明日、この事を以て客に問ふと、趙令時、字を德麟といふものが居て、貴下は、何故そんな事を問はれるか、仇池は卽ち福地、小有洞天の附屬地であつて、杜甫も萬古仇池穴、潛通小有天といふ句を作つたではないかといつた。それから、他日、工部侍郎王欽臣、字を仲至といふものが、予に語つていふには、自分は、ある時、使命を奉じて、仇池に往つたことがあるが、そこには九十九泉があつて、萬山が之を環つて居るといつた。すると、わが夢は正夢で、その仇池は、世を避くること桃花源の如くなるべき絶好の境地であらうといふのである。

【詩意】凡人と聖者と、その居を異にすることなく、清濁相反するものが、この世を共にして、一緒に住んで居る。そこで、わが心閒なれば、偶然に自ら仙境を見るが、俗念一たび起らば、その境地は、忽ち消えて無くなつて仕舞ふ。眞一の個處を知らうとならば、六根の作用を全く停止する必要がある。桃源と雖も、實際、遠くはないので、藜の杖を突いて至り、やがて、しばらく休息することも出來る位である。その桃源に於ては、身づから耕して、地力に任かせ、學問を廢して天賦の才藝を抱き、左臂にして雞に化すへくんば、時夜を求むべく、この尻、以て駕となすべくんば、決して之を休めるにも及ばず、蓮の葉の上に棲む龜は、晨に呼吸を爲し、枸杞が化したといふ狗は、夜吠えることがある。そこで、耘つたり樵したりして、甘く芳ばしき野生の草木を得、生のままで嚙んで、決して煮たり炙つたりしない。劉子驥は、其處に行き得ず、形骸空しく相隔つるも、陶淵明は、全く神游を得たに相違ない。すでに神游する以上は、高山も越え難からず、淺水は衣を捲くり上げるにも及ばず、何の造作もなく行けるが、桃源は遂に仇池に及ばず、わが夢中に高擧して、その地に至りしより、今幾歳になるか。從來、いささか悟つて生死を一にして居たが、近ごろは、癡慧を同一視する樣に成り、安期生の居た廣州の菖蒲澗の如き、葛稚川の遺蹟たる羅浮の如き、精神上の交通をなして、吾が神靈を蔽うて居る塵俗を拂ひ除けて仕舞へば、夢中、その地に赴き、その人に從つて游ぶことが出來る。今しも桃花は庭下に滿ち、流水は戸外に流れ、考へ樣に因つては、ここが、すでに桃源であつて、その地に來た秦民が、始皇の難を避ける爲にし、その心に畏るるところありし上は、決して眞正の仙契ではなく、まことに笑ふべきことである。

【餘論】紀昀は「翻入一層、用意超妙、筆力亦た曲折自如」といつて居る。

和陶歸去來兮辭　陶の歸去來兮辭に和す

子瞻謫居昌化、追和淵明歸去來辭、蓋以無何有之鄕爲家、雖在海外未嘗不歸云爾。

【訓讀】子瞻、昌化に謫居し、淵明の歸去來辭に追和す。蓋し、無何有の鄕を以て家と爲す、海外に

在りと雖も、未だ嘗て歸らずんばあらずと爾云ふ。

歸去來兮。
吾方南遷(一)安得歸。
臥江海之澒洞(二)。
弔角鼓之悽悲。
迹泥蟠而愈深。
時電往而莫追。
懷西南之歸路。
夢良是而覺非。
悟此生之何常。
猶寒暑之異衣。
豈襲裘而念葛。

歸り去らむ來、
吾、方に南遷、安んぞ歸るを得む。
江海の澒洞に臥し、
角鼓の悽悲を弔ふ。
迹は、泥に蟠して愈よ深く、
時は、電のごとく往いて追ふなし。
西南の歸路を懷ひ、
夢は良に是にして覺は非。
この生の何の常あらむを悟る、
猶は寒暑の衣を異にするがごとし。
豈に裘を襲ねて葛を念はむや、

【字解】【一】南遷 はじめ惠州、次に儋州に貶謫されしをいふ。
【二】澒洞 空闊たる貌。

蓋得(三)觕而喪微。
我歸甚易。
匪馳匪奔。
俯仰還家。
下車闔門。
(四)藩垣雖缺。
堂室故存。
挹吾天(五)醴。
注之窪(六)尊。
飲月露(七)以洗心。
飱朝霞而眩(八)顏。
混客主而爲一。
俾婦(九)姑之相安。

蓋し觕を得て微を喪ふ。
わが歸る甚だ易く、
馳するに匪ず、奔るに匪ず。
俯仰、家に還り、
車を下つて門を闔づ。
藩垣、缺けたりと雖も、
堂室、故と存す。
わが天醴を挹んで、
これを窪尊に注ぐ。
月露を飲んで以て心を洗ひ、
朝霞を飱して顏を眩す。
客主を混じて一となし、
婦姑をして相安からしむ。

【三】得觕而喪微 觕は物の麤なざること、卽ち麤、微は精微、精緻。
【四】藩垣 周圍の垣根。
【五】天醴 美酒に同じ。
【六】窪尊 くぼめる樽。
【七】月露 月下の露、莊子に「藐姑射の山に神人あり、居る、風を吸うて露を飮む」とある。
【八】眩顏 顏色の澤澤しくなること。
【九】婦姑 嫁と下婢。

知盗竊之何有。　盗竊の何くに有らむを知つて、
乃捪(一〇)門而折關。　乃ち門を捪つて關を折る。
廓圜(一一)鏡以外照。　廓たる圜鏡、以て外を照らし、
納萬象而中觀。　萬象を納れて中より觀る。
治廢井以晨汲。　廢井を治めて以て晨に汲み、
滃(一二)百泉之夜還。　滃たる百泉の夜還る。
守(一三)靜極以自作。　守靜、極まつて以て自ら作り、
時爵(一四)躍而鯢(一五)桓。　時に爵躍して鯢桓す。
歸去來兮。　歸り去らむ來、
請終老於斯游。　請ふ斯游に終老せむ。
我先人之敝廬。　わが先人の敝廬、
復舍此而焉求。　復た此を舍いて焉くにか求めむ。
均海南與漢(一六)北。　海南と漢北とを均しくし、

【一〇】捪門而折關　關も亦た門、門を打ち倒す。
【一一】圜鏡　圓い鏡。
【一二】滃　水の勢よく涌く貌。
【一三】守靜　老子に「虚を致すこと極まり、靜を守ること篤く、萬物竝に作り、吾、以て其復を觀る」とある。
【一四】爵躍　爵は雀、莊子に「雲將、東に游び、適ま鴻濛に遭ふ、方に髀を拊ち、爵躍して游ばむとす」とある。
【一五】鯢桓　莊子に「鯢桓の審を淵となし、止水の審を淵となす」とある。鯨鯢の如く盤桓する。
【一六】漢北　漢水の北、蜀の故郷を云ふ。

挈往來而無憂。　挈へて往來して憂なからむ。
畸(一七)人告予以一言。　畸人、予に告ぐるに一言を以てす、
非八(一八)卦與九(一九)疇。　八卦と九疇とに非ず。
方飢須糧。　飢に方つては糧を須ひ、
已(二〇)濟無舟。　すでに濟つて舟なし。
忽人(二一)牛之皆喪。　忽ち人牛の皆喪へば、
但喬木與高邱。　但だ喬木と高邱とのみ。
警六(二二)用之無成。　六用の成るなきを警め、
自一(二三)根之返流。　一根の返流よりす。
望故家而求息。　故家を望んで息ふを求むれば、
曷中道之三(二四)休。　曷ぞ中道に三休せむ。
已矣乎。　已んぬるか、
吾生有命歸有時。　わが生、命あり、歸る時あり。

【一七】畸人　世のすね者。
【一八】八卦　揚子に「伏羲は八卦を始めて、文王は六十四」とある。
【一九】九疇　書經に「天、乃ち禹に洪範九疇を錫ふ、彝倫の敍するところ」とある。
【二〇】已濟無舟　傅大士の金剛經頌に「渡河須用筏、到岸不須船」とある。
【二一】人牛之皆喪　施註に「梁州清居和尙、牧牛の圖を述べ、以て心源に喩ふ、第十二章、人牛ともに亡ぶ、以て超詣を明かにす」とある。
【二二】六用　前に見ゆ、六根の作用。
【二三】一根　即ち六根を統一する樞紐。
【二四】三休　賈子に「翟王、使を遣して楚に至らしむ。楚王、客に誇らむとして、引いて章華臺に上り、三

我初無行亦無留。　われ初め行くなく、亦た留まるなし、
駕言隨子聽所之。　駕して言に子に隨つて之く所に聽す。
豈以師南華而廢從安期。　豈に以て南華を師として、安期に從ふを廢せむや。
謂湯稼之終枯。　湯稼の終に枯るるを謂ひ、
遂不漑而不耔。　遂に漑せずして耔はず。
師淵明之雅放。　淵明の雅放を師として、
和百篇之新詩。　百篇の新詩に和す。
賦歸來之淸引。　歸來の淸引を賦す、
我其後身蓋無疑。　我、その後身たること、蓋し疑なし。

【題義】 引の意味は――われ子瞻、昌化に謫居して、陶淵明の歸去來辭に追和した。蓋し、予は、莊子の謂はゆる無何有の鄕を以て、おのが家と考へて居るから、海外に居た處で、いつでも歸られるといふのである。

休して其上に至る」とある。

【二五】南華　莊子を云ふ、舊唐書明皇紀に「天寶元年、莊子を號して南華眞人となす」とある。

【二六】湯稼　湯の時、三年の大旱があつた。ここでは、旱に逢つた稻といふ義。

【二七】不耔　耔はつちかふ、即ち培養する。

【二八】淸引　淸歌といふに同じ、沈約の梁雅樂歌に霽籟淸引とある。

【詩意】 歸り去らむか來、吾、すでに南方に遷謫せられ、どうして歸ることが出來やう。現に江海の空濶なる處に臥し、鼓角の聲の悽然として悲しきを聞いて居る。わが足跡は、泥中に蟠まつて愈よ深ければ、とても歩を移すことは出來ず、時は電光の如く去つて仕舞つて、追へども及ばず、世間は、すべてさうである。ここに於て、西南への歸路を懷へども、夢に見て居る間は、まことに是なるが如く、覺むれば、一切皆非である。この人生は、變化して定まらず、何の常態もないものだと悟れば、さながら、寒暑の折折につけて、著る衣を異にすると一般。いかで、厚い皮衣を重ねつつ、薄い葛衣を思ふべき、萬一さうすれば、物の粗惡なるを善しとして、精緻なるを棄てると同じであらう。わが家は、無何有の鄕にあるから、歸るといつた處で、何の造作もなく、馳するにも非ず、奔るにも非ず、俯仰して家に歸り、車を下つて門を鎖ぢた。あたりを見めぐらせば、垣根は處處こはれて居るが、堂室は元の儘で殘つて居る。そこで、わが美酒を酌んで、窪める罇に注ぎ、心のどかに之を飮むと、さながら、月下の露を吸うて、心を洗ふが如く、朝やけの氣を餐して、顏色が澤澤しく成つた樣である。主客を混じて一となし、女どもをして、落ち付いて安心せしめ、盜賊などは居らぬといふことを知つて居るから、門を打倒して仕舞ひ、廓然として圓い鏡を懸けて外に照らし、萬象を映させて、その中を觀、古井を修治して晨に汲めば、百泉は勢よく夜の間に涌き出たと見えて、一ぱいに成つて居た。出來る限り、靜を守つて、精神だけを働かせ、時には、雀の如く躍り、時には鯢の如く盤桓

して居る。歸り去らむか來、願はくは、この無何有の郷に終老したいもので、これこそ、我が先人の敝廬であるから、これを棄てて、更に何をか求むべき。今居る海南と漢北と、一は中國、一は蠻地で、全く隔絶して居るが、無何有の郷には、かかる區別もなく、誰でも一緒に攜へ來つて、何等の憂もない。すると、畸人があつて、予に告ぐるに一言を以てしたが、伏羲の八卦にも非ず、神禹の九疇にも非ず、扨ていふには、飢うるに當つては、糧食が必要であるが、すでに渡つて仕舞へば、舟も入らぬ。人牛ともに亡ふといふ様な超詣の域に到達すれば、この生涯も終りで、あとは墓だけ殘つて、唯だ喬木と高邱とあるのみ。六根の作用は、虛妄であつて、何の效果をも齎らさぬといふことを覺れば、ただ精神の反射的活動に依賴する外なく、無何有の故家を望みつつ、早く其處に往つて緩緩休息したいと思ふならば、途中で三度も休む様なことがあつてはならぬといつたが、なる程、御尤千萬な仰せである。已んぬるかな、わが生涯は限あつて、死に歸する時は定まつて居る。そこで、われは、初めより行くでもなく、さうかといつて、留まるでもなく、車に乘つて、君と共に、何處へでも行きたい處に行くことに致さう。何も南華眞人の莊子を師として、仙人の安期生に從學することを止めたといふ譯でもない。旱に逢つた苗は、どうせ枯れると決つて居るから、水を遣るにも及ばず、又培ふ必要もない。ここに、陶淵明の雅澹開放を師とし、その百篇の詩に和した上に、歸去來の淸歌をも賦したので、われが淵明の後身たることは、蓋し疑ふに及ばざることである。

【餘論】紀昀は「これ亦た桃源の詩意、然れども、詞、究むるに、宜しく之を詩集に入るべからず。陶詞、亦た諸文と同編」とある。熟ら考ふるに、これは騷の體で、騷の形式は、賦とは略ぼ同一で、漢代以後、彼の專ら客觀的描寫を主とするに對して、此は主觀的感想を述ぶるを旨として居るが、要するに、南方律語の餘波と見るべきものである。されば、詩を廣い意味で律語といふことにすれば、ここに入れた處で、決して不倫ではない。但し、古來の慣習として、この種の騷體は、詩の中に入れず、全く獨立させるか、然らざれば散文の少しく變化したものと見て、賦と同じく大抵散文と同類となし、ここにも云ふが如く、陶淵明集が、すでにさうであるから、論者も、かく云つたのであらう。

歸去來集字、十首 幷引　　歸去來集字、十首　幷に引

予喜讀淵明歸去來辭、因集其字、爲十詩、令兒曹誦之、號歸去來集字云。

【訓讀】予、喜んで淵明の歸去來辭を讀む、因つて、その字を集めて十詩を爲り、兒曹をして之を誦せしめ、歸去來集字と號すと云ふ。

命(一)駕欲何向。欣欣春木榮。　駕を命じて、何くに向はむと欲する、欣欣として春木榮ゆ。

世人無往復。鄉老有將(二)迎。　世人、往復なく、鄉老、將迎あり。

雲內流泉遠。風前飛鳥輕。　雲內、流泉遠く、風前、飛鳥輕し。

相攜就衡(三)宇。酌酒話交情。　相攜へて衡宇に就き、酒を酌んで交情を話す。

【字解】【一】命駕　車を命じて外出する。【二】將迎　將も迎へる。【三】衡宇　衡門屋宇、かぶき門のある家。

【題義】予は、平生、喜んで陶淵明の歸去來辭を讀んで居る。そこで、その辭中の字を集めて、詩十首を作り、兒曹をして之を諷誦せしめることとし、題して歸去來集字といつたといふので、集字とは、ある文辭中の字に限つて用ふることである。或は、止むを得ざる場合に限つて、多少の出入を寛恕する場合もあるが、東坡の此詩などは、極めて嚴格で、さういふものは一字もない。集字の起源は、大方こゝらに在ると思はれるので、後には、蘭亭集字だの、赤壁集字などがあつて、專ら才人の巧思を競ふことに成つて居る。

【詩意】車を命じて外出するが、一體、何處へ往かうとするのであるか。今しも、春の木木は欣欣として榮に向ひ、まことに長閑に、心地よき時節。世上の人とは、往復しないが、村の古老は、喜んで迎へる。路すがらの景色はといへば、流れ出る泉は、遠く雲の內よりし、飛ぶ鳥は、春風の前に舞うて身も輕げに見える。やがて、主人に導かれ、相攜へて、とある衡門のある家に入り、酒を酌みつつ、懇に交情を語り合つた。

【餘論】紀昀は「これ亦た事を借りて閒を消す、これを詩といふを得ず、然れども、亦た惡しからず」といつて居るが、一寸領き兼ねる。元來、誰の詩にしても、大抵は事を借りて閒を消したものであるのに、かく云つたのは、どういふ了見か。それから「十首、皆淵明の語に代る」といつたのは、無論の事である。

涉世恨形(一)役。告(二)休成老夫。　世を涉つて、形の役たるを恨み、休を告げて、老夫と成る。

良欣就歸路。不復向迷(三)途。　良に欣ぶ歸路に就くを、復た迷途に向はず。

去去徑猶菊。行行田欲蕪。　去去、徑、なほ菊、行行、田、蕪せむと欲す。

情(四)親有還往。清酒引尊壺。　情親、有つて還た往き、清酒、尊壺を引く。

【字解】【一】形役　歸去來辭に以心爲形役とある。心を以て形骸の徒隸となし、いやいやながら、口腹の爲に俸祿を貰つて仕官したといふこと。【二】告休　辭職する。【三】迷途　歸去來辭に迷途其未遠とあつて、楚辭の廻朕車以復路兮、及行迷之未遠に本づいたのであらう。【四】情親　情誼厚き親友。

【詩意】久しく世を涉り、心を以て形の役とすることを殘念に思つたが、今次愈よ辭職して、一老夫

と成つたので、やツと、さツぱりした。そこで、喜んで故郷への歸路に就き、今後、二度と迷へる途には向はぬ覺悟である。しかし、鄕里の有樣はといへば、三徑到る處、菊、なほ殘れども、打見る限り、田畑は、荒れはてて居る。幸にも、情誼篤き親友が居るから、取り敢へず、それを訪ひ、樽中の清酒を傾けながら歡話した。

與世不相入。膝琴聊自歡。　世と相入れず、琴を膝にして聊か自ら歡ぶ。

風光歸笑傲。(一)雲物寄游觀。(二)　風光、笑傲に歸し、雲物、游觀を寄す。

言話審無倦。心懷良獨安。　言話、審に倦むなく、心懷、良に獨り安し。

東皋(三)清有趣。植杖日盤桓。(四)　東皋、清、趣あり、杖を植てて日に盤桓。

【字解】(一)笑傲　笑ひつつ世に傲る高情。(二)雲物　空の景色。(三)東皋　阮籍の奏記に「將耕於東皋之陽」とある、皋は田。(四)盤桓　足の進み難き貌、去りがてにする。

【詩意】世間とは相容れず、そこで、琴を膝にして彈じつつ、聊か自ら喜んで居る。四時の風景は、笑傲の高情に歸し、空の景色は、游觀を寄するに足りる。打解けて語りつつ、明かに倦むことなく、わが心は、まことに暢氣である。東の野らは、清げに趣ある處から、杖を立てたまま、眺め暮らし、日日去りがてにして居る。

世事非吾事。駕言歸路尋。　世事は吾が事に非ず、駕して言に歸路を尋ぬ。

向時迷有命。今日悟無心。　時に向つて迷ふ、命あり、今日悟つて、心なし。

庭內菊歸酒。窗前風入琴。　庭內、菊、酒に歸し、窗前、風、琴に入る。

寓形(一)知已老。猶未倦登臨。　形を寓して、已に老ゆるを知るも、猶は未だ登臨に倦ます。

【字解】(一)寓形　形骸ヲ此世に寄せる。

【詩意】世間のごたごたは、吾が關係したことでもないから、車に乘つて、歸路を尋ぬることにした。時時、おもひ迷ふたのも、天命であつて、今日悟つて見れば、何等の執著もない。庭內には菊があつて、觀賞の後には酒を飮み、窓前には、琴が置いてあつて、風が空音を弄することがある。形骸を此世に寓して、すでに年老いたるを知りつつも、登高臨眺は、決して厭きることがない。

雲岫(一)不知遠。巾車(二)行復前。　雲岫、遠きを知らず、巾車、行いて復た前む。

僕夫尋老木。童子引清泉。　僕夫は老木を尋ね、童子は清泉を引く。
矯首獨傲世。委心還樂天。　首を矯げて獨り世に傲り、心に委せて還た天を樂む。
農夫告春事。扶老向良田。　農夫、春事を告ぐ、老を扶けて良田に向ふ。

【字解】【一】雲峒　峒は兩山の間、卽ち谷。【二】巾車　巾で拂ひ淸めた車といひ、平生巾で覆うてある車といひ、巾を垂れた車といひ、數說あるが、假りに最初の說に從つて置く。【三】春事　春の野良仕事。

【詩意】雲の涌き出づる谷の遠きを知らず、そこへ往かうと思ひ、巾車に駕して出かけたことがある。その間、家僕は、庭にでも植ゑる積りか、老木を尋ね、童子は、淸泉を引き來る計畫をして居る。首を矯げて靑空を望みつつ、ひとり世に傲り、心を自然に任かせて、又ぞろ、天を樂む樣に成つた。農夫は、春に成つて野良仕事が始まるといつて、態態告げ來りしに因り、老軀を扶けて、わが良田に向ひ、その模樣を眺めて居る。

富貴良非願。鄉關歸去休。　富貴、良に願に非ず、鄉關、歸り去つて休す。
攜琴已尋壑。載酒復經邱。　琴を攜へて、已に壑を尋ね、酒を載せて、復た邱を經たり。
翳翳景將入。涓涓泉欲流。　翳翳として景將に入らむとし、涓涓として泉流れむと欲す。
老農人不樂。我獨與之游。　老農、人ごとに樂まず、われ獨り之と游ぶ。

【字解】【一】鄉關　故鄉に同じ。【二】翳翳　かざろふ。【三】景將入　太陽が西に沒しかかる。【四】涓涓　ちよろちよろと流れる。

【詩意】富貴は、まことに吾が願ふところに非ざるが故に、ここに歸り去つて、鄉里に退隱した次第。琴を攜へて、すでに、谷間に尋ね入つたが、酒を載せて、今度は、岡に登つて見た。かざろひて、日の將に入らむとする景色や、ちよろちよろと音を立てて泉の流るるなど、殊に趣がある。農夫は、せツせと働いて、人ごとに樂まず、苦勞の極だと思つて居るが、われは、獨り其仲間に入り、一緒に野良仕事をして居る。

觴酒命童僕。言歸無復留。　酒を觴せむとして童僕に命じ、言に歸らば復た留まるなし。
輕車尋絕壑。孤棹入清流。　輕車、絕壑を尋ね、孤棹、淸流に入る。
乘化欲安命。息交還絕游。　化に乘じて命を安んせむと欲す、交を息めて還た游を絕つ。
琴書樂三徑。老矣亦何求。　琴書、三徑を樂む、老いたり、亦た何をか求めむ。

【字解】【一】觴酒　觴はさかづき、酒を酌む。【二】乘化　化は陰陽の變化。【三】絕游　往來を絕つ。【四】三徑　庭中に三

條の小路が設けたるを云ふ。もと後漢の蔣詡が創めたので、陶淵明は、その眞似をしたのであらう。

【詩意】酒の支度を童僕に命じて、さきに遣り、すでに歸らうと思へば、決して留まつて居らぬ。輕車に乘じて絕壑を尋ね、孤棹、舟を行つて淸流に入るは、ともに興あることながら、歸るといつたら、必ず歸る。ここに、天地陰陽の化に乘じて、わが命を安んせむとし、すでに交際を止めた上は、併せて、往來を廢絕する外はない。そこで、琴を彈じ、書を讀みつつ、三徑の景色を樂み、最早、年老いたる上は、何も外に求めることはない。

歸去復歸去。帝鄕〔一〕安可期。　歸り去り、復た歸り去る、帝鄕、安んぞ期すべき。

鳥還知已倦。雲出欲何之。　鳥、還つて已に倦むを知り、雲、出でて何くにか之かむと欲する。

入室還攜幼。臨流亦賦詩。　室に入つて還た幼を攜へ、流に臨んで亦た詩を賦す。

春風吹獨立。不是傲親知。　春風、獨立を吹く、これ親知に傲るならず。

【字解】〔一〕帝鄕　天上を云ふ。

【詩意】歸り去りし後、復た歸り去らうと思ふが、天上は、必ずしも行かれるといふ譯でもない。鳥が飛び還つたのは、すでに倦んだからであらうが、雲は岫を出でて、何處に往かうとするのであるか。室に入つて、例の如く、幼兒を攜へ、水流に臨んでも、亦た詩を作る。ぬるき春風の吹き度る中に、ひとり超然として立つて居るのは、景色に看惚れて居るからであつて、決して、親友どもに傲つて居るのではない。

役役倦人事〔二〕。來歸車載奔〔三〕。　役役として人事に倦み、來り歸らむとして、車、載ち奔る。

征夫問前路。稚子候衡門。　征夫、前路を問ひ、稚子、衡門に候す。

入息亦詩策〔四〕。出游常酒尊。　入つて息ふ、亦た詩策、出でて游ぶ、常に酒尊。

交親〔五〕書已絕。雲壑〔六〕自相存。　交親、書、すでに絕え、雲壑、自ら相存す。

【字解】〔一〕役役　せッせと忙がしげに立ち廻る貌。〔二〕人事　世間の事。〔三〕載奔　載は卽ち。〔四〕詩策　詩人の杖。〔五〕交親　交友に同じ。〔六〕雲壑　雲に鎖された深谷。

【詩意】せッせと忙しさうである處から、世間の俗事は、すでに厭になり、鄕に歸らむとして、車を奔らせた。旅人は、行く手の途を問ひ、稚子は、衡門に出迎へて居る。すでに、家に歸りし後は、入つて息ふにも、吟筇を離さす、出でて游べば、いつでも、酒樽を傾ける。交友の處からの書信は、すでに絕えて、音沙汰もないが、雲に鎖せる絕谷は、依然として殘つて居る。

寄レ傲疑二今是一、求レ榮感二昨非一。　傲を寄す、今の是なるを疑ひ、榮を求む、昨の非なるを感ず。
聊欣尊有レ酒。不レ恨室無レ衣。　聊か欣ぶ、尊に酒あるを、恨みず、室に衣なきを。
邱壑世情遠。田園生事微。　邱壑、世情遠く、田園、生事微なり。
柯庭還獨眄。時有二鳥歸飛一。　柯庭、還た獨り眄る、時に鳥の歸り飛ぶあり。

【字解】【一】寄傲　世俗に傲る高情を寄せる。【二】求榮　榮達、即ち出世を求める。【三】世情　俗情に同じ。【四】生事　生活狀態。【五】柯庭　木の茂れる庭上。【六】獨眄　ひとり眺める。

【詩意】世俗に傲る底の高情を寄せ得たるより、今日の是なるを思ひ、出世を願つて居た處から、昨日の非なることをつくづく感じた。樽中に酒あるは、聊か喜ぶべく、室中に衣なきことなどは、何とも思はぬ。山谷の間を跋涉すれば、俗情は、いつとなく遠ざかるし、田園に居ると、生活狀態も、自然ささやかである。木木の茂れる庭上を獨り眺めて居ると、時として、鳥の歸り飛ぶのが見える。

題二過所レ畫枯木竹石一三首　過の畫くところの枯木竹石に題す　三首

老可能爲レ竹寫レ眞。　老可、能く竹の爲に眞を寫す、
小坡今與レ石傳レ神。　小坡、今、石の與に神を傳ふ。
山僧自覺菩提長。　山僧、自ら覺ゆ、菩提の長きを、
心境都將付二臥輪一。　心境、すべて將に臥輪に付せむとす。

【字解】【一】老可　文與可を云ふ、前に數ば見えて居た、東坡の友人で畫竹の名手。【二】小坡　末子の過を云ふ。【三】菩提　傳燈錄に、「僧あり、臥輪禪師の偈を擧げて云ふ、臥輪有二伎倆一、能斷二百思想一、對境心不レ起、菩提日日長、と。六祖、これを聞いて曰く、この偈、未だ心地を明かにせず、と。因つて、偈を示して曰く、慧能沒二伎倆一、不レ斷二百思想一、對境心數起、菩提作麼長とある。菩提とは、悟りすましたる禪寂の妙境を云ふのであらう。【四】臥輪　禪師の名、上に見ゆ。

【題義】この首は、末子の過の畫いた枯木竹石の圖に題したのである。

【詩意】老いたる文與可は、能く竹を寫生したが、今、小坡は、石の爲に其精神を畫き出すことを試みた。この圖に對して、山僧は、日日菩提の妙味の長くして盡きざるを覺ゆべく、その心境は、すべて、かの臥輪禪師の喝破した通りであらう。

【餘論】黃山谷は、この一首にだけ次韻し、即ち左の通りである。

眼入二毫端一寫二竹眞一。枝掀葉擧是精神。因知幻化出二無象一。問取人間老斲輪。

散木支離得二自全一。　散木支離、自ら全きを得たり、
交柯蚴蟉欲二相纏一。　交柯蚴蟉、相纏はむと欲す。
不レ須二更說能鳴雁一。　須ひず、更に說く能鳴の雁、

【字解】【一】散木　役に立たぬ木、莊子に見え、前に子由初到二陳州一の詩中に注して置いた。【二】支離　同じく、莊

要以空中得(六)盡年。　空中を以て、年を盡すを得るを要す。

子に見え、前に龍尾硯の詩中に注して置いた。【三】交柯　枝を交へる。

【四】翦翦　ひれくれる。【五】能鳴雁　莊子に「夫子、故人の家に舍す、故人喜び、豎子に命じ、雁を殺して之を烹せしむ。豎子請うて曰く、その一は能く鳴く、その一は鳴く能はず、請ふ、奚をか殺さむ。主人曰く、鳴く能はざるものを殺せ、と。明日、弟子、莊子に問うて曰く、昨日、山中の木は、不材を以て、その天年を終ふるを得たり。今、主人の雁は、不材を以て死す。先生、將に何くにか處らむとする。莊子曰く、周、將に夫の材と不材との間に處らむとす、是に似て非なり、故に未だ累を免れず」とある。【六】得盡年　莊子に「以て生を全うすべし、以て年を盡すべし」とある。

【詩意】不用の木は、形態不完全なるの故を以て、その身を全うするを得、入り亂れた枝幹は、ひねくつて、互に纏ひ付かうとして居る。その上、能く鳴く雁が材あるを以て死せざりしことなどは、說かずとも善いので、かの雁は、この人界を離れた空中に於て、その天年を盡さば、それで善いのである。

倦看澀(一)勒暗蠻村。　倦んで看る、澀勒、蠻村暗きを、

亂棘孤藤束瘴(二)根。　亂棘孤藤、瘴根を束ぬ。

惟有長(三)身六君子。　惟だ長身の六君子あり、

猗猗猶得似淇(四)園。　猗猗、猶は淇園に似るを得たり。

【字解】【一】澀勒　嶺南の竹の名、嶺表錄異に「竻竹笴は、その竹枝、上に刺す、南人呼んで刺勒となす」とあつて、馮應榴の按に「竻譜、竻竹笴は叢生す。澀勒の二字に至つては、未だ何に本づくかを詳にせず、【二】瘴根　瘴氣を帶びた根。【三】長身六君子　圃中に竹が六本植いてあると見える。【四】淇園　詩經に見えた淇澳で、名高き竹の產地。漢書溝洫志に「武帝の時、河決す、淇園の竹を下して以て楗となす」とある。

【詩意】ここ儋州の地には、澀勒といふ竹が、暗い程生ひ茂り、ごちやごちやに成つた棘や一株の藤の蔓が、その根を絡んで居るのは、見るもうとましい位。しかし、この畫中に於ては、すらりと丈高く伸びた六本の竹があつて、猗猗として艷やかな有様は、かの淇園に似て居る樣で、まことに喜ばしい。

眞一酒歌　　眞一酒の歌

布算以步五星、不如仰觀之捷、吹律以求中聲、不如耳齊之審、鉛汞以爲藥、策易以候火、不如天造之眞也、是故神宅空樂出虛蹋蹄者、以氣升、孰能推是類、以求天造之藥乎、於此有物、其名曰眞一、遠游先生方治此道、不飮不食而飮此酒、食此藥、居此堂、予亦竊其一二、故作眞一之歌、其詞曰、

【訓讀】算を布いて、以て五星を步するは、仰ぎ觀るの捷なるに如かず。律を吹いて、以て中聲を求むるは、耳齊の審にするに如かず、鉛汞以て藥と爲し、易を策して、以て火を候するは、天造の眞

に如かざるなり。これが故に、神宅空しく樂み、虛を出でて蹋踘するものは、氣を以て升る。孰れか、能く是類を推して、以て天造の藥を求めむや。ここに物あり、その名を眞一といふ。遠游先生、方に此道を治め、飲ます、食はすして、この酒を飲み、この藥を食ひ、この堂に居る、予も亦た其一二を竊む、故に眞一の歌を作る。その詞に曰く、

空中細莖插天芒(一)、　空中の細莖、天に插むの芒、
不生沮澤(二)生陵岡。　沮澤に生ぜずして、陵岡に生ず。
涉閱四氣(三)更六陽(四)。　四氣を涉閱して六陽を更へ、
森然(五)不受螟與蝗(六)。　森然として受けず、螟と蝗と。
飛龍御月(七)作秋涼、　飛龍、月に御して、秋涼を作し、
蒼波改色屯雲黃。　蒼波、色を改めて、屯雲黃なり。
天旋雷動(八)玉塵香、　天は旋り、雷は動いて、玉塵香ばしく、
起溲(九)十裂(一〇)照坐光。　起つて溲ねて、十裂、坐を照らして光る。
蹣跌(一一)牛噍(一二)安且詳、　蹣跌の牛は噍んで、安且つ詳、
動搖天關(一三)出瓊漿。　天關を動搖して、瓊漿を出す。
壬公(一四)飛空丁女藏、　壬公、空に飛んで、丁女藏し、
三伏(一五)遇井了不嘗。　三伏、井に遇うて、了に嘗めず。
釀爲眞一和而莊、　釀して眞一となす、和にして莊、
三杯儼如侍君王。　三杯、儼として君王に侍するが如し。
湛然寂照非楚狂(一六)、　湛然寂照、楚狂に非ず、
終身不入無功(一七)鄉。　終身、入らず、無功の鄕。

【字解】【一】插天芒　麥の穗が頭を昂げて居るのを形容して云ふ。【二】沮澤　濕地。【三】四氣　九月霜降、立冬、十月小雪、大雪を併稱す。【四】六陽　十一月に一陽を生じ、四月に至つて六陽となるを云ふ。【五】森然　勢よく列び立つ貌。【六】螟與蝗　爾雅に「苗心を食ふを螟といひ、葉を食ふを螣といひ、根を食ふを蟊といひ、節を食ふを賊といふ、四者は蝗蟲の類なり」とある。【七】飛龍御月　易の乾の九五に飛龍在天とあつて、三月に當る。【八】天旋雷動　麥を臼でひくこと、天の旋るが如く、且つ雷聲を爲すといふは、臼をひく形容。【九】起溲　水でこねる。【一〇】十裂　晉の何曾が蒸餅を好み、十字に裂けて居なければ食はなかつたといふことで、前に游傅綱香積寺の詩中に注して置いた。【一一】蹣跌　坐禪する爲に足を組む。【一二】牛噍　噍は嚙む。【一三】天關　黃庭經に「口を玉關となす」とある。【一四】壬公　王註に「壬公は水を言ふなり、丁女は火を言ふなり、すでに華池の水を出さば、壬水飛んで上に在り、丁火伏して下に在り」と見ゆ。【一五】三伏　夏の三個月を云ふ。【一六】楚狂　即ち接輿、論語・莊子等に見ゆ。又列仙傳に「陸通といふものは、楚狂接輿なり、養性を好み、諸名山に游ぶ、かつて孔子に遇うて歌うて曰く、鳳兮鳳兮、何德之衰」とある。【一七】無功鄉　王績、字は無功、醉鄕記を作つた、前に數ば見ゆ。

【題義】眞一酒は、麥で釀造し、いくら飲んでも頭に來ず、それが道家眞一の義に協つて居るといふので、眞一酒と名づけ、そして、東坡が此歌を作つたのである。東坡は、惠州に居た時、その法を鄧

道士から受けたといふのに、ここに儋州に來てから歌を作つたのは、すこし變だといふので、馮應榴は「或は酒を釀すは惠州に在り、歌を作るは儋州に在るも、未だ知るべからざるなり」といつて居る。

引の意味は――むづかしい計算をして、五星の運行を推歩するよりも、仰いで天を觀た方が、餘程手輕であるし、律を吹いて、正聲に中れる聲を求めるよりも、耳で之を聞き分けた方が餘程審かであるし、鉛や水銀を調合し、易の文句に對照して、火を加減するよりも、自然に出來て居る仙藥の方が眞正である。されば、神宅空しくして樂み、虛を出でて、踊り上るものは、氣を以て上升するのであるが、誰が此より類推して、天造の仙藥を求めやうか。ここに、一物あつて、眞一と名づけ、遠游先生吳子野は、今しも、仙道を修行し、平生飲ます、食はざれども、唯だこの酒を飲み、この藥を食ひ、この堂に居て、ひたすら、清修を旨として居る。予も亦た、其一二を竊んで、一寸、その味を解して居る積りだから、ここに眞一の歌を作つたので、その文句は左の通りだといふのである。

【詩意】麥の細莖は直立し、その穗は、高く昂つて、天に插むが如く、その性として、沮澤の地に生せずして、小高い岡に生ずる。麥は、八個月を經て生熟するので、その間、霜降より大雪に至るまでの四氣を閱し、又十一月一陽の生ずるより四月六陽の揃ふまでに及んで居る。麥は、勢よく森然として竝び、決して、螟蝗の害を受けず、飛龍の御する月、即ち三月になると、熟しかかり、今まで青い波を打つて居たのが、一變して、動かざる雲の黃色を帶ぶるが如く、即ち麥秋である。そこで、麥を臼でひけば、玉塵香ばしく、それを餅にする時と同じく、その表面が十字に裂ける位も蒸すと、座を照らして光る位で、やがて麴が出來る。一方では、寢て居る牛に嚙ます如く、米をふかして潰し、それに麥の麴をませ、十分安らかに且つ念入りにやると、口中から瓊漿を出すと同じく、水は飛んで上に在り、火は伏して下に在り、各〻その作用を爲し、三伏の間、寒冷な處に貯藏して、決して開封せずに置くと、眞一の酒が釀成せられ、その味は、和かに、且つ莊嚴であつて、三杯飲んでも、少しも醉はず、儼として、君王の御側に侍して、すこしも、姿勢を頽すことなく、湛然寂照、心靜に落ち付いて、かの狂歌を事とする楚の接輿の眞似だにせず、また幾ら飲んだ處で、かの王績の謂はゆる醉鄉に入ることなどは、終身斷じて無い。

【餘論】この詩は、毎句押韻、謂はゆる柏梁體である。查初白は、この詩の趣意を明かにする爲に、下の言を爲して居るが、大に參考になる。曰く、この詩の大意、道家三一還丹の訣を取り、題を借りて、以て言を寓す、空中細莖插レ天芒、以下六句は、麥、四時の氣を得て以て成る、故に性溫和なるを言ふなり。天旋雷動玉塵香の二句は、麥を屑にして麴を造る法なり。跏趺牛噍安且詳より末に至るまでは、米を蒸し、酒を釀し、及び釀成後の品格香味を雜記す。これを飲まば、渴を解くべく、しかも、醉ふべからざるなり。通篇の大指、かくの如し。但だ、前後錯落、羚羊、角を挂けて跡の求むべきなきが如きのみ、と。

汲江煎茶

江を汲んで茶を煎る

活水還須活火烹。　活水、還た須らく活火もて烹るべし、
自臨釣石取深清。　自ら釣石に臨んで深清を取る。
大瓢貯月歸春甕。　大瓢、月を貯へて春甕に歸し、
小杓分江入夜瓶。　小杓、江を分つて夜瓶に入る。
雪乳已翻煎處脚。　雪乳、すでに煎處の脚を翻し、
松風忽作瀉時聲。　松風、忽ち瀉時の聲を作す。
枯腸未易禁三椀。　枯腸、未だ三椀を禁じ易からず、
坐聽荒城長短更。　坐して聽く、荒城の長短更。

【字解】【一】活水　活動する水、泉や川の水を指す。池の水などは、即ち反對の死水である。【二】活火　炭の焰をいふ。【三】煎處脚　五註本に「茶を烹て、脚を論ずるもの尙し。茶譜、袁州の界橋、その茶名、甚だ著はるるも、湖州の研膏紫筍、これを烹れば綠脚の垂下するあるに若かざるなり」とあり、施註に「茶錄、凡そ茶、湯多くして茶少ければ脚散じ、湯少く茶多ければ、脚聚まる」とある。脚とは、茶粉が脚の如き狀をなして下垂し、それが廣がつて、湯と混和することを云ふのであらう。【四】長短更　五註本に「その撾數の寡きを言うて短となし、多きものを長となす」とある。城中の鼓樓で時を報ずるのに、夜が更ける程、その撾つ數が增加する。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】活水は、活火で煮なければならぬ。今、活火は手近に在るから、活水を得る爲に、自身で、江中なる釣場の石に臨んで、江水の深く淸めるところを汲んで來た。その汲むには、大瓢を以てし、月を併せて瓢中に貯へしまま、持ち還つて甕の中にうつし、やがて、小さい杓子で、その江水を少しづつ分ち汲んで、瓶中に入れた。その沸く處を見て居ると、表面には、雪色の乳の樣な白い泡が浮んで、下には、長い脚が垂れ、その煎える音は、さながら、松風の吹き瀉ぐが如くである。わが枯腸は、一二椀で滿足することが出來ず、忽ち三椀に及び、仍つて、時を移して、荒城の鼓樓で幾つ撾つたか知らぬが、夜ふけの時刻を報ずるのを聞いた。

【餘論】楊誠齋は、この詩を激賞して「一篇の中、句句皆奇、一句の中、字字皆奇」といひ、詩人玉屑には、之を引いて、更に詳論して居る。但し、乾隆御批には「舒促離合、風湧き雲飛ぶが如し。楊萬里輩、曲げて疏解を爲す、反つて、その趣詣、失ふに似たり」とあり、紀昀は「細膩にして脫洒に出づ。細膩の詩は粘滯に易し、かくの如きの脫洒を難しと爲す」といひ、又結二句を評して「情に入つて跡なし」といつて居る。なほ、この詩中、庚青兩韻を通用して居るのは、一寸注意すべきことである。

贈李兒彥威秀才

李兒彥威秀才に贈る

魏王大瓢實五石。　魏王の大瓢、五石を實たす、

【字解】【一】魏王大瓢　莊子に

種成(二)濩落將安適。　種ゑ成つて濩落、將に安くに適かむとす。
(三)可憐公子持十牛。　可憐の公子、十牛を持し、
海上三年竟何得。　海上三年、竟に何をか得たる。
(四)先生少負(五)不羈才。　先生、少にして負ふ不羈の才、
從軍數到(六)單于臺。　從軍、數ば到る單于臺。
天山直欲(七)三箭取。　天山、直に三箭もて取らむと欲す、
白衣將軍何人哉。　白衣の將軍、何人ぞや。
(八)夜逢怪石曾飲羽。　夜、怪石に逢うて、かつて羽を飲ましむ、
(九)戲中戟枝何足數。　戲に戟枝に中つ、何ぞ數ふるに足らむ。
誓將(一〇)馬革裹尸還。　誓つて、馬革を將て尸を裹んで還る、
肯學(一一)班超苦兒女。　肯て學ばむや、班超の兒女を苦むるを。
(一二)封侯衞霍知幾許。　封侯衞霍、知る幾許、
老矣先生困羈旅。　老いたり、先生、羈旅に困む。

「魏王、われに大瓠の種を貽る」とあつて、前に嵩山松林の詩中に注して置いた。【二】濩落　莊子に瓠落に作る、平淺にして多物を容れざること。【三】可憐公子　任公子、亦た莊子に見え、前に曹既見和の詩中に注して置いた。【四】先生　李秀才を指す。【五】不羈才　漢書司馬遷傳に「僕少にして、不羈の才を負ひ、長じて鄕曲の譽なし」とある。【六】單于臺　漢書武帝紀に「長城を出で、北、單于臺に登る」とある。【七】三箭取　下の白衣將軍と共に、薛仁貴の事、前に次韻王晉卿奉詔の詩中に注して置いた。【八】夜逢怪石　史記李廣傳に「廣、出で獵し、草中の石を見る、以て虎となして之を射る、石に中つて鏃を沒す、これを視れば石なり、因つて復た更

酒酣聊復說平生。　酒酣に、聊か復た平生を說く、
(一三)結韈猶堪一再鼓。　結韈、なほ一再鼓するに堪へたり。
(一四)棄書捐劍學萬人。　書を棄て、劍を捐てて、萬人を學ぶ、
(一五)紈袴儒冠皆誤身。　紈袴儒冠、皆身を誤る。
窮途政似(一六)不龜手。　窮途、政に似たり不龜手、
與世羞爲(一七)西子顰。　世と西子の顰を爲すを羞づ。
如今唯有(一八)談天口。　今の如き、唯だ談天口あり、
(一九)雲夢胸中呑八九。　雲夢、胸中、八九を呑む。
世間萬事寄(二〇)黃粱。　世間萬事、黃粱に寄す、
且與先生說(二一)烏有。　且つ先生と烏有を說かむ。

に之を射れども入らず」とあつて、前に題王晉卿畫後の詩中に注して置いた。【九】戲中戟枝　呂布の事、前に書劉君射堂の詩中に注して置いた。【一〇】馬革裹尸　前に聞喬太博換左藏の詩中に注して置いた。【一一】班超　後漢書の本傳に見ゆ。但し、傳中には兒女の字なく、定めて「年老いて土を思ひ、子勇を遣して塞に入らしむ。而して、超の妹昭、上書して超の生還を丐ふ」の意を用ひたのであらう。【一二】封侯衞霍　漢書の本傳に據れば、靑は長平侯に、去病は冠軍侯に封ぜられた。【一三】結韈　前に與葉淳老の詩中に注して置いた。【一四】棄書捐劍　漢書項籍傳に「籍、少時、書を學んで成らず、去つて劍を學び、又成らずして去る。項梁、これを怒る。籍曰く、書は姓名を記するに足るのみ、劍は一人の敵、學ぶに足らず、願はくは、萬人の敵を學ばむ」とある。【一五】紈袴儒冠　杜甫の詩に紈袴不餓死、儒冠多誤身とある。紈袴は、絹の下裳、貴公子の服裝。【一六】不龜手　寒い時、手のかじかまぬ藥、莊子に「宋人、善く不龜手の

藥を爲すものあり、世世、拼澼絖を以て事とす。客、これを聞き、その方を百金に買ふ」とある。【一七】西子擊　前に次二韻章傳道一の詩中に注して置いた。【一八】談天口　史記孟荀列傳に「翳衍の術、迂大にして閎辯、奭や文具はつて施し難し、淳于髡は久しく與に處れば、時に善言を得るあり。故に、齊人頌して曰く、談天の衍、雕龍の奭、炙轂過の髡」とある。【一九】雲夢　前に司竹監の詩中に注して置いた。【二〇】黃粱　即ち粟、前に今年正月十四日の詩中に注して置いた。又呂純陽集に「洞賓、雲房に遇ひ、同じく一肆中に憩ふ。雲房、自ら起つて炊を執る。洞賓、夢に入り、備さに富貴寵榮を極め、相たること數十年、忽ち罪譴せられて家貲を籍沒し、妻孥を分散す、路に風雪に值ひ、僕馬ともに瘁し、一身無聊、方に浩歎を興し、怏然として夢覺む、雲房、黃粱を炊いで未だ熟さざるなり。雲房、笑つて曰く、子が適來の夢、升沈萬態、榮瘁多端、五十年間、一頃のみ」とある。【二一】烏有　即ち無、前に李公擇過二高郵一の詩中に注して置いた。

【題義】説明に及ばぬ、但し、李秀才は、如何なる經歷の人か分からぬ。

【詩意】魏王の大瓠は、五石を盛るべく、それを蒔いて實が出來たところが、平淺にして、多物を容れず、折角ながら、あまり役に立たない。任公子は、十牛を餌として、東海の上で釣を垂れたが、三年の久しき、一も得るところが無かつた。先生の不遇なることは、さながら、魏王の瓠、公子の釣と同じである。先生は、少にして不羈の英才を負ひ、從軍して、北、單于臺に至りしことも、度度あつた。かの白衣將軍の如く、三箭を以て、直に天山を平定せむとするのは誰であるか、先生以外に其人ありとも思はれない。夜歸るとき、李廣が怪石を射て、その羽を沒したと同じく、呂布が戲に轅門に戟を射て、これに中てたことも、物の數ならず、まことに射藝の達人である。そこで、馬革に尸を裹んで還ることを心に誓ひ、かの班超が、老後、生きて玉門關に入りたいといふ一心から、倅を塞に入れ、妹に上書させて、大分迷惑をかけたといふ樣な眞似は、決して爲さない。衞青・霍去病の如く、運が好くて、天晴、封侯の位を得たものは、幾人あるか知らぬが、先生のみは、氣の毒にも、年老いて後までも、羈旅に困んで居られる。その酒酣なるに當つては、聊か復た平生を說き、韈を結んで起てば、一再鼓聲につれて、羣がる敵中にも切り込むといふ氣概がある。おもへば、その初、書を棄て、劍を捐て、そして萬人を敵とすべき兵法を學び、紈袴儒冠は、兎角身を誤り易いからといふので、武を以て身を立てる積りであつた處が、窮途に在つて立身せず、折角の兵法も、不龜手の藥と同じく、普通の場合には、世の用とならず、さうかといつて、世間に對して、西施の顰に倣ふは、愈よ醜にして、恥づべきが故に、斷じて之を爲さぬ覺悟である。今では、雄辯滔滔、天を談ずる鄒衍の口のみあつて、例の如く、胸中には雲夢八九を呑むべく、昔日の豪氣は、決して衰へない。さはれ、世間の萬事は、黃粱一炊の夢に等しく、決して、あてに成るものではなく、そこで、先生と共に、世事、すべて無なることに就いて、しばらく、御話を致さうと思つて居る。

【餘論】紀昀は「唐人轉韻の古格を用ひて、亦た流暢、但し東坡の佳處に非ざるのみ」といひ、さすがに肯綮に中つて居る。

戯贈孫公素

戯に孫公素に贈る

披扇當年笑溫嶠。　扇を披いて、當年、溫嶠を笑ひ、

握刀晩歲戰劉郎。　刀を握つて、晩歲、劉郎を戰かしむ。

不須戚戚如馮衍。　須ひず、戚戚として馮衍の如きを、

便與時時說李陽。　便ち與に、時時、李陽を說け。

【字解】【一】披扇　溫嶠の妻が扇を披き、障間より見て其夫を笑ひしこと、前に孔毅父換詞の詩中に注して置いた。【二】握刀　三國志の注正傳に「孫權、妹を以て先主に妻はす。妹、才捷にして剛猛、諸兄の風あり、侍婢百餘人、皆親ら刀を執つて侍立す、先主、入る毎に衷心常に凜凜」とある。【三】劉郎　即ち劉備。【四】馮衍　毎に其妻と不和であつたので、前に次韻王鞏六首の詩中に注して置いた。【五】李陽　世說に「王夷甫の婦は、郭泰寧の女、才拙にして性剛、夷甫、これを患へて、禁ずる能はず。時に其郷人幽州刺史李陽は京都の大俠、郭氏、これを憚る。夷甫、驟に之を諫め、乃ち曰く、但だ、我、卿を不可といふのみならず、李陽も亦た卿を不可と謂ふと。郭氏、これが爲めに小しく損す」とある。

【題義】孫公素、名は賁、當時諸家の集中に見えて居る。この詩は、東坡が其妻を畏れることを諷したのであるから、特に戯贈と署したのであらう。侯鯖錄に「孫公素、內を畏るるは、衆の共に知るところ、かつて、坡公に扇に書せむことを求む、坡、題して披扇當年云云といふ」とあり、又「公素、むかし、程宣徽の門賓たり、後に程公の女を娶る、性、極めて妬悍」とある。

【詩意】君の細君は、扇を披いて其夫を笑ひし當年の溫嶠の妻の如く、又刀を握つて、年を取つて居る劉備を戰慄せしめた孫夫人の如く、なかなか偉い。但し、君は、馮衍の如く常に戚戚として居るにも及ばず、時時、李陽の如く妻君の畏れ憚る人を擔ぎ出して、これを凹ませるも、一の方便である。

儋耳

儋耳

霹靂收威暮雨開。　霹靂、威を收めて暮雨開く、

獨憑闌檻倚崔嵬。　獨り闌檻に憑つて崔嵬に倚る。

垂天雌霓雲端下。　垂天の雌霓、雲端より下り、

快意雄風海上來。　快意の雄風、海上より來る。

野老已歌豐歲語。　野老、すでに豐歲を歌うて語り、

除書欲放逐臣回。　除書、逐臣を放つて回らしめむと欲す。

殘年飽飯東坡老。　殘年、飯に飽いて東坡老い、

一壑能專萬事灰。　一壑能く專にすれば、萬事灰なり。

【字解】【一】霹靂收威　山公註に「唐書、吳武陵の孟簡に與ふる書に云ふ、子厚の斥けらるる十二年、殆んど半世、霆砰電射は天怒なるも、朝を終る能はず、聖人上に在り、安んぞ世を畢つて人臣を怒るあらむや」と。公の起句、暗に其意を用ふ」とある。【二】雌霓　普通の虹の外に在つて薄く見ゆるものを云ふ。山公註に「埤雅、虹常に雙見す、鮮盛なるものは雄、其の闇きものは雌」とある。【三】除書　任命の辭令。

【四】一壑能專　溪山の中に隱居すること。查註に「按ずるに、漢書敍傳、一壑に漁釣すれば、萬物、其の志を奸すなし。王介甫、その意を用ひて詩を作つて云ふ、我亦暮年專一壑と。陳後山の詩、亦た他日入東專一壑の句あり」といひ、馮應榴の案に「晉の陸雲の逸民賦の序、古しへの逸民、天下を輕んじ、萬物を細として、一邱の歡を專にし、一壑の美を擅にせむと欲す、豈に、身、宇宙

に勝りて、心、紛華に恬なるを以てする者ならずや」とある。

【題義】儋耳は卽ち儋州、漢書地理志に「合浦徐聞より南海に入つて大州を得たり、東西南北、千里。武帝の元封元年、略して以て儋耳珠崖郡となす」とある。

【詩意】おどろおどろしき雷は、その威を收め、暮雨漸く止みし時、ひとり欄干に倚つて、山の高い處に居る。眺めやれば、天より垂れたる雌霓は、雲端に下り、雄風、海上から吹き來る心地よさ。野老は、すでに豐年を歌うて相語り、天子より赦令を下されて、遷謫の臣を召し還さうといふ御思召である。予は、餘生、飯に飽きて、ひもじい目をしなければ、以て老ゆるに足るべく、幸に一壑を專にして、溪山に隱居することが出來れば、萬事は唯だ冷灰に付する積りである。

【餘論】乾隆御批に「嶠峭たる雄姿、挫折を經るも、稍や損抑せず、浩然の氣を養ふ、ここに於て、その心聲を見る」とある。

余來儋耳、得吠狗、曰烏觜、甚猛而馴、隨予遷合浦、過澄邁、泅而濟、路人皆驚、戲爲作此詩

余、儋耳に來りて吠狗を得、烏觜と曰ふ。甚だ猛にして馴、予に隨つて合浦に遷るや、澄邁を過ぎ、泅いで濟る、路人、皆驚く。戲に爲に此詩を作る

烏喙本海獒。幸我爲之主。
烏喙、本と海獒、幸にして、我、これが主となる。

食餘已瓠肥。終不憂鼎俎。
餘を食うて、すでに瓠肥、終に鼎俎を憂へず。

晝馴識賓客。夜悍爲門戶。
晝は馴れて賓客を識り、夜は悍にして門戶を爲す。

知我當北還。掉尾喜欲舞。
わが當に北に還るべきを知り、尾を掉つて、喜んで舞はむと欲す。

跳踉趁童僕。吐舌喘汗雨。
跳踉、童僕を趁ひ、舌を吐いて汗雨に喘ぐ。

長橋不肯躡。徑渡淸深浦。
長橋、肯て躡まず、徑に渡る淸深の浦。

拍浮似鵝鴨。登岸劇虓虎。
拍浮、鵝鴨に似たり、岸に登つて、虓虎より劇なり。

盜肉亦小疵。鞭箠當貰汝。
肉を盜むも亦た小疵、鞭箠、當に汝を貰すべし。

再拜謝厚恩。天不遣言語。
再拜して厚恩を謝せよ、天、言語せしめず。

何當寄家書。黃耳定乃祖。
何ぞ當に家書を寄すべき、黃耳、定めて乃の祖。

【字解】【一】烏喙　口先が黑色である處から、名づけたのであらう。【二】海獒　海邊の大犬、爾雅に「狗、四尺を獒といふ」とある。【三】瓠肥　まるまると瓠の如く肥えて居る、史記に「張蒼、身長大、肥白、瓠の如し」とある。【四】鼎俎　特別に食事の支度をする。【五】跳踉　躍りはねる。【六】拍浮　水を拍つて浮ぶ。【七】虓虎　吼ゆる虎。【八】貰汝　貰は赦。【九】黃耳　陸機の家犬の名、千里を隔てた故郷に手紙を屆けたといふので、前に「捕鰋至浮雲嶺」の詩中に注して置いた。

【題義】予は、儋耳に來て、一頭の善く吠える犬を得、烏觜と名づけた。その犬は、甚だ猛勇であるが、能く馴れて居た。今次、予が廉州の合浦に遷されるに就いて、一緒に隨つて來たが、澄邁縣を過ぐる時、澄江を泅いで渡つたから、路行く人は、皆驚いた。そこで、予は戲に此詩を作つたといふのである。

【詩意】烏喙と名づくるは、海邊大犬の種であつて、幸に予に飼はれて居た。平生、食物の餘りを頂戴して、丸丸とふとり、決して、特別に食事の支度をする心配もなかつた。晝は、善く主人に馴れて、來訪する賓客を識別し、夜は、勇悍にして、門戸の番をする。この犬は、予が當に北歸すべきを知り、喜びの餘り、尾を掉つて舞はむとし、踊りはねて、童僕の後を追ひ、息を切らして舌を吐き、喘ぎつつ、雨なす汗を流した。やがて、澄邁縣に來かかると、長橋があるにも拘はらず、眞直に淸く深き入り江を渡つたが、その水を拍いて浮ぶ樣は、鵝鴨の如く、やがて岸に登ると、吼ゆる虎の如き勢を示した。汝が肉を盜むのは、小さな疵であつて、その爲に他人から鞭たれるならば、予は、往いて、汝を赦して貰はう。天が、汝をして、言語を發せしめざりしは、まことに厚恩であつて、汝は、再拜して之を感謝せねばならぬ。かの黃耳は、定めて汝の先祖であらうから、汝も、亦た國元への手紙を屆けることが出來るであらう。

【餘論】乾隆御批に「一時の戲筆、人情を摹繪す。盜肉亦小疵、鞭箠當貰汝の二句、その意を寓するもの深し」とあり、紀昀は「小品亦た佳」といつて居る。

澄邁驛通潮閣二首

澄邁驛通潮閣　二首

倦客愁聞歸路遙。倦客、愁へ聞く歸路の遙なるを、

眼明飛閣俯長橋。眼は明かに、飛閣、長橋に俯す。

貪看白鷺橫秋浦。貪り看る、白鷺の秋浦に橫ふを、

不覺青林沒晩潮。覺えず、青林の晩潮に沒するを。

【字解】【一】倦客　久しく異鄉に居て倦みはてた人。【二】飛閣　高閣。その勢、飛舞せむと欲するが如きを云ふ。

【題義】查註に「太平寰宇記、澄邁縣は、瓊崖州の西九十里に在り。隋、縣を置き、邁を以て名となす。志を按ずるに、縣西、又澄江あり、故に名づく。名勝志、通潮閣は乃ち澄邁の驛閣なり、舊志、通潮閣、一名通明閣、澄邁縣西に在り」と見ゆ。この詩は、東坡が儋州より廉州に遷るとき、澄邁驛を過ぎ、驛西なる通潮閣に登つて作つたのである。

【詩意】久しく客たりしものは、歸路の遙なるを聞いて、うんざりするばかり、ここ長橋を俯瞰する高閣に上れば、兩眼明かにして、景色がはツきりして居る。そこで、白鷺が秋の入り江を橫ぎつて飛ぶを眺めつつ、晩潮、いつしか推し寄せ、對岸の青林の見えなく成つたのには、氣が付かなかつた。

餘生欲老海南村。（一）　餘生、老いむと欲す海南の村、

帝遣巫陽招我魂。（二）　帝、巫陽をして我が魂を招かしむ。

杳杳天低鶻沒處、　杳杳、天低れて、鶻、沒する處、

青山一髮是中原。　青山一髮、是れ中原。

【字解】（一）**海南村**　儋州を指す。（二）**帝遣巫陽**　楚辭の招魂に帝告巫陽曰、有人在下、我欲輔之、魂魄離散、汝筮與之とあつて、その註に「帝は天帝を謂ふなり、女な巫陽といふ」とある。

【詩意】予は、海南なる儋州に在つて、餘生を送る積りであつた處が、天帝は、巫陽を遣して、離散せる我が魂魄を招き返さしめ、今度、はじめて北に歸ることになつた。眺めやれば、杳杳として天低く鶻影の沒する地平線上に、一髮長く拖ける青山は、即ち中原の地なるべく、やがて、其處へ往くと思へば、まことに嬉しい。

【餘論】乾隆御批には「羈望深情、含蘊、際なし」とあり、紀昀は「神來の筆」といひ、東坡の絕句中に於ては、有數の佳作である。

泂酌亭

泂酌亭

瓊山郡東、衆泉觱發、然皆冽而不食、丁丑歲六月、南遷過瓊、始得雙泉之甘於城之東北隅、以告其人、自是汲者常滿、泉相去咫尺而異味、庚辰歲六月十七日、遷於合浦、復過之、太守承議郎陸公、求泉上之亭名與詩、名之曰泂酌、其詩曰、

【訓讀】瓊山郡の東、衆泉觱發、然れども、皆冽にして食はれず。丁丑の歲六月、南遷して瓊を過ぎ、はじめて雙泉の甘きを城の東北隅に得、以て其人に告ぐ。これより、汲むもの常に滿つ。泉、相去ること咫尺にして、味を異にす。庚辰の歲六月十七日、合浦に遷らむとし、復た之を過ぐ。太守承議郎陸公、泉上の亭名と詩とを求む、これを名づけて泂酌といふ。その詩に曰く、

泂酌彼兩泉。（一）挹彼注茲。　泂として彼の兩泉を酌み、彼を挹んで茲に注ぐ。

一瓶之中。有澠有淄。（二）　一瓶の中、澠あり、淄あり。

以瀹以烹。衆喊莫齊。（三）　以て瀹し、以て烹、衆喊、齊しうするなし。

自江徂海。浩然無私。　江より海に徂く、浩然として私なし。

豈弟君子。江海是儀。　豈弟の君子、江海、これ儀。

既味我泉。亦嚌我詩。（四）　すでに我が泉を味ふ、亦た我が詩を嚌へ。

【字解】【一】澗　さむし、ふかし等の意味がある。【二】有淄有澠　二水、各ゝ味を異にす、列子に「口、將に爽はむとするもの、先づ淄澠を辨ず」とあつて、張湛の註に「淄澠、水味を異にす、すでに合すれば別ち難きなり」とある。【三】衆喊　喊は味ふ。揚子法言に「狄牙は能く喊ふも、齊しうする能はず、これを齊しうして口喊はざるものは、その味を嘗むるなり」とある。狄牙は儀狄易牙。【四】嚼我詩　嚼は飲んで盡さざるの意。儀禮疏に「嚼は、齒に至つて之を嘗むるをいふ」とあつて、つまり、味ふこと。

【題義】引の意味は——瓊山郡の東には、多くの泉が涌き出るが、しかし、皆寒冷に過ぎて、到底、飲用することが出來ない。紹聖四年丁丑六月、予は、惠州より南に遷されて瓊を過ぎた時、二つの泉の味の甘いのを郡城の東北隅に發見し、その筋の人に告げた處から、爾後、汲みに來るものが常に一ぱいであつた。その泉は、相去ること咫尺で、味の違つて居るのが不思議である。元符三年庚辰六月十七日、廉州合浦に遷さるるに就いて、再び其處を通過すると、太守承議郎陸某が、泉の邊なる亭子の名と詩とを求めたるに因り、亭を名づけて泂酌といひ、そして、別に詩を作つた。その詩は即ち左の通りであるといふのである。

【詩意】つめたい彼の兩泉を酌み、こちらのを汲んで、あちらのにまぜる、すると、一瓶の中に淄澠二水を混合した樣なもので、これを煮て沸かしても、最早、區別することが出來ない。この泉は、江に入り、そして海に注ぎ、浩然として私するところがない。豈弟の君子は、江海を以て、その儀表となし、德澤の衆に及ぶを期すべく、すでに、わが泉を飲んだ上は、又わが詩を善く味つて貰ひたい。

六月二十日夜渡海　六月二十日、夜、海を渡る

（一）參橫斗轉欲三更。　參橫はり、斗轉じて、三更ならむと欲す、
（二）苦雨（三）終風也解晴。　苦雨終風、也た晴を解す。
雲散月明誰（四）點綴。　雲は散じ、月は明かに、誰か點綴、
天容海色本澄淸。　天容海色、本と澄淸。
空餘（五）魯叟乘桴意。　空しく餘す、魯叟、桴に乘ずるの意、
粗識（六）軒轅奏樂聲。　粗ぼ識る、軒轅、樂を奏するの聲。
（七）九死南荒吾不恨。　九死南荒、吾、恨みず、
茲游奇絕冠平生。　この游、奇絕、平生に冠たり。

【字解】【一】參橫斗轉　參は星の名、斗は北斗、曹子建の善哉行に月沒參橫、北斗闌干とある。【二】苦雨　ながい雨。【三】終風　終日吹きすさぶ風。【四】點綴　あしらふ。晉書謝重傳に「時に月夜明淨、道子嘆じて以て佳となす。重、率爾として曰く、意謂ふ乃ち微雲の點綴するに如かず」とある。【五】魯叟　孔子、論語に「道行はれず、桴に乘つて海に浮ばむ」とある。【六】軒轅奏樂　軒轅は黃帝、黃帝が樂を洞庭の野に張りしこと、前に東陽水樂亭の詩中に注して置いた。【七】九死　離騷に亦余心之所善兮、雖九死其猶未悔とある。

【題義】說明に及ばぬ。ここの海は、朱崖と合浦との間である。東坡は、儋州に赴任する時も、ここを渡つたから、これで二度目である。王氏の交廣春秋に「朱崖儋耳は、大海中、極南の外、合浦の徐聞縣に對す、清朗、風なきの日、はるかに朱崖州を望む、囷廩の如く大、徐聞より對渡、北風、帆

を擧ぐる一日一夜にして至る、周匝二千餘里、徑に渡る八百里」とある。

【詩意】參の星は横はり、北斗は位置を轉じ、夜、將に三更ならむとする頃、今までの長雨と終日吹きすさんだ風とは、ともに止んで仕舞ひ、雲は散じ、月は明かにして、萬里の碧霄、何物の點綴するなく、空も、水も、本來の色にかへつて、飽くまで澄み切つて居る。予が海を渡るは、むかし、孔子が桴に乘つて浮ばむといつた其意を餘して居るが、格別の效果もなく、風水の聲を聞いては、むかし、黄帝が洞庭の野に於て樂を張つたことを思ひ出す。身は、南方蠻荒の地に來り、殆んど死ぬ樣な憂き目に遇つたが、決して、遺恨とは思はず、この游の奇絶にして、從前、例なき程なるは、まことに喜ぶべきことである。

【餘論】方回は「或は謂ふ、尾句太だ過ぎ、愆を省るの意なしと。殊に然らざるなり。章子厚・蔡卞、これを殺さむと欲し、しかも、これを處すること怡然たり、この老境に當つて、怨むなく、怒るなく、以て茲游奇絶となす、眞に生死を了し、得喪を輕んずるの天人なり」といつて居る。

自雷適廉宿於興廉村淨行院

雷より廉に適き、興廉村の淨行院に宿す

荒涼海南北。佛舍如雞棲。　荒涼たり海の南北、佛舍、雞棲の如し。

忽行榕林中。跨空飛栱枅。　忽ち榕林の中を行けば、空に跨つて栱枅を飛ばす。

當門冽碧井。洗我兩足泥。　門に當つて碧井冽たり、わが兩足の泥を洗ふ。

高堂磨新甎。洞戶分角圭。　高堂、新甎を磨し、洞戶、角圭を分つ。

倒牀便甘寢。鼻息如虹霓。　牀を倒にして、便ち甘寢、鼻息、虹霓の如し。

童僕不肯去。我爲半日稽。　童僕、肯て去らず、われ半日の稽を爲す。

晨登一葉舟。醉兀十里溪。　晨に一葉の舟に登り、醉兀、十里の溪。

醒來知何處。歸路老更迷。　醒め來る、知る何の處、歸路、老いて更に迷ふ。

【字解】【一】佛舍　卽ち寺、淨行院を云ふ。【二】雞棲　鳥小屋。【三】栱枅　爾雅に「杙の大なるものを栱となす」とあり、說文に「枅は屋櫨なり」とある、ともに、ますがた、卽ち柱上の方木。【四】新甎　甎は敷瓦、別に牀を張らずして甎を敷きつめてある。【五】角圭　部屋の入り口が、或は四角形、或は圭字形をなすといふ意であらう。

【題義】この詩は、廉州赴任の途中、雷州を過ぎて、後、興廉村の淨行院に投宿した時に作つたのである。

【詩意】海の南北は、風物荒涼にして、寺といつても、鳥小屋同樣、榕樹の林中を行くと、空中に

跨つて枡形を架して建築し、いはば掘ッ立小屋の樣なもの、門前には、奇麗な水の湧く井戸があつたから、取り敢へず、兩足の泥を洗ひ落した。高堂の中には、甎を敷きつめ、奥深き部屋の入口は、四角形や圭字形をなして居る。そこで、寢臺なる夜具の汚いのを裏がへしにして、直に寢入り、鼻息は虹を吐くと疑はれた。僮僕どもは、敢て去らずして、側に付添うて居たが、予は、ここに半日逗留し、朝早く、一葉の舟に乘じ、兀兀として醉つたまま、十里の急溪を過ぎた。やがて、酒が醒めると、何處とも分からず、北方の歸路は、どちらの方かと、老の身は、更に心に惑ふばかりである。

【餘論】紀昀は當門列碧井の二句に就いて「皆俚」といつて居る。

雨夜宿淨行院　雨夜、淨行院に宿す

芒鞵不踏利名場。　芒鞵、踏まず利名の場、
一葉輕舟寄淼茫。　一葉の輕舟、淼茫に寄す。
林下對牀聽夜雨。　林下對牀、夜雨を聽く。
靜無燈火照凄涼。　靜にして燈火の凄涼を照らすなし。

【題義】前首と同じく、淨行院の作である。

【詩意】生來、わら履を穿いたまま、名利の場に踏み入りしことなく、今や、一葉の輕舟に乘じて、淼茫たる江海の間に跡を寄せて居る。今宵、林下の荒れ寺で、僮僕輩と牀を向け合ひつつ、雨の音を聞いて居るが、凄涼の中、燈火なき寂しさ、全く外には無い位である。

廉州龍眼質味殊絶可敵荔支　廉州の龍眼、質味殊絶、荔支に敵すべし

龍眼與荔支。異出(一)同父祖。　龍眼と荔支と、異出にして父祖を同じうす。
端如甘與橘。未易相可否。　端に甘と橘との如く、未だ相可否し易からず。
異哉西海濱。琪樹羅元圃(二)。　異なるかな西海の濱、琪樹、元圃に羅ぬ。
纍纍似桃李。一一流膏(三)乳。　纍纍として桃李に似たり、一一、膏乳を流す。
坐疑星隕空。又恐珠(四)還浦。　坐に疑ふ星の空に隕つるを、又恐る、珠の浦に還るを。
圖經未嘗說。玉(五)食遠莫數。　圖經、未だ嘗て說かず、玉食、遠く數ふるなし。
獨使皴(六)皮生。弄色映琱(七)俎。　ひとり皴皮生をして、色を弄して琱俎に映せしむ。
蠻荒非汝辱。幸免妃(八)子汚。　蠻荒、汝の辱に非ず、幸に妃子の汚すを免る。

【字解】【一】異出同父祖　本草に「陶隱居云ふ、廣州、別に龍眼あり、荔支に似て小。又廣志、龍眼樹、葉は荔支に似、蔓延して木に緣る」とあり、番禺雜編に「龍眼子、樹葉、ともに荔支に似たり、但し、子圓小、止だ淡黃一色、廣人多く呼んで亞荔支となす」とあり、南方草木狀に「龍眼、樹は荔支の如し、但し枝葉稍や小」云云とある。【二】元圃　崑崙に在る仙界。【三】膏乳　嶺表錄異に「龍眼は、肉白くして漿を帶び、その甘きこと蜜の如し」とある。【四】珠還浦　前に辨才退居の詩中に注して置いた。【五】玉食　結構な食物。【六】皴皮生　荔支を云ふ。皴は說文に「皮の細起するなり」とあり、本草註に「荔支の殼に皺あり、紋、羅の如し」とある。【七】瑪爼　前に逢古夜飲の詩中に注して置いた、奇麗な盆皿。【八】妃子汚　王註に「楊貴妃、荔支を好み、歳ごとに涪州に取り、以て漁陽の難を致す、荔支に於ては汚たり」とある。

【題義】この詩は、廣州の龍眼肉を詠じたので、その質味、特別に優れ、荔支に敵することが出來るといふのである。

【詩意】龍眼と荔支とは、その父祖を同じうして分派したもので、まさしく、蜜柑と橘との如く、互に可否することは出來ぬ。不思議なるは、西海の濱に於て之を生じたことで、たとへば琪樹が元圃に列植するが如く、その實は、纍纍として桃李の如く、個個に甘い汁を流して居る。打見れば、星が空より落ちしかと疑はれ、又名珠が合浦に還つて來た樣である。むかしから、地理書にも、決して說いて居らず、折角の美味も、何分、遠方の事で、數へ立てる譯に行かぬ處から、ひとり、荔支をして、その色を弄して、美美しき盆皿に映せしめる次第である。汝は、蠻荒に生ひ出でた處で、決して恥辱ではなく、又荔支の如く楊貴妃に其名を汚されることを免れたのは、まことに仕合せなことであつた。

【餘論】紀昀は「坐疑の二句、刪るべし」といひ「寓意、結を作す」といつて居る。

合浦愈上人以詩名嶺外將訪道南岳留詩壁上云閒伴孤雲自在飛東坡居士過其精舍戲和其韻

合浦の愈上人、詩を以て嶺外に名あり、將に道を南岳に訪はむとし、詩を壁上に留めて云ふ、閒に孤雲に伴うて自在に飛ぶ、と。東坡居士、その精舍を過ぎ、戲に其韻に和す

孤雲出岫豈求伴。孤雲、岫を出づ、豈に伴を求めむや、
錫杖凌空自要飛。錫杖、空を淩いで、自ら飛ぶを要す。
爲問庭松尙西指。爲に問ふ、庭松、尙は西を指すを、
不知老奘幾時歸。知らず、老奘、幾時か歸る。

【字解】【一】庭松尙西指　廣異記に「玄奘、將に西域に往かむとし、靈巖寺に於て松一樹を見、手を以て其枝を摩して曰く、吾、西に去つて佛敎を求む、汝、西に長ずべし。吾、歸らば、卽ち東向せよ、と。去るに及びて、枝、西に指す、約長さ數丈。一年、忽ち東に向ふ、弟子、これを迎ふ、果して還る」とあつて、同じ事が大唐新語にも見えて居る。【二】老奘　卽ち玄奘、舊唐書に「姓は陳氏、偃師の人、大業の末出家す。博く經論に涉る。かつて謂ふ、翻譯の者、訛謬多し、と。故に西域に就き、廣く異本を求めて、之を參驗せむ、と。貞觀の初、往いて西域に游び、百餘國を經、西域記十二卷を著し、十九年、京師に歸る」とあり、續高僧傳に「玄奘、本名は褘、陳仲弓の後。貞觀中、西域より歸り、詔を奉じて、經論七十三部

一千三百三十卷を翻譯す」とある。【三】幾時　何時に同じ。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】孤雲の谷を出づるが如く、此を去りし君は、いかで同行者を求むべき、錫杖は、空を淩いで、勝手に飛んで行くのみである。庭上の松は、まだ依然として、西に向つて居るので、玄奘に比すべき君は、何時歸るか、まだ分からぬ。

梅聖兪之客歐陽晦夫、使工畫茅菴、已居其中、一琴横牀而已、曹子方作詩四韻、僕和之云

梅聖兪の客、歐陽晦夫、工をして茅菴に畫かしめ、すでに其中に居る、一琴、牀に横はるのみ。曹子方、詩四韻を作る、僕、之に和すと云ふ

寂寞王子猷。回船剡溪路。　寂寞たり王子猷、船を回す剡溪の路。

迢遙戴安道。雪夕誰與度。　迢遙たり戴安道、雪夕、誰と與にか度らむ。

倒披王恭氅。半掩袁安戶。　倒に王恭の氅を披き、半ば袁安の戶を掩ふ。

應調折絃琴。自和撚須句。　應に調すべし、折絃の琴、自ら和す須を撚るの句。

【字解】【一】王子猷雪夕、戴安道を山陰に訪はむとして、舟を剡溪に漕ぎ出し、その門前に到りしが、相見ずして直に引き返したといふ有名な話で、前に樫山次韻答周長官の詩中に注して置いた。【二】王恭氅　王恭の著て居る上衣に雪がかかつて、鶴氅の如く見えたといふこと、前に江上值雪の詩中に注して置いた。【三】袁安戶　錄異記・汝南先賢傳等に見え、前に謝二人見和江上值雪の詩中に注して置いた。【四】折絃琴　絃が切れたままに成つて居る古琴、賈島の詩に見え、前に次韻仲殊雪中に注して置いた。【五】撚須句　須は鬚、談苑に　盧延讓の詩、その人口に播くもの、人に寄するの詩、吟安一個字、撚斷幾莖鬚あり」と見ゆ。

【題義】歐陽晦夫は、困學紀聞に「名は闢、桂州の人、梅聖兪、詩あり、これを送つて云ふ、我家無梧桐、安可久棲鳳、と。東坡、南遷して合浦に至る、晦夫、時に石康令たり、その詩稿數十幅を出す」とあつて、歐陽修とは、全然關係なく、これを修の親族といふのは、全く根據なき臆說である。その歐陽晦夫は、畫工をして茅菴に畫かしめ、自ら其中に居り、唯だ一琴が牀上に横はるのみ、極めて簡素な有樣。曹子方は、爲に四韻（卽ち八句）の詩を作つて贈つたから、予は之に和したといふのである。曹子方は、前に送曹輔の詩中に注して置いた。

【詩意】王子猷は、折角來たものの、興盡きたといふので、船を回し、寂寞として、剡溪の路を下つて往つたが、此方の戴安道は、そんなこととは知らず、雪の夜の長きを誰と共に過ごしたであらうか。君は、矢張、その戴安道の如く、ひとり室中に籠り、王恭の鶴氅を裏がへしに著て、袁安の戶を半ば掩ひ、そして、時たま、絃の切れた琴を調べつつ、自ら鬚を撚つて拈出した詩句に和して居られる。

【餘論】通篇、雪の典故を列擧してある處を見ると、晦夫の室には、蓋し雪を畫いたものであらう。

歐陽晦夫惠琴枕

歐陽晦夫、琴枕を惠まる

(一)中郎不眠仰看屋。得此古(二)椽圍尺竹。
(三)輪囷濩落非笛材。剖作(四)袖琴(五)徽軫足。
流傳幾處到淵明。臥枕綸巾(六)酒新漉。
(七)孤鸞別鵠誰復聞。鼻息齁齁自成曲。

中郎、眠らず、仰いで屋を看、この古椽圍尺の竹を得たり。
輪囷濩落、笛材に非ず、剖いて袖琴となして、徽軫足れり。
幾處に流傳して淵明に到る、臥して綸巾を枕し、酒、新に漉す。
孤鸞別鵠、誰か復た聞かむ、鼻息齁齁、自ら曲を成す。

【字解】【一】中郎 中郎將の略、後漢の蔡邕を云ふ。【二】古椽圍尺竹 蔡邕長笛賦の序に「邕、難を江南に避け、柯亭に宿す。柯亭の館、竹を以て椽となす。邕、仰いで之を盻て曰く、良竹なり、と。取つて以て笛となす、奇聲獨絶、歷代、これを傳ふ」とある。【三】輪囷濩落 太く從つて穴の大なるをいふ。【四】袖琴 袖に入れる小琴。【五】徽軫 琴の絃と琴下の柱。【六】酒新漉 陶淵明が頭巾で酒を漉したといふので、前に和蔡準の詩中に注して置いた。【七】孤鸞別鵠 ともに古しへの琴曲の名。陶淵明の詩に、知我故來意、取琴爲我彈、上絃驚別鶴、下絃操孤鸞、とある。

【題義】琴枕とは、小さな琴で、枕と爲し得るものと見える。それを歐陽晦夫が特に贈つたから、この詩を作つて謝としたのであらう。

【詩意】蔡邕の如き音律を知つて居る人が、眠らずして屋根を仰ぎ、古い椽から周圍一尺もある此竹を發見したが、何分太く、且つ穴が大きくて、笛にならぬ處から、これを割いて、袖中の小琴となし、絃を張り、琴柱を備へた。それが、幾處にか流傳した後、しまひに、淵明に比すべき予の處に來たので、新に酒を漉して濡れた頭巾をも脱せず、臥して之に枕することがある。孤鸞別鵠の曲は、復た聞くべからざれども、鼻息は、齁齁として、自然、音律に協つて居るのは、まことに不思議である。

琴枕

琴枕

清眸作金徽。素齒爲玉軫。
(一)響泉竟何用。(二)金帶常苦窘。
爛斑漬(三)珠淚。宛轉堆(四)雲鬢。
君若安七絃。應彈(五)卓氏引。

清眸、金徽と作し、素齒、玉軫となす。
響泉、竟に何の用ぞ、金帶、常に苦窘。
爛斑、珠淚を漬し、宛轉、雲鬢を堆す。
君、もし七絃を安んせば、應に卓氏の引を彈すべし。

【字解】【一】響泉 琴の名、輟耕錄に「卽ち蔡邕の傳ふるところ」とある。【二】金帶 文選洛神賦の註に「魏の東阿王、甄逸の女を求むれども遂げず。黃初中、入朝、帝、植に甄后の玉縷金帶枕を示す。植、これを見て覺えず泣下る」とあるが、琴には關係が薄い、又苦窘の二字が不詳であるが、他に定說がないから、しばらく之に據る外はない。【三】珠淚 述異記に「南海の外、鮫人

あり、水居魚の如く、機織を廢せず、その眼、能く泣いて珠を出す」とある。【四】雲鬟　左傳に「むかし、有仍氏、女を生む、黰黑にして甚だ美、光、以て鑑すべし」とある。【五】卓氏引　漢書司馬相如傳に「臨邛令、前んで琴を奏せしめて曰く、ひそかに聞く、長卿、これを好む、と。願はくは、自ら娯めと。相如辭謝し、爲に鼓すること一再行。この時、卓王孫、女文君あり、新に寡して音を好む、故に相如、繆つて令をして相重んぜしめ、しかも琴心を以て之を挑む」とある。

【題義】琴枕は、前首の題中に見えて居て、この詩は、即ちそれを詠じたものである。

【詩意】この琴を人に譬へると、清眸は金徽となり、素齒は玉軫となつたものと見立てられ、古しへの嚮泉と號した名琴も、その用なく、甄后の金帶枕も、之に比べると、その相及ばざるに苦むであらう。この琴は、斕斑として、鮫人の淚の化せし珠を濆すが如く、宛轉として、雲なす黑髮を堆するが如くである。今は、枕に代用して居るが、もし七絃を張つて異れば、司馬相如が文君を挑んだ彼の古曲を彈ずるであらう。

留別廉守

廉守に留別す

(一)編萑以(二)苴豬。(三)墐塗以塗之。
萑を編んで、以て豬を苴み、墐塗、以て之に塗る。

小餅(四)如嚼月。中有(五)酥與飴。
小餅、月を嚼むが如く、中に酥と飴とあり。

懸知合浦人。長誦東坡詩。
はるかに知る合浦の人、長く誦す東坡の詩。

(六)好在(七)眞一酒。爲我(八)醉宗貲。
好在なれ眞一の酒、わが醉宗の貲と爲す。

【字解】【一】編萑　萑は細葦。【二】苴豬　苴は裹む、豬は豚の肉。【三】墐塗　粘土。【四】如嚼月　形圓くして月の如く、これを食へば少しづつ缺けるをいふ。【五】酥與飴　酥は牛酪、即ちバタ。【六】好在　無事なれといふ意。【七】眞一酒　前に其詩があつて、詳しく題下に注して置いた。【八】醉宗貲　一族を宴する時の御馳走。

【題義】東坡は、元符三年五月に廉州に移して安置されたが、わづか三個月にして、同年八月、その地を離れることになつたので、この詩は、即ち廉州の張太守に留別したのである。張は、その名を逸して分からぬが、張左藏とある處を見ると、元と武官から知州に改められたものであらう。

【詩意】この席上、燒いた肉饅頭を供せられたが、細葦を編んで豚の肉を裹み、粘土を塗つて、それから燒いた小さい餅で、これを食ふ樣は、さながら月を嚼むが如く、中には、バタと飴とをませて味を付け、至極好味である。合浦の人人は、今後、わが詩を誦して、ひどく東坡が氣に入つたいふことを傳へるであらう。それから、わが醸造した眞一酒も、至つて善いもので、かつて、宗族を宴する時の御馳走とした位である。

【餘論】紀昀は「殊に語を成さず」といつて居るが、いかにも、その通り、今次、愈よ北歸するのであるから、區區たる口腹の事以外に、もツと然るべき言ひ草の無い筈は無いと思はれる。

缾笙

缾笙

庚辰八月二十八日、劉幾仲餞飲東坡、中觴聞笙簫聲、杳杳若在雲霄間、抑揚往返、粗中音節、徐而察之、則出於雙缾、水火相得、自然吟嘯、蓋食頃乃已、坐客驚歎、得未曾有、請作缾笙詩記之。

【訓讀】 庚辰八月二十八日、劉幾仲、東坡を餞飲す。中觴にして、笙簫の聲を聞く、杳杳として雲霄の間に在るが若く、抑揚往返、粗ぼ音節に中る。徐にして之を察すれば、則ち雙缾に出で、水火相得て、自然に吟嘯す、蓋し食頃にして乃ち已む。坐客驚歎して未曾有を得たりとし、請うて、缾笙の詩を作つて之を記せしむ。

孤松吟風細冷冷、〔一〕 孤松、風に吟じて細冷冷、
〔二〕獨繭長繅女媧笙。〔三〕 獨繭、長く繅る、女媧の笙。
陋哉石鼎〔四〕逢彌明、 陋なるかな、石鼎、彌明に逢ふ、
〔五〕蚯蚓竅作蒼蠅聲。 蚯蚓の竅は作す、蒼蠅の聲。
缾中宮商自相賡、 缾中の宮商、自ら相賡す、
〔六〕昭文無虧亦無成。 昭文、虧くるなく、亦た成るなし。
東坡醉熟呼不醒、 東坡、醉、熟して呼べども醒めず、
但云作勞吾耳鳴。 但だ云ふ、吾が耳を勞するの鳴を作すと。

【字解】〔一〕冷冷 清亮なる貌。〔二〕獨繭 神仙傳に「園客、蠶を養うて五色の獨蠒を成す、これを繰れば月を經て絶えず」とある。〔三〕女媧笙 禮記の疏に「女媧氏、風姓、庖犧の制度を承け、はじめて笙中の簧を作る」とある。〔四〕石鼎 韓愈・劉師服等が軒轅彌明と共に、石鼎聯句を作つたといふことで、前に次ニ部發父集句ニ及び地爐の詩中に注して置いた。〔五〕蚯蚓 この一句は石鼎聯句中の二句の意を合せたものである。〔六〕昭文 莊子に見え、前に和ニ陶雜詩一の詩中に注して置いた、〔七〕勞吾耳鳴 晉書載記に「石勒力耕、鞞鐸の聲を聞く、毎に歸つて其母に告ぐ。母曰く、耳を勞するの鳴を作す、不祥に非ざるなり」とある。

【題義】 缾笙とは如何なものかといふことに就いては、引中に於て詳述してある。元符三年庚辰八月二十八日、劉幾仲が東坡の爲に餞別の宴を設けた。酒もりの最中、笙簫の樣な聲が聞こえ、杳杳として雲霄の間に在るが如く、抑揚往返、略ぼ音節に中つて居る。これは不思議だといふので、時を移して、よくよく見ると、その聲は、雙缾より起り、水火相得て、自然に吟嘯するので、しばらくすると、止んで仕舞つた。坐客は、驚歎して、未だ曾て有らざりしものを見聞したといひ、予に缾笙の詩を作らむことを請ふたから、これを賦して、取り敢へず、その事を記したといふのである。但し、席主たりし劉幾仲の爵里等は不詳である。

【詩意】 その聲たるや、孤松の風に吟するが如く、細くて清亮であるし、五色の獨繭の絲を長長と紡ぐが如く、そして、女媧の初めて造つた笙の聲音を偲ばしめる。これは、缾中の水が涌き立つて發す

るので、韓退之輩が軒轅彌明に遇うて石鼎の聯句を爲し、その中に、「時於蚯蚓竅、微作蒼蠅鳴」といつたのも、まことに淺陋であるといふことを悟らしめる。缾中の聲は、宮商に協うて、自然に賡和するが如く、かの昭文の琴を彈ずる時、成虧以上に超越した場合と同じである。ここに、東坡は、すツかり酒に醉ひ、眠つたままで、呼べども醒めず、折角の珍らしい音色に對しても、吾が耳を勞して鳴るものに過ぎぬといつて、格別、聞かうともしなかつた。

【餘論】 紀昀は「歷落、奇逸の氣あり」といつて居る。

歐陽晦夫遺接羅琴枕戲作此詩謝之

歐陽晦夫、接羅琴枕を遺る、戲に此詩を作つて之を謝す

攜兒過嶺今七年。 兒を攜へ、嶺を過ぎて今七年、
(一)晚途更著(二)黎衣冠。 晚途、更に著く黎の衣冠。
白頭穿林要(三)藤帽。 白頭、林を穿つて藤帽を要し、
赤脚渡水須(四)花縵。 赤脚、水を渡つて花縵を須ふ。
不愁故人驚(五)絕倒。 愁へず、故人の驚いて絕倒するを、

但使俚俗相恬安。 但だ俚俗をして相恬安せしむ。
見君合浦如夢寐。 君を合浦に見る、夢寐の如し、
挽須握手俱(六)汍瀾。 須を挽き、手を握つて、俱に汍瀾。
妻縫接羅(七)霧縠細。 妻は接羅を縫うて、霧縠細に、
兒送琴枕氷徽寒。 兒は琴枕を送つて、氷徽寒し。
無絃且寄(八)陶令意。 無絃、且つ寄す陶令の意、
倒載猶作(九)山公看。 倒載、猶ほ山公の看を作す。
我懷汝陰(一〇)六一老。 われは懷ふ汝陰の六一老、
眉宇秀發如春巒。 眉宇秀發、春巒の如し。
羽衣鶴氅古仙伯。 羽衣鶴氅、古仙伯、
岌岌兩(一一)柱扶霜紈。 岌岌たる兩柱、霜紈を扶く。
至今畫像作此服。 今に至つて、畫像、この服を作す、
凜如退之加(一二)渥丹。 凜として、退之の如く、渥丹を加ふ。

【字解】【一】晚途 晚年に同じ。【二】黎衣冠 黎人の衣冠。王註に、「黎は、生黎を謂ふなり。儋州の俗、山嶺を呼んで黎となす。而して人、その間に居る、號して生黎といふ、地志載するところに見ゆ。今、黎衣冠といふ、黎人服するところの衣冠を謂ふなり」とあり、査註に「太平寰宇記、海南の風俗、男子髽首にして梳を插み、人齒を帶びて瓔飾となし、木皮を績んで衣となし、女人は五色の布を以て帽となし、斑布を以て裙となし、號して都籠といふ」とある。【三】藤帽 番禺雜編に「生黎人、藤を用ひて裹頭を織り、匯陽子と號す」とある。【四】須花縵 一に須を愁に作つてあつて、その方が意味が通ずる。花縵は頭上の花飾りで、西域記に「西域國人、首に花縵を冠し、身に瓔珞を衣る」とある。【五】絕倒 ここでは、笑つて噴き出すこと。【六】汍瀾 涙の流れる貌。【七】霧縠 縐地の細かきをいふ。【八】陶令 陶淵明が無絃の琴を彈ぜしこと、前に謝蘇自之及び覯月聽琴の詩中に注して置いた。【九】

爾來前輩皆鬼錄。(一三)　爾來、前輩、皆鬼錄、

我亦帶脫巾攲寬。　われ亦た帶脫、巾攲つて寬なり。

作詩頗似六一語。　詩を作つて、頗る似たり六一の語、

往往亦帶梅翁酸。(一四)　往往亦た帶ぶ梅翁の酸なるを。

山公　山簡が倒に接䍦を戴きしこと前に東湖及び饒渓行の詩中に注して置いた。【一〇】汝陰六一老　汝陰は穎州、六一老は歐陽修。その自ら作れる六一居士傳に「將に穎水の上に退休せむとし、更めて六一居士と號す。客、問ふあり、曰く、六一とは何の謂ぞや。居士曰く、藏書一萬卷、集錄金石遺文一千卷、琴一張あり、棋一局あり、而して常に酒一壺を置き、吾が一翁を以て五物の間に老ゆ、これ豈に六一たらざらむや」とある。【一一】兩柱　兩方の高くなつて居る冠。【一二】渥丹　詩經に顏如渥丹とある。【一三】鬼錄　冥界に在る死者の帳簿。【一四】梅翁酸　梅聖兪の寒險なる趣致。

【題義】接䍦は頭巾。この詩は、歐陽晦夫が頭巾と琴枕とを贈つたから、戲に作つて謝意を表したといふのである。晦夫は、前にも琴枕を贈つたことがあつて、何時でも、さう琴枕ばかり贈る筈もなからうと思はれるので、これは、矢張、前の事に係り、接䍦と併せて詩にしたのであらう。

【詩意】予は、倅を引き連れ、五嶺を越えて、南方の惠儋二州に居たことは、今で七歲、晩年に成つて、黎人の衣冠を著けて、野蠻化した始末。そこで、白髮頭で林中を穿つ時には、蘢で造つた帽子が必要であるし、跣足で水を徒渉する時は、頭上の花縵を濡らしては心配することがある。舊知の人人が見ると、驚いて吹き出すかも知れぬが、そんな事には頓著なく、鄉に入つては鄉に從へといふ通り、俚俗と逆ふなきを旨とするからである。君に廉州で逢つたのは、丸で夢中の如く、鬚を挽き、手を握つて、二人ながら、涙、流れて止まらず、そして、君の細君は、目の細かい絹地で頭巾を縫つて呉れ、令息は、氷絃の冷かなるを帶ゆる琴枕を届けて呉れた。琴は、陶淵明が無絃を彈じた遺意を寄すべく、頭巾は、裏がへしに被つて、山簡の樣に見られるであらう。潁州に退隱された六一老は、わが平生敬慕するところで、その眉宇は秀發にして、春山の如く、翩翩たる羽衣や、純白なる鶴氅を著て居られた處は、丸で古しへの仙人といつても善い位、そして、白い絹で造つて兩端の峨峨として高い冠を被つて居られる。今日でも、歐陽公の肖像といへば、乾度、その服裝であるが、その凜たる風度は、さながら韓退之の如く、唯だ顏色が、もツと赤くて渥丹の樣であるといふことが違ふのみである。その後、先輩の人人は、皆死んで仕舞ひ、予も亦た瘦せ衰へて、帶はするけ、頭巾は攲つて綏くなつた。ここに、詩を作つたが、頗る六一老の語に類し、且つ又往往にして梅聖兪の樣な寒酸の趣を存して居る。

【餘論】紀昀は「闕文あるに似たり」といつて居るが、いかさま、結末が稍やまとまらぬ樣である。

309
65

終

續國譯漢文大成

文學部

六十六の下

309
65

帙入

始

續國譯漢文大成

文學部　第六十六册（第十七帙の下ノ二）

蘇東坡詩集　六の二

309
65

蘇東坡詩集　卷四十四

古今體詩　四十三首

次韻王鬱林

王鬱林に次韻す

晩途流落不堪言。
晩途流落、言ふに堪へず、

海上春泥手自翻。
海上の春泥、手自ら翻す。

漢使節空餘皓首。(一)
漢使、節、空しくして皓首を餘し、

故侯瓜在有頹垣。(二)
故侯、瓜在り、頹垣あり。

平生多難非天意。
平生多難、天意に非ず、

此去殘年盡主恩。
ここを去つて、殘年、盡く主恩。

誤辱使臣相抆拭。(三)
誤つて、使臣を辱うして、相抆拭、

寧聞老鶴更乘軒。(四)
むしろ聞かむや、老鶴更に軒に乘ずるを。

【字解】【一】漢使節空　蘇武、使して匈奴に居ること久しく、節旄盡く落ちしこと、前に玉盤盂の詩中に注して置いた。【二】故侯瓜　邵平の事、前に蔡州道上の詩中に注して置いた。【三】抆拭　二字、ともにぬぐふ。漢書朱博傳に「左馮翊となる、長陵の大姓尙方禁、少時、かつて人の妻を盜んで斫られ、創、その頰に著く。府功曹、その賂を受け、白して禁を除して守尉に調す。博、聞知し、他事を以て召し見、その面

を視るに、果して癥あり。博、左右を辟け、禁に是れ何等の創と問ふや、禁、自ら情の得らるるを知り、叩頭して狀を伏す。博、笑つて曰く、大丈夫、もとより時に之あり、焉ぞ、歸の恥を避ぎ、拔狀して禁を用ひむと欲す、能く自ら效すや不や、と。禁、且つ喜び且つ懼れ、對へて曰く、必ず死せむ、と。博、因つて之を親信す」とある。【四】老鶴更乘軒　左傳に「衞の懿公、鶴を好み、鶴に軒に乘するものあり」と見ゆ。

【題義】この詩は、鬱林太守王某が詩を寄せしに因り、次韻して酬いたのである。輿地廣記に「鬱林州は、古しへの蠻夷の地、秦、桂林郡を立つ、宋の開寶七年、黨牢二州を廢して鬱林に入る」とあり、九域志に「廣南西路、鬱林郡軍事、南流縣に治す、西南、廉州に至る二百里」とある。王某の名字は失考。

【詩意】予は、晩年流落して、その不運は、御話にも成らぬ位、海邊に於て、春泥を自分ではね上げたと同じである。たとへば、蘇武が漢の使となつて、久しく胡地に留まり、節旄いつしか落ち盡して、白髮頭を剩せしが如く、邵平が瓜を植ゑて、破れ垣が依然として殘つて居る樣なものである。平生、度度ひどい目に遇つたのは、何も天意ではなく、ここを去つて、無事に餘生を送ることが出來れば、卽ち天恩である。頃ろ、態態、使者を遣され、從來の罪過を拭ひ消し下されるとのことであるが、老鶴が寵を得て、車に乘せられた樣な主意は、決して承はらない。

【餘論】乾隆御批には「忠厚悱惻、大雅の遺音」とあり、紀昀は「五六、詩人の言」といつて居る。

藤州江上、夜起對月、贈邵道士

藤州江上、夜、起つて月に對し、邵道士に贈る

江月照我心。江水洗我肝。　江月、わが心を照らし、江水、わが肝を洗ふ。
端如徑寸珠。墮此白玉盤。（一）　端に徑寸の珠の如く、この白玉盤を墮す。
我心本如此。月滿江（二）不湍。　わが心、本と此の如く、月、滿ちて、江、湍せず。
起舞者誰歟。莫作三人看。（三）　起つて舞ふものは誰か、三人の看を作す莫れ。
（四）嶠南瘴癘地。有此江月寒。　嶠南、瘴癘の地、この江月の寒きあり。
乃知天壤間。何人不清安。　乃ち知る、天壤の間、何人か清安ならざらむ。
牀頭有白酒。盎若白露溥。　牀頭に白酒あり、盎として、白露の溥たるが若し。
獨醉還獨醒。夜氣清漫漫。　獨り醉ひ、還た獨り醒む、夜氣、清漫漫。
仍呼邵道士。（五）把琴月下彈。　仍つて、邵道士を呼び、琴を把つて月下に彈ず。
（六）相將乘一葉。夜下蒼梧（七）灘。　相將ゐて一葉に乘じ、夜下る蒼梧灘。

【字解】【一】白玉盤　月を云ふ。【二】江不湍　湍は早瀨、江水が急流しない。【三】三人看　月と我と我が影とを併せて云ふ。

【四】 嶠南　嶺南に同じ。【五】 邵道士　後に送邵道士彦肅還都嶠といふ詩があつて、即ち其人なるべく、そこで、名は彦肅といふことが分かる。【六】 相將　相率う、相攜ふに同じ。【七】 蒼梧瀬　漢書地理志に「蒼梧は越の地、元封五年、十三州刺史を置く、交州部七郡、蒼梧は其一」とあり、名勝志に「藤江は、藤源縣に在り。交趾を出でて邕州に至る、左右江、ここに至りて繡江と合し、又東流し、番禺に至つて海に入る。蘇子瞻、舟を藤城の下に繫ぐといふは、即ち此處なり。鵝見瀬あり、縣南に在り、金環瀬は峽内に在り」と見ゆ。

【題義】 この詩は、藤州の江邊で、夜中に起きて月に對し、仍つて賦して邵道士に贈つたのである。

【詩意】 江天の月は、わが心を照らし、江中の水は、我が肝を洗ひ、白玉盤と見まがふ月が江心に落ちると、まさしく、直徑一寸ほどある珠の如く見える。わが心は、すでに、この月の如く、月は、まん圓で、江水急流せず、まことに、好い景色。この間、起つて舞ふものは誰か、月と影とを併せて、三人に見える樣に、浮かれ出してはならぬ。嶺南は、名だたる瘴癘の地とはいひながら、江月は、寒げに見える。すると、天地の間、何人か淸安ならざるべき。幸にして、牀頭には濁酒があつて、盎然たることは、白露の溥として滿ち湛へて居るが如くである。それを獨り酌んで醉ひ、やがて又獨り醒めると、夜氣淸く、漫漫として、はてもなく、ひいやりと身にしみる。そこで、邵道士を呼び醒まし、琴を取り出して、月下に彈じた。これから、君と共に一葉の舟に乘じ、この良夜に蒼梧の急流を下らうと思ふ。

【餘論】 乾隆御批に「舒元輿の序に曰く、一篇只だ形容擬議を辨ず、猶ほ是れ月下孤雄の伎倆、と。この詩、乃ち能く妙明の心を證出し、直に是れ天を照らし、地を照らす」とあり、紀昀は「淸光明徹、復た筆墨の痕なし、これを神來の候となす」といつて居る。

徐元用使君、與其子端常、邀僕與小兒過、同游東山浮金堂、戲作此詩

徐元用使君、其子端常と、僕と小兒過とを邀へ、同じく東山の浮金堂に游ぶ。戲に此詩を作る

昔與徐(一)使君。共賞錢(二)塘春。　むかし、徐使君と、共に錢塘の春を賞す。
愛此小(三)天竺。時來中(四)聖人。　愛す、この小天竺、時に中聖人を來らしむ。
松如遷客老。酒似使君醇。　松は遷客の如く老い、酒は使君に似て醇なり。
繫舟藤城下。弄月鐔(五)江濱。　舟を藤城の下に繫ぎ、月を鐔江の濱に弄す。
江月夜夜好。山雲朝朝新。　江月、夜夜好く、山雲、朝朝新なり。
使君有令子。眞是石(六)麒麟。　使君、令子あり、眞に是れ石麒麟。
我子乃散(七)材。有如木輪(八)囷。　わが子、乃ち散材、木の輪囷たるが如きあり。

二老白接䍦。兩郎烏角巾。　二老は白接䍦、兩郎は烏角巾。

醉臥松下石。扶歸江上津。　醉うて松下の石に臥し、扶けられて江上の津に歸る。

浮(九)橋半沒水。揭(一〇)此碧鱗鱗。　浮橋、半ば水に沒し、この碧鱗鱗たるを揭す。

【字解】【一】徐使君　使君は縣令以上の尊稱、前に數ば見ゆ。【二】錢塘　即ち西湖の所在地。【三】小天竺　王註に「杭州の佛寺に上下兩天竺あり、おもふに、今、浮金堂の景、稍や之に似たり、故に小の稱あるなり」とある。【四】中聖人　前に贈孫莘老七絕の詩中に注して置いた。然るべき高僧。【五】鐔江　王註に「藤州の縣、名づけて鐔津といふ」とある。【六】石麒麟　前に贈辯才師の詩中に注して置いた。【七】散材　役に立たぬ材木、前に子由初到陳州の詩中に注して置いた。【八】輪囷　節くれ立つ。【九】浮橋　舟橋。【一〇】揭此　揭は、衣裳を捲くり上げる。

【題義】徐元用の名は疇であらうといふこと。この人は、元祐六年、右通直郎新差權知連州たりしことが、通鑑長編に見えて居る。はじめ、杭州に於て、東坡と相知り、後に親を養ふこと畢りし後は、復た越に官して居たのであらう。その徐元用が、子息端常と共に、東坡と末子過とを迎へて、同じく東山なる浮金堂に游びしに因り、東坡は、戲に此詩を作つたといふのである。

【詩意】むかし、徐使君と共に、錢塘の春を賞覽したことがあるが、ここ浮金堂は、宛然たる小天竺、時たま、然るべき高僧が來て、留まつて居られる。境內の松は、遷客たる予の如く老い、酒は、使君に似て清醇である。予は、舟を藤城の下に繫ぎ、夜は月を鐔江の濱に弄したが、江月、夜夜宜しく、山雲は朝朝新にして、まことに面白い景色。使君には、子息があつて、眞に天上の石麒麟に比すべく、愚息の如きは、役に立たぬ謂はゆる散材で、木の節くれ立つて居る樣である。使君と予とは、白い頭巾を戴き、二人の若い者は、黑い角巾を被り、醉うては松下の石に臥し、扶けられて江上の渡し場に歸つて來た。すると、舟橋が半ば水中に沒して居たから、止むを得ず、衣を捲くり上げて、碧鱗鱗たる處を徒涉した。

【餘論】紀昀は「平直にして興象少し」といつて居るが、いかにも、その通りで、材料の選擇排列が甚だ粗率である。

送鮮于都曹歸蜀灌口舊居　鮮于都曹の蜀の灌口の舊居に歸るを送る

鬅(一)盡霜須照碧(二)銅。　霜須を鬅き盡して、碧銅を照らす、

依然春雪在長松。　依然、春雪、長松に在り。

朝行犀(三)浦催收芋。　朝に犀浦を行いて、芋を收むるを催し、

夜渡繩(四)橋看伏(五)龍。　夜、繩橋を渡つて、伏龍を看る。

莫嘆倦游無駟(六)馬。　嘆ずる莫れ、倦游、駟馬なきを、

【字解】【一】鬅盡　王註に「鬅は鑷んで鑷の如し」とある、即ち拔き取ること。【二】碧銅　鏡を云ふ。【三】犀浦　元和郡縣志に「犀浦は元と成都縣の界。垂拱中、犀浦縣を置く、李冰造るところの石犀に因つて名づく」とある。【四】繩橋　釣り

要將老健敵千鍾(七)。　老健を將て、千鍾に敵するを要す。

子雲(八)三世惟身在。　子雲三世、惟だ身あり、

爲向西南說病容。　爲に西南に向つて、病容を說く。

橋、王註に「灌口に在り、繩か引いて之を架す、故に繩橋といふ」とあり、吳船錄に「橋の廣さ十二丈、繩の長さ百二十丈、上に竹笆を布き、數木ごとに一架を以てし、橋を中空に挂く。大風、これを過ぐれば、漁人の網を晒し、染家の彩布を晾らすの狀の如し。又須らく爽を捨てて疾步すべし、稍や從容たれば、震掉して行くべからず」とある。【五】伏龍　觀の名、范石湖、離堆の詩の序に「沿江の兩岸中斷、李氷、これを鑿つて、以て江水を分つ、上に伏龍觀あり、これ氷が孽龍を鎖せし處」とある。【六】駟馬　馬車を引かす四頭立の馬、【七】千鍾　俸祿の多きを云ふ。【八】子雲　漢書揚雄傳に「字は子雲、蜀郡成都の人なり、成哀平の三世を歷て、官を徙さず」とある。

【題義】鮮于都曹は名字失考。成都古今記に「秦の昭王、李氷を以て蜀守に代らしむ、離堆を鑿ちて洙水の害を辟け、二江を成都中に穿つ、ここに於て、沃野千里、號して陸海となす、民、その惠を思ひ、廟を立つて灌口山に在り」と見ゆ。この詩は、都曹たる鮮于某が蜀なる灌口の舊居に歸らむとするを送つて作つたのである。

【詩意】霜の色せる鬚を拔き去つて、鏡に對し、どうやら、若若しく成つた積りで居ても、白髮は、依然として、春の雪が丈高い松にかかつて居る樣である。かくの如く老いたる君が、故鄕に歸りし後は、朝に犀浦を巡つて、早く芋を取り入れろといつて、小作人に催促し、夜は、釣り橋を渡つて、李氷が鎖したといふ龍を看て居る。すでに、官游に倦んで、格別出世もせず、四頭立の馬車に乘る身分に成り得ざりしことを歎するに及ばず、唯だ老いての後の壯健は、千鍾の俸祿にも匹敵する。君は、彼の揚子雲が、三代の間、惟だ其身を餘して、すこしも官を徙さざりしと同じである。さればこそ、西南に向つて、病後の容態は如何と御尋ねする次第である。

書堂嶼

書堂嶼

蒼山古木書堂嶼。　蒼山古木、書堂嶼、

北出湘水百餘步。　北、湘水を出づる百餘步。

誰爲往來斷世界。　誰か往來の爲に世界を斷き、

至今人指安禪(一)處。　今に至つて人は指す安禪の處。

豈無驚蛇與飛鳥。　豈に驚蛇と飛鳥となからむや、

後來那復知其趣。　後來、那ぞ復た其趣を知らむ。

不知我身今是否。　知らず、わが身、今是なりや否やを、

空記名稱在常住(二)。　空しく名稱を記して常住に在り。

【字解】【一】安禪　山公註に「釋典、初禪は五法を修し、四禪は八災患を離る、不動地と名づく、これを安禪となす」とある。【二】常住　楞嚴經に「了然自ら知り、本妙心を得、常住不滅」とある。

【題義】査註に「舊志を案ずるに、書堂嶼に三あり、一は梧州に在り、一は韶州曲江縣に在り、一は

仁化縣に在り、未だ孰れか是なるを詳にせず。水經を考ふるに、湘水は、零陵始安縣より出づ、註に云ふ、湘灕同源、分れて二水となり、南を灕水となし、北は湘川と。今詩に云ふ、北出二湘水一百餘步と、當に是れ梧州の書堂嶼なるべし」とある。

【詩意】書堂嶼は、蒼然たる山で、古木之に被り、湘水の北百餘步の處に當つて居る。ここに往來する爲に、誰が世界を打ち斷いで、路を開いたのであるか、今日に至るも、人は遙に之を指して、安禪の處だといつて居る。ここには、驚蛇と飛鳥とが居ない譯でもないが、後來、かかる趣を知るものはない。わが身は、今果して是なりや否やを知らざれども、ここに、空しく書堂嶼てふ名稱を記して、此詩を作り、常住の緣を結んだのである。

【餘論】紀昀は「輕率」といつて、例の如くけなして居る。

送邵道士彥肅還都嶠

邵道士彥肅の都嶠に還るを送る

乞得紛紛擾擾身。　乞ひ得たり紛紛擾擾の身、
結茅都嶠與仙鄰。　茅を都嶠に結んで、仙と鄰る。
少而寡欲顏常好。　少にして欲寡く、顏、常に好く、
老不求名語益眞。　老いて名を求めず、語、益す眞なり。
許邁有妻還學道。　許邁、妻あり、還た道を學び、
陶潛無酒亦從人。　陶潛、酒なく、亦た人に從ふ、
相隨十日還歸去。　相隨ふ、十日、還た歸り去る、
萬劫清游結此因。　萬劫淸游、この因を結ぶ。

【字解】【一】乞得　暇を貰ふ。【二】紛紛擾擾身　此世に在る身體。【三】都嶠　題義の項に注して置く。【四】許邁　晉書の本傳に「字は遠游、父母尙ほ存す、茅嶺の洞室に往來す。父母すでに終る、乃ち婦孫氏を遣して家に歸らしめ、遂に其同志と携へて徧く名山に游ぶ」とある。【五】陶潛　晉書の本傳に「羊松齡・龐遵等、或は酒あつて之を要す、ともに酒の座に至り、主人を識らずと雖も、亦た欣然として忤ふなく、醉すれば卽ち返る」とある。【六】萬劫　劫は世界の破滅をいふので、永久といふ意。

【題義】邵道士は、前にも見えて居た。都嶠は山洞の名、洞天福地記に「第二十都嶠山洞、周回一百八十里、寶元の天と名づく、容州に在り」と記し、司馬子微、天地宮府圖の序に「都嶠山洞は、容州普寧縣に在り、仙人劉根、これを治む」とあり、名勝志に「都嶠山は梧州容縣の南に在り、山に八峰あり、南北二洞あり、南洞は寬廣平坦、北洞は差や狹し、星壇を爲るもの八、中峰の絕頂に中宮院あり」と見ゆ。この詩は、道士邵彥肅の都嶠山洞に歸るを送つたのである。

【詩意】この紛紛擾擾たる身を乞ひ受けて、暇を貰ひ、全く此世を脫離すれば、茅屋を都嶠の山洞に結んで、仙人と鄰り合ふことであらう。君は、少にして慾望少きが故に、何等の煩悶なく、從つて、顏の色が常に澤澤しくて宜しいし、老いても、虛名を求めず、あくまで眞面目である處から、その言葉

は、すべて眞實である。君は、許邁の如く、細君までが仙道を學び、又陶淵明の如く、酒が無くても、人に從つて決して忤ふことはない。ここに相隨ふこと十日にして、君は歸り去らむとし、愈よ御別となつたが、永久に亡びざる淸游の因緣を結んだのは、予に取つて、まことに喜ばしいことである。

【餘論】篇中、還の字が近接して複出して居るのは、一寸目障りである。

書韓幹二馬　韓幹の二馬に書す

赤髯碧眼老鮮卑。　赤髯碧眼、老鮮卑、
回策如縈獨善騎。　策を回すこと縈るが如く、獨り善く騎す。
赭白紫騮俱絕世。　赭白紫騮、ともに絕世、
馬中湛岳有妍姿。　馬中の湛岳、妍姿あり。

【字解】【一】老鮮卑　後漢書鮮卑傳に「東胡の支なり、別に鮮卑山に依る、故に因つて號とす」とある。【二】回策　晉書に「王濟、その兄の子濟を馬に乘ぜしむ、姿容すでに妙、策を廻らすこと、縈るが如く、善く騎するもの、以て之に過ぐるなし」とある。【三】赭白紫騮　ともに馬の名、文選顏延年、赭白馬賦に乘輿赭白とあり、李白、紫騮馬の詩に、紫騮行且嘶、雙翻碧玉蹄とある。【四】湛岳　夏侯湛と潘岳、ともに姿容に美なるを以て有名であつた。

【題義】韓幹は、唐の玄宗の時の人で、畫馬に工なるを以て世に知られて居た。この詩は、二頭の馬を畫いた韓幹の圖に題したのである。

【詩意】赤い髯に碧い目をして居る鮮卑の老夷が馬に跨り、鞭を揮り廻はすこと、さながら廻るが如く、その騎馬に巧なることは、他に比類なき位。そして一は赭白、一は紫騮、ともに世にすぐれ、その姿の妍麗なるは、馬中の夏侯湛・潘岳とも稱すべきものである。

觀大水望朝陽巖作　大水を觀、朝陽巖を望みて作る

朝陽巖前不結廬。　朝陽巖前、廬を結ばず、
下眺江水百步餘。　下に江水を眺む、百步餘。
春泉濺濺出乳竇。　春泉濺濺、乳竇を出で、
青沙白石半洿涂。　青沙白石、半ば洿涂。
不到津頭二三日。　津頭に到らざる二三日、
誰知江水漲天墟。　誰か知らむ、江水の天墟に漲るを。
遙望橫盃不敢濟。　遙に望み、盃を橫へて、敢て濟らず、
巖口正有人罾魚。　巖口、正に人の魚を罾するあり。

【字解】【一】乳竇　鍾乳の滴れる穴。【二】洿涂　涂は塗、汚れたる路。【三】天墟　列子に「無底の谷、名づけて歸墟といふ」とある。天然の深壑。【四】橫盃　馮應榴の案に「盃渡の意を用ふるに似たり、再考」とある。杯渡の事は、高僧傳に見え「その名姓を知らず」とあるが、常套の典故で、杜甫にも杯渡不驚鷗の句がある。

【題義】 元結の游二朝陽巖一記に「零陵に至り、その郭中、水石の異あるを愛し、舟を泊して之を尋ね、巖と洞とを得たり、その東に向ふを以て、遂に以て之に名づく」とあり、柳宗元の記に「朝陽巖より東南に水行して、蕪江に至る、取るべきもの三、袁家渴に如くなし」とあり、詩話總龜に「朝陽巖は、永州城南一里餘に在り、下、瀟水に臨む。元結、名を取り、自ら歌を爲つて云ふ、朝陽巖下瀟水深、朝陽洞中寒泉清、零陵城郭夾二瀟水一、巖洞幽奇當二郡城一」とあり、施昱の游記に「永州の西門を出でて、舟行二里、百歩に及ばずして山頂に至る。上下二巖あり。上巖は石厂聳植、石側の一亭を觀瀾といふ、ここを過ぎ、再び石磴數十級を歴、乃ち下巖に至る、大江汩汩、その前に循ふ」とある。この首は、大洪水の時、朝陽巖を望んで作つたのである。しかし、査愼行の案に「紀年錄、先生、庚辰八月末に於て廉州に至り、木栰を作つて水を下り、容藤を歴て梧に至る。この歲、復た永州に移るの命あり、先生の謝表亦た云ふ、先自二昌化貶所一移二廉州一、又自二廉州一移二舒州節度副使一、永州居住、行至二英州一、復二朝奉郎提擧成都玉局觀一云云、と。先生、永州に移るの命、當に本年八月以後に在るべし。その曾て永州に至ると否と、本集及び紀年錄、皆考ふべきなし。據るべきものは、止だ此詩あるのみ。而して、施氏原本、又載せず、外集杭州卷中に載するも、據るところを知らず」とあり、馮應榴の案に「先生の李之儀に與ふる書に、某移二永州一、過二五羊一、度二大庾一、至レ吉出レ陸、由二長沙一至レ永、荷叔靜拏レ舟、相送數十里、大浪中作二此書一云云とありと雖も、但し是れ藤梧、はじめて櫂を發する時に寄するところの書、預め永に赴くの途、かくの如きを經るを言ふ。英州に至るに及びて、又玉局の命を聞き、卽ち庾嶺より、扁舟、直に下る、實は未だ永に至らず、且つ詩に春泉の字あり、時候亦た合はず、この詩、必ず先生の作に非ざるなり」とあつて、成程と頷かしめる。

【詩意】 朝陽巖前に纜を結ばず、偶ま此に來て、下に江水を眺めると、わづかに百餘歩を隔つるのみ。春の泉は、濺濺として、鍾乳の滴れる巖洞を出で、その邊一帶、靑沙白石、半ば穢げに泥を帶びて居る。二三日、舟つきの處に往つて見なかつたが、誰か知るべき、江水は、天然の踏墟に漲つて居る。そこで、それを遙望し、盃を浮べて渡らうともせず、悵然佇立して居ると、折から、巖口には、魚を網する人が居つた。

【餘論】 紀昀は「杜吳の體に效ふ、未だ高老となさず、吳體拗折、渾然天成に非ざれば不可」といつて居る。

將レ至二廣州一、用二過韻一、寄二邁迨二子一

將に廣州に至らむとし、過の韻を用ひて、邁・迨二子に寄す

皇天遣レ出レ家。臨レ老乃學レ道。

皇天、家を出でしめ、老に臨んで、乃ち道を學ぶ。

北歸爲二兒子一。破レ戒堪二一笑一。

北歸、兒子の爲めなり、戒を破つて一笑に堪へたり。

披雲見天眼。回首失海潦。　雲を披いて天眼を見、首を回らせば海潦を失ふ。
蠻唱與黎歌。餘音猶杳杳。　蠻唱と黎歌と、餘音、猶は杳杳。
大兒收衆稗。四歲守孤嶠。　大兒は、衆稗を收め、四歲、孤嶠を守る。
次子病學醫。三折乃粗曉。　次子は、病んで醫を學び、三折、乃ち粗ぼ曉る。
小兒耕且養。得暇爲書繞。　小兒は、耕して且つ養ひ、暇を得れば書の爲に繞る。
我亦困詩酒。去道愈茫渺。　われ亦た詩酒に困み、道を去つて愈よ茫渺。
紛紛何時定。所至皆可老。　紛紛、何の時か定まらむ、至るところ、皆老ゆべし。
莫爲柳儀曹。詩書教蠻獠。　柳儀曹となる莫れ、詩書、蠻獠に敎ふ。
亦莫事登陟。谿山有何好。　亦た登陟を事とする莫れ、谿山、何の好きかある。
安居與我游。閉戶淨洒掃。　安居、われと游び、戶を閉ぢて淨く洒掃せよ。

【字解】【一】出家　ここでは、家族と分れたといふ義。【二】天眼　雲の破れて靑天の見えることをいふ。【三】海潦　行潦の如き海。【四】孤嶠　嶠は山。これは、惠州の白鶴峰を指すのであらう。【五】三折　左傳に「晉の范中行氏、將に公を伐たむとす。齊の高彊曰く、三たび肱を折つて良醫たるを知る、唯だ君を伐つを不可となす」とある。【六】耕且養　漢書藝文志に「古しへの學者は、耕し且つ養ひ、三年にして一藝に通ず」とあり、揚子法言に「古しへの學者は、耕し且つ養ふ」とある。【七】柳儀曹　王註に「職林、魏に儀曹郞あり、唐、改めて禮部といふ」とある。唐書柳宗元傳に「貞元中、禮部員外郞となり、永州司馬に貶せられ、元和中、柳州刺史に徙る」とあるが、劉禹錫の集などでは、每每、柳儀曹と稱して居る。

【題義】この詩は、將に廣州に到著せむとする時、末子過の詩韻を用ひて、邁・迨の二子に寄せたので、この時、長子邁は、家屬と共に、惠州なる例の白鶴峰下の新居を守り、次子迨は、常州に居た。過の斜川集に將至五羊、先寄伯達・仲豫二兄と題する詩があつて、卽ちこの韻を用ひた原作である。

【詩意】皇天は、予をして、家族と離れ、老に臨んで道を學ばしめた。今北に歸るのは、全く倅ともの爲めであつて、喜びの餘り、道家の戒律を破るは、まことに一笑すべきことである。雲を披いては、靑天の眼の如きを仰ぎ、首を回らせば、行潦の樣な海水は最早見えなくなり、蠻奴並に黎人の歌唱のみは、杳杳として、なほ耳に殘つて居る。長男は、多勢の稚子を引き具して、四年の久しき、白鶴峰下の新居を守り、次男は、病勝である爲に、醫術を學び、三たび、肱を折る樣に、散散困んだ揚句に、やツと、その大略に通曉する樣になり、末子は、自ら耕しつつ養ひ、暇さへあれば、讀書に忙しい。われも亦た詩酒に累せられて、道を去ること愈よ遠く、紛紛たる心中の愁は、何時鎭定するか分からぬが、到る處、どこでも、わが老を送ることは出來る。かの柳宗元の眞似をして、蠻獠の民に詩書を敎へもせず、さうかといつて、山丘に登りもせず、谿山は何の好き處があらうかといつて、多寡を括つて居

る。汝等と一緒に成つたならば、安居して、われと游ぶを旨とすべく、戸を閉ぢて、奇麗さッぱりと、ふき掃除をして呉れれば善いので、この外、格別に望むところはない。

【餘論】紀昀は「刻意擺脫、直にして剽ならず」といつて居る。

贈鄭清叟秀才

鄭清叟秀才に贈る

風濤戰(一)扶胥。海賊橫(二)泥子。
風濤、扶胥に戰ひ、海賊、泥子に橫はる。

胡爲犯(三)二怖。博此一笑喜。
胡すれぞ、二怖を犯し、この一笑の喜びを博せる。

問君奚所欲。欲談仁義耳。
君に問ふ、奚の欲するところ、仁義を談せむと欲するのみ。

我才不逮人。所有聊足已。
わが才、人に逮ばず、有るところ、聊か足らむのみ。

安能相付與。(四)過聽君誤矣。
安んぞ能く相付與せむ、過聽、君誤れり。

霜風掃瘴毒。冬日稍清美。
霜風、瘴毒を掃ひ、冬日、稍や清美。

年來萬事足。所欠惟一死。
年來、萬事足れり、欠くところは惟だ一死。

澹然兩無求。滑淨空(五)棐几。
澹然として、兩つながら求むるなく、滑淨、空しく棐几。

【字解】(一) 扶胥　廣州志に「扶胥鎭は、州城の南に在り」とある。(二) 泥子　王註に「扶胥泥子皆經海の處なり」とあり、査註に「泥子は未詳」とある。(三) 二怖　以上二つの危險。(四) 過聽　あやまつて聽く。(五) 棐几　榧の木で造つた几。

【題義】說明に及ばぬ、但し、鄭清叟は失考。

【詩意】扶胥鎭の外には風濤相戰ひ、泥子の邊では海賊が橫行して居る。どうして二つの危險を犯して、この一笑の喜に換へ得たのであるか。君に問うて、何を欲するかといへば、仁義を談じたいといはれる。わが才、もとより人に及ばざれども、現に所有するものは、聊か十分である積り、しかし、これを互に附與することは出來ないので、實際以上に聞いて居るのは、君の誤りで、予は、そんな偉いものではない。今しも、霜を帶びたる寒風は、瘴熱の毒を掃ひ、冬の日色は、聊か清美である。年來、萬事を以て足れりとして居て、唯だ一死を缺くばかり。君と予と、すでに澹然として求むるところなく、唯だ棐几だけは、滑に磨き込んである。

【餘論】紀昀は「微に剽意あり、然れども、語、頓宕あり、尙ほ甚だ滑ならず」といひ「年來の二句、宋人の詩話、亦た之を議す。然れども、東坡、特に自ら萬念皆空しく、故に語言文字を立てざるの意を言ふ、怨尤するところあるに非ず、論者、未だ上下の文義を見ざるのみ」といつて居る。

和孫叔靜兄弟李端叔唱和

孫叔靜兄弟・李端叔の唱和に和す

病骨瘦欲折。霜髯鑷更疏。　病骨、瘦せて折れむと欲す、霜髯、鑷けて更に疏なり。

喜聞新國政。兼得故人書。　喜んで新國政を聞く、兼ねて故人の書を得たり。

秉燭眞如夢。傾杯不敢餘。　燭を秉つて眞に夢の如く、杯を傾けて敢て餘さず。

天涯老兄弟。懷抱幾時攄。　天涯の老兄弟、懷抱、幾時か攄べむ。

【字解】【一】鑷・ 毛を拔く、前に送鮮于都曹の詩中に注して置いた。

【題義】 施註に「孫叔靜、名は鼛、錢塘の人、江都に徙る。年十五にして太學に游ぶ、老蘇先生、亟ば之を稱す。哲宗、提擧廣東常平に擢んづ。東坡、惠州に居り、極意ともに周旋す。二子、晁无咎・黃魯直の女を娶る。黨事起る、家人これを危む、叔靜、一も顧みるなし。平生行義に篤し、君子人なり。仕へて太僕卿殿中少監となり、顯謨閣待制知曹州單州を以て、靖康二年卒す。年八十六」とあり、馮應榴の案に「その兄弟の名字事蹟、ともに失考」とある。李端叔は、前に數ば見えて居た。この詩は、孫叔靜の兄弟と李端叔と唱和せし詩韻に次したのである。但し、紀昀は「題に脫誤の處あらむ」といつて居る。

【詩意】 予は衰老の身、病骨瘦せて將に折れむとし、白髯を拔くと、一層疎になつた。ここに、國政の革新されたことを聞いて喜び、おまけに、舊友の手書に接した。行樂の爲に、燭を秉れば、まことに夢の心地、杯を傾けて、すこしも酒を餘さない。君等兄弟は、天涯はるかに隔つて居るから、何時再び逢つて懷抱を陳べることが出來やうか。

【餘論】 紀昀は「渾老情あり、空調に同じからず」といつて居る。

廣倅蕭大夫借前韻見贈復和答之二首

廣倅蕭大夫、前韻を借りて贈らる、復た之に和答す　二首

生還粗勝虞。早退不如疏。　生還、粗ば虞に勝れり、早退、疏に若かず。

垂死初聞道。平生誤信書。　死に垂んとして初めて道を聞く、平生、誤つて書を信ず。

風濤驚夜半。疾病送災餘。　風濤、夜半に驚き、疾病、災餘を送る。

賴有蕭夫子。憂懷得少攄。　賴に蕭夫子あり、憂懷、少しく攄ぶるを得たり。

【字解】【一】勝虞・ 虞は虞翻、前に庚辰歲人日の詩中に注して置いた。査註に「案ずるに、先生、遠謫と雖も、猶は生還を得たり、故に虞に勝れりといふなり」とある。【二】如疏・ 疏は疏廣・疏受、卽ち二疏。漢書疏廣傳に「兄の子受と竝に太子の師傅となり、位に在ること五歲。廣、受に謂つて曰く、われ聞く、足るを知れば辱められず、止まるを知れば殆からず。今、官成り、名立つこと、か

くの如し、去らざれば、恐らくは、後悔あらむ。豈に如かむや、父子相隨ひ、關を出で故郷に歸老し、壽命を以て終らむには、亦た善からずや。受、叩頭して曰く、大人の誠に從はむ、と。卽日、ともに病を移して骸骨を乞ふ、上、皆これを許す」とある。

【題意】査註は「龍泉舊志、蕭世範、字は器之、嘉祐癸卯の進士、虔州廣州に通判たり、廣西轉運判官に遷る。その廣州に在る、蘇文忠公、これと游ぶ、廣倅蕭大夫に酬ゆるの詩あり」と見ゆ。この詩は、廣州の通判たる蕭世範が前に掲げた詩の韻を用ひて一詩を贈られたから、復た之に和答したといふのである。

【詩意】予は遷謫されしものから、幸に生きて還つたことだけは、虞翻に勝つて居るが、早く身を退くることに就いては、二疏に及ばなかつた。死に垂んとして、初めて大道を聞き、平生、誤つて書物を信じて居たのは、まことに宜しくない事であつた。今や廣州に逗留し、夜半、風濤の物すごきに驚き、災禍を送りし後、又しても病氣で、散散な憂き目に遇つた。しかし、幸にも、蕭君が詩を贈られたりするに因つて、少しく憂懷を攄べることが出來た。

【餘論】乾隆御批に「軾の詩、好んで古人の姓を用ひて韻を壓す、前人これを譏るものあり、この詩の起句の若き、亦た是れ、習氣未だ除かず。しかも、格韻は晩節よりも高明なり」とあり、紀昀は「これ便ち淺率」といつて居るが、垂死の一聯だけは、一寸面白い。

心閒詩自放。筆老語翻疎。　心、閒にして、詩、自ら放、筆、老いて語、翻つて疎。

贈我皆強韻。知君得異書。　われに贈る皆強韻、知る君が異書を得たるを。

滔滔沮叟是。綽綽孟生餘。　滔滔沮叟、是れなり、綽綽たり、孟生の餘。

一笑滄溟側。應無憤可攄。　一笑、滄溟の側、應に憤の攄ぶべきなかるべし。

【字解】【一】詩自放　放は放縱、放逸。【二】語翻疎　疎は疎雜、粗率。【三】強韻　むづかしい韻。【四】異書　珍書、抱朴子に「時人、蔡邕の異書を得たるを疑ひ、その帳中を捜れば、果して王充作るところの論衡を得たり」とある。【五】滔滔沮叟　論語に長沮桀溺の語を載せて「滔滔たるもの、天下皆是れなり」とあるを翻用す。【六】綽綽孟生　孟子に「我に官守なく、我に言責なきなり、すなはち、吾が進退、豈に綽綽然として餘裕あらざらむや」とある。

【詩意】心閒なるままに、詩は自然奔放であるし、筆が老熟すると、語は却つて粗率である。君が予に贈られた詩は、いづれも、むづかしい韻であつて、何か珍書を得られたからであらう。天下滔滔として、世事と相關せざるは、長沮・桀溺の如く、綽綽として餘裕あるは、孟子にして、はじめて能くすべきものである。予は、一笑して、滄溟の側に居るが、すでに、人事を拋棄して仕舞つたから、攄ぶべき忿憤の念慮だにない。

周敎授索枸杞因以詩贈錄呈廣倅蕭大夫

周敎授、枸杞を索む、因つて詩を以て贈り、錄して廣倅蕭大夫に呈す

（一）鄜侯藏書手不觸。 鄜侯の藏書、手も觸れず、
嗟我嗜書終日讀。 嗟す、我が書を嗜んで終日讀むを。
（二）短檠照字細如毛。 短檠、字を照らして、細、毛の如く、
怪底昏花懸兩目。 怪底、昏花、兩目に懸る。
扶衰賴有（三）王母杖。 衰を扶くる、賴に王母杖あり、
名字於今掛仙錄。 名字、今に仙錄に掛く。
荒城古塹草露寒。 荒城古塹、草露寒く、
碧葉叢低（四）紅菽粟。 碧葉叢は低る紅菽粟。
（五）春根夏苗秋著子。 春は根、夏は苗、秋、子を著く、
盡付（六）天隨恥充腹。 盡く天隨に付して腹を充たすを恥づ。
蘭傷桂折緣有用。 蘭傷桂折、用あるに緣る、

【字解】【一】鄜侯　唐の李泌、前に書軒の詩中に注して置いた。【二】短檠　丈高からぬ燭臺。【三】王母杖　枸杞の別名、抱朴子に見え、前に黃子木拄杖の詩中に注して置いた。【四】紅菽粟　赤い小さい實を指して、豆や粟の粒に比したのであらう。【五】春根　本草に、枸杞は冬に根を采り、春夏に葉を采り、秋に莖實を取る」とある。【六】天隨　唐書に「陸龜蒙、字は魯望、松江の甫里に居り、時に江湖散人と謂ひ、或は天隨子と號す。居るところの前後、皆杞菊を種ゑ、以て杯案に供す」とある。【七】丹其族　一族全滅する。【八】薏苡　すずだま、馬援が交趾を征せし時、これを車に載せて

爾獨何損（七）丹其族。 爾獨り何ぞ損じて、その族を丹にする。
贈君愼勿比（八）薏苡。 君に贈る、愼んで、薏苡に比する勿れ、
采之終日不（九）盈匊。 これを采つて、終日、匊に盈たず。
外澤中乾非爾儔。 外は澤、中は乾いて、爾の儔に非ず、
斂藏更借秋陽曝。 斂藏、更に秋陽を借りて曝らす。
（一〇）雞壅（一一）桔梗一（一二）稱帝。 雞壅桔梗、一に帝と稱す、
（一三）堇也雖尊等臣僕。 堇や、尊と雖も、臣僕に等し。
時復論功不汝遺。 時に復た功を論じて汝を遺さず、
異時謹事東籬菊。 異時、謹んで事へよ東籬の菊。

歸り、その爲に嫌疑を招いたことがあつて、前に次韻王鞏の詩中に注して置いた。【九】不盈匊　兩手に一ぱいにならぬ。【一〇】雞壅　本草に「芡、一名雞壅」とある、水ぶき、或は鬼はすといふ。【一一】桔梗　陶弘景の別錄に「桔梗、梗草と名づく、葉は薺苨と相似たり」とある。【一二】一稱帝　莊子に「堇や　その實は堇なり、桔梗なり、雞壅なり、豕零なり、これ時に帝たるものなり、何ぞ勝げて言ふべけむや」とある。帝たりとは、その貴きをいふ。【一三】堇也

本草に「堇は毒草なり、乃ち烏頭の苗」とある。

【題義】 周敎授の名は不詳。この詩は、周敎授から、枸杞が欲しいといつて來たに就いて、詩を以て之に贈り、錄して、廣州通判の蕭世範にも見せたといふのである。

【詩意】 名だたる李鄜侯の藏書は、不幸にして、まだ手を觸れぬが、われも亦た書を嗜んで、終日、讀誦に耽つて居る。夜、低い燭臺の下に居ると、文字は、小さくして毛の如く、不思議にも、兩方の目

が霞んで來る。これは、老衰した證據であつて、これを直すには、王母杖の異名ある枸杞に限り、現に、その名字は、仙人の記錄に掲げられてある。枸杞は、荒れた城の空濠の中などに生じ、晨に露を帶びて寒く、碧色の葉が低く茂つて居つて、その間に、豆や粟の如き小さな粒の赤い實が見える。春は根、夏は若芽を摘み、秋は實を結び、陸龜蒙は、平生、これを食して、腹を充たして居た。かの蘭や桂樹の傷折せらるるは、妙なる其香が用を爲すからであるが、汝、枸杞は何の爲に損じて、一族全滅の禍に遭ふのであるか。今、御依頼に因つて、これを君に贈るが、かの慈菽に比してはならぬ。慈菽は、終日摘んでも、兩手に滿たず、その上、外は澤澤しく、中は乾いて、氣を受くること全からざれば、到底、枸杞の類ではなく、これを收藏するには、よく秋の日に曝らさねばならぬので、なかなか手數がかかる。かの雞壅の如き、桔梗の如き、皆藥中の帝王と稱せられ、烏頭も亦た尊いけれども、汝に比べると、臣僕に等しいものである。もし效果の顯然たることを論ずれば、決して、汝を遺さざるべく、そして、他日、秋の末になれば、謹んで、一歩を東籬の菊に讓つて、これに臣とし事へるが善い。

【餘論】紀昀は「結、感慨を寓す」といつて居て、卽ち功に矜らず、その分に安んずべきことを勸めたものであらう。

跋王進叔所藏畫

王進叔、藏するところの畫に跋す

徐熙杏花

徐熙の杏花

江左風流王謝家（一）。　江左の風流、王謝の家、

盡攜書畫到天涯。　盡く書畫を攜へて天涯に到る。

却因梅雨（二）丹青暗。　却つて、梅雨、丹青の暗きに因り、

洗出徐熙落墨（三）花。　洗ひ出す徐熙落墨の花。

【字解】【一】王謝　東晉の王導謝安の後で、當時の名族。なほ、前に宿九仙山の詩中に注して置いた。【二】梅雨　王註に「廣南に黄梅雨あり、最も書畫を損ず」とある。【三】徐熙落墨　徐熙は五代より宋初に居た有名な畫家。落墨は、主として墨を用ひ、あまり彩色を用ひざる畫をいふ。圖畫見聞志に「徐熙は、意、古今に出づ、徐鉉曰く、落墨を格となし、彩綴の跡を雜ふ、色と相隱映せざるなり」とあり、畫註に「事實類苑、國初の布衣、江南の徐熙と僞蜀の翰林待詔黄筌と、皆善畫を以て名を著はす。後 江南平らぎ、熙、京師に至り、圖畫院に送らる。黄の妙は傳色に在り、用筆極めて細、殆んど墨跡を見ず。熙は、墨筆を以て之を畫き、略ぼ丹粉を施し、別に生動の意あり。筌、その己に勝るを惡み、言ふ、熙の畫、粗惡、格に入らずと。これを罷む。熙の子、乃ち諸黄の格に效ひ、更に墨筆を用ひず、直に采色を以て之を圖す、これを沒骨畫といひ、諸黄と相下らず、遂に院品に齒せらるるを得たり。然れども、氣韻皆熙に及ばず。圖繪寶鑑、今の花を畫くもの、往往色を以て、暈淡して成す、ひとり、徐熙の落墨、以てその枝葉蕊萼を寫し、然る後、色を傅す、故に骨氣風神、古今の絶筆たり」とある。

【題義】本集の跋峽中詩後に「庚辰の歳、南海を過ぎ、部刺史王公進叔を見る」とあるから、進叔は、當時、嶺南の監司であつたに相違ないが、その名字閱歷等は不詳。この詩は、王進叔所藏の畫に題したのである。

【詩意】王謝といへば、六朝の頃、江南に鳴つた風流の名族、君も其後裔である處から、天涯の僻境に赴任するにも、態態、書畫を攜帶された。しかし、梅雨の頃は、丹青の彩色を剝損する虞があるといふので、落墨で畫いた徐熙の杏花の一幅のみを懸けて置かれる。

【餘論】紀昀は「五首、各〻寄託あり、風調、復た乏しからず。惟だ山茶の一絕、怨んで太だ怒る」といひ、この第一首に就いては「この首、自ら寓す」といつて居る。

趙昌四季

趙昌の四季

(一)倚竹佳人翠袖長。　竹に倚るの佳人、翠袖長し、
天寒猶著薄羅裳。　天寒、猶ほ著く薄羅の裳。
揚州近日紅(二)千葉。　揚州近日、紅千葉、
自是風流時(三)世妝。芍藥　自ら是れ風流の時世妝。

【字解】【一】倚竹佳人　杜甫の佳人に天寒翠袖薄、日暮倚脩竹」とある。【二】紅千葉　査註に「志林、揚州の芍藥、天下の冠たり。蔡繁卿、主となり、はじめて、萬花會を作し、御愛紅を以て第一となす」とあるが、馮應榴の案に「余の見るところ、末句なし。惟だ、名勝志に云ふ、芍藥凡そ三十二品、首御衣黄といふものあり、首御愛紅といふものあり」とある。千葉紅は、紅色で瓣の多いのを云ふのであらう。【三】時世妝　流行の風俗。白居易の新樂府に、時世妝、時世妝、自出城中傳四方」とある。

【題義】圖畫見聞志に「趙昌、工に花菓を畫き、名、獨秀を推す、伎、亦た儔にし難し」とある。この詩は、趙昌の筆に成れる四季の代表的花卉の畫幅に題したので、第一首は芍藥を詠じ、詩の末に自ら注して居る。以下之に倣へ。

【詩意】芍藥は、たとへば、佳人、竹に倚つて翠袖長く、天寒き折から、薄き羅裳を著けた樣である。近ごろ、揚州では、この圖中に見るが如き紅色多瓣の種類を愛するが、これは、風流なる流行である。

【餘論】紀昀は「この首、小人を刺るに似たり」といつて居る。

(一)楓林翠壁楚(二)江邊。　楓林翠壁、楚江の邊、
(三)躑躅千層不忍看。　躑躅千層、看るに忍びず。
開卷便知歸路近。　卷を開いて、便ち知る歸路の近きを、
(四)劍南樵叟爲施丹。躑躅　劍南の樵叟、爲に丹を施す。

【字解】【一】楓林　宋玉の九辨に江水湛湛兮上有楓とあり、阮籍の詠懷に湛湛長江水、上有楓樹林」と見ゆ。【二】楚江　揚子江。【三】躑躅　つつじ、王註に「躑躅は、山石榴なり、その花深紅、蜀人、映山紅と號す。荊楚山壁の間、最も多し」とあり、韓愈の詩に躑躅紅千層とある。【四】劍南樵叟　趙昌の別號、范蜀公の東齋記に「趙昌、自ら劍南樵人と稱す」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】揚子江の上流に於ては、苔青き絕壁高く峙ち、その上に楓樹が茂り、その間間には、躑躅

の花が層を爲して咲き滿ちて、まことに、看るに忍びぬ。卷を開けば、わが歸路の近きを知るべく、筆者の趙昌は、殊に意を用ひて、これを赤く染めたのであらう。

【餘論】紀昀は「この首、ひとり賦體を用ふ、但だ鄕心を寓す、竝に別意なし。知の字、疑ふらくは如の字の誤」とある。

輕肌弱骨散幽葩。　輕肌弱骨、幽葩を散ず、
眞是靑裙兩髻丫。　眞に是れ靑裙兩髻丫。
便有佳名配黃菊。　便ち、佳名の黃菊に配するあり、
應緣霜後苦無花。寒菊　應に霜後花なきに苦むに緣るなるべし。

【詩意】寒菊は、輕肌弱骨、まことにしをらしく、そして、奧ゆかしい花が、ちらほら咲いて居て、たとへば、靑裙の老孃が、頭上に二つの髻を結つて居る樣である。さればこそ、佳名を黃菊に配するので、霜ふりし後、花なきに苦む折から、愈よ珍重されるのであらう。

【餘論】紀昀は「これ小人の時に乘じて進むを得るを刺る」といつて居る。

游蜂掠盡粉絲黃。　游蜂、掠め盡して粉絲黃なり、
落蘂猶收密露香。　落蘂、猶は收む密露の香。
待得春風幾枝在。　春風を待ち得る、幾枝かある、
年來殺菽有飛霜。山茶　年來、菽を殺す、飛霜あり。

【題義】山茶は、さざん花、又或は椿を指すこともある。二花は、もと同種類であるから、いづれでも善い。

【詩意】游蜂は、黃粉を帶びたる雄蘂の花絲を掠め盡し、たまたま落ちた雌蘂は、露の香を帶びて居る。しかし、冬から後は、霜が降つて、豆を枯らす位であるから、咲き續けて、春風に遇ふものは、幾枝もない。

【餘論】紀昀は「この結、太だ露、亦た太だ激、その時を以て之を論す、亦た應に作るべからず」といひ、馮應榴の案には「これ乃ち寓言、菽を殺すの霜あるに因つての故に、多枝、留めて春時を待つべからず。以て讁に遭ふの人、再び春和を被る能はざるに比するなり」といつて居る。

和黃秀才鑒空閣　黃秀才の鑒空閣に和す

明月本自明。無心孰爲境。　明月、本と自ら明かに、無心、孰れか境となす。

【字解】【一】散幽葩　散は散落ではなく、散點の義で、奧ゆかしい花がちらほら咲いて居る。【二】兩髻丫　二個處に髻を結び分けてある。

【字解】【一】粉絲　雄蘂の花絲を云ふ。【三】殺菽　菽は豆の類。

挂空如（一）水鑒。寫此山河影。
我觀大瀛海。巨浸與天永。
九州居其間。無異蛇盤鏡。
空水兩無質。相照但耿耿。
妄云（二）桂兎蟇。俗說皆可屛。
我游鑒空閣。缺月正淒冷。
（三）黃子寒無衣。對月句愈警。
借君（四）方諸淚。一沐（五）管城穎。
誰言小（六）叢林。淸絕冠（七）五嶺。

空に挂つて水鑒の如く、この山河の影を寫す。
われ大瀛海を觀るに、巨浸、天と永し。
九州、その間に居り、蛇の鏡に盤するに異なるなし。
空水、兩つながら質なく、相照らして但だ耿耿。
妄りに桂兎蟇といふも、俗說、皆屛くべし。
われ鑒空閣に游ぶ、缺月、正に淒冷。
黃子、寒、衣なく、月に對して、句、愈よ警。
君が方諸の淚を借り、一沐す管城の穎。
誰か言ふ、小叢林、淸絕、五嶺に冠たりと。

【字解】【一】水鑒　文選、謝希逸の月賦に柔祇雪凝、圓靈水鏡とあり、容齋隨筆に「月中の空虛は水影なり」とある。【二】桂兎蟇　酉陽雜俎に「舊傳、月中に桂あり、蟾蜍ありと。故に異書に云ふ、月桂、高さ五百丈、下に一人あり、常に之を斫る。長慶中、人あり、八月十五夜、月光を玩ぶ、林中、匹帛の如きに屬す。尋いで之を觀れば、一金背の蝦蟇を見る、疑ふらくは是れ月中の者」とあり、張衡の靈憲に「月は陰精の宗、積んで獸を成し、兎に象る」とある。【三】黃子　卽ち黃秀才。【四】方諸　鏡を云ふ、淮南子に「陽燧、日を見て燒きて火となり、方諸、月を見て津うて水となる」とある。【五】管城穎　筆の尖端。【六】叢林　禪林寶訓に「衆僧の止まるところの處、草、亂生せざるを叢といひ、木、亂長せざるを林といふ、その內、規矩法度あるを言ふなり」とあつて、査初白は、崇福寺だらうといつて居る。【七】五嶺　猗覺寮雜記に「五嶺の說、多くは同じからず。後漢吳祐・劉表傳の註、西、衡山守宿より、東、海に至るまで、一山の限りて名を標する五あり。裴氏の廣州記、大庾・始安・臨賀・桂陽・揭陽、これを五嶺となす、衆說同じからず、錄して以て備考とす」とある。

【題義】黃秀才、名字失考。鑒空閣は、杭州に在るといつて、杭州圖經、咸淳臨安志を引く人もあるが、邵氏の王註正譌に「詩意を案ずるに、閣の嶺外に在ること、甚だ明かなり。胡氏註、乃ち杭州圖經を引く、殊に謂なし」といひ、査註には更に之を駁して「洪容齋續筆、余、南海に游ぶ、西歸の日、舟を金利山下に泊し、崇福寺に登る、閣あり、江流に臨む、標して鑒空といふ、正に東坡の詩牌、その上に掲ぐるを見る。蓋し、當時臨賦の處なりと。これに據れば、鑒空閣は、當に廣州に在るべし。王氏の註、謬れり、本詩の結句を觀るに、辨を待たずして自ら明かなり」とある。

【詩意】明月は、本來、自然明かであつて、無心の境は、この外、何處にもない。月が空に挂ると、宛として水鏡の如く、地上なる山河の影を寫して居る。われ、大瀛海を見るに、澤山の水は、天に接して永く、九州は、その間に浮び、蛇が鏡中に盤屈して居る樣なものである。天と水と、もと堅硬な物質ではなく、耿耿として、相照らして居る。月中には、桂が生えて居るといひ、兎や蟇が棲んで居るといふが、皆俗說にして斥くべきものである。われ、今、鑒空閣に登ると、缺月冷かにすさまじく、主人たる黃秀才は、この寒いのに、衣なくして、月下に詩を作ると、その句は、愈よ警拔である。君

から、鏡に結ぶ露を借りて、わが筆の先を洗つて、何か一つ拈り出さうと思ふ位、かの小叢林たる崇福寺は、五嶺以南、ひとり清絶と稱すべき譯でもない。

【餘論】紀昀は「靈空超妙、前の藤州江上の作に減せず」といつて居る。

韋偃牧馬圖

韋偃の牧馬圖

神工妙技帝所收。
神工妙技、帝の收むるところ、

江都曹韓逝莫留。
江都曹韓、逝いて留まるなし。

人間畫馬惟韋侯。
人間の畫馬、惟だ韋侯、

當年爲誰掃驊騮。
當年、誰が爲に驊騮を掃ふ。

至今霜蹄踏長楸。
今に至つて、霜蹄、長楸を踏む、

圉人困臥沙壠頭。
圉人困臥す、沙壠の頭。

沙苑茫茫蒺藜秋。
沙苑茫茫、蒺藜の秋、

風鬉霧鬣寒颼颼。
風鬉霧鬣、寒颼颼。

龍種尙與駑駘游。
龍種、なほ駑駘と游ぶ、

長稭短豆豈我羞。
長稭短豆、豈に我が羞ならむや。

八鑾六轡非馬謀。
八鑾六轡、馬の謀に非ず、

古來西山與東邱。
古來、西山と東邱と。

【字解】【一】江都曹韓　江都は、名畫記に「江都王緒は、霍王元軌の子、太宗皇帝の猶子なり。才藝多く、善く鞍馬を畫いて、名を擅にす」とある。曹は曹覇、名畫記に「曹覇は、魏の曹髦の後、髦、後代に稱せらる。覇、開元中に在つて、すでに名を得、天寶の末、毎に詔して御馬及び功臣を寫し、官、左武衛將軍に至る」とある。杜甫の作つた韋諷錄事宅、觀曹將軍畫馬引の破題に「國初以來畫鞍馬、神妙獨數江都王、將軍得名三十載、人間又見眞乘黄」とあり、又別に丹青引、贈曹將軍覇の一首がある。韓幹は、卽ち曹覇の弟子、數ば見えて居た。【二】韋侯　韋偃といふに同じ、卽ち韋偃、題義の項に注して置く。【三】驊騮　名馬を云ふ。【四】霜蹄踏長楸　杜甫の韋偃畫馬歌に、「韋侯別我有所適、知我憐君畫無敵、戯拈禿筆掃驊騮、歘見騏驎出東壁、一匹齕草一匹嘶、坐看千里當霜蹄」とある。又曹子建の詩に「鬪雞東郊道、走馬長楸間」とあつて、文選の註に「古人、楸を種う、故に長楸といふ」とある。【五】圉人　馬飼、主馬寮の吏員。【六】沙苑　水經註に「洛水、東、沙邱の北を逕す」とあり、唐六典に「沙苑監は隴右の牛馬を牧するを掌る」とあり、元和郡縣志に「沙苑、一名は沙阜、同州馮翊縣南に在り、その地、六畜に宜しく、沙苑監を置く」とあり、太平寰宇記に「沙苑の古城は、朝邑縣南に在り、馮翊縣の東界より洛水の南岸に沿ひ、朝邑の界に入り、南、渭水に至る、廣さ四十八里」とある。【七】蒺藜　濱びし、海濱の沙地に生ずる一種の蔓草、夏、葉間に五瓣の小花を開き、三角又は四角の刺ある實を結ぶ、後世、鐵又は木にて、この實の形を作り、敵の進路を緊ぐに用ふ。【八】風鬉霧鬣　前に王晉卿欲奪海石の詩中に注して置いた。【九】龍種　名馬を云ふ。龍の神潔なるものは、化して馬となるといふ傳說に本づく。杜甫の李鄠縣胡馬行に「一聞說盡急難材、轉益愁向駑駘輩、始知神龍別有種、不比俗馬空多肉」とある。【一〇】長稭　稭は皮を去りし藁。【一一】我羞　羞は膳羞、卽ち食物。【一二】八鑾六轡　四頭立の馬車といへば、無論、馬四頭をつけ、二頭づつ並んで二列。その各一に鈴を二つつけるから八鑾。二頭に手綱三本で、一本を共通にする、四頭で六本、六轡といふ。轡は手綱、これをくつわといふのは邦俗の誤である。【一三】西山與東邱　王註に「西山は伯夷なり、東邱は盜跖なり。莊子駢拇篇、伯夷は名に首陽の下に死し、盜跖は利に東陵の上に死す」とある。

【題義】 韋偃は、唐の畫家で、杜甫と同時、名畫記に「韋偃、畫山水に工なり、高僧奇士、老松異石、筆力勁健、風格高擧」とあり、名畫錄に「韋偃は、京兆の人、蜀に寓す、善く山水竹樹人物を畫き、戲筆を以て鞍馬を點綴し、千變萬化、その妙を曲盡す、韓幹の匹なり」とある。この詩は、韋偃の畫いた牧馬の圖に題したのである。

【詩意】 凡そ神工妙技と稱せられるものは、天帝に收用されるから、いつまでも、この世には居らず、かの江都王緒の如き、曹霸・韓幹の如き、すでに死して留めることは出來ない。これ等の人人の後に在つて、馬を畫いたのは、唯だ韋偃だけで、その當時、誰の爲に、この名馬を畫いたか知らぬが、今一幅の畫が殘つて居る。その畫幅を見ると、依然として、名馬が霜蹄に長楸を踏みにじり、圉人は、弱り切つて、沙丘の邊に臥して居る處が寫してある。音に聞く沙苑は、茫茫として、蒺藜正に秋に入り、その名馬どもは、風鬉霧鬣を振り立て、寒げに颼颼として打靡くを意とせざる樣である。おもへば、折角の龍種が、やくざ馬と一緒になつて游んで居る樣であるが、元來、藁や豆の如きは、名馬の食するものではなく、唯だ自由に草を齕み、水を飮んで居れば、その眞性を發揮すべく、又八鑾六轡といつた樣に、馬車を曳かされるのも、馬の欲するところではなく、矢張、足を翹げて勝手に躍りはねて居るのが、その本性で、人に飼はれる苦痛は、伯夷が西山に薇を采つて饑を忍び、盜跖の東陵に居る時、人の肝を食ふを減せしめられる樣なものである。

【餘論】 紀昀は「語、頗る遒緊、後半純ら是れ寓言」といつて居る。

題₂靈峰寺壁₁

靈峰寺の壁に題す

靈[一]峰山上寶陀寺。
靈峰山上の寶陀寺、

白髮東坡又到來。
白髮の東坡、又到り來る。

前世德[二]雲今我是。
前世の德雲、今、我、是れなり、

依稀猶記妙高臺。
依稀、なほ記す妙高臺。

【字解】【一】靈峰・寶陀寺・妙高臺と共に題義の項に注して置く。【二】德雲 名勝志に「蘇軾、惠州に謫せられ、舟を此に泊し、前身德雲和尙たるを夢み、詩を賦して云云」として、この絶句が引いてあるし、馮應榴は、「寓惠州」の註に據つて「按ずるに、德雲は、寶陀院の示寂僧なり」といつて居る。但し、德雲比邱といふものが、勝樂國妙峰山の上に居たといふことが、華嚴經に見えて居るから、この僧は、その名を襲用したのであらう。

【題義】 廣州志に「靈峰山、一名靈洲山、城西六十五里に在り、鬱水、その下に出づ。唐志に謂ふ、南海の名山は靈洲、名川は鬱水、これ、その上に寶陀院妙高臺あり、院中に寶陀佛あるを以ての故に名づく」とあつて、王註に、態態遠く南都の妙峰寺及び金山の妙高峰を引いたのは、この地と全く干涉なくして、無論 訳 である。この詩は、即ち靈峰寺に參詣して、その壁に題したのである。

【詩意】 靈峰山の上なる寶陀寺は、まことに招提の淨境である處から、白髮頭の東坡は、態態やつ

て來た。そして東坡の前世は、この寺に居た德雲和尚であつて、今の予は、取りも直さず、その生まれ替りに相違なく、妙高臺など、朧げながら、記憶して居るのは、まさしく、その證據である。

廣州何道士衆妙堂

廣州何道士の衆妙堂

湛然無觀古眞人。　湛然として、古しへの眞人を觀るなく、
我獨觀此衆妙門(一)。　われ獨り、この衆妙の門を觀る。
夫物(二)芸芸各歸根。　夫れ物は芸芸として、各〻根に歸し、
衆中得一道乃存。　衆中、一を得れば、道、乃ち存す。
道人晨起開東軒。　道人、晨に起つて、東軒を開き、
趺坐一醉扶桑(三)暾。　趺坐、一醉す扶桑の暾。
餘光照我玻瓈盆。　餘光、わが玻瓈の盆を照らし、
倒射窗几清而溫。　倒に窗几を射て、清にして溫。
欲收(四)月魄餐日魂。　月魄を收めて、日魂を餐せむと欲す、

【字解】【一】衆妙門　老子に、「玄の又玄、衆妙の門」とあつて、宇宙の本體は、道と稱し、常無常有、玄玄微妙にして、衆妙の出づるところといふ義。【二】物芸芸　老子は「夫れ物芸芸たれども、各〻その根に歸る、根に歸るを靜といふ」とある。芸芸は、芸芸に同じく、しげりて多き貌。【三】扶桑暾　暾は朝日、楚辭の註に「日、はじめて東方に出づ、その容、暾暾として盛なる貌なり。東方に扶桑の木あり、その高さ萬仞、日、下れば、暘谷に浴し、上れば扶桑を拂ふなり」とある。【四】收月魄餐日魂　黃庭經の註に「日氣を呑むの法、常に日の初めて出づる時を以て、東向、齒を叩くこと九通、叩き畢つて、瞑目、握つて固く存すれば、五色の流霞、來つて一身に接し、ここに於て、日光流霞、ともに口中に入る。月を呑むの法、常に月の初めて出づる時を以て、西向、齒を叩くこと十通、咒し畢り、瞑目、握つて固く存すれば、月色精光、ともに口中に入る、能く此道を修すれば、日月に奔るの神仙なり」とある。【五】我自日月　任註に「道家言ふ、人身中、自ら日月あり」と見ゆ。

我自(五)日月誰使呑。　われ自ら日月、誰にか呑ましめむ。

【題義】查註に「先生、嶺南に在つて往還するもの、兩何道士あり、その一は惠州逍遙堂に居る、名は宗一、その一は廣州天慶觀に居る、卽ち崇道大師なり」とあり、又本集中の衆妙堂記を引いて、「廣州崇道大師何德順は、道を學んで妙に至るものなり、故に其堂を廣めて衆妙といひ、書、海南に來り、文以て之を記せむことを求む」とある。この詩は、東坡が北歸の途中、衆妙堂に立ち寄り、乃ち賦して、何道士に贈つたのである。

【詩意】湛然と心を落ちつけて、古しへの仙人を觀、そして之を羨ましがつてはならぬので、われは獨り、この衆妙の門を觀るべしである。抑も、萬物は、芸芸として繁多なれども、各〻その根源に歸れば、衆妙中、唯だ一條の原理を得べく、そこに道が存して居る。君は、朝早く起きて、東軒を開き、あぐらをかいて、扶桑に上る朝日の光に醉うて、餘光は、座上に在る玻璃盆をさへ照らし、やがて、明窓淨几の間を射ると、淸淸しげにして、且つ溫かである。君は、日月の氣を吸收したいと思つて居

られるが、その身中に自然日月があつて、それは誰に呑ましめやうとされるのか。

題馮通直明月湖詩後　馮通直の明月湖の詩の後に題す

(一)老衍清篇墨未枯。老衍の清篇、墨、未だ枯れず、
(二)小馮新作語尤殊。小馮の新作、語、尤も殊なり。
呼兒淨洗涵星硯。兒を呼んで淨く洗ふ涵星硯、
爲子賡(三)歌墮(四)月湖。子の爲に賡歌して月湖に墮つ。
聞道牂江空抱(五)珥。聞くならく、牂江、空しく珥を抱くと、
年來合(六)浦自還珠。年來、合浦、自ら珠を還す。
請君多釀蓮花酒。請ふ、君、多く釀せよ蓮花の酒、
準擬(七)王喬下履鳧。準擬す、王喬が履鳧を下すを。

【字解】【一】老衍　衍は馮衍、同姓の故を以て馮通直に相比す。前に次韻蒜山縣見寄の詩中に注して置いた。【二】小馮　馮祖仁に比す。【三】賡歌　和して歌ふ。【四】墮月湖　諸家の註に未詳とあるが、明月湖に嚮くといふ意味に見て置く。【五】抱珥　東坡の自註に「南詔に西珥河あり、即ち古しへの牂牁江なり、河の形、月の珥を抱くが如し、故に西珥といふ」とある。【六】合浦　前に辯才退居の詩中に注して置いた。【七】王喬　その來るを伺つて之を網した處が、履を得たといふので、前に雙鳧觀の詩中に注して置いた。

【題義】馮通直の本名は失考、本集の與馮祖仁書に「水道間關、寸進、更に二十餘日、乃ち曲江に至り、當に宇下に至るべし」とあり、又「先什輒ち已に題跋」とあり、又、書馮祖仁父詩後に「河源令齊參祖仁、その先君子の詩、七篇を出す、燦然として唐人の風あり」と見ゆ。すると、この詩は、馮祖仁の請に應じて、その父通仁の明月湖の詩に題したのである。なほ、明月湖は、前に送呂昌朝知嘉州の詩中に注して置いた。

【詩意】御尊父の清篇は、墨痕、未だ枯れず、さう古いものではなく、貴下の新作も、語語、殊絕である。今倅を呼んで、祕藏の涵星硯を洗ひ清め、君の爲に和詩を作り、歌聲が明月湖に響徹する樣にしたいと思ふ。聞けば、月湖に近き牂牁江は、月の珥を抱くが如くであるが、そこに產する珠は、年來、皆合浦に還つて仕舞ひ、今は何も殘らぬとの話。願はくは、君よ、多く蓮花酒を釀造せよ、醉中には、かの王喬が雙鳧に化して飛び行くが如く、吟魂は、はるかに月湖に行くことも出來やう。

次韻鄭介夫二首　鄭介夫に次韻す　二首

一落泥塗迹愈深。一たび泥塗に落つれば、迹、愈よ深く、
(一)尺薪如桂米如金。尺薪は桂の如く、米は金の如し。
(二)長庚到曉空陪月。長庚、曉に至つて空しく月に陪し、
(三)太歲今年合守心。太歲、今年合に心を守るべし。

【字解】【一】尺薪如桂　戰國策に「蘇秦、楚王に謂つて曰く、楚國の食、貴きこと玉の如く、薪、貴きこと桂の如し」とある。【二】長庚　太白星、即ち明星。【三】太歲　孝經鉤命訣に「歲星、心を守れば、年穀

して置いた、なほ、漢書、鄭尙書の履聲の事を援用したのであらう。

相與齧氈指漢節。　相與に氈を齧んで漢節を指し、

何妨振履出商音。　何ぞ妨げむ、履を振つて商音を出すを。

孤雲倦鳥空來往。　孤雲倦鳥、空しく來往、

自要閒飛不作霖。　自ら要す、閒飛して霖を作さざるを。

【語義】鄭介夫、名は俠、その傳は、宋史に見え、ひどく新法に反對し、且つ流民の圖を獻じたことを以て知られて居る。神宗の末、英州に徙され、哲宗即位、蘇子由、諫官となり、介夫放流十年、屢ば大赦を經るも、終に牽復を得ず、父、日に益す老いて、還る期なく、有志の士、これが爲に涕泣する旨を上言し、はじめて歸ることが出來て、泉州敎授となつたが、元符の初、再び英州に竄せられ、徽宗即位、赦されて故官に還つた。東坡の此詩を寄せたのは、恰も英州再竄中に當つて居ると思はれる。

【詩意】君は、不幸にして、泥塗に陷り、その跡、愈よ深く、且つ生活に苦み、一尺の薪は、桂の如く、一升の米は金の如くである。太白の星は、曉に至るまで、空しく月に陪從するも、格別何にも成らず、今年、歲星が心を守るといへば、年穀豐にして、すこしは、樂に成るであらう。かかる苦境に在るにも拘はらず、君が操守を變せざるは、かの蘇武が氈毛を嚙みつつ、漢節を持して離さざりし

豐」とあつて、その註に「歲星、心を守るを重華となす、故に年豐なるなり」とある。心は二十八宿の一。【二】齧氈　蘇武の事、前に「次韻孫巨源」の詩中に注して置いた。【三】振履　前に「諸公餞子敦」の詩中に注

と同じく、朝廷に於て、一かどの重きをなすは、履聲涼しげに聞こえ、天子が鄭尙書の足音を知つて居られる如くである。雲、心なくして岫を出で、鳥、飛ぶを倦んで歸るを知るものから、南北に往來しても、何の效果なく、依然たる貶謫の身、倦鳥は閒飛すべく、孤雲は霖を成すに足らず、唯だ枉げて剋下の境涯に安んじて居る外はあるまい。

【餘論】紀昀は「すべて、此事を用ふ。二公、遷謫と雖も、猶ほ宋士なり、結二句、自ら好し」といつて居る。

一生憂患萃殘年。　一生の憂患、殘年に萃まる、

心似驚蠶未易眠。　心は驚蠶に似て、未だ眠り易からず。

海上偶來期汗漫。　海上、偶ま來つて汗漫を期し、

葦間猶得見延緣。　葦間、猶ほ延緣を見るを得たり。

（一）良醫自要經三折。　良醫、自ら三折を經るを要す、

（二）老將何妨敗兩甄。　老將、何ぞ妨げむ、兩甄を敗るを。

收取桑榆植梨棗。　桑榆を收取して、梨棗を植う、

【字解】【一】良醫　前に「將至廣州」の詩中に注して置いた。【二】老將　晉書周訪傳に「賊率杜曾を擊つ。李恆をして左甄を督し、許朝をして右甄を督せしめ、訪、自ら中軍を領し、その衆に令して曰く、一甄敗るれば三鼓を鳴らし、兩甄敗るれば六鼓を鳴らさむ、と。旦より申に至り、兩甄皆破る。訪、親ら鼓を鳴らす、將士皆騰躍奔赴、曾、遂に大

祝君眉壽似增川。 祝す、君の眉壽、增川に似たるを。

に潰ゆ」とある、兩翼は兩翼であらう。【三】眉壽 詩經に以介眉壽とある。【四】增川 同じく天保に如川之方至以莫不增とある。

【詩意】 一生の憂患は、殘年に萃まり、老後、安きを得ず、心は驚鷺の如く、おツちりと眠られぬことと推察する。君は、偶然、南海の上に來り、遊跡汗漫、いつ歸るとも知らず、葦間に路を尋ねて、どうやら川べりをたどることが出來た樣なものである。古しへより、良醫は、三たび肱を折るを要すと稱せられ、老將は、兩翼が敗れたからといつて、びくともしない。君は、桑楡を取り除け、梨棗を植ゑて、心のどかに、子孫の計を爲すべく、その長壽は、川の方に至つて增さざるなきが如くならむことを祈る次第である。

昔在九江、與蘇伯固唱和、其略曰、我夢扁舟浮震澤、雪浪橫空千頃白、覺來滿眼是廬山、倚天無數開靑壁、蓋實夢也、昨日又夢伯固、手持乳香嬰兒示予、覺而思之、蓋南華賜物也、豈復與伯固相見於此耶、今得來書、知已在南華、相待數日矣、感嘆不已、故先寄此詩

むかし、九江に在つて、蘇伯固と唱和す。その略に曰く、われ夢に、扁舟、震澤に浮ぶ、雪浪、空に橫うて千頃白し。覺め來れば、滿眼、是れ廬山、天に倚つて、無數、靑壁を開く、と。蓋し、實夢なり。昨日、又伯固を夢む、手に乳香の嬰兒を持して、予に示す。覺めて之を思ふ、蓋し南華の賜物ならむ、豈に復た伯固と此に相見むやと。今、來書を得、すでに南華に在つて、相待つこと數日なるを知り、感嘆已まず、故に先づ此詩を寄す

扁舟震澤定何時。 扁舟震澤、定めて何の時、
滿眼廬山覺又非。 滿眼の廬山、覺めて又非なり。
春草池塘惠連夢。 春草の地塘、惠連の夢、
上林鴻雁子卿歸。 上林の鴻雁、子卿歸る。
水香知是曹溪口。 水香ばしく、知る是れ曹溪口、
眼淨同看古佛衣。 眼淨くして、同じく看る古佛の衣。
不向南華結香火。 南華に向つて、香火を結ばざれば、

【字解】【一】惠連夢 前に次韻李端叔送保倅の詩中に注して置いた。【二】子卿歸 子卿は蘇武の字、漢書蘇武傳に「昭帝卽位、匈奴、漢と和親す。漢、武等を求む、匈奴、詭つて武死すと言ふ。後、漢使、復た匈奴に至る、常惠、使者に敎へ、單于に謂つて言はしむ、天子、上林中に得て、雁を得たり、足に帛書を係くるあり、言ふ、武等、某の澤中に在りと。單于、左右を視て驚き、

此生何處是眞依。　この生、何の處か、これ眞依。

武の官屬を召し、武に隨つて還らしむ」とある。【三】曹溪口　王註に「この句、正に以て南華を言ふ。天監元年、婆羅門智樂といふものあり、南游して曹溪口に至り、水を掬し、香を聞いて云ふ、これ必ず勝地、道場を建つべし、と。故に是に南華寺あるなり」と見ゆ。【四】眼淨　王註に「維摩經に云ふ、塵に遠ざかり、垢を離るれば、法眼の淨きを得、と。故に先生屢ば此字を用ふ、水洗禪心俱眼淨と云ひ、又眼淨不覩登伽女と云ふが如き、是れなり」とある。【五】古佛衣　査註に「劉禹錫の曹溪第二碑、はじめ、達磨佛衣と俱に來り、道を得、傳付して以て眞印となす。大鑒に至り、置いて傳へず。翻譯名義、屈眴、ここに大細布といふ、木綿の花心を緝めて織成す、その色青黑、即ち達磨傳ふるところの袈裟」とある。

【題義】題の意味は――むかし、九江に在りし時、蘇伯固と唱和し、その詩中、我夢扁舟浮震澤、雪浪橫空千頃白、覺來滿眼是廬山、倚天無數開青壁」といふ句があつて、どうやら、正夢であつた。昨日、又夢の中に、伯固が、手に乳の香の失せざる綠兒を抱いて來て、予に示したが、覺めての後に考へると、それは、南華寺の長老から物を賜はつたといふことであらう。さなくば、どうして、再び伯固と此に相見ることがあらう。今、伯固から手紙が屆いたので、すでに南華寺に在つて、數日も待つて居るといふことを知り、感歎止まず、仍つて、先づ此詩を寄せたといふのである。

【詩意】舟を震澤に浮べたのは、何時であつたか、覺め來れば、唯だ滿眼の廬山を見るだけで、一場の夢に過ぎなかつた。むかし、謝靈運は、惠連を夢みて、池塘春草の句を得たが、われと伯固との關係は、略ぼ之に類似して居るし、予が今北歸するのは、上林で雁を得たといふことから、蘇武が召し還されたのと同じである。やがて、一緒に南華寺に往けば、水の香ばしきに因つて曹溪口たるを知るべく、淨眼を以て、ともに達磨傳來の古い佛衣を拜見することも出來る。元來、南華は物外の靈境、その住持は希に見るところの高僧であるから、もし、之に對して、香火の社を結ばなければ、この一生を通じて、眞に歸依すべき處も無からう。

【餘論】紀昀は「又この事を用ふ、眞に解すべからず」といつて居る。

追和沈遼贈南華詩　沈遼の南華に贈る詩に追和す

善哉彼上人。了知明鏡臺。　善いかな、彼の上人、了に知る明鏡臺。
歡然不我厭。肯致遠公杯。　歡然として我を厭はず、肯て遠公の杯を致さむや。
莞爾無心雲。胡爲出岫來。　莞爾たり、無心の雲、胡すれぞ岫を出でて來る。
一堂安寂滅。卒歲局蒼苔。　一堂、寂滅に安んじ、歲を卒へて、蒼苔に局す。

【字解】【一】上人　禪宗要覽に「瓶沙王、佛弟子を呼んで上人となす、內に德智あり、外に勝行あつて、人の上に在り、故に上人と名づく」とある。【二】遠公杯　遠公は即ち慧遠、廬阜雜記に「遠師、白蓮社を結び、書を以て陶淵明を招く。陶曰く、弟子、性、酒を嗜む、もし飮を許さば、即ち往かむと。遠、これを許す、遂に造る」とある。

【題義】この首は、沈遼といふ人が、南華長老に贈つた詩に追和したのである。馮應榴の案に「咸淳

臨安志、遂は文通の弟、登第後、吳縣の令となり、劾に遭うて籍を削られ、池陽に卜居す」とある。

【詩意】善いかな、かの上人は、明鏡臺に比すべき人の胸中の心を知り拔いて居られる。そこで、歡然として、われを厭はず、慧遠が陶淵明に酒を飮むことを許した樣に、杯を致される。上人は、雲を眺め、かの無心の者が、如何なれば、岫を出でて自ら勞するかといはれる。さればこそ、一堂の中に籠り、寂滅に安んじて、涅槃の境を希ひ、歲の終るまで、青苔が生えたまま、扃を鎖してある。

曹溪夜、觀傳燈錄、燈花落一僧字上、口占

曹溪の夜、傳燈錄を觀る、燈花、一僧字の上に落つ、口占

山堂夜岑寂。燈下看(一)傳燈。　山堂、夜岑寂、燈下に傳燈を看る。

不覺燈花落。(二)茶毗一箇僧。　覺えず、燈花落ちて、一個の僧を茶毗するを。

【字解】【一】傳燈　書名、釋氏稽古略に「吳僧道原、釋迦世尊、初祖迦葉より、以て東土禪宗の傳嗣、諸祖の機緣に至るまでを集め、景德傳燈錄三十卷となす。眞宗、嘉賞し、翰林學士楊億等に敕し、刊正して序を撰し、頒つて大藏に入る」とある。【二】茶毗　焚燒する、火葬する。

【題義】曹溪の南華寺に居て、夜、傳燈錄を讀んで居ると、丁子が僧といふ字の上に落ちたから、この詩を口占したといふのである。口占とは、くちずさむ、口中にて隱に其言語を度りて人に授くるの義。後には、人に授くるといふ意は無くなつて、咄嗟の間に唱へ出すといふ樣に用ひて居る。

【詩意】山寺の堂中で、ひッそりした夜に當つて、燈下に傳燈錄を看て居ると、知らぬ間に、丁子が落ちて、一個の坊主を茶毗に付して仕舞つた。

【餘論】まことに下らぬ題で、從つて、詩も駄洒落に過ぎず、紀昀が「これ豈に是れ詩ならむや」といつたのは、極めて適切である。

南華老師示四韻、事忙、姑以一偈答之

南華老師、四韻を示さる、事忙はし、姑く一偈を以て之に答ふ

惡業相纏(一)五十年。　惡業、相纏ふこと五十年、

(二)常行(三)八棒十三禪。　常行、八棒十三禪。

却著衲衣歸(四)玉局。　却つて衲衣を著けて玉局に歸る、

自疑身是(五)五通仙。　自ら疑ふ、身は是れ五通の仙。

【字解】【一】五十年　この時、東坡は六十五歲であるが、これは、物心を知つてから以後の年數を云つたのであらう。【二】常行　行の字は、戒行などいふ時、仄字であるが、通用したのかも知れぬ。【三】八棒　傳應稽の案に「僧、関山の令含禪師に問ふ、明明不會、師の指示を乞ふ。師曰く、八棒十三禪」とある。これだけでは、よく分からぬが、日ごとに八棒を打たれ、又、一日は十二時で、十二時以上の禪をやらねばならぬといふ意味でもあらうか。【四】玉局　この

頃、東坡は玉局觀を勾管することに成つた。【五】五通仙　五燈會元に「世尊、五通仙人が、世尊に六通あり、われに五通あり、如何が是れ一通と問ひしに因り、佛、五通仙人を召す、五通、應諾す、佛曰く、かの一通は、儞、われに問ふ」とある。すると、五通仙人は、佛と相去ること一通、略ぼ相亞ぐものと見える。

【題義】本集の南華長老題名記に「南華は、六祖大鑒示滅せしより、その傳法得眼の者、散じて四方に之く、故に、南華は、律寺となる。吾が宋の天禧三年に至り、はじめて、智度禪師普遂に詔して住持たらしむ、今の明公に至るまで十一世」とある、明公、一に朗公に作り、これが即ち南華老師である。この首は、南華老師から、四韻、即ち律體の詩を示されたが、何分、事忙しくて、考へる暇もない故に、取り敢へず、一偈を以て之に答へたといふのである。

【詩意】われ世に出でて、惡業に付き纏はれて居たこと、すでに五十年、八棒十三禪を常行として、精進したいと思つて居る。やがて、僧衣を著て玉局觀に入る時あらば、取りも直さず、この身は五通仙人だらうと疑ふであらう。

次韻韶守狄大夫見贈二首　韶守狄大夫の贈らるるに次韻す　二首

華髮蕭蕭(一)老遂良。　華髮蕭蕭たり、老遂良、

一身萍挂海中央。　一身、萍は挂く海の中央。

無錢種菜爲家業。　錢なく、菜を種ゑて家業となし、

有病安心是藥方。　病あるも、心を安んずるは是れ藥方。

才疎正類(二)孔文擧。　才、疎にして、正に孔文擧に類し、

癡絕還同(三)顧長康。　癡絕、還た顧長康に同じ。

萬里歸來空(四)泣血。　萬里、歸り來つて、空しく血に泣く、

(五)七年(六)供奉殿(七)西廊。　七年供奉す、殿の西廊。

【字解】【一】老遂良　東坡の自註に「褚の河南帖に云ふ、即日、遂良、須髮盡く白し、と。蓋し長沙に謫せらるるの時なり」とある。【二】孔文擧　後漢書孔融傳に「融、その高氣を負ひ、志、靖難に在り、しかも、才疎にして、意廣く、迄に成功なし」とある。【三】顧長康　前に再用前韻寄莘老の詩中に注して置いた。【四】泣血　馮應榴の案に「末二句、哲宗の晏駕を指す、故に泣血の字を用ふ」とある。【五】七年　馮應榴の案に「先生、元豐八年、哲宗即位の十二月、入つて延和に侍せしより、元祐八年九月、出でて定州に知たるに至るまで、中間五六閱年を除いて、京師の外に在らず、前後統計、正に七年なり」とある。【六】供奉　唐書百官志に「明皇、文學の士を選びて、翰林供奉と號す。開元二十六年、又翰林供奉を改めて學士となす」とある。【七】西廊　東坡の自註に「邇英閣は、延和殿西廊の下に在り」と見ゆ。查註に「黃山谷詩註、東京記を引いて云ふ、崇政殿西、邇英閣あり。梁谿漫志、端明殿は後唐に始まる、國初改めて文明となす。而して、學士、仍ほ端明の難を領す。雍熙の初、又改めて文德と名づけ、明道の間、承明を改めて端明となし、後、改めて延和と名づく」とある。

【題義】查註に「太平寰宇記、嶺南道韶州、秦、南海郡に屬す。三國の吳、始興郡を置く。隋の開皇九年、改めて韶州となし、州北八十里、韶石を以て名となす。九域志に、廣南東路韶州、南、英州に至る一百九十五里、東北、南安軍に至る三百三十里と。狄大夫、名は咸、本集九成臺銘の敍中に見ゆ。又

後詩中に誰知南岳老の句あり、當に是れ衡州の人なるべし」とある。この首は、韶州の太守狄咸から詩を贈つて來たから、取り敢へず、これに次韻したのである。

【詩意】白髮蕭蕭として、褚遂良の老いたるに同じく、この一身は、萍の如く、海の中央に挂つて居る。錢なきが故に、百姓の眞似をして、菜を種うることを家業とし、病氣の時は、安心が唯一最善の藥方である。才の疏なることは、正しく孔文擧に類し、癡絶なることは、顧長康に類して居る。今萬里の海外より歸らむとし、天子の崩御を聞き、むかし、七年の久しき、延和殿の西廊なる邇英閣に、翰林學士として供奉し、日夕、聖恩を辱うしたるを思ふと、涙盡きはてし後、血を以て之に續ぐばかりである。

森森畫戟擁朱輪。　森森たる畫戟、朱輪を擁す、

坐詠梁公覺有神。　坐詠梁公、神あるを覺ゆ。

白傳閒游空誦句。　白傳閒游、空しく句を誦し、

拾遺窮老敢論親。　拾遺窮老、敢て親を論せむや。

東海莫懷疏受意、　東海、懷くなかれ疏受の意、

西風幸免庾公塵。　西風、幸に免る庾公の塵。

爲公過嶺傳新唱。　公の爲に、嶺を過ぎて新唱を傳ふ、

催發寒梅一信春。　發するを催す、寒梅一信の春。

【字解】【一】朱輪　前に會景亭の詩中に注して置いた。【二】梁公　唐書に「狄仁傑、梁國公に封ぜらる」とあつて、これは借用して韶州を指したのであらう。【三】白傳　東坡の自註に「事は、白樂天の吳郡詩石記に見ゆ」とある。五註本に「白樂天、蘇州たる時、旬宴詩刻の序あり、云ふ、章、この州に在つて、歡詩甚だ多し、郡宴の詩あり、云ふ、兵衞森畫戟、宴寢凝清香と。最も警策となす。今、この篇を石に刻して、將來に傳貽し、因つて余の旬宴の一章を以て亦た後に附す。諷句とは、この森戟凝香の句を誦するなり」とある。【四】拾遺　東坡の自註に「事は、子美の贈狄明府の詩に見ゆ」とあつて、即ち梁公曾孫我姨弟、不見十年官濟濟といふのである。【五】疏受　前に次韻孫巨源の詩中に注して置いた。【六】庾公　即ち庾亮、前に王廷老退居の詩中に注して置いた。

【詩意】森森たる畫戟は、朱輪を擁し、古しへの狄梁公の如く、坐して吟詠するのは、まことに精神ある樣に覺える。君は白樂天の如く、閒游して空しく句を誦し、又杜甫に似て、窮老の餘、敢て親を論ずることはない。依然として官に在る身は、東海の疏受の樣に辭職の心を起さず、誰でも快からざる人もないから、西風の吹きすさぶ日でも、庾亮の塵を受けることはない。君が爲に、五嶺を過ぎて、新しい詩句を傳へ、寒梅が第一に春信を傳へて咲き出でる樣に催促しやうと思ふ。

次韻韶倅李通直二首　韶倅李通直に次韻す　二首

一篇瀧吏可書紳。　一篇瀧吏、紳に書すべし、

【字解】【一】瀧吏　韓愈が潮州

莫向長沮更問津。　長沮に向つて更に津を問ふ莫れ。

老去常憂伴新鬼。　老去、常に憂ふ新鬼を伴ふを、

歸來且喜是陳人。　歸來、且つ喜ぶ是れ陳人。

曾陪令尹蒼髯古。　かつて、令尹に陪して蒼髯古く、

又見郎君白髮新。　又見る、郎君、白髮の新なるを。

回首天涯一惆悵。　首を回らせば、天涯一惆悵、

却登梅嶺望楓宸。　却つて、梅嶺を登つて楓宸を望む。

に貶せられる途中の作で、その中に「往問瀧頭吏、潮州尚幾里、瀧吏垂首笑、官何問之愚、蔵大瓶甖小、所在自有宜、官何不自量、滿溢以取斯、不知官在朝、有益國家不、得無風其間、不武亦不文、仁義飾其躬、巧姦敗群倫、叩頭謝吏言、始慙今更羞」とあつて、大指、皆嘲謔の詞である。【二】書紳　帶に書きつける、論語に見ゆ。【三】長沮　孔子が子路をして津を長沮に問はしめたといふので、亦た論語に見ゆ。【四】新鬼　新に死せし人、鬼は祭らざるを云ふ。左傳に「夏父弗忌、宗伯たり、僖公を躋び、且つ明かに見て曰く、われ新鬼大、故鬼小なるを見る」とある。【五】陳人　陳は古い、世におくれた人。【六】令尹　李倅の父を指す。【七】郎君　李倅を指す、王註に「古人、その父を謂ひ、又その子を謂ふるに於ては、謂うて郎君となす。李義山の令狐綯に與ふる詩に、郎君官貴施行馬」の如し」とある。【八】梅嶺　査註に「史記索隱、豫章三十里、梅嶺あり、古しへの驛道に當る。相傳ふ、梅將軍を以て名を得たり、と。越絕書、越王の子孫、姓は梅氏、秦、六國を併す、越王、零陵を踰えて南海に往く、越人梅鋗、從つて臺嶺に至つて家す、鄉人、因つて臺嶺を謂うて梅嶺となす、又大庾嶺と名づく」とある。【九】楓宸　王註に「天子の殿庭なり、何平叔、景福殿賦、芸若充庭、槐楓被宸」とあり、馮應榴の案に「說文解字、楓木は、漢の宮殿中多く之を植う、故に楓宸と稱す」とある。

【題義】王註に「案ずるに、先生、李惟熙に與ふるの帖に、偶ま生還を得、平生、龍舒の風土を愛し、卜居して終老の計を爲さむと欲す」とあつて、査註にも、この帖を擧げ「第二首と意合ふ、惟熙、疑ふらくは、即ち李通直ならむ」とある。すると、この詩は、韶州の通判たる李惟熙、字は通直の詩に次韻したのである。

【詩意】韓退之の瀧吏といふ詩は、宜しく紳に書すべく、貶謫された人は、顧みて自ら反省するが善いので、長沮に向つて、渡し場を問ふにも及ばない。次第に年を取つては、新佛に伴ふことを憂へ、歸り來つては、今の世に似合はしからぬ昔の人であることを喜んで居る。さきには、白髯の古りたる御親父の令尹に陪從したこともあつて、その上、貴下の白髮の新なるを見、君の家とは、累世の知り合である。身は、天涯に在つて、首を回らせば、惆悵の思に堪へぬものから、却つて、梅嶺に登つて、天子の居ます楓宸の方を望んで居る。

【餘論】紀昀は「語淺く、意深く、常語にして其舊を覺えず」といつて居る。

青山祇在古城隅。　青山、祇だ古城隅に在り、

萬里歸來卜築初。　萬里歸り來る、卜築の初。

曾見四山朝鶴駕。　かつて見る、四山、鶴駕に朝するを、

【字解】【一】四山　李註に「一統志、龍眠山は桐城縣に在り。又舒州に潛川あり、左慈修煉の處、皖山は天柱山、道書に司元洞天と稱す、漢の武帝、かつて此に登封し、以、

更看三李跨鯨魚。 更に看る、三李、鯨魚に跨るを。
欲從(四)抱朴傳家學。 抱朴より、家學を傳へむと欲す、
應怪(五)中郎得異書。 應に怪むべし、中郎の異書を得たるを。
待我(六)丹成馭風去。 待て我が丹成つて風に馭して去り、
借君瓊珮與霞裾。 君の瓊珮と霞裾とを借るを。

南岳に代ふ。或は、卽ち此の數山を指すなり」とある。【三】三李 王明淸の揮麈三錄中に「元祐中、舒州に李亮工といふものあり、文を以て縉紳の間に鳴り、伯時、元中と龍眠の三李と號す。同年、進士に登り、出處相若く、その後、仕、ともに顯はれず」とある。【三】跨鯨魚 李白が鯨に跨つて仙去したといふので、前に「次韻韶讀杜」の詩中に注して置いた。【四】抱朴 査註に「神異錄、明皇、元洞先生諫議大夫李抱朴に勅し、御頬を賚らして、九天司命の爲に、像を舒州潛山に塑せしむ。はじめて至る、忽ち殿後の石壁裂け、中に泥五色あり、卽ち取つて以て事を竣る、接するに、明皇又送「元洞眞人李抱朴謁「司命眞君」の詩あり、今先生引くところは、乃ち舒州の事。遹直、姓は李、故に「傳家學」といふ。もし以て葛稚川と爲さば、これを失ふこと遠し」とある。【五】中郎 蔡邕の事、前に「和陶答龐參軍」及び「廣倅蕭大夫」の詩中に注して置いた。【六】丹成 李白の詩に「待吾還丹成、投跡歸此地」とある。又東坡の自註に「僕、むかし、開封の幕となり、先生、赤令たり、暇日、相與に内外の丹を論じ、且つ其丹を出して僕に示す。今、三十年にして、君を曲江に見、同じく南華に游び、山水の間に宿すること數日、齋を遣うて嘆嗟し、且つ我に舒に卜居せむことを勸む、故に詩中、これに及ぶ」とある。

【詩意】青山は、只だ舒州古城の隅に在つて、景色も宜しく、予は萬里の海外より歸り來り、ここに落ち付いて後、地を卜して住居を築造しやうとさへ思つて居る。さうすれば、四方の山山で、仙人が鶴駕に乘じて、天に朝するを見るべく、又李氏の三人が、鯨に騎して登仙する其處をも尋ねることが出來る。君は、李抱朴の後裔として、家學を傳へやうと思つて居るし、予が珍らしいことを話し出すと、古しへの蔡邕の如く、必ず異書を得たに相違ないといつて怪むであらう。予が丹を煉つて成り、將に風に御して去らむとする時は、君から瓊佩と霞裾とを借りて、初めて昇天すべく、決して、無沙汰で往つて仕舞ふ樣なことはないから、安心して、待つて居て貰ひたい。

狄韶州煮蔓菁蘆菔羹

狄韶州、蔓菁蘆菔の羹を煮る

我昔在田間。寒庖有珍烹。 われ、むかし、田間に在り、寒庖に珍烹あり、
常支(一)折脚鼎。自煮花蔓菁。 常に折脚の鼎を支へ、自ら花蔓菁を煮る。
中年失此味。想像如隔生。 中年、この味を失ひ、想像、生を隔つるが如し。
誰知南岳老。解作(二)東坡羹。 誰か知らむ、南岳老、東坡の羹を作るを解せむとは。
中有蘆菔根。尙含曉露淸。 中に蘆菔の根あり、なほ曉露の淸を含む。
勿語貴公子。從渠嗜(三)羶腥。 貴公子に語る勿れ、渠が羶腥を嗜むに從かせよ。

【字解】【一】折脚鼎 前に「附二月長老」の詩中に注して置いた。【二】東坡羹 本集、東坡羹の引に「東坡居士、煮るところの菜羹、魚肉を用ひず、五味、自然の甘あり。その法、菘、もしくは蔓菁、もしくは蘆菔、もしくは薺を以てし、揉洗して汁を去り、菜を

湯中に下し、生米を入れて、糝となし、少生薑を入れ、油盤を以て之を覆ひ、其上に飯を炊ぐこと、常法の如し、飯熟し、羹亦た爛して食ふべし」とあつて、日本でいへば、雜炊の如きものであらう。【三】羶腥　二字ともに腥い、卽ち肉食を指す。

【題義】 狄韶州は、前にも見えた韶州の太守狄咸。蔓菁は蕪、蘆菔は大根、諸家の註には、本草・埤雅等を引いてあるが、必要がないから、今、すべて略すことにする。この詩は、狄咸が蕪・大根の羹を煮て進めたから、大に喜んで作つたのである。

【詩意】 予が昔日田舍に居た時は、貧しき廚にも珍らしい御馳走があつたので、毎毎、脚の折れた鍋を進めて、花の咲きかかつた蕪を煮て食つた。中年の頃は、全く此味を口にせず、これを想像すると、隔生の感がある。しかも、料らざりき、南嶽老の狄韶州が、東坡發明の羹を造り出して進めむとは。その中には、大根があつて、依然として、晨の露の涼しげなるを含んで居る。しかし、貴公子輩に語つた處で、仕方がないので、彼等には、唯だ腥羶を食はして置けば、それで宜しい。

【餘論】 紀昀は「淺近」といつて、大にけなして居るが、一應尤もである。

李伯時畫其弟亮工舊隱宅圖

李伯時の畫ける其弟亮工の舊隱宅の圖

樂天早退今安有。　樂天早退、今安くにか有る、

摩詰長閒古亦無。　摩詰長閒、古しへ亦た無し。

五畝自栽池上竹。　五畝、自ら栽う地上の竹、

十年空看輞川圖。　十年、空しく看る輞川の圖。

近聞陶令開三徑。　近ごろ聞く、陶令の三徑を開くを、

應許揚雄寄一區。　應に許すべし、揚雄の一區を寄するを。

晚歲與君同活計。　晚歲、君と活計を同じうし、

如雲鷺鴨散平湖。　雲の如きの鷺鴨、平湖に散す。

【字解】【一】樂天　白居易の字、【二】早退　早く身を退ける。【三】摩詰　王維の字。【四】池上竹　白樂天に池上篇があつて、その中に竹を併敍してある。前に竹閣、及び獨樂園の詩中に注して置いた。【五】輞川圖　輞川は終南山中の勝地、王維は別墅を築いて自ら之を圖した。唐書の本傳に「畫思、神に入り綸工に、以て天機の到るところとなす、學者及ばざるなり、別墅に華子岡・攲湖・竹里館・柳浪・茱萸沜・辛夷塢あり」と記し、國史補に「王維、性を立て致を高くす、宋之問の輞川の別業を得たり、山水絕勝」とある。【六】陶令　卽ち陶淵明、彭澤の令たりしが故に云ふ。【七】揚雄　前に和歐陽少師の詩中に注して置いた。

【題義】 輿地紀勝に「飛霞亭は、乃ち李公寅隱居の處、その兄伯時、爲に舊宅の圖を作る、亭は尉署の後に在り」と見ゆ。すると、亮工は、亮功に作るべく、そして、名は公寅である。この詩は、李龍眠が其弟亮功の爲に畫いた舊隱宅の圖に題したのである。

【詩意】 早く退官した白樂天は、すでに仙去して、今は居らぬし、王摩詰の何時でも閒暇なるは、古しへと雖も、その例を見ぬ位。樂天は、地上五畝の地に竹を栽ゑ、王維の輞川隱居の圖は、ここに十年

の間、空しく見ただけである。近ごろ聞けば、亮功は、陶令の如く、官を罷めて歸里し、新に庭中に三徑を開いたといふことで、揚雄の如き予が、その傍に一區劃の宅地を寄せることを許すであらう。さうすれば、予が晩年は、君と共に、活計を同じうし、平湖に於て、雲の如く多き鵝鴨を養ひたいと思ふ。

【餘論】査初白は「頷聯、起二句を分承す」といつて居るし、乾隆御批にも之を承けて「池上は樂天の句を承け、輞川は摩詰の句を承け、陶令は李に比し、揚雄は自ら比し、一意直下、舒展自如、これを律詩の神境となす」とある。

東坡居士、過龍光、求大竹、作肩輿、得兩竿、南華珪首座、方受請爲此山長老、乃留一偈院中、須其至授之、以爲他時語錄中第一問

東坡居士、龍光を過ぎて、大竹を求め、肩輿を作りて、兩竿を得たり。南華の珪首座、方に請を受けて此山の長老となる。乃ち一偈を院中に留め、その至るを須つて之を授け、以て他時語錄中の第一問と爲す

斫得龍光(一)竹兩竿。斫り得たり、龍光、竹兩竿、

持歸嶺北萬人看。嶺北に持ち歸らば萬人看む。

竹中一滴曹溪水。竹中一滴、曹溪の水、

漲起西江十八灘(二)。漲り起す西江の十八灘。

【語義】東坡居士は、龍光寺を過ぐる時、大きな竹を求めて、肩輿を作らむとして、二竿を得た。折しも、南華寺の珪首座が衆に推されて、この山の長老となりしに因り、一偈を院中に留め、その至るを俟つて、これに授けしめ、仍つて他日語錄中の第一問と爲す積りであるといふので、その偈が、即ち此詩である。

【詩意】龍光寺中の竹兩竿を斫り取つたが、その太いことは、又格別で、これを嶺北に持ち歸つたならば、誰でも驚いて看るであらう。その竹筒の中なる一滴曹谿の水が、西江に注ぎ入り、漲つて十八灘とならうとは、誰か臆想すべき。長老の法德洪大なることは、かくの如く、やがて、大に世人を敎化されるであらう。

贈嶺上老人

嶺上老人に贈る

鶴骨(一)霜髯(二)心已灰。鶴骨霜髯、心、すでに灰、

【字解】【一】龍光　寺の名。

【二】十八灘　前に過惶恐灘の詩中に注して置いた。王註にも「虔州西江に十八灘あり」と見ゆ。

【字解】【一】鶴骨　骨格の痩せ

たるをいふ。

【二】霜髯　白い天神髯。

【三】合抱　一かかへある。

青松合抱手親栽。　青松合抱、手、親ら栽う。

問翁大庾嶺頭住、　翁に問ふ、大庾嶺頭に住む、

曾見南遷幾箇回。　かつて、南遷幾箇か回るを見たる。

【題義】獨醒雜志に「東坡、還つて庾嶺の上に至りて、村舍に少憩す。一老翁あり、出でて從者に問うて曰く、官は誰とか爲す。曰く、蘇尙書。翁曰く、これ蘇子瞻か。曰く是れなり、と。乃ち前んで坡を揖して曰く、われ聞く、人、公を害するもの百端、今日北歸、これ、天、善人を祐くるなり、と。東坡笑つて之に謝し、因つて、一詩を壁間に題す云云」とある。

【詩意】予は、すでに年老いて、骨は鶴の如く瘦せ、髯は霜の樣に白くなり、心は冷灰と成りはてた。ここに立てる一かかへの靑松は、さきに通過する時、手づから植ゑたもので、それが、かほど大きくなつたのを見ても、歲月の移り行いたことが分かる。翁に問ふが、年來、ここ大庾嶺頭に住んで居て、南に遷謫された人で、赦されて、北に歸つたものを幾個見たか、予の如きは、蓋し稀なもので、聊か自ら幸とせねばならぬ。

【餘論】乾隆御批には「高朗、靑蓮の一體を得たり」とあるが、紀昀は「自ら幸とするの詞、然れども、亦た太だ淺し」といつて、忌憚なく遣ッつけて居る。

贈嶺上梅　　嶺上の梅に贈る

梅花開盡百花開。　梅花、開き盡して百花開き、

過盡行人君不來。　行人を過ぎ盡して、君來らず。

不趁靑梅嘗煮酒。　靑梅を趁うて、煮酒を嘗めず、

要看細雨熟黃梅。　看るを要す、細雨の黃梅を熟するを。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】梅花開き盡し、春も稍や闌になつて、百花が亂れ開いた。その時、旅客が行き盡しても、君のみは、ひとり來なかつたが、今ごろに成つて、やッと御出になつた。君は、ここに靑い梅の實を探がして、沸かした酒を嘗めやうともせず、細雨の中に、梅の實の黃に熟するを看て居られる。

【餘論】題して「嶺上の梅に贈る」といふものの、實は、嶺上の梅に代つて、言を立てた樣に成つて居る。

余昔過嶺而南、題詩龍泉鐘上、今復過而北、次前韻

余、むかし、嶺を過ぎて南し、詩を龍泉の鐘上に題す、今復た過ぎて北し、前韻

に次す

秋風卷黃落。朝雨洗綠淨。　秋風、黃を卷いて落し、朝雨、綠を洗うて淨し。

人貪歸路好。節近中原正。　人は、歸路を貪つて好し、節は、中原に近くして正し。

下嶺獨徐行。艱險未敢忘。　嶺を下つて獨り徐行、艱險、未だ敢て忘れず。

遙知叔孫子。已致魯諸生。　遙に知る叔孫子、すでに致す魯の諸生。

【字解】〔一〕卷黃　黃は黃葉。〔二〕洗綠　綠は綠葉。〔三〕叔孫子　漢書に「叔孫通、博士となり、上に說いて曰く、臣、願はくは、魯の諸生と臣の弟子とを召して、ともに朝儀を起さむ、と。ここに於て、通、魯の諸生三十餘人を徵さしむ。魯に兩生あり、行くを肯んぜず、云云。通、笑つて曰く、若は眞に鄙儒、時變を知らず、と。遂に徵すところの三十人と西す」とある。

【通義】査註に「龍泉は失考。志を案ずるに、大庾嶺の支を南源といふ、飛泉百丈、下に龍湫潭あり、深さ測るべからず。寺あり、雲封といふ。唐、庾山院と名づけ、俗、挂角寺と名づく、六祖大鑒禪師の塔あり。左に卓錫泉あり。疑ふらくは、卽ち龍泉ならむ」とある。題の意味は、予、さきに嶺を越えて南方に向つた時、詩を龍泉の附近なる寺の鐘の上に題した。今、再び此地を過ぎて、北歸するに際し、前韻に次して、この詩を作つたといふのである。

【詩意】秋風は颯として、黃ばんだ木の葉を捲いて吹き落したが、朝に成つて見ると、雨は常綠樹を洗うて淨く、まことに好い景色。人は、歸路を急ぐも好かるべく、中原に近づくに從つて、節物は、平正に成つて來る。嶺を下つて獨り徐行し、山中の艱險は、忘れられない位。今しも、叔孫通の樣な人が召し出され、元祐の黨人を起用して、新に禮儀を定めるといふが、予の如きは、當時の兩生の如く、全く除外されて居る。

【餘論】李註に「案ずるに、陸游の序に云ふ、建中の初、韓曾二相、政を得、盡く元祐の人を收用し、その召さざるものも、亦た大藩に補す。惟だ東坡兄弟、なほ宮祠を領す、末句、蓋し謂はゆる致す能はざるところの二人に寓す、意深くして語緩なり」とあつて、大に參考になる。それから乾隆御批には「刻意斲削、節短くして味長し」とあり、紀昀が「古韻を用ふ」といつたのは、中原正の正の字を指したのである。

過嶺二首　嶺を過ぐ　二首

暫著南冠不到頭。　しばらく、南冠を著くるも、頭に到らず、

卻隨北雁與歸休。　卻つて北雁に隨つて、ともに歸休。

平生不作兎三窟。　平生、作さず兎三窟、

【字解】〔一〕南冠　鍾儀の故事、左傳に見えて、前に與三文郎一飮レ酒の詩中に註して置いた。〔二〕兎三窟　戰國策に「馮諼、孟嘗君に謂つて曰

今古何殊貉一邱。（三）　今古、何ぞ殊ならむ貉一邱。

當日無人送臨賀。（四）　當日、人の臨賀を送るなく、

至今有廟祀潮州。（五）　今に至つて、廟あり、潮州を祀る。

劍關西望七千里。　劍關、西に望む七千里、

乘輿眞爲玉局游。（七）　輿に乘じて、眞に玉局の游を爲す。

く、狡兎、三窟あり、わづかに其死を免るるを得るのみ」とある。【三】 貉一邱　漢書に「楊惲曰く、秦時、但だ小臣に任じ、竟に以て滅亡す。大臣を親任せしめば、即ち今に至らんのみ。古しへと今と、一邱の貉の如し」とある。【四】 臨賀　唐書に「楊憑、臨賀の尉に貶せらる。姻友、往いて候するものなし。ひとり、徐晦、藍田に至つて慰餞す。宰相權德輿、謂つて曰く、君、臨賀を送る、まことに厚し、乃ち累を爲すなからむや。晦曰く、布衣の時に方つて、臨賀、われを知る。今、遽に棄つるに忍びむや。もし、公、異時、姦邪に譖斥せらるれば、又爾るべけむや、と。德輿、その直を歎じて、これを朝に稱す。李夷簡、遽に表して監察御史となす。曰く、君、楊臨賀に負かず、肯て國に負かむや」とある。【五】 潮州　韓愈が潮州に貶せられ、惠政ありしに因り、潮人、これが爲に廟を立て、東坡は嘗て其記を作つた。【六】 劍關　元和郡縣志に「小劍の故城は、利州益昌縣の西南五十一里に在り、大劍の戍を去ること四十里、連山通衢、これを劍閣道といふ。縣の西南より小山を踰えて大劍口に入る、即ち、秦、張儀・司馬錯をして蜀を伐たしめしとき、由るところの路なり、亦た之を石牛道といふ」とある。【七】 玉局　觀の名、成都城南柳堤に在る。東坡は、この觀の提擧に任ぜられた。

【題義】 說明に及ばぬ。

【詩意】 しばらく、南冠を戴きしものから、すッぽり頭までは入らず、却つて、北地に歸る雁に隨ひ、罪を赦されて歸休することに成つた。平生、まさかの時の用意として、狡兎が三窟を穿つが如き事を爲さず、達觀すれば、今古は、おしなべて、一邱の貉に過ぎぬ。むかし楊憑が臨賀の尉に貶せられた時、徐晦が獨り之を送つて、その直を嘆賞されたが、予が曩に南遷された時は、かかる人だになく、韓愈は、潮州に左遷されて、後には其地に祀られたといふが、予も亦た此の如くならむことを希望する。故國なる劍關は、ここより西に七千里を隔てて居るが、やがて、輿に乘じて、本當に成都なる玉局觀に遊ぶこともあらうと思ふ。

【餘論】 紀昀は「五六、自ら好し、然れども、宜しく自ら況すべからず」といつて居る。

七年來往我何堪。（一）　七年來往、われ何ぞ堪へむ、

又試曹溪一勺甘。　又試む、曹溪、一勺の甘きを。

夢裏似曾遷海外。　夢裏、かつて海外に遷るに似たり、

醉中不覺到江南。（二）　醉中、覺えず、江南に到る。

波生濯足鳴空澗。　波は、濯足に生じて空澗に鳴り、

霧繞征衣滴翠嵐。　霧は、征衣を繞つて翠嵐を滴る。

誰遣山雞忽驚起。　誰か、山雞をして忽ち驚起せしむ、

【字解】【一】 七年　年譜を見ると、東坡は、紹聖元年を以て定州より惠州に貶せられ、凡そ四年にして、再び惠州に貶せられ、明年、元符と改元、乃ち廉州に量移したから、計七年になる。【二】 江南　即ち虔州。

半巖花雨落毿毿。 半巖の花雨、落ちて毿毿。

【詩意】七年の久しい間、南北に來往して、老年の身には、まことに堪へられないが、その間、曹溪の本山に參詣して、一句の甘きを味つたことがある。かつて、海外に遷謫されたことは、まるで夢裏の如く、今や、醉中、知らず識らずの間に、虔州に到著した。空澗の水に足を濯へば、波が湧いて鳴り出し、霧は旅衣を繞つて、翠嵐滴るが如く、はては、しとどに濡れて仕舞ふ。誰か知らぬが、水鏡に妝ふ例の山雞を驚かして起たしめたものと見え、巖半の花は、毿毿として、雨の如く降り注いだ。

【餘論】乾隆御批に「遷謫を視ること、猶ほ醉夢中の若し、その胸中、別に澄定のもの在るを知る」とあり、次に紀昀が「結、機心、すでに盡き、必ずしも相猜まざるの意を言ふ、寫景に非ざるなり」といつたのは、頗る發明するところがある。

過嶺寄子由　嶺を過ぎて子由に寄す

投章獻策謾多談、 章を投じ、策を獻じて謾に多談、
能雪冤忠死亦甘。 能く冤忠を雪がば、死も亦た甘んず。
一片丹心天日下、 一片の丹心、天日の下、
數行清淚嶺雲南。 數行の清淚、嶺雲の南。
光榮歸珮呈佳瑞、 光榮歸珮、佳瑞を呈し、
瘴癘幽居弄晚嵐。 瘴癘幽居、晚嵐を弄す。
從此西風庾梅謝、 これより、西風、庾梅謝す、
却迎誰與馬毿毿。 却迎、誰と與にか馬毿毿。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】かつて、文章を投じ、策略を獻じ、いたづらに、言ひ草のみ多く、その爲に禍を得たのであるが、苟くも、あくまで忠心を失はぬといふ樣に、冤罪を雪ぎ淸められたならば、いつ死んでも善いと思ふ。一片の丹心は、耿耿として、天日の下に輝きわたり、數行の淸淚は、嶺雲の南に降り注ぐ。今日北歸するに就いて、劍佩は、光榮の爲に佳瑞を呈し、瘴癘に鎖された幽居は、日暮に山氣に弄せられて、最早見えなく成つて仕舞つた。これより西風吹きすさび、大庾嶺上の梅の木も、葉が落ち盡す頃になるので、誰が毿毿たる馬を竝べて送迎するか、さすがに、邊僻の寂しさ、自然感慨を免れぬ次第である。

蘇東坡詩集 卷四十五

古今體詩 四十二首

留題顯聖寺

顯聖寺に留題す

渺渺疏林集晩鴉。渺渺たる疏林、晩鴉集まる、

孤村煙火梵王家。孤村の煙火、梵王の家。

幽人自種千頭橘。幽人、自ら種う、千頭の橘、

遠客來尋百結花。(一)遠客、來り尋ぬ、百結の花。

(二)浮石已乾霜後水。浮石、すでに乾く、霜後の水、

(三)焦坑閒試雨前茶。(四)焦坑、閒に試む、雨前の茶。

祇疑歸夢西南去。祇だ疑ふ、歸夢、西南に去り、

翠竹江村繞白沙。翠竹江村、白沙を繞る。

【字解】【一】百結花 丁香を云ふ。【二】浮石 名勝志に「浮石は、南安府南康縣西を去ること三十里、形、覆鐘の如く、水、その外を環り、上游の勝概たり、唐の顯聖院あり」とある。【三】焦坑 名勝志に「焦溪は、南康縣西三十五里に在り、源、鍋坑に出で、浮石に至つて章水に入る」とある。【四】雨前 穀雨の前。

【題義】説明に及ばぬ。顯聖寺は、字解の中に注して置いた。

【詩意】渺渺たる疏林には、晩鴉がとまり、孤村に煙火の上るのは、卽ち寺である。幽人たる予は、ここに千頭の橘を植ゑやうと思ふが、遠客は、丁香の花を珍らしげに尋ねるであらう。名だたる浮石は、霜後、水、すでに乾き、焦坑では、追追、穀雨の前に當つて、茶を摘むであらう。唯だ歸夢が、反對に西南に向つて去り、翠竹の白沙を繞れる江村に向ふのは、まことに不思議で、つまり、この地の風景が好いからであらう。

予初謫嶺南、過田氏水閣、東南一峯、豐下銳上、里人謂之雞籠山、予更名獨秀峯、今復過之、戲留一絕

予、はじめ嶺南に謫せられ、田氏の水閣を過ぐ。東南一峯、豐下銳上、里人、これを雞籠山と謂ふ。予は更めて獨秀峯と名づく。今復た之を過ぎ、戲に一絕を留む

倚天巉絕玉浮圖。天に倚つて巉絕たり、玉浮圖、

肯與彭郎作小姑。肯て彭郎と小姑たらむや。

獨秀江南知有意。獨り江南に秀づる、意あるを知る、

要三二別四三壺。二別を三にし、三壺を四にするを要す。

【字解】【一】浮圖　卽ち塔、その峰を喩へて云ふ。【二】彭郎　王註に「拾遺、江南に兩山あり、孤迴、江中に出づ、古しへ傳へて二孤となす、後人、これを訛し、卽ち大なるものを以て大姑となし、小なるものを小姑となし、祠を立て、婦人の名を以て之に配す。洞庭の下に洲あり、風濤、これに激すれば、隱隱として聲あり、古しへ、傳へて猛浪磯となし、後の訛するものは彭郎磯といふ。又以て小姑の塔となすなり」とある。【三】二別　大別山と小別山。【四】三壺　海中の三山、卽ち蓬萊・方丈・瀛洲。

【題義】南安志に「南康縣治の東七十步に蘇步坊あり、蘇子瞻、南遷して此を經、田如鼇の六經堂を過ぎ、留題、因つて名づく。坊側に井あり、深くして洌、石底、盤の如し、九竅あり、泉、中より湧き出づ」とあり、又「獨秀峰は、縣の東南二十里に在り、俗、雞籠と名づく、山下に龍湫あり」と見ゆ。題の意味は――予、はじめ、嶺南に謫せられしとき、田如鼇の水閣、六經堂を訪うた。そこで眺めると、東南の一峰、下が膨れ、上が銳く削つた樣で、里人は、これを雞籠と稱したが、予は、改めて獨秀峰と名づけた。今再び水閣を過ぎしに因り、戲に一絕を題したといふのである。

【詩意】雞籠山は、塔の如く嶄然屹立、天に倚つて巉絕の勢を爲して居て、たとひ、彭郎の如きものがあつたとて、これに配して小姑となることを諾すべきか。ここに江南に在つて、獨り秀でて居るのは、大に意味あることで、二別に加へて三となし、三山に加へて四となさむとする積りであらう。

【餘論】查註に「案ずるに、燕丹子に云ふ、高きこと、三王を四にし、下、五伯を六にせしめむと欲す、と。困學紀聞に云ふ、三墳を四にし、五典を六にし、二曜を三にし、五緯を六にすと。先生、こ

の詩の結句、正に此解に同じ」とあり、紀昀も亦た「これ五帝を六にし、三王を四にすの語より化して來る。然れども、詩に入つて、句法を成さず」といつて居る。

寄題潭州徐氏春暉亭　潭州徐氏の春暉亭に寄題す

曈曨曉日上三竿。　曈曨たる曉日、三竿上る、
客向東風競倚欄。　客は東風に向つて、競うて欄に倚る。
穿竹鳥聲驚步武。(一)　竹を穿つの鳥聲、步武に驚き、
入簷花影落杯盤。　簷に入るの花影、杯盤に落つ。
勿嫌步月臨元圃。(二)　嫌ふ勿れ、月に步して元圃に臨むを、
冷笑乘槎向海灘。　冷笑す、槎に乘じて海灘に向ふを。
勝概直應吟不盡。　勝概、直に應に吟じて盡さざるべし、
憑君寄與畫圖看。　君に憑つて、畫圖に寄與して看む。

【題義】說明に及ばぬ。但し、春暉亭は、諸家の註に見えぬから、しばらく之を缺く外はない。

【字解】【一】步武　國語に「步武尺寸の間に過ぎず」とあつて、わづかなる距離。
【二】元圃　晉書陸機傳に「葛洪、書を著し、機の文を稱す、猶ほ元圃の積玉 夜光に非ざるはなきがごとし」とあつて、即ち玉を產する仙境。

【詩意】曈曨たる朝日が、三竿の高さに上り、春風徐に吹き度る時、ここ亭上の欄干に倚つて眺めやる心地よさ。鳥の聲は、竹を穿つて聞こえ、さながら人の近きに在るを知つて驚くが如く、花の影は、簷にまで入つて、杯盤にさへ映つて見える。ここに居れば、月に步して、玉を產する元圃の地を見下すが如く、舟に乘つて、海灘に乘り出す必要もない。その勝概は、なかなか、一寸の間に吟し盡すことが出來ぬから、君に依賴して、畫圖の中に寄せて、巧に寫して貰ひたいと思ふ。

【餘論】紀昀は「步武の字、腐」といつて居る。

乞數珠贈南禪湜老　數珠を乞うて南禪の湜老に贈る

從君覓數珠。老境仗消遣。　君に從つて數珠を覓む、老境、仗つて消遣せむ。
未能轉千佛。且從(一)千佛轉。　未だ千佛を轉する能はず、且つ千佛に從つて轉す。
儒生推變化。乾策數大(二)衍。　儒生、變化を推し、乾策、大衍を數ふ。
道士守玄(三)牝。龍(四)虎看舒卷。　道士、玄牝を守り、龍虎、舒卷を看る。
我老安能爲。萬(五)劫付一喘。　われ老いて、安んぞ能く爲さむ、萬劫、一喘に付す。
嘿坐閱塵界。往來八(六)十反。　嘿坐、塵界を閱し、往來、八十反。

區區我所寄。蹙縮蠶在繭。　區區、わが寄するところ、蹙縮、蠶、繭に在り。

適從海上回。蓬(七)萊又清淺。　適ま海上より回れば、蓬萊又清淺。

【字解】【一】且從千佛轉　傳燈錄に「法達禪師、法華經を誦して、三千部に及ぶ。六祖曰く、心迷へば法華轉じ、心悟れば法華を轉ず」とあり、翻譯名義に「佛の心中化他の法を轉じ、度して他心に入る、轉法輪と名づく」とある。【二】大衍　王註に「易、大衍の數五十、其れ四十九を用ひよ。又曰く、凡そ天地の數五十有五、これ變化を成して鬼神を行ふ所以なり」とある。【三】玄牝　老子に見ゆ、宇宙の本體を云ふ。前に贈二黄山人一の詩中に注して置いた。【四】龍虎　王註に「金晶論、夫れ龍虎は金木なり、金を虎となし、木を龍となす、虎の異名は眞鉛、金木なり、龍の異名は眞汞、木火なり」とある。【五】萬劫　未來永劫の義、前に登二常山一及び送二鄧道士一の詩中に注して置いた。【六】八十反　王註に「釋氏の書、大劫小劫あり、饑饉・疾疫・刀兵の增減の如きは、これ皆小劫の異名、二十增減を統べて一住劫となし、これを中劫と名づくと。又、成壞空劫あり、皆中劫なり、時量各二十增滅を經、住劫と等し。この成住壞空の短長の量を統べて、八十增滅を經、一大劫と名づく」とあり、法苑珠林に「一壞二空三成四住、この四時中、各二十小劫に分ち、すべて八十小劫となし、始めて、一大水火劫となす」とある。【七】蓬萊又清淺　前に留二題仙都觀一の詩中に注して置いた。

【題義】本集に虔州崇慶院藏經記序といふ一文があつて、その中に「提長老、寺を南禪に剏建す、卽ち崇慶なり」とあつて、亦た廉泉院と稱して居る。提老は、本卷清隱老の下に詳しく注することにする。この詩は、數珠が欲しいといつて、南禪寺なる提長老に贈つたのである。

【詩意】君に向つて數珠を求め、それに依つて、老境の閒暇を消遣したいと思ふ。もとより、悟り切らぬ心には、千佛を轉ずること能はず、しばらく、千佛に轉せられ、つまり、自力とは行かぬから、他力に依る外はない。儒生は、變化の理を推算し、易の象數を以て、大衍五十の數を算出し、道士は、玄牝と號する宇宙の本體を守り、龍虎金木の法を以て仙丹を調合する。われは、年を取つて、兩つながら之を能くせず、未來永劫を以て、一呼吸に付し、默坐して、この塵界の推移を觀じ、八十增減を經て大劫になることを知つて居る。區區として、わが心を寄せるのは、主として、この點に在るので、たとへば、蠶が身を縮めて、繭の中に潛んで居る樣なものである。今しも、適ま海上から歸つて來たが、蓬萊の水でさへ、清淺になる位で、有爲轉變の到底免れぬ上は、佛道に歸依して、安心立命を求める外はない。

【餘論】紀昀は「太だ剽なり」といつて居る。

鬱孤臺

鬱孤臺

吾生如寄耳。嶺(一)海亦閒游。　吾が生、寄の如きのみ、嶺海、亦た閒游。

贛(二)石三百里。寒江尺(三)五流。　贛石、三百里、寒江、尺五流る。

楚山微有霰。越瘴久(四)無秋。　楚山、微に霰あり、越瘴、久しく秋なし。

望斷橫(五)雲嶠。魂飛咤(六)雪洲。　望は斷ゆ、雲に橫ふの嶠、魂は飛ぶ、雪を咤るの洲。

曉鐘時出寺。暮鼓各鳴樓。　曉鐘、時に寺を出で、暮鼓、各〻樓に鳴る。
歸路迷千嶂。勞生閱百州。　歸路、千嶂に迷ひ、勞生、百州を閲す。
不隨猿鶴化。甘作賈胡留。　猿鶴に隨つて化せず、甘んじて、賈胡となつて留まる。
祗有貂裘在。猶堪買釣舟。　祗だ貂裘の在るあり、猶ほ釣舟を買ふに堪へたり。

【字解】【一】嶺海　五嶺と南海。【二】贛石　虔州志に「贛州の水は、府城の北、章貢二水の會處に在り、北流して萬安縣に至る、その間に九灘あり、上水の信豐寧都の如きは、石磧尤も險なり、故に、俗、上下三百里贛石と稱す」とある。【三】尺五流　五註本に「その窄きを言ふのみ」とある。【四】久無秋　馮應榴の案に「詩、天暖に、涼秋の氣候なきを言ふなり」とある。【五】横嶠　爾雅に「山鋭くして高きを嶠といふ」とある、即ち五嶺をいふ。【六】咤雪洲　咤はほこる、珍らしがる、これは、瓊崖儋萬の四州を言ふ。賈捐之傳に「儋耳珠崖、皆南方海中に在り、洲は南越の地に居り、炎蒸にして雪なし、雪あらば、以て著咤となすなり」とある。【七】猿鶴　抱朴子に「周の穆王南征し、久しうして歸らず、一軍皆化し、君子は猿鶴となり、小人は蟲沙となる」とある。【八】賈胡　商賣をする外國人。【九】貂裘　戰國策に「蘇秦、黒貂裘を衣て出游し、數歳、大に困んで歸る」とある。

【題義】鬱孤臺は、前にも見えて居た。東坡の自註に「再び虔州を過ぎて、前韻に和す」とある。

【詩意】わが一生は、この世に寄寓して居るに過ぎず、五嶺南海の遠きも、亦た閒游を爲した。贛石上下三百里の險は、他に其比なく、狹い寒江は、勢すさまじく流れて居る。楚山には、少しく霰が降つて、雪模様であるが、越地は、依然暖く、瘴氣吹き滿ちて、全く涼秋の氣候がない。五嶺は、さかしき山が雲に横はつて、望、將に斷たむとし、雪を珍らしがる瓊・崖・儋・萬の地に向つて、魂を飛ばす次第である。曉の鐘は、寺を出でて響くが、暮の鼓は、各〻樓上に鳴つて居る。わが北歸の路は、千嶂の間に迷ひ、從來、この生を勞して、諸州を歷めぐり、しかも、なほ猿鶴と共に仙せず、甘んじて行商の外國人の樣な氣がして、此に留まつて居る。唯だ、むかしの儘の貂裘が殘つて居るから、釣舟を買つて、これから、世外に優游したいと思つて居る。

【餘論】乾隆御批に「深穩の至、彌よ出でて清新」といひ、「吾生如寄耳の一句、集中、屢ばその横溢を見る、もとより此に屑屑たらざるなり」とある。

虔守霍大夫監郡許朝奉見和復次前韻

虔守霍大夫、監郡許朝奉、和せらる、復た前韻に次す

大邦安靜治。小院得閒游。　大邦、靜治に安んじ、小院、閒游を得たり。
贛水雨已漲。廉泉春未流。　贛水、雨、すでに漲り、廉泉、春、未だ流れず。
同烹貢茗雪。一洗瘴茅秋。　同じく、貢茗の雪を烹て、一洗せむ瘴茅の秋。
秋思生蓴鱠。寒衣待橘洲。　秋思、蓴鱠に生じ、寒衣、橘洲を待つ。
揚雄未有宅。王粲且登樓。　揚雄、未だ宅あらず、王粲、且つ樓に登る。

（五）老景無多日。歸心夢幾州。　老景、多日なく、歸心、幾州を夢む。

敢因（六）逃酒去。端爲和詩留。　敢て酒を逃るるに因つて去らむや、端に詩に和するが爲に留まる。

舊篋藏（七）新語。淸風自滿舟。　舊篋、新語を藏し、淸風、自ら舟に滿つ。

【字解】〔一〕貢茗雪　產地から貢獻した名茶を雪水で沸かす。〔二〕瘴茅　黃茅瘴といつて秋時の毒熱をいふ。〔三〕揚雄　前に和歐陽少師の詩中に注して置いた。〔四〕王粲　前に二公再和の詩中に注して置いた。〔五〕老景　老境に同じ。〔六〕逃酒　酒席から逃れ出る。漢書に「劉章、高后の爲に酒を行る、諸呂の一人、酒を亡ぐ」とある。〔七〕新語　寄せられた新作。

【題義】　虔州志に「霍漢英、字は子侔、紹聖間、虔州に知たり。許監郡の名、失考」とあり、馮應榴の案に「霍子侔、竝に先生が錢濟明・蘇伯固に答ふる尺牘中に見ゆ。又淸波雜志に云ふ、淮西の憲臣霍漢英、奏して、天下、蘇軾撰するところの碑刻、竝に一例除毀すべきを乞ふ。詔して之に從ふ。時に崇寧三年なり、と。これに據れば、漢英、淮西より虔に移り、先生の赦され歸りしを見て、復た詩を和して好を修す、眞に取るに足らず」とある。この詩は、虔州太守霍大夫及び監郡朝奉郎許某が共に予の詩に和して贈られたから、再び前韻に次して之に酬いたといふのである。

【詩意】　大邦は、靜平の治に安んじて、四境無事なるが故に、二君は、小院中に引き籠つて、閒游することが出來る。折から、贑江の水は、雨の爲に既に漲り、廉泉は、方に涸れ盡し、春を待つて、まだ流れない。一緒に、貢茶を雪水に和して沸かし、秋の名殘たる黃茅瘴の毒熱を一洗したいと思ふ。秋思は、故國の蓴羹鱸膾を思ふに因つて生じ、寒衣は、柑橘の洲上に熟するを待つて、はじめて著けやう。揚雄は、貧にして未だ宅あらず、王粲は、客中、しばらく樓に登つて、遠望を事として居る。予は、老境に臨んで、剩すところ、多日なく、心に北歸を急ぐ爲に、幾つかの州を夢に見る。予は、決して酒を逃れて去るのではないが、君の詩に和する爲に、此に留まつて居る。持ち古したる篋中には、君の新詩を入れ、その爲に、淸風が自然、舟に滿つるが如く感ぜられた。

贈虔州術士謝晉臣　虔州の術士謝晉臣に贈る

（一）屬國新從海外歸。　屬國、新に海外より歸る、

（二）君平且莫下簾帷。　君平、且つ簾帷を下す莫れ。

前生恐是（三）盧行者。　前生、恐らくは是れ盧行者、

後學過呼韓退之。　後學、過つて呼ぶ韓退之。

死後人傳（四）戒定慧。　死後、人は傳ふ戒定慧、

生時宿（五）直（六）斗牛箕。　生時、宿は直る斗牛箕。

【字解】〔一〕屬國　蘇武が匈奴より漢に歸りし後、典屬國に任ぜられた。〔二〕君平　嚴遵の字　成都に居て賣卜を業として居た、前に和陶雜詩の詩中に注して置いた。〔三〕盧行者　高僧傳に「慧能、姓は盧氏、韶陽に往いて劉志略に遇ふ。略に姑あり、恆に涅槃經を讀む。能、これを聽き、卽ち尼の爲に中義を解

憑君爲算行年看。　君に憑る、爲に行年を算して看よ、

便數生時至死時。　便ち生時を數へて、死時に至る。

折す、尼、深く爲に歎服し、鼓して行者となす」とある。【四】戒定慧　傳燈錄に「法海禪師、はじめて六祖を見、問うて曰く、即心即佛、願はくは指喩を垂れよ。師云ふ、吾が偈を聽け、曰く、即心慧と名づく、即佛は乃ち定、定慧等持、意中清淨と。蓋し佛氏、戒は定を生じ、定は慧を生ずるを謂ふなり」とある。【五】宿直　星が位置する。【六】斗牛箕　前に次韻滿星硯の詩中に注して置いた。又王註に「先生、蓋し自ら謂ふ、生時、退之と相似たりと。蓋し、命宮、斗門に在り、而して、身宮、亦た在ればなり。事は、本集に見ゆ」とある。【七】行年　生涯の年。

【題意】説明に及ばぬ、但し、謝晉臣は失考。

【詩意】身は蘇武の如く、新に海外より都に歸らうとして居る折から、嚴君平に比すべき君に問ひたいことがあるから、しばらく、簾帷を下さずに涩いて吳れろ。予の前生は、多分、盧行者でもあらうか。そして、後學の者は、過つて韓退之の樣だといつて居る。されば、佛道は悟入し、死後には、人をして、戒より定、定より慧と、次第に進境があつて、まことに偉らいといはしめる樣にしたく、生まれた時の星は、斗牛箕の間に當り、その出處進退、頗る退之と相類して居る。君に依賴するが、わが爲に、行年いくつまで生きられるかを算し、從つて、出生の時より死去の時に至るまでの事を數へ立てて、篤と話して貰ひたい。

【餘論】前聯は、すでに答周循州の詩中に見え、唯だ一字違ふだけである。查初白は「この詩、五六の聯、三四兩句を分承し、末一句又五六を總結す、章法遒緊」といつて居る。

虔州景德寺榮師湛然堂　虔州景德寺榮師の湛然堂

卓然精明念不起。　卓然精明、念、起らす、

兀然灰槁照不滅。　兀然灰槁、照、滅せす。

方定之時慧在定。　定の時に方つて、慧、定に在り、

定慧照寂非兩法。　定慧照寂、兩法に非す。

妙湛總持不動尊。　妙湛、總持、不動、尊し、

默然眞入不二門。　默然、眞に入る不二の門。

語息則默非對語。　語、息めば默す、對語に非す、

此話要將周易論。　この話、周易と論するを要す。

諸方人人把雷電。　諸方の人人、雷電を把り、

不容細看眞頭面。　容さす、細に、眞頭面を看るを。

【字解】【一】精明　楞嚴經に、「妙精明心」とあり、又「精明卽妙」とある、悟り澄ました心を形容して云ふ。【二】灰槁　灰の如く冷かに枯れる。【三】方定之時　定慧は前詩の戒定慧にも注して置いた。【四】妙湛　楞嚴經の註に「妙湛は眞諦般若德を贊するなり、總持は俗諦解脫德を贊するなり、不動は中諦法身德を贊するなり、卽ち三にして一、故に妙湛といふ。卽ち一にして三、故に總持といふ。三に非す、一に非す、故に不動といふ」とある。【五】不二門　佛敎の蘊奧、前に維摩像の詩中に注して置いた。【六】周易論

欲知妙湛與總持。　知らむと欲す、妙湛と總持とを、

更問江東三語掾。　更に問へ、江東の三語掾。

王註に「蓋し、聲發すれば語となり、聲止めば默となる、語る者終に默せざるに非ず、默する者終に語らざるに非ず、この二者は本と相對せざるなり」とある。【七】把雷電　五註本に「各〻その權を擅にするを言ふなり、譚家、擊電の機といふは、是れのみ」とある。【八】三語掾　阮瞻の事、前に次二韻道潛留別一の詩中に注して置いた。

【題義】査註に「輿地紀勝、景德寺は、劉宋建つ、舊と安天と名づく、虔州府治の東南隅に在り、地勢爽曠、城南の山水を瞰覽す、梵宇壯麗、間を以て計るもの二千六百、佛像萬餘。黃山谷の詩、城東寶坊金碧重は、卽ち此なり。虔州志に謂ふ、唐の德宗貞元三年に建つ、と。未だ詳にせざるところ」とある。榮師は失考。この詩は、虔州景德寺の中で、榮師の居る湛然堂に題したのである。

【詩意】悟り澄ました後は、卓然精明、すこしの念慮だに起らず、又兀然として灰の如く枯れ切つてからは、光明照耀し、決して消えることなく、榮師の精神狀態は、卽ち此の如くである。その入定を爲す時に當つて、慧は、早くも定中に生じて、意中、淸淨となるので、定と慧、照と寂とは、ともに修練する過程と其極致とであるから、全く同一と稱すべく、斷じて、兩法ではない。次に、妙湛といひ、總持といひ、不動といひ、その尊きこと、限りなく、默然として不二の法門に突入するのである。元來、語止めば默、語と默とは、互に聯關して居るもので、相對的の者ではなく、この事は、周易の原理と共に詳論する必要がある。諸方の人人は、雷電を把つて照らし見、それで、この域に到達しやうと思ひ、眞正の頭面を精細に見るといふ根氣が無いから、到底、その目的を達することが出來ぬ。そこで、この手合にして、妙湛といひ、總持といふ其意義を知らうと思ふならば、さし向、かの淸談を以て知られ、晉代の三語掾と稱せられし阮瞻輩に問ふ外なかるべく、その根柢が誤つて居ると、正當の結果は得られない。

【餘論】紀昀は「眞に是れ偈呪」といつて居る。この邊の詩は、すべて東坡晚年の作に係り、御本人は、餘程悟り切つた積りであらうが、果して、如何なものか。それに、古今の註家は、佛理に懵いから、箋釋も到底不十分であるし、譯解者に於ては猶更の事であるから、先づ大抵にして片づける外はない。

次韻陽行先

陽行先に次韻す

室空惟法喜。心定有天游。　室は空しく惟だ法喜、心定まつて天游あり。

摩詰原無病。須洹不入流。　摩詰、もと病なく、須洹、流に入らず。

若嫌尋直枉。坐待寸田秋。　もし直枉を尋ぬるを嫌はば、坐して待たむ寸田の秋。

雖未麒麟閣。已逃鸚鵡洲。　未だ麒麟閣ならずと雖も、すでに逃る鸚鵡の洲。

酒醒風動竹。夢斷月窺樓。
衆謂元(六)德秀。自稱陽道州(七)。
拔(八)葵終相魯。避穀會封留(九)。
用舍俱無礙。飄然不繫舟。

酒醒めて、風、竹を動かし、夢斷えて、月、樓を窺ふ。
衆は謂ふ元德秀、自ら稱す陽道州。
葵を拔いて終に魯に相たり、穀を避けて會ず留に封せられむ。
用舍、ともに礙なく、飄然たり繫がざるの舟。

【字解】【一】法喜　妙法を悟り得たる喜悅。【二】摩詰　維摩經に「維摩詰言ふ、我が此病の如きは、眞に非ず、有に非ず」とある。【三】須涅　金剛經に「須陀洹、名づけて入流となす、しかも、實は入るところなし」とあり、その註に「須陀洹、ここに、入流、果證を得るものと飜す。入流を約して說く、卽ち八聖道の流に入るなり」とある。【四】麒麟閣　漢書蘇武傳に「甘露三年、單于入朝す、帝、股肱の良を思うて、乃ち其人を麒麟閣に圖畫す」とある。【五】鸚鵡洲　禰衡が黃祖に殺された處、前に萩浦の詩中に注して置いた。【六】元德秀　唐書に「字は紫芝、母亡ふ、親在つて娶るに及ばざりしを以て、肯て婚せず。人以て嗣を絕つべからずとなすや、答へて曰く、兄に子あり、先人祀らるるを得、吾、何ぞ娶らむ」とあり、田汝成の西湖志餘に「陽行先、平生娶らず、東坡、直に其室に造り、かつて元德秀を以て之を呼ぶ。居士曰く、某は卽ち陽城の裔と。故に坡詩、衆謂元德秀、自稱陽道州と。蓋その妻なきを謂ふなり」とある。【七】陽道州　唐書に「陽城、字は亢宗、道州刺史となる」とある。【八】拔葵　史記に「公儀休、魯の相たり、茹を食うて美なり、その園葵を拔いて之を棄つ」とある。【九】封留　漢書張良傳に「漢、功臣を封す。帝曰く、籌策を帷帳の中に運らし、勝を千里の外に決するは、子房の功なり、と。自ら齊の三萬戶を擇ばしむ。良曰く、はじめ、臣、下邳に起り、上と留に會す。これ、天、臣を以て陛下に授く。願はくは、留に封ぜらるれば足れり、と。良、性疾多く、卽ち道引して穀を食はず」とある。

【題義】宋史に「陽孝本、字は行先、贛州の人、學博く、行高く、城西通天巖に隱る。蘇軾、海外より歸り、過ぎて之を愛し、これを號して玉巖居士といふ。隱遯二十年。崇寧中、八行に擧げられ、褐を解き、直秘閣を以て歸る」とある。この詩は、陽行先に次韻し、却つて其人に贈つたのである。

【詩意】室中空しくして人なき處、以て法悅を爲すべく、心定まりし後は、自由に神游することが出來る。維摩詰は、もと病あるに非ず、須陀洹は、未だ流に入らず、世の曲直を尋ぬることを億劫がり、唯だ方寸の心田が秋に入つて成熟するのを待つて居る。されば、未だ麒麟閣に圖せられずとも、鸚鵡の洲より逃れ去るべく、つまり、功名は立たずとも、禍害に遠ざかつて居るので、これが卽ち君の刻下の境涯である。平居無事の際、夕に酒醒むれば、風來つて竹を動かし、中夜、夢覺むれば、月が樓を窺つて居る。衆人は、君を以て元德秀に比するけれども、君は、自ら先祖の陽道州に同じであると稱して居る。やがて、公儀休が葵を拔いて魯に相たりしが如く、天晴立身すべく、その後は、張良が穀を避けて留に封せられた如く、世外に高遯されるであらう。君の一身は、これを用ふるも、これを舍くも、兩つながら、障礙なく、飄然として、繫がざる舟の如くであらう。

再用數珠韻贈湜老　　再び數珠の韻を用ひて、湜老に贈る

嗣(一)宗雖不言。叔(二)寶猶理遣(三)。　　嗣宗は、言はずと雖も、叔寶は、猶は理遣。

東坡但熟睡。一夕一展轉。　東坡は但だ熟睡、一夕一展轉。

南遷昔虞翻。却掃今馮衍。　南遷、むかしは虞翻、却掃、今は馮衍。

古佛既手提。諸方皆席卷。　古佛、すでに手提、諸方、皆席卷。

當年清隱老。鶴瘦龜不喘。　當年の清隱老、鶴瘦せて龜喘せず。

和我彈丸詩。百發亦百反。　わが彈丸の詩に和し、百發亦た百反。

耆年日彫喪。但有犢角繭。　耆年、日に彫喪、但だ犢の角繭するあり。

時來窺方丈。共笑虎毛淺。　時に來つて方丈を窺ひ、ともに虎毛の淺きを笑ふ。

【字解】【一】嗣宗　阮籍の字、前に阮籍嘯臺の詩中に注して置いた。【二】叔寶　衞玠の字、前に堂後白牡丹の詩中に注して置いた。【三】理遣　理窟で萬事を推し遣る。【四】虞翻　前に庚辰歲人日の詩中に注して置いた。【五】却掃　掃ひ去られる。【六】馮衍　前に與周李游徑山の詩中に注して置いた。【七】手提　傳燈錄に「手に諸佛を提げ、直に本來の面目を見る、諸方の賛宿、能くその右に出づるなし」とある。【八】席卷　傳燈錄に「百丈禪師、馬祖に侍して言下に省悟す。次日、馬祖、座に升り、衆、わづかに集まる　百丈　出でて、席を卷却す、祖、便ち座を下る」とある。【九】清隱老　査註に「本集、崇慶禪院新經藏記略に云ふ、吾、南遷して虔州を過ぎ、廉泉を訪うて崇慶院に入る。江南に於て壯麗第一たり、その費二十餘萬、前長老曇秀、はじめて之を作り、成るに幾くして寂す。今の長老惟湜、嗣いで之を成す、と。先生、又湜長老の眞贊あり、云ふ、道與之貌、天與之形、雖同乎人、而實無情、彼眞清隱　何殊丹青、日照月明、風動雷行、夫孰非幻、忽然而成、此眞清隱、可謂兩晴、と。これに據れば、清隱は、當に是れ惟湜の號なるべし」とあり、馮應榴の案に「先生、又清隱堂の銘あり、云ふ、已去清隱而老崇慶、と。すなはち是れ堂名にして、犢に非ざるなり」とある。【一〇】犢角繭　前に次韻送程六の詩中に注して置いた。【一一】虎毛淺　爾雅の釋獸に「虎の竊毛、これを虦猫といふ」註に云ふ、竊は淺なり。疏に云ふ、虎の淺毛なるもの、別に虦猫と名づく」とあり。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】阮籍は、言ふことなきも、衞玠は、何でも理窟づめに遣りたがる。予、東坡は、但だ熟睡して居るだけで、夜中展轉し、すこしも六つかしいことは言はぬ。南遷せし昔は、虞翻の如く、その地より掃ひ去られし今は、馮衍の如くである。手に諸佛を提げて、その本來の面目を見るべく、言下に省悟しては、どこへ往つても、長老輩をして、席を卷いて座を下らしめる。當時淸隱堂に居た湜長老は、年が取つて、修養愈よ積み、鶴の如く愈よ瘦せ、そして、龜の如く喘ぐことはない。そこで、彈丸の如き我が詩に和し、百たび發すれば、その都度、投げかへされるので、胸中綽綽たること、以て想ひ見るべしである。今しも、年を取つた高僧輩は、日ごとに凋喪し、唯だ繭の形をして角の曲がり込んだ小牛に比すべき若僧のみ多く、時時來つて方丈に窺ふものは、虎としては毛の薄い虦猫の如き生道心に過ぎず、ここに、宗風を發揚するに就いて、長老の健在を祝する次第である。

【餘論】紀昀は「亦た剽」といつて、例の如く、けなして居る。

和猶子遲贈孫志擧

（一）軒裳大（二）爐鞴、（三）陶冶一世人。
從橫落（四）模範、誰復甘飢貧。
可憐（五）方回癡、初不疑嘉賓。
頗念（六）懷祖黠、瞋兒與兵姻。
（七）失身墮浩渺、投老無涯垠。
回看十年舊、誰似數子眞。
孫郎表獨立、霜戟交重闉。
深居不汝覿、豈問親與鄰。
連枝皆秀傑、英氣推（八）伯仁。
我從海外歸、喜及（九）崆峒春。
新年得（一〇）異書、西郭有逸民。
小孫又過我、歡若平生親。

猶子遲の孫志擧に贈るに和す

軒裳は大爐鞴、陶冶す一世の人。
從横、模範に落ち、誰か復た飢貧に甘んせむ。
憐むべし、方回の癡、はじめ、嘉賓を疑はず。
頗る念ふ懷祖の黠、兒の兵と姻するを瞋る。
身を失うて、浩渺に墮ち、老に投じて涯垠なし。
回看す十年の舊、誰か數子の眞に似たる。
孫郎、獨立を表し、霜戟、重闉に交はる。
深居、汝を覿す、豈に問はむや、親と鄰と。
連枝、皆秀傑、英氣、伯仁を推す。
われ海外より歸り、崆峒の春に及ぶを喜ぶ。
新年、異書を得、西郭に逸民あり。
小孫、又、われを過ぎ、歡は平生の親の若し。

清詩五百言、句句皆絕倫。
養火雖未伏、要是丹砂（一一）銀。
我家六（一二）男子、朴學非時新。
詩詞各璀璨、老語徒周（一三）諄。
願言教宿好、永與竹（一四）林均。
六子豈可忘、從我屢厄（一五）陳。

清詩五百言、句句皆絕倫。
火を養うて、未だ伏せずと雖も、これ丹砂の銀なるを要す。
わが家の六男子、朴學、時新に非ず。
詩詞各、璀璨、老語、徒に周諄。
願はくは言に宿好を敎くし、永く竹林と均しからむ。
六子、豈に忘るべけむや、われに從つて、屢ば陳に厄せらる。

【字解】【一】軒裳　軒車裳服、大官輩の行裝をいふ。【二】爐鞴　鞴はふいご「風を扇ぐ所以なり」とある。【三】陶冶　陶は土を埏して器と爲すこと、冶は金を鑄て器となすこと。【四】模範　鑄形、揚子法言に「師は人の模範」とあり、又李註に「木を以てするを模といひ、竹を以てするを範といふ」とある。【五】方回癡　晉書郗愔傳に「字は方回。子超、字は嘉賓。超、實は桓氏に黨す、愔の王室に忠なるを以て、これを知らしめず、將に亡びむとするや、一箱の書を出して門生に付して曰く、わが亡後、もし大に眠食を損すれば、この箱を呈すべしと。超の死するに及び、愔、果して、哀悼疾を成す。門生、旨に依つて之を呈す、悉く溫と往反の密計なり。愔、ここに於て、大に怒つて曰く、小子死する、恨むらくは晩し」とある。【六】懷祖黠　晉書王述傳に「字は懷祖。子坦之、桓溫の長史たり、溫、子の爲に婚を坦之に求めむと欲す、家に還つて父を省するに及び、しかも、述、坦之を愛し、長大と雖も、なほ抱いて膝上に置く。坦之、因つて溫の意を言ふ。述、大に怒り、遽に排下して曰く、汝、竟に癡なるか、詎ぞ溫の面を畏る、女を以て兵に妻はすべけむや」とある。【七】失身　五註本に「先生の詩意謂ふ、人、皆富貴を樂む、郗超が桓溫の謀に預り、王坦之が桓溫の婚に從ふが如き、皆富貴に趨るが爲のみ。而して、超の父、癡を以て後に其謀を怒り、坦之の父、黠を以て早く其請に從は

す。然れども、その桓温を惡むと爲すは一なり。奈何せむ、二子の本意、富貴を圖るに在るを、と。因つて以て自らその善く富貴を謀らずして、流落に至るを言ふのみ」とある。【八】伯仁　晉書周顗傳に「三子、顗・嵩・謨、顗、別に傳あり」とあつて、伯仁は、卽ち顗の字。前に子由初到二陳州一の詩中に注して置いた。馮應榴の案に「斜川集に、孫志康墓銘あり、云ふ、先君、貢擧に知たり、志康、擢んでて第六人に置かれ、廷試、復た第六に居ると。先生詩中の伯仁は、蓋し志康を指すなり」とある。【九】崆峒　虔州志に「崆峒山は、城南六十里に在り、一名空山、章貢二水、夾んで以て北に趨す、一郡の望なり、山麓周回百里」とある。【一〇】異書　東坡の自註に「陽行先、登眞隱訣を以て借さる」とあり、舊唐書經籍志に「登眞隱訣二十五卷、陶弘景撰」とある。【一一】丹砂銀　王註に「古皆子の丹砂行伏丹訣を案ずるに、丹砂五兩、汞を結んで砂子となし、火を養ふこと七日、玉筯となし、これを消して銀となす。又大銅鍊眞寶經に曰く、丹砂を將て修鍊し、伏火後、鼓して白銀を成す、これを名づけて一返となすなり、白銀を將て、化して砂を出し、伏火なして之を鼓せしめ、乃ち黃銀を成す、これを名づけて二返となすなり」とあり、抱朴子に「丹砂、これを燒いて水銀を成し、變を積み、又還つて丹砂を成す、故に能く人をして長生せしむ」とある。【一二】六男子　自分と子由と、二家の倅、卽ち邁・迨・過・遲・适・遠の六人。【一三】周詳　周匝にしてくどきこと。【一四】竹林　前に次韻王鞏の詩中に注して置いた。【一五】厄陳　莊子に「孔子、陳蔡の隘、邱に於て其れ幸なるか」といひ、漢書儒林傳に「匡に畏れ、陳に厄せらる」とある。

【題義】この詩は、姪の遲より孫志擧に贈りし作に和したのである。查註に「孫立節、字は介夫、二子、一は名勰、字は志康、一は名勴、字は志擧、虔州志に見ゆ」とある。

【詩意】軒車裳服は、大きな爐や鞴の如きものであつて、一世の人を陶冶し、すべての人は、縱橫に鑄型に入れられるので、飢貧に甘んじて居るものは殆んど無い。郗愔の癡なるや、初めは、その子の郗超が桓溫に與みせしことを丸で知らず、王述の黠なるや、その子の坦之が桓溫と婚姻を通せむとするを怒つた。郗超・王坦之、ともに富貴に志あるが故に、權臣に阿附したのであるが、予は、決して富貴を謀らざりしに因り、いつしか浩渺の間に落ち、老の身を投せむとするも涯際なく、現に、この地に流落して居る。ここに、十年の昔の事を回顧するに、まじめなものは五六人あつて、その中でも、孫君は獨立を表し、家は武人である處から、霜なす戟が幾重にも成つて居る門に交叉し、まことにいかめしく物物しい有樣。その奧深く居る君は、親舊近鄰の者でさへ一寸逢ふことも出來ぬ位。連枝の人人は、いづれも、秀でて傑出し、中にも、君は、英氣勃勃として、かの周顗に比すべき程である。予は、近ごろ、海外より歸つて、先づ、ここ虔州に來り、崆峒山の春に逢ひしは喜ぶべく、まして、西郭に居る逸民の陽行先といふ人から、新年に、異書を借し與へられた。それから、君も亦た來訪せられ、さながら、むかしからの知り合の如く、その示された詩は、五百字ばかりの長いもので、洗鍊の極、句句絕倫、たとへば、仙丹を煉る樣なもので、まだ十分に火を伏して居らぬが、要するに、その本質は、丹砂から變する白銀であつて、いづれは、鍊り上ると同じく、君の詩も、いつかは上達するに相違ない。わが家には、倅や甥どもを併せて、六男子があるが、いづれも、古朴の學問をなして、當世向でなく、詩を作ると、文彩璀璨として居るが、年寄りの言葉がくどい樣なものである。願はくは、此に從來の好を更に厚くし、末長く竹林七賢と同じ樣にありたいものである。かの六男子は、予に取つて忘れることも出來ず、予に從つて、屢ば陳蔡同樣の災厄に遇つたものであるから、彼等の事

も、何分宜しく、御願ひする次第である。

【餘論】紀昀は「殊に冗漫を嫌ふ」といつて居るが、無論さういふ處もある樣である。

南禪長老、和詩不已、故作六蟲篇答之

南禪の長老、詩に和して已ます。故に六蟲篇を作つて之に答ふ

鳳凰覽德輝。遠引不待遣。
鳳凰は德輝を覽、遠く引いて遣るを待たず。

鷾鴯戀庭宇。倏忽來千轉。
鷾鴯は庭宇を戀ひ、倏忽、來つて千轉。

那將坐井蛙。而比談天衍。
那ぞ井に坐するの蛙を將て、而も天を談ずるの衍に比す。

蠹魚著文字。槁死猶遭卷。
蠹魚は文字に著き、槁死して猶ほ卷に遭ふ。

老牛疲耕作。見月亦妄喘。
老牛は、耕作に疲れ、月を見るも、亦た妄りに喘ぐ。

東坡方三問。南禪已五反。
東坡、方に三問、南禪、すでに五反。

老人但目擊。侍者應足繭。
老人、但だ目擊、侍者、應に足繭すべし。

最後六蟲篇。深寄恨語淺。
最後に六蟲の篇、深く寄せて語の淺きを恨む。

【字解】【一】德輝　賈誼の弔屈原文に鳳凰翔於千仞兮、覽德輝而下之とある、德光といふに同じ。【二】遠引　遠く去る。【三】鷾鴯　莊子に見え、註に「燕なり」とある。【四】坐井蛙　莊子に「埳井の蛙、一壑の水を擅にして跨跱する、樂、これ亦た至れり」とある。【五】談天衍　衍は鄒衍、前に洞庭春色の詩中に注して置いた。【六】蠹魚　紙魚、即ちしみ。【七】見月亦妄喘　風俗通に「吳牛、月を望めば喘ぐ。彼日に苦む、月を見るも、怖れて亦た之に喘ぐ」とある。又世說に「滿奮、風を畏る。晉の武帝の坐に在り、北窗に琉璃屏を作す、實は密にして疏なるに似たり。奮、難色あり。帝、これを笑ふ。奮、答へて曰く、臣、猶ほ吳牛の月を見て喘ぐがごとし」とあつて、劉孝標の註に「今の水牛は、江淮の間に生ず、故に之を吳牛といふ。南土、暑、多くして、この牛、熱を畏る、月を見れば、これ日なるを疑ふ、月を見て喘ぐ所以」とある。【八】足繭　足の先が曲つて歩けなくなる。

【題意】南禪の湜長老より、しきりに和詩を寄せて止まざるに因り、この六蟲篇を作つて、これに答へたといふのである。

【詩意】鳳凰は、德光を見れば、いくら遠くでも、その方に向つて去り、決して他から遣さるるを待たない。これに反して、燕は、人家の庭宇をのみ戀ひ慕ひ、忽ちの間に、千遍も往復する。井に坐し、一壑の水を擅にして自ら足れりとする蛙は、いかで天を談ずる鄒衍に比すべきか。蠹魚は、文字の間にへばり著いて、乾らびて死ねば、その儘、卷き込まれる。老牛は、耕作に疲れ、月を見ても日と思ひ、その暑熱甚しかるべきを疑うて、しきりに喘ぐ。物の大小は、すべて此の如くである。東坡は、今しも、三たび問ふたに過ぎぬが、南禪の長老は、それに對して、五たびも、和作を遣され、長老は、年寄のことで、見て居るだけだから、善い樣なものの、取次をする侍者は、度度往復して、足

が棒の様に成つたことと思ふ。そこで、この六蟲篇を差出して、これで打切りとしたいのであるが、折角、寄せるものの、語語淺薄なるは、まことに遺憾の至である。

【餘論】六蟲の蟲は、昆蟲ではなく、汎く動物といふ意味であるが、鳳凰・鷰・蛙・蠹魚・牛と算へると、五つしかない。そこで、査初白は「詩中、止だ五種に及ぶのみ、豈に鳳凰を以て二となすか、殊に解すべからず」といつて、至極尤もである。

明日南禪和詩不到故重賦數珠篇以督之二首

明日、南禪の和詩、到らず、故に重ねて數珠篇を賦して以て之を督す　二首

未來不可招。已(一)過那(二)容遣。未來は招くべからず、已過は那ぞ遣るを容さむ。

中間見在心。一一風(三)輪轉。中間、見在の心、一一、風輪轉す。

自從一生二。巧(四)歷莫能衍。一の二を生ぜしより、巧歷も、能く衍するなし。

不如袖手坐。六(五)用都懷卷。如かず、手を袖して坐し、六用、すべて懷卷せむには。

風雷生謦(六)欬。萬竅自號喘。風雷、謦欬に生じ、萬竅、自ら號喘。

詩人思(七)無邪。孟子內(八)自反。詩人、思、邪なく、孟子、內に自ら反す。

大珠分(九)一月。細綆合兩(一〇)繭。大珠は、一月を分ち、細綆は、兩繭を合す。

纍然挂禪林。妙用夫豈淺。纍然として禪林に挂る、妙用、夫れ豈に淺からむや。

【字解】【一】已過　過去に同じ。【二】那容遣　すでに滅し去つて形跡なきを云ふ。【三】風輪轉　大集經に「風あり、能くより、風あり、能く下る。心、もし上を念へば、風、心に隨つて乘起し、心、もし下を念へば、風、心に隨つて乘下す。轉運の作すところ、皆是れ風心に隨つて轉ず」とある。【四】巧歷　上手な算數家。【五】六用　六根の作用、前に次韻子由浴罷の詩中に注して置いた。【六】謦欬　しはぶきの聲。【七】思無邪　論語に「詩三百、一言以て之を蔽ふ、曰く、思、邪なし」とある。【八】內自反　反は反省。【九】分一月　形圓きが故に云ふ。【一〇】兩繭　繭二つから絲を繰つて拗る。

【題義】前詩を湜長老に贈つた處が、その翌日、和詩が來なかつた。今度は、參つたかと思つたが、再び數珠篇二首を賦して贈り、和詩を催促したといふのである。

【詩意】未來は、すぐに招く譯にも行かず、過去は、すでに跡を滅して態態遣すことも出來ず、中間なる現在に於て、この心は、風の如くに、ぐるぐる廻つて居る。一から二を生じ、それから無窮に及び、いくら算道の名人でも、これを敷衍して考へることは出來ぬから、手を袖にして默坐し、六根の作用は、卷いて之を懷にする外はない。風雷は、謦欬にも生じ、萬竅は、自然に叫んで喘ぐものである。唯だ詩人のみは、思、邪なく、そして、孟子は、自ら向內的省察を爲すことを主張した。抑も、數珠てふものは如何といふに、大きな珠は、各一個の月を分ちしが如く、細い綆は、兩繭の絲を拗

り合せたものに外ならず、欒然として、これを禪林の中に挂くれば、その妙用、もとより深く、長老は、これに因つて、佛道に參透したものであらう。

朝來取飯化。乃是維摩遣。　朝來、飯を取つて化す、乃ち是れ維摩遣す。
全鋒雖未露。半藏已曾轉。　全鋒、未だ露はれずと雖も、半藏、すでに曾て轉ず。
說有陋裴頠。談無笑王衍。　說は、裴頠を陋とするあり、談は、王衍を笑ふなかれ。
看經聊爾耳。遮眼初不卷。　經を看る、聊か爾るのみ、眼を遮つて初め卷かず。
三吒故自醒。一吷何由喘。　三吒、故と自ら醒む、一吷何に由つてか喘ぐ。
請歸視故櫝。靜夜珠當反。　請ふ、歸つて故櫝を視よ、靜夜、珠は當に反るべし。
安居三十年。古衲磨山繭。　安居三十年、古衲、山繭を磨す。
持珠尙默坐。豈是功用淺。　珠を持して、尙ほ默坐す、豈に是れ功用淺からむや。

【字解】【一】維摩遣　維摩經に「汝、上方界分に往け、國あり、衆香と名づけ、佛を香積と號す。汝、往いて彼に到り、世尊に稽首し、願はくは、世尊食ふところの餘を得、當に娑婆世界に于て、佛事を施作すべし」とある。【二】全鋒　王註に「羅山、衆に示して云ふ、全鋒、斂静つ、知音に遇ふこと罕なり。同生同死、萬中に二なし」とある。【三】半藏　傳燈錄に「婆子あり、人をして錢を送つて去り、老宿に請うて藏經を閲かしむ。老宿、施利を受け、便ち禪牀を下つて轉一匝し、乃ち云ふ、婆子に傳語せよ、藏經を轉じ了るなり、と。その人歸り、擧げて婆子に似す、婆子云ふ、比來全藏を開くを請ふ、如何ぞ、只だ半藏を開くを爲す」とある。【四】裴頠　晉書の本傳に「頠、深く王衍の徒、聲譽太だ過ぎ、位高く、勢重く、物務を以て自ら嬰けず、遂に相放效し、風教陵遲するを患へ、乃ち崇有論を著し、以て其蔽を釋く」とある。【五】三吒　尙書顧命に「三宿三祭三吒」とあつて、註に「爵に奠つて飮まざるを吒といふ」とある。【六】一吷　王註に「吷は吹なり、一吹の間、未だ喘に至らざるを云ふなり」とある。【七】故櫝　韓非子に「楚人、その珠を鄭に賣るものあり、木蘭の櫝を爲り、桂椒の櫝を薰し、綴るに珠玉を以てす。鄭人、その櫝を買うて、その珠を還す。これ善く櫝を賣るといふべし、未だ善く珠を鬻ぐと謂ふべからざるなり」とある。【八】磨山繭　翻譯名義に「蟲衣は、野蠶の綵絲を用ひて衣と作すを謂ふ。東天竺に國あり、鳥陀と名づく、便米熟せむと欲すれば、葉變じて蟲となり、蟲は米を食ふ、人取つて蒸し、以て綿となすなり」とある。

【詩意】朝來、飯を貰ふ爲に、勸化に出かけられるが、それは、卽ち維摩より遣されるのである。長老は、なかなか全鋒を露はさないが、藏經の半は、すでに曾て轉じて仕舞つた。長老の說は、裴頠を陋とし、談話をしても、王衍を笑はず、つまり、萬象を以て無と觀じて居るのである。經を看ることがあつても、ほんの眞似に過ぎず、眼を遮つて、初めから卷かうともせず、三たび口に銜んだばかりで、醒めた心持があるし、一氣に吹き出して喘ぐことはない。要するに、長老は、深く佛道に悟入し、匿たる經文などに依らないのである。むかしの箱は、その儘、殘つて居て、やがて、靜夜に珠の方から自然と還つて來るであらう。長老は、ここに安居すること三十年、山繭で織つた古い僧衣を著たままである。そして、平生、數珠を爪繰つて、相變らず、默坐して居られる處を見ると、その功用は、

決して淺薄なものではない。

用前韻再和霍大夫

文字先生飲。江山清獻游。
典刑傳父老。尊俎繼風流。
度嶺逢梅雨。還家指麥秋。
自慚鴻雁侶。爭集稻粱洲。
野濶橫雙練。城堅聳百樓。
行看鳳尾詔。却下虎頭州。
君意已吳越。我行無去留。
歸途應食粥。乞米使君舟。

前韻を用ひて、再び霍大夫に和す

文字、先生の飲、江山、淸獻の游、
典刑、父老に傳はり、尊俎、風流を繼ぐ。
嶺を度つて、梅雨に逢ひ、家に還つて麥秋を指す。
自ら慚づ鴻雁の侶、爭つて集まる稻粱の洲。
野は濶くして雙練を橫へ、城は堅くして百樓を聳ゆ。
行く〳〵鳳尾の詔を看、却つて虎頭の州を下る。
君の意、すでに吳越、わが行、去留なし。
歸途、應に粥を食ふべし、米を乞ふ使君の舟。

【字解】〔一〕先生　東坡の自註に「劉執中を謂ふ」とあり、宋史に「劉彝、字は執中、福州の人、熙寧の初、新法の不便を言ひ、黜められて虔州に知たり」とある。〔二〕淸獻　虔州志に「趙抃は、西安の人、嘉祐六年、右司諫となり、內侍を極論し、出でて虔州に知たり」とある。〔三〕梅雨　王註に「周處の風土記に云ふ、夏至の前の雨、黃梅雨と名づく、衣服を霑せば皆敗黦す」と。又埤雅に云ふ、今江湘二浙、四五月の間、梅黃落せむと欲すれば、水潤土溽、柱礎皆汗し、蒸鬱して雨と成る、これを梅雨といふ」とある。〔四〕麥秋　王註に「蔡邕の月令章句に云ふ、百穀、各〻初生を以て春となし、熟を秋と爲す、故に麥は孟夏を以て秋となすなり。今、指麥秋といふ、すなはち、四月の末を言ふなり」とある。〔五〕橫雙練　章貢二水をいふ、なほ謝朓の句に澄江淨如練とある。〔六〕鳳尾詔　紀聞譚に「晉の武帝、詔詐、凡そ諸侯の牋奏、これを批して諾といふ、而して、草書、若字の尾、鳳の形の如し、故に之を鳳尾諾といふ」とある。〔七〕虎頭州　舊說に、虎頭は顧愷之の小字、これは、無錫、卽ち常州の人だから、常州を虎頭州といふとあるが、諸家、皆これを駁し、これは虔州だといつて居る。查註に「元和郡縣志、晉の南康郡は、宋の南康國、隋、虔州と改む。熊克の中興小歷に云ふ、紹興二十三年、校書郎董德元、上言す、虔州、虎頭城と號す、佳名に非ざるなり。今、天下寧一て安く、ひとり、この郡、小簪あり、おもふに、その名以て之を兆すあらむ、と。すでにして、廷臣の議、亦た虔劉の議ありといふ。遂に州名を贛と改め、古縣名に因る。案ずるに、虎頭州は、卽ち虔州なり、趙清獻の守虔州の詩に虎頭城裏人煙鬧、馬祖巖前氣象豪の二句、證すべし」とある。おもふに、虔を虎頭といつたのは、虔の字の主部虍が、虎といふ字の上半であるからであらう。〔八〕乞米　顏魯公の事、前に次韻過陳絕糧の詩中に注して置いた。

【題義】前韻とは、前に見えた鬱孤臺の詩韻で、さきに其韻を用ひて霍大夫に詩を贈つたことがある。すると、大夫、卽ち霍漢英が和作を寄越したから、再び其韻を用ひ、更に之を和したのである。

【詩意】さきに、劉執中は、ここに文字の飲をなし、趙抃は、ここに江山の游をなしたが、その典型は、父老の間に傳はり、君は、尊俎の間に風流を繼がれて居る。予は、五嶺を度つて、梅雨に逢ひ、行く麥秋の頃に家に還らうとして居るが、慚づべきは、鴻雁の友として、稻粱の洲に集まり、ひどく、き惱んで居ることである。眺めやれば、野は濶くして、二水練を橫へ、城は堅固で、多くの物見樓

が聳えて居る。ここに、行く、天子の詔を奉じて、虔州に下つて來た。君の心は、すでに吳越の間に馳せて居るが、わが行、去留なく、おッつけ、旅程に上る積り、北歸の途すがら、粥を食ひたいと思ふので、使君の舟に向つて、米を乞ふ次第である。

用前韻再和許朝奉

前韻を用ひて、再び許朝奉に和す

高門元世舊。客路晚追游。
清絕聞詩語。疏通豈法流。
傳家有衣鉢。斷獄盡春秋。
邂逅陪車馬。尋芳謝朓洲。
淒涼望鄉國。得句仲宣樓。
恨賦投湘水。悲歌祀柳州。
何如五字律。相與一尊留。
更約登塵外。歸時月滿舟。

高門、元と世舊、客路、晚に追游。
清絕、詩語を聞き、疏通、豈に法流。
傳家、衣鉢あり、斷獄、盡く春秋。
邂逅、車馬に陪し、芳を尋ぬ、謝朓の洲。
淒涼、鄉國を望む、句を得たり、仲宣の樓。
恨賦、湘水に投じ、悲歌、柳州を祀る。
何ぞ如かむや、五字の律、相與に一尊留まるに。
更に約す、塵外に登り、歸る時、月、舟に滿つ。

【字解】【一】世舊　代代舊好がある。【二】法流　漢書藝文志に「法家者流は、蓋し理官より出づ、信賞必罰、以て禮制を輔く」とある。【三】衣鉢　前に次韻毛滂の詩中に注して置いた。【四】謝朓洲　どこか分からぬが、謝朓の詩に芳洲採二杜若一とあつて、杜若の生えて居る汀洲を指したのであらう。【五】仲宣樓　仲宣は王粲の字、前に二公再和の詩中に注して置いた。【六】投湘水　賈誼が湘水を渡る時、文を爲つて屈原を弔ひしこと、前に西山詩和者の詩中に注して置いた。【七】祀柳州　韓愈の羅池廟碑の銘に、柳州を祭る迎享送神詩が記してあつて、前に玉女洞及び遷居の詩中に注して置いた。【八】塵外　亭名、虔州の勝景、前に虔州八境の詩中に注して置いた。

【題義】前に虔守霍大夫、監郡許朝奉見レ和云云とあつた、この詩は、許朝奉が次韻の作を寄越したから、再び之に和したのである。

【詩意】君の一門とは、代代の舊好ある上に、予は、今、客路の身、晚年、ここに追隨して同游することの出來たのは、まことに喜ばしい。その間、詩語の清絕なるを拜聽し、事ごとに疏通して、きまりをつけられるが、決して、法家者流の如く冷酷ではない。君は、傳家の衣鉢を傳へ、訴訟を判決するには、すッかり、春秋賞罰の義に準據して居られる。ここに、ゆくりなくも、相逢ひしに因り、車馬に陪して、謝朓の詩中に見えた樣な杜若の洲に芳を尋ね、さびしい思をして、鄉國を望む折から、仲宣樓に比すべき高閣に上る詩を作つた。さはれ、我が心の悲哀は、恨を賦して、文を湘水に投じた賈誼の如く、又悲歌、以て柳宗元の靈を祀りし韓愈にも似て居る。されば、五言律の樣な簡單な詩を作つて、相與に一尊を酌んで留賞する方が、はるかに善い。その上、去つて塵外亭に登り、ゆッくり

と月を舟に載せて歸ることを、前以て約束して置かう。

【餘論】邂逅の四句は、隔句に對偶をなし、これを扇對と稱する。王註に「梁の元帝の詩に云ふ、朝出屠羊縣、夕返仲宣樓、と。凡そ四句第一句を以て第三句に對し、第二句を以て第四句に對す、これを扇對といふ、蓋し、白氏金針に出づといふ。然れども、梅聖兪に至つて、續金針を作り、乃ち前人の詩を引いて云ふあり、昔時花下留連飮、暖日天桃鶯亂啼、今日江邊容易別、淡煙衰草馬頻嘶、以て其格を證す。今、この兩聯は、卽ち其格」とあるが、査註には「案ずるに、趙彥材云ふ、凡そ詩の扇對、蓋し白氏金針に始まる。胡仔曰く、杜少陵の鄭少監を哭するの詩、得罪台州去、時危棄碩儒、移官蓬閣後、穀貴歿潛夫、すなはち、此よりも前、すでに之あり、白氏に始まらず」といつて居る。されば、紀昀が「邂逅の四句、隔句對法、唐人、この格あり」といへるは、蓋し、語つて未だ詳ならざるものであらう。

用前韻再和孫志擧

前韻を用ひて、再び孫志擧に和す

(一)人衆者勝天。天定亦勝人。　人、衆きものは天に勝ち、天、定まつて亦た人に勝つ。

(二)鄒通豈不富。(三)郭解安得貧。　鄒通、豈に富まざらむや、郭解、安んぞ貧なるを得む。

(四)驚飛賀厦燕。走散(五)入幕賓。　驚飛す厦を賀するの燕、走り散ず入幕の賓。

醉眠(六)中山酒。結夢(七)南柯姻。　醉眠す中山の酒、夢を結ぶ南柯の姻。

寵辱能幾何。悲歡浩無垠。　寵辱、能く幾何ぞ、悲歡、浩として垠なし。

回視人間世。了無一事眞。　人間の世を回視するに、了に一事の眞なるなし。

灑掃古(八)玉局。香火通帝閽。　灑掃す古玉局、香火、帝閽に通す。

我室思無邪。我堂德有鄰。　わが室、思、邪なく、わが堂、德に鄰あり。

所至爲鄉里。事賢友其仁。　至るところ、鄉里となし、賢に事へて其仁を友とす。

之子富經術。蔚如(九)井大春。　之子、經術に富み、蔚として井大春の如し。

(一〇)蜿蟺楚南極。淑氣生此民。　蜿蟺、楚の南極、淑氣、この民を生ず。

唱高和自寡。非我誰當親。　唱高くして和自ら寡く、我に非ずして誰か當に親むべき。

譬彼(一一)嶰谷竹。翦裁待伶倫。　譬ふ彼の嶰谷の竹、翦裁して伶倫を待つに。

俗學吁可鄙。紙(一二)縐配(一三)緺銀。　俗學、吁、鄙むべし、紙縐、緺銀に配す。

聊將調癡鬼。亦復爭華新。　聊か將に癡鬼に調れむとし、亦た復た華新を爭ふ。

願子事篤實。浮言拂讒諄。　願はくは、子、篤實を事とし、浮言、讒諄を拂へ。

窮通付造物。得喪理本均。　窮通、造物に付し、得喪、理、本と均し。

期子如太倉。會當發陳陳。　期す、子が太倉の如く、會ず當に陳陳を發すべきを。

【字解】【一】人衆者勝天　この二句は申包胥の語、前に「送千乘之進士一及び次前韻寄子由」の詩中に注して置いた。【二】鄧通　漢書佞幸傳に「文帝、善く人を相する者をして鄧通を相せしむ、曰く、當に貧にして餓死すべし。上曰く、能く通を富ますものは我に在り、何ぞ貧を説かむ、と。ここに於て、通に蜀の嚴道銅山を賜うて、自ら錢を鑄るを得せしむ、鄧氏の錢、天下に布く、その富、かくの如し」とある。【三】郭解　漢書游俠傳に「豪を茂陵に徙すに及びてや、郭解、貧にして訾に中らず。吏、恐れて敢て徙さずんばあらず。衞將軍、爲に郭解家貧にして徙に中らざるを言ふ。上曰く、解は布衣、權、將軍を使ふに至る、これ其家貧ならず」とある。【四】賀厦燕　淮南子に「大厦成つて、燕雀來り賀す」とある。【五】入幕賓　晉書に「桓溫、不軌を懷く、郗超、これが謀を爲す。謝安、王坦之と、かつて溫に詣りて事を論ず。溫、超をして帳中に臥して之を聽かしむ。風動いて帳開く。安笑つて曰く、郗生は入幕の賓といふべし」とある。【六】中山酒　一たび飲めば、千日の間、酣眠するといふ酒。前に「和海州石室」の詩中に注して置いた。【七】南柯國　淳于棼が夢に槐安國に至り、國王の壻となりしこと、前に「雁蕩山」の詩中に注して置いた。【八】古玉局　即ち玉局觀。【九】井大春　後漢書に「井丹、字は大春、五經に通ず、京師、これが語を爲して曰く、五經紛綸井大春」とある。【一〇】蜿蟺のたくつて蟠る、韓愈の文に「淸淑の氣、蜿蟺扶輿、磅礴して鬱積す、意ふに、必ず魁奇忠信、材德の民、その間に生ずるあらむ」と見ゆ。【一一】嶰谷　前に「送家安國歸成都」の詩中に注して置いた。【一二】紙紹配銅銀　王註に「紙を以て紹となし、銅を以て銀となす、俗學の實なきを言ふ」とあるが、馮應榴の案には「疑ふらくは、紙錢を用ふるの意、故に下に窮鬼と云ふなり」とある、すると、紙や絹を以て、細かな銀錢に代へるといふ意と見える。【一三】讒諄　王註に「狂言を讒といふ、字、素問に出づ」とある。【一四】太倉　前に「次韻曾子開」の詩中に注して置いた。

【題義】前に「和猶子遲贈孫志擧」の一首があつたが、この詩は、志擧が和作を寄越したから、乃ち再び其韻を用ひて志擧に和したのである。

【詩意】人衆き時は天に勝つが、天が定まれば、矢張人に勝つといふは、古しへの格言である。鄧通は、十分に富んで居たし、郭解は、どうして貧乏の筈がないと云はれ、大厦の新に成りしを喜び合つて居た燕も、俄に驚いて起つ樣なことがあるし、入幕の賓といはれた郗超も、うツかり見つかると、あわてて走り出すし、中山の酒に醉へば、千日の間、眠さめず、南柯國に壻入りして、富貴を極めたのは、唯だ束の間の夢に過ぎなかつた。この世に於ける寵辱は、どれ程の事であらうか、悲歡は循環して、はてもなく、人間の世を回顧すると、一事として眞なるものは無い。われ既に玉局觀の提擧を命ぜられ、香火を薦めて天帝に奉仕する身分であるから、わが室に於ては、思、邪なきを旨とし、わが堂に於ては、德、必ず鄰あるを主とし、どんな處にでも落ち付いて、おのが鄕里となし、賢人を相手にして、その仁を友としやうと思つて居る。君は、經學の修養深く、蔚然として、古しへの井大春の如く、楚地の南極に於て、かくの如き人の輩出したのは、全く淸淑の氣の盤結した爲めである。君が詩を唱へ出せば、格、甚だ高きが故に、和するものは自然少く、予に非ざれば、誰も之に當ることが出來ず、たとへば、かの嶰谷の竹の如く、折角切り取つても、伶倫の如きものでなければ、吹き鳴らし得

す、從つて、その價値を認めぬ樣なものである。世の俗學者流は、もとより賤むべく、何事につけても、胡魔化しを事とし、錢の代りに紙錢を用ひ、とぼけた樣な幽鬼に戯れて、その奇麗で珍らしいことを誇らうとして居る。願はくは、君だけは、篤實を旨とし、浮言の狂妄にして乇くどきを一掃して貰ひたい。達觀すれば、窮通は、もと天意、得失は、根本に至つて同一理である。そこで、予は、君が太倉の如く、十分に素養を貯へ、その古びた處から、段段に取り出す樣にあらむことを希望する次第である。

崔文學甲、攜文見過、蕭然有出塵之姿、問之則孫介夫之甥也、故復用前韻賦一篇示志擧

崔文學甲、文を攜へて過ぎらる、蕭然として出塵の姿あり。これを問へば則ち孫介夫の甥なり。故に復た前韻を用ひ、一篇を賦して志擧に示す

（一）象服盛（二）簪珥。豈是（三）邢夫人。　象服、簪珥盛に、豈に是れ邢夫人。
敝衣破冠履。可憐（四）范叔貧。　敝衣破冠履、憐むべし范叔の貧。
君看崔員外。晚就觀（五）國賓。　君看よ崔員外、晚に就く觀國の賓。
當年頗赫赫。（六）翁嫗爭爲姻。　當年頗る赫赫、翁嫗、爭つて姻を爲す。
（七）蹭蹬阻風水。（八）横斜挂邊垠。　蹭蹬、風水に阻まれ、横斜、邊垠に挂る。
青衫映白髮。今似（九）梅子眞。　青衫、白髮に映じ、今、梅子眞に似たり。
道存百無害。甘守吳市闉。　道存して、百、害なく、甘んじて守る吳の市闉。
自言總角歲。（一〇）慈母爲擇鄰。　自ら言ふ、總角の歲、慈母、爲に鄰を擇ぶと。
邦人驚（一一）似舅。嬌嬌惡不仁。　邦人、舅に似たるに驚く、嬌嬌として不仁を惡む。
詩文非他師。家法乃（一二）富春。　詩文、他の師に非ず、家法、乃ち富春。
豈非（一三）空同秀。爲國產雋民。　豈に空同の秀、國の爲に雋民を產するに非ざらむや。
挺然（一四）齊魯生。近出（一五）姫姜親。　挺然たり齊魯の生、近く姫姜の親に出づ。
爲文不在多。（一六）一頌了伯倫。　文を爲る、多きに在らず、一頌、伯倫を了す。
清詩要鍛煉。乃得（一七）鉛中銀。　清詩、鍛煉を要す、乃ち鉛中の銀を得む。
自我遷嶺外。七見（一八）槐火新。　わが嶺外に遷つてより、七たび見る槐火の新なるを。
著書已絕筆。一嘿含千諄。　著書、すでに筆を絕ち、一嘿、千諄を含む。
（一九）贇桴和葦籥。（二〇）天節非（二一）人均。　贇桴、葦籥に和し、天節、人均に非す。

時時自娛嬉。豈爲俗子陳。 時時、自ら娛嬉、豈に俗子の爲に陳せむや。

【字解】【一】象服　法度の衣服、夫人の禮服。【二】簪珥　かんざしと耳の飾。【三】邢夫人　前に芙蓉城の詩中に注して置いた。【四】范叔　卽ち范雎、前に次韻張杜詩の詩中に注して置いた。【五】觀國賓　鄉貢生が都に上つて試驗を受けること、杜甫の詩に「甫昔少年日、早充觀國賓」とある。【六】翁嫗爭爲姻　東坡の自註に「退之の贈崔員外に見ゆ」とあつて、その詩には、「連年收科第、若摘頷下髭」とあり、又「老婦願嫁女、不約論財貲、老翁不量分、累月賽其兒」とある。崔員外、名は斯立、字は立之。【七】蹭蹬　弱つて進退自由ならざること、王註に「言ふは、巨魚、縱ならむと欲するも、風水に阻まれて、乃ち蹭蹬す」とあり、杜甫の詩に「蹭蹬無縱鱗」とある。【八】橫斜　王註に「言ふは、餘星の零落するが如く、天心に當らずして、邊角に挂るなり」とある。【九】梅子眞　前に次韻陳海州の詩中に見ゆ。【一〇】慈母　前に播掾官母挽詞の詩中に注して置いた。【一一】似舅　宋書に「桓玄、義軍の起るを聞き、大に懼れて曰く、劉裕は一世の雄、何無忌は劉牢之の外甥、酷だ其舅に似たり、ともに大事を擧ぐ、何すれぞ成るなからむ」とある。【一二】富春　三國志に「孫堅、世々吳に仕へて富春に家す」とあつて、これは同姓に因んで孫介夫を指したのである。【一三】空同秀　空同は卽ち崆峒、山名、前に和駒子遐の詩中に見ゆ。【一四】齊魯生　馮應榴の案に「漢書叔孫通傳、魯の諸生を徵す、齊の字なし、但し、愛觀聞評を考ふるに、揚子法言を引いて云ふ、先生を齊魯に徵す、致す能はざるところのもの二人と、齊魯といふは、上文齊魯大臣の語を承く、竊ふらくは、後人、一の齊の字を添ふるなり、と。これに據れば、齊魯諸生に作るも、亦た可」とある。【一五】姬姜　姬は王室たる周の姓、姜は齊の姓、屢ば婚姻を通じて居た、ここでは宗室に關係ある名族の義。【一六】一頌　晉書に「劉伶、字は伯倫、未だ嘗て意を文翰に厝かず、惟だ酒德頌一篇を著す」とあり、魏泰の臨漢隱居詩話に「朱子京云ふ、唐藝文志、劉伶文集三卷あり、坡、豈に偶ま忘るるか、と。予謂ふ、坡は晉史に據るのみ、且つ公の意、本と謂ふ、只だ此一篇、以て平生を道び盡し、名を後世に傳ふるに足る、他文の有無、必ずしも論ぜざるなり」とある。【一七】鉛中銀　蘇頌の本草圖經に「銀の鉛中に在るや、鉛と相雜る、土人采り得、鉛を以て再三煎煉して方に成る、又鉛銀最も得難し。今時の燒煉家、一斤の鉛ごとに、止だ一二銖を得」とある。【一八】槐火　王註に「言ふは、七たび清明を見るなり、蓋し、清明、火を楡槐に取る」とある。しかし、周禮の註に「春は楡柳を取り、夏は棗杏を取り、夏季は桑柘を取り、秋は柞楢を取り、冬は槐檀を取る」とある。【一九】蕢桴和葦籥　禮記に「蕢桴土鼓葦籥は、伊耆氏の樂なり」とある。蕢桴は、土で固めた桴で、それで鼓を擊つ。葦籥は、葦の管で造つた管。伊耆氏は堯の別名。【二〇】天節　自然の音節。【二一】人均　人爲の樂。

【題義】秋官の崔甲といふ人が、文章を攜へて來訪した。蕭然として、塵俗を拔き出でた姿をして居て、天晴、一かどの人物。聞いて見ると、孫介夫の甥といふこと。そこで、再び前韻を用ひ、この一篇を賦して孫志擧に示したといふのである。崔甲、字は次之、その閱歷等は失考、孫介夫の事は、虔州志に「孫立節、寧都の人、皇祐の進士、王安石新法を行ひ、以て條例司と爲さむと欲す。立節曰く、當に我に勝つ者を求むべし、我輩人の如きは、肯て是官とならず、と。蘇文忠、剛說を作つて以て之に遺る」とある。

【時意】象服を著て、簪や耳飾りを盛に付けて居たからといつて、神仙の邢夫人ではないが、古くなつた衣に、破れた冠履を著けて居る范叔の貧乏らしい有樣は、まことに、氣の毒である。つまり、人の眞價は、その服裝などに關係しない。ここに、崔員外は、晚年になつて、鄉貢生となり、その時は、聲譽赫赫として、翁嫗輩は、爭つて、その娘を嫁に遣りたいと思つた位。しかし、その後、大魚が風水に妨げられて、弱り込んだ如く、又消え殘つた星が、橫に斜に天の片隅に懸れる如く、青衫は白髮に映じ、さながら、古しへの梅子眞の樣であつて、道の存する限りは、すこしも差障りとは成らず、廿

んじて吳の市門を守ると同じく、微官に安んじて居る。その崔君が自ら言ふには、總角の少年の頃には、慈母が近鄰を擇んで、專ら意を教育に用ひたから、一邦の人は、その伯父の孫介夫の如く、矯矯として不仁を惡むのに驚歎した位。それから、詩文も、他人を以て師と爲さず、孫氏に傳はつて居る家法を守つて居るといつた。いかさま、これは空同山の秀靈が、國家の爲に、傑出した人を產出したのであらう。その人物は、挺然として、かの叔孫通が致す能はざりし齊魯二生の如く、それが近く姫姜に比すべき名族の中から出でたといふのも、不思議の至りである。文章を作つても、多きを旨とせず、かの劉伶の如きは、一篇の酒德頌だけで、千古に不朽である。清秀なる詩句は、十分に鍛錬すべく、鉛の中から、純粹な銀の出る樣にせねばならぬ。顧みれば、予が嶺南に遷謫されしより、七たび槐火の新なるを見、近ごろでは、著書の筆を絕ち、一默の中に千諄を含み、最早、何も言はぬ積り、土製の棒だの、蘆の管だのは、極めて、原始的の樂器ではあるが、これこそ、自然の音節であつて、人爲の樂を超絕して居るので、つまり、言はで思ふは、言ふに勝れるのである。そこで、時時、自ら娛んで喜んで居るが、この眞情は、君を除いて、世上俗子の爲には、到底述べることが出來ない。

戲贈虔州慈雲寺鑒老

戲に虔州慈雲寺の鑒老に贈る

居士無塵堪洗沐。　居士、塵の洗沐に堪へたるなし、
道人有句借宣揚。　道人、句あり、借つて宣揚。
窗間但見蠅鑽紙、　窗間、但だ見る蠅の紙を鑽するを、
門外惟聞佛放光。　門外、惟だ聞く佛の光を放つを。
偏界難藏眞薄相。　偏界、藏し難し、眞に薄相、
一絲不挂且逢場。　一絲、挂けず、且つ逢場。
却須重說圓通偈、　却つて須らく重ねて圓通の偈を說くべし
千眼熏籠是法王。　千眼の熏籠、是れ法王。

【字解】【一】佛放光　楞嚴經に「爾時、世尊、肉髻の中より百寶光を涌かし、光の中、千葉寶蓮を涌出す、化如來あり、寶華の中に坐し、頂より十道百寶の光明を放つ」とある。【二】遍界　五燈會元に「石霜山の慶諸禪師、方丈内に在り、僧、窗外に在つて問ふ、咫尺の間、甚麼の爲に師の顔を見ざる。師曰く、遍界かつて藏せず」とある。【三】一絲不挂　傳燈錄に「南泉、陸亘に問ふ、十二時中作麼生、陸曰く、寸絲挂けず、又逢場戲を作す」とある。【四】圓通　楞嚴の偈に「根選擇圓通、入流成正覺」とあり、楞嚴經に「跋陀婆羅佛、圓通を問ふ、わが證するところの如き、因に觸れて上たり」とある。【五】熏籠　李註に「十六開士、浴室に於て本因を證悟す、熏籠焙浴に於て具に大安樂を得」とある。【六】法王　法華經に「法王無上尊」といひ、圓覺經註に「佛は萬法の王たり、又空王といふ」とある。

【題義】 輿地紀勝に「慈雲寺は、贛州城の東南に在り、舊名景德寺」とあり、冷齋夜話に「東坡、海外より歸つて虔上に至る、水涸れ、舟行くを得ざるを以て、時に慈雲寺を過ぎて浴す。長老明鑒、魁梧、世、畫くところの慈恩の如く然り。叢林、道學を以て之に與ふ。坡、詩を作つて之に戲る云云」とある。この詩は、即ち虔州慈雲寺の明鑒長老に贈つたのである。

【詩意】東坡居士は、湯あみをせねばならぬ程、塵にまみれても居らず、長老の作つた句を借りて、大に法風を宣揚しやうと思ふ。窓間には、唯だ蠅が來て、障子の紙を針する音が聞こえ、門外では、佛が光明を放つたといつて、頻りに取沙汰をして居るのが聞こえる。この身の徧界に隱れ難きは、その相貌の尙ほ薄きに起因し、體に一絲をも挂けず、丸裸でも逢場の戯を爲すことに躊躇しない。しかし、ここには、再び圓通の偈を說くべく、千眼を具へ、熏籠で焙烙して、やがて、湯あみを終れば、取りも直さずこの身が法王、卽身卽佛とは、まさしく此事であらう。

畫車二首

何人畫此隻輪車。　何人か、この隻輪車を畫く、
便是當年攲器圖。　便ち是れ、當年攲器の圖。
上易下難須審細。　上るは易く、下るは難く、須らく審細すべし。
左提右挈免疏虞。　左提右挈、疏虞を免れむ。

【字解】【一】隻輪車　即ち一輪車。東京夢華錄に「獨輪車、前後二人、駕の兩旁を把り、兩人扶挾、前に驢の挽くあり、これを串車といふ、耳子轉輪を用ひざるを以てなり」とあり、春渚詩話に「儀江より以東、獨輪小車あり、一人前に挽き、一人後に推す、これを羊頭車といふ。書籍、未だ此名を載するものを見ず、ひとり、張文潜の輪夢行に云ふ、羊頭車子毛布嵌と。はじめて、詩人の之を用ふるを見る」とある。【二】攲器　家語に「孔子、魯の桓公の廟に觀る、攲器あり、守廟の者に問ふ、これ何の器ぞや。對へて曰く、これ蓋し宥坐の器。孔子曰く、吾聞く、宥坐の器、虛しければ攲ち、中なれば正しく、滿つれば覆る、明君、以て至誡となす」とあつて、又荀子及び韓詩外傳等に見えて居る。

【題義】この詩は、車の畫に題したのである。

【詩意】誰が、この一輪車を畫いたか知らぬが、これは、むかしの攲器の圖と略ぼ同じである。この車たるや、上ることは易く、下ることは難いから、篤と注意すべく、そして、左に提げ、右に挈げ、兩方で相助けて行けば、幸に過失を免れることが出來る。

【餘論】紀昀は「この首、凡近」といつて居る。

九衢歌舞頌王明。　九衢の歌舞、王明を頌す、
誰惻寒泉獨自淸。　誰か惻む、寒泉の獨り自ら淸きを。
賴有千車能散福。　賴に千車の能く福を散するあり、
化爲膏雨滿重城。　化して、膏雨となつて、重城に滿つ。

【字解】【一】九衢　都大路。【二】王明　王者の明德、易の井卦九三に「井渫つて食はれず、我が心の惻を爲す、用つて汲むべくんば、王明、竝に其福を受けむ」とあるを用ふ。

【詩意】今しも、都大路では、歌舞して太平の御世に於ける王者の明德を頌し、寒泉の獨り淸きに拘はらず、汲まれずに棄ててあるのを痛む人がない。しかし、幸に、これを汲み、千輛の隻輪車に載

せ、城中の民家に配つて、その福を散ずれば、やがて、膏雨の重城に滿ちた樣な趣があらう。

【餘論】紀昀は「この首未詳」といつたが、寒泉は、東坡自ら比し、千車は、當路の有力者を指したのであらう。

虔州呂倚承事年八十三讀書作詩不已好收古今帖貧甚至食不足

虔州の呂倚承事、年八十三、書を讀み詩を作つて已まず。好んで古今の帖を收め、貧甚しくして、食足らざるに至る

（一）揚雄老無子。（二）馮衍終不遇。揚雄、老いて子なく、馮衍、終に不遇。

不識（三）孔方兄。但有（四）靈照女。孔方兄を識らず、但だ靈照女あり。

家藏古今帖。墨色照箱筥。家に古今の帖を藏し、墨色、箱筥を照らす。

飢來據（五）空案。一字不堪煮。飢ゑ來つて、空案に據る、一字、煮るに堪へず。

枯腸五千卷。磊落相（六）撐拄。枯腸五千卷、磊落相撐拄す。

吟爲蜩蛩聲。時有（七）島可句。吟して、蜩蛩の聲を爲し、時に島可の句あり。

爲語里長者。德齒敬已古。爲に里の長者に語る、德齒、すでに古りたるを敬せよ。

如翁有幾人。（八）薄少可時助。翁の如き、幾人かある、薄少、時に助くべし。

【字解】【一】揚雄　はじめ童烏といふ子があつたが、八歳で死んで後は、子がなかつた。【二】馮衍　前に次韻王鞏山亭見寄の詩中に注して置いた。【三】孔方兄　錢をいふ、前に贈王仲素の詩中に注して置いた。【四】靈照女　傳燈錄に「龐居士、女あり、靈照と名づく、常に隨つて竹漉籬を製し、これを鬻がしめ、以て朝夕に供す」とある。【五】空案　何物も載つて居らぬ机。【六】撐拄　互に支へ合ふ。【七】島可　賈島と可朋。【八】薄少　少しばかりの贈金。

【題義】潘子眞詩話補遺に「呂倚夢得は、維揚の人、少にして場屋の聲あり。屬對を善くし、喜んで書畫を收む。蹭蹬不偶、老いて、始めて恩を以て虔州瑞金簿に補せらる。致仕し、貧以て歸るなし。年八十餘、惟だ一女あり、轅人に嫁す、因つて居る。王禹玉と舊あり、元豐の間、錢二萬・酒十壺を餉る。夢得、啓を作つて謝を致し、隔句中、白水眞人・靑州從事を用ひて對となす。禹玉、極めて之を歎賞す、後、東坡、虔を過ぎ、詩を以て之に遺るといふ」とある。承事、詳しくは承事郎、文官の官階。この詩は、虔州の承事郎呂倚といふもの、年八十三に成つても、書を讀み、文を作つて、少しも止まず、且つ好んで古今の法帖を蒐集し、貧甚しくして、食物さへ十分でない位。その人と爲りに感じて、賦して贈つたといふのである。

【詩意】揚雄は、老いて後、遂に子なく、馮衍は、終生不遇であつた。君も、この二人と同じく、孔

方兄と稱する錢とは、知り合にもならず、唯だ靈照女の樣な娘が一人居るだけである。家には、古今の法帖を藏し、墨色は箱を照らすばかり、飢ゑて來ると、空案に據つて、その法帖を眺めて居るが、一字と雖も、煮ることが出來ない。學問の素養深く、枯腸の中には、五千卷の書籍があつて、つッ張つて、互に支へ合ふといふ有樣。その詩を吟じ出す聲は、蟬や蟋蟀の如く、時時、賈島・可明に比すべき名句がある。ここに、里中の長者に告げるが、道德年齒、すでに久しきを經たるものは、隨分尊敬すべく、まして、この翁の如きは、外に幾人もないのであるから、すこしばかりの義捐金でも贈つて、時時、救助するが善からう。

王子直去歲送子由北歸往返百舍今又相逢贛上戲用舊韻作詩留別

王子直、去歲、子由の北歸するを送りて、往返百舍、今また、贛上に相逢ふ。戲に舊韻を用ひ、詩を作つて留別す

米盡無人典破裘。米盡きて、人の破裘を典するなし、
送行萬里一（一）鄙游。送行萬里、一鄙游。
解舟又欲（二）攜君去。舟を解き、又君を攜へて去らむと欲す、
歸舍聊須（三）與婦謀。舍に歸つて、聊か須らく婦と謀るべし。
聞道年來（四）丹伏火。聞くならく、年來、丹、火を伏すと、
不愁老去雪蒙頭。愁へず、老い去つて、雪、頭に蒙るを。
剩（五）買山田添鶴口。剩さへ、山田を買うて、鶴口を添ふ、
廟堂新拜（六）富民侯。廟堂、新に拜す富民侯。

【字解】【一】鄙游　王註に、顏魯公の蔡明遠に與ふる帖に云ふ、「闇、鄙游、明遠と同じく來り、采石に至らむと欲すと。許るに、其れ久しからずして亦た合はむ」とある。【二】攜君去　晉書張輪傳に「賀循、命に赴いて洛に入らむとし、吳の閶門を經、船中に於て琴を彈ず。輪、はじめ相識らず、乃ち循に就いて言譚し、便ち相欽悅す。循に問うて、その洛に入るを知る。輪曰く、吾、亦た北京に事ありと。便ち同じく載せて、即ち去り、しかも、家人に告げず」とある。【三】與婦謀　楚王が孫叔敖の子を相とせむと欲して優孟に問ひ、孟が歸つて婦と謀りしこと、前に寄呂穆仲の詩中に注して置いた。【四】丹伏火　前に和駒子運の詩中に注して置いた。【五】買山田　王子直、鶴田山に住せしが故に云ふ。【六】富民侯　漢書に「武帝、田千秋を拜して丞相となし、富民侯に封ず」とある。

【題義】王子直は、去年、子由の北歸を送り、驛の百もある長い道中を往復したが、今、又贛上に於て逢ひしが故に、戲に舊韻を用ひ、この詩を作つて、留別したといふのである。王子直は、秀才といふだけで、その名字閱歷等は分からない。

【詩意】米が無くなつても、誰も破裘を質に入れて救つて呉れる人もないが、君は、當年の鄙游の如く、萬里の行を送つて呉れられて、まことに辱い。そこで、舟を解き、君をも載せて一緒に立ち去

らうと思ふ位であるが、家に歸つて、聊か細君と相談されるが善からう。聞けば、年來、仙丹を鍊つて火を伏せてあるさうで、年を取つて、雪の如き白髮が頭に被るをも苦にしない。その上、君は、鶴田山に畑を買つて、鶴をさへ飼はうといふ位。廟堂の上に於ては、田千秋の如き人が、俄に拔擢されて、富民侯に封せられたといふが、君は、そんな事を聞いても、何とも思つては居らぬ樣である。

次韻江晦叔二首

江晦叔に次韻す　二首

人老家何在。龍眠雨未驚。　人、老いて、家、何くにか在る、龍、眠つて、雨、未だ驚かす。

酒船回太白。稚子候淵明。　酒船、太白を回し、稚子、淵明を候す。

幸與登仙郭。同依坐嘯成。　幸に登仙の郭と、同じく、坐嘯の成に依る。

小樓看月上。劇飮至參橫。　小樓、月の上るを看、劇飮して參の橫はるに至る。

【字解】【一】回太白　太白は李白の字、前に哭刁景純の詩中に注して置いた。【二】候淵明　陶淵明の歸去來辭に僮僕歡迎、稚子候門とあり、又その詩に、歸人望煙火、稚子候簷隙とある。【三】登仙郭　郭は郭泰、李膺と同舟して仙の如く見えたといふこと、前に次韻徐積見懷の詩中に注して置いた。【四】坐嘯成　成は成瑨、字は公梭、前に趙郎中見和の詩中に注して置いた。

【題義】説明に及ばぬ。晦叔の事は、前に送江公著知吉州の詩中に注して置いた。

【詩意】われは、老いて、家が何處とも知らず、幸ひ、江中の龍が眠つて居る爲に、ひどい風雨もなく、これでは旅路も安心である。たとへば、酒を載せし舟が李白を送り回すが如く、又稚子が門に候して、陶淵明の歸るを待つが如く、予も亦た歸りが急がれる。ここに、君と逢つたのは、登仙せむとする郭泰と舟を同じうせしが如く、又坐嘯せる成瑨に依つた樣である。されば、小樓に倚つて、月の上るを眺めつつ痛飮して、參といふ星の橫はる頃に至つた次第である。

鐘鼓江南岸。歸來夢自驚。　鐘鼓、江の南岸、歸り來つて、夢、自ら驚く。

浮雲時事改。孤月此心明。　浮雲、時事改まり、孤月、この心明かなり。

雨已傾盆落。詩仍翻水成。　雨、すでに盆を傾けて落ち、詩、仍ほ水を翻して成る。

二江爭送客。木杪看橋橫。　二江、爭つて客を送り、木杪、橋の橫はるを見る。

【詩意】江の南岸には、寺があると見えて、鐘鼓の聲、さわがしく聞こえ、歸つて此に至れば、夢も自然、驚いて醒めるばかり。浮雲は、時事と共に改まり、孤月は、此心の如く光明透徹である。雨は、既に盆を傾けるが如く降り注ぎ、詩は、水を翻すが如く、咄嗟の間に出來た。二江の水は、爭つて客を送るが如く、木の梢の邊に、橋の橫はるのが見える。

【餘論】乾隆御批に「冲襟內に蓄、文、詞に見はる、達然として理に入らざるなし」とあつて、これ

は、まさしく、苕溪漁隱叢話に「浮雲世事改、孤月此心明、語意高妙、參禪悟道の人、胸襟を吐露するが如く、一毫の窒礙なきなり」とあり、困學紀聞に「浮雲世事改、孤月此心明、坡公晩年造るところ深し」とあるのを承けたのである。

次韻江晦叔兼呈器之

江晦叔に次韻し、兼ねて器之に呈す

横空初不跨鵬鼇。　空を横ぎる、初めより鵬鼇に跨らず、
但覺胡牀歩歩高。（一）　但だ覺ゆ、胡牀、歩歩高きを。
一枕晝眠春有夢。　一枕、晝眠つて、春に夢あり、
扁舟夜渡海無濤。　扁舟、夜渡つて、海に濤なし。
歸來又見顚茶陸。（二）　歸り來つて、又見る茶に顚するの陸、
多病仍逢止酒陶。（三）　多病、仍は逢ふ酒を止むるの陶。
笑說南荒底處所。　笑うて說く、南荒、底の處の所、
衹今榕葉下庭皐。（四）　衹今、榕葉、庭皐に下る。

【字解】【一】歩歩高　東坡の自註に「器之言ふ、かつて、夢に飛び、自ら身と坐牀と皆空中に起つを覺ゆ」とある。【二】顚茶陸　東坡の自註に「さきに鐡瘡に在り、かつて晦叔に語る、陸羽は茶顚、君、亦た然り」とある。【三】止酒陶　東坡の自註に「陶淵明に止酒の詩あり、器之少時、飲量敵なし、今復た飲まず」とある。【四】庭皐　皐は平地。

【題義】王註に「劉安世、字は器之、寶文閣待制に終る、學者、號して元城先生といふ」とあつて、宋史に其傳を載せ、なほ邵氏見聞後錄に「器之、東坡と元祐の初同朝、元符の末に至り、嶺南より歸り、道に相遇うて、はじめて交歡す」とある。この詩は、江晦叔の詩韻に次し、兼ねて劉安世に贈つたのである。

【詩意】予は心地曠濶、空中を横ぎるにも、初より鵬や鼇に跨らず、歩歩の間に、身と坐牀とが自然高くなる様な氣がする。枕を擁して、暢氣に晝寢をすると、春の日永に夢をなし、夜、扁舟に乘じて、海を渡ると、幸にも濤なくして、至つて平穩であつた。そこで、此まで歸つて來ると、茶の爲に氣違ひの樣になれる陸羽の如き君と相見るを得、多病の身で、酒を止めた陶淵明の樣な人に逢つた。南荒は、如何な處かといへば、今しも、春過ぎて、榕樹の葉が庭もせに散り敷き、流石に物寂しい景色であらう。

寒食與器之游南塔寺寂照堂

寒食、器之と南塔寺の寂照堂に游ぶ

城南鐘鼓鬭淸新。　城南の鐘鼓、淸新を鬭はす、
端爲投荒洗瘴塵。（一）　端に投荒の爲に、瘴塵を洗ふ。

【字解】【一】投荒　宋史劉器之傳に「章惇、事を用ひて新州別駕に貶し、英州に安置す、投荒七年、甲

總是鏡空（二）堂上客。 すべて、是れ鏡空堂上の客、
誰爲寂照（三）境中人。 誰か寂照境中の人となる。
紅英掃地風驚曉。 紅英、地を掃うて、風、曉に驚き、
綠葉成陰雨洗春。 綠葉、陰を成して、雨、春を洗ふ。
記取明年作寒食。 記取せよ、明年、寒食を作し、
杏花曾（四）與此翁鄰。 杏花、かつて此翁と鄰りしを。

含蓄するところ遺憾の地、これが歴ざるはなし」とある。【二】鏡空堂 王註に「或は云ふ、鏡空堂は張安道の堂なりと、未だ詳ならず。但し、先生、聰上人に和する詩あり、一悟鏡空老、始知圓澤賢」とあるから、僧の名ではないかと思はれる。【三】寂照 堂の名、楞嚴經に湛然寂照とあるを取つたのであらう。【四】曾與此翁鄰 韓愈の杏花の詩に「居鄰北郭古寺空、杏花兩株能白紅、明年更發應更好、道人莫忘鄰家翁」とある。

【題義】秦和志に「槐安閣は、縣の南塔寺に在り、黃山谷、白下の宰となつて詩あり」と見え、虔州志にも亦た之を載せてあるが、あまり著名でもないと見えて、紀述は甚だ疎略である。王註に杭州圖經を引いたのは、全く見當違ひであらう。この詩は、寒食の日に、劉器之と共に、南塔寺の寂照堂に游んで作つたのである。

【詩意】城南なる寺の鐘鼓の響は、清新にして、まさしく、投荒の人の爲に、瘴塵を洗つて吳れる樣である。ここに來たものは、すべて鏡空長老の堂上の客であるが、その中、誰が名にしおふ寂照境中の人となり得べきか。今しも、紅の花びらは、地を掃うて、風は曉に驚き、綠の若葉は陰をなし、雨は春を洗ひ去らうとして居る。明年再び寒食に遇ひし時、杏花は、かつて、かく申す東坡と鄰り、その眷賞を受けたといつた其言葉を記憶して居て貰ひたい。

【餘論】乾隆御批に「花落ち、木榮え、人事を言はず、しかも、人事の變遷、自ら見はる、寄慨良に深し」とある。

器之好談禪、不喜游山、山中筍出、戲語器之、可同參玉版長老、作此詩

器之、好んで禪を談じ、游山を喜ばず。山中に筍出づ、戲に器之に語る、同じく玉版長老に參すべしと、此詩を作る

叢林眞百丈（一）。法嗣有橫枝（二）。 叢林、眞に百丈、法嗣、橫枝あり。
不怕石頭（三）路。來參玉版師。 怕れず石頭の路、來り參す玉版の師。
聊憑柏樹子（四）。與問籜龍兒。 聊か柏樹子に憑つて、與に問ふ籜龍の兒。
瓦礫猶能說。此君（五）那不知。 瓦礫、なほ能く說く、此君、那ぞ知らざらむ。

【字解】【一】百丈 傳燈錄に「洪州百丈山の懷海禪師、大雄山に住む、居處巖巒、峻極まれるを以て、故に之を百丈と號す」と

ある。【三】横枝　東坡の自註に「玉版は横枝の竹筍なり」とある。【三】石頭路　前に次韻答二寶覺一の詩中に注して置いた。【四】柏樹子　前に和堂及び鞮德孺惠二柏石一の詩中に注して置いた。【五】此君　竹を云ふ、前に綠筠軒の詩中に注して置いた。

【題義】劉器之は、好んで禪を談ずれども、山に游ぶことを好まない。そこで、一處に寺に參詣すると、山中で筍を見つけたから、戲に器之に向つて、これも同じく玉版長老の處へ往つて、禪に參ずることが出來やうといひ、仍つて、この詩を作つたといふのである。苕溪漁隱叢話に「東坡、かつて、劉器之と同じく玉版和尙に參せむとす。器之、欣然、これに從ふ。廉泉に至り、筍を燒いて食ふ。器之、筍味の勝れたるを覺え、問ふ、これ何の名ぞ。曰く、玉版と名づく、この老僧、善く法要を說き、人をして禪悅の味を得せしむ、と。ここに於て、器之、方に其戲を悟る。坡、偈を作る、云云、と。この詩、盡く禪家の語を用ひて形容す、游戲に善きものといふべし。山谷云ふ、この老、般若に於て、橫說竪說、百に剩語なし、その筆端、舌あるに非ざるか」とある。

【詩意】叢林は、名の同じ通りに、眞に洪州の百丈山に似て居るし、その法嗣としては橫枝の此筍がある。この筍は、石頭の路を恐れず、態態、ここに來て、玉版和尙に參禪せむとし、まことに、殊勝の至である。そこで、柏樹子に憑つて、この筍に事問はむとして居るのであるが、瓦礫でさへも、往往にして物いふ位であるから、此君と稱せらるる竹にして、話說することを知らぬ筈はない。

永和清都觀道士童顏鬒髮問其年生於丙子蓋與予同求此詩

永和清都觀の道士、童顏鬒髮、その年を問へば、丙子に生まる、と。蓋し、予と同じ。此詩を求めらる

(一)鏡湖敕賜老江東。　鏡湖、敕して賜ひ、江東に老ゆ、

未似西歸(二)玉局翁。　未だ似ず、西歸の玉局翁。

敧枕未容春夢斷。　枕を敧てて未だ容さず、春夢の斷ゆるを、

清都宛在(三)默存中。　清都、宛として默存の中に在り。

每逢佳境攜兒去。　佳境に逢ふ毎に、兒を攜へて去り、

試問行年與我同。　試みに行年を問へば、我と同じ。

自笑餘生消底物。　自ら笑ふ、餘生、底物を消ふ、

(四)半篙清漲百灘空。　半篙の清漲、百灘空し。

【字解】【一】鏡湖敕賜　賀知章が官を罷めて歸る時、玄宗が之に鏡湖一曲を賜はりしこと、前に哭二刁景純一の詩中に注して置いた。【二】玉局　前に送二戴蒙一及び過レ嶺の詩中に注して置いた。【三】默存　穆天子傳に「王、化人の袪を執り、騰つて上るもの中天、王、實に以爲へらく、淸都紫微、鈞天廣樂、帝の居るところ、と。すでに寤め、王、從つて來るところを問ふ、左右曰く、王、默存するのみ」とある。【四】半篙清灘　東坡の自註に「予、劉器之と同じく、虔州を發す、江水忽ち清漲丈餘、贛石三百里、一も見るものなし。永和に至り、器之、舟

を解いて先づ去り、予、ひとり、淸都に游んで此詩を作る」とある。

【題義】査註に「泰和志、縣を距つる、東北八十里、晉の置ける東昌城あり。隋、省いて西昌に入る、今の永和鎭、即ち其地なり。吉安志、萬安縣に三鄕あり、曰く永和、曰く誠信、曰く龍泉。廬陵志、淸都觀は、吉州城南十五里、儒林鄕、永和鎭に在り。南唐保大の間、石基あり、號して西臺といふ。宋の興國の初、道士蕭道元、茅を臺に結び、額、西臺觀を賜ふ。治平中、今の名に改む。蘇軾、南歸し、かつて游び、爲に淸都臺の三字を書す。本集に淸都謝道士の眞贊あり、云ふ、謝道士、生丙子、眞一存、長不死、欲識淸都面目、一江春水東流、滔滔直入滄海、大至蓬萊頂頭と。道士、姓は謝、字は子和」とある。すると、この題は、永和なる淸都觀の謝道士は童顏で、房房した髮をして居るが、その年を問へば、丙子に生まれたといふから、予と同年で、六十五歲。その人が詩を求めたから、この一首を作つたといふのである。

【詩意】君は、當年の賀知章が、敕して鏡湖一曲を賜はつて、江東に老ゆるが如く、予が西歸して玉局觀を提擧するのとは、丸で異なつて居る。枕を敧てても、長閑けき春の夢は未だ醒めやらず、名にしおふ淸都は、默存の中に在つて、彷彿として、天上に參向することがある。予は佳境に逢ふ每に、伜と一緖に往き、そこで、君に逢つたから、試に行年を問ふと、恰も予と同じだといふことで、その若若しいのは、まことに羨ましい。予は、餘生を送るに、何物を用ふべきか。江水、忽ち淸漲して、半篙の深さに及び、百灘の險も皆沒して仕舞ひ、ここまで無事で來られたのが、先づ嬉しいと思ふ位、その落寞たることは、自分でも、をかしい位である。

贈詩僧道通

詩僧道通に贈る

雄豪而妙苦(一)而腴。　雄豪にして妙、苦にして腴、
祇有琴(二)聽與蜜殊。　祇だ琴聽と蜜殊とあり。
語帶煙霞從古少。　語は煙霞を帶ぶ、古しへより少く、
氣(三)含蔬筍到公無。　氣は蔬筍を含む、公に到つて無し。
香林乍喜聞薝蔔(四)。　香林、乍ち喜ぶ薝蔔を聞くを、
古井惟慚斷轆轤。　古井、惟だ慚づ轆轤を斷つを。
爲報韓(五)公莫輕許。　爲に報ぜよ、韓公、輕しく許す莫れ、
從今島(六)可是詩奴(七)。　今より、島可、これ詩奴。

【字解】【一】苦而腴　苦いけれども妙味がある。【二】琴聽與蜜殊　琴を學んで居た思聰と蜜ばかり嘗めて居る仲殊、ともに詩僧の名、東坡の自註に「錢塘の僧思聰、總角、琴を善くす、後、琴を舍てて詩を學び、復た詩を棄てて道を學ぶ。その詩、皎然に似て、しかも雄放を加ふ。安州の僧仲殊の詩、敏捷立どころに成る。しかも、工妙、人に絕えて遠きこと甚し。殊、穀を避けて常に蜜を喫ふ」とある。【三】氣含蔬筍到公無　東坡の自註に「酸餡の氣なきをいふなり」とある。つまり、酸い樣な甘い樣な精進料理の味がないといふ意。【四】薝蔔　梔子の花、前に數ば見ゆ。【五】韓公　即ち韓愈、賈島の詩を激賞せしが故に云ふ。【六】島可　賈島と可明、王註に「島は賈島なり、は

じめ、浮屠となつて無本と名づく。可は可明なり。韓退之、無本に詩を贈つて之を稱す、故に其經許といふ」とある。【七】詩奴 王註に「杜牧、李賀詩集の序を作り、謂はゆる奴僕として蓄に命ずるの意」とある。

【題義】 説明に及ばぬ。詩人玉屑・石林詩話には、皆惠通に作つてあるが、未だ孰れか是なるを詳にせず、且つ倶に失考。

【詩意】 詩を作つて、雄豪なれども工妙、苦いけれども、えならぬ至味があつたのは、唯だ思聰・仲殊の二人があつたばかりだが、君は決して之に遜らない。語語、煙霞の匂を帶びたるは、古しへより其例なく、坊主の詩といへば、蔬筍の氣を含んで、精進料理臭いが、君の作には、絶對に、さういふことがない。ここに、君の詩を得たるは、花咲き匂ふ林の中に、梔子の薫り高きを聞くが如く、古井の清冷極まれる水が、轆轤が無くては、どうしても汲めぬと同じである。むかし、韓退之は賈島などを推許したが、最早輕しく、さういふことを言はぬ樣にと警告した位で、今後、賈島・可明などは、詩の上で、全く君の奴僕たるに過ぎぬものである。

【餘論】 乾隆御批には「氣含蔬筍、祇だ是れ諧語を以て詩に入れ、遂に千古の名論となる。世の堂を開いて人の爲にするもの、能く斯意を得ば、定めて、兎園四六、敗衄の時文、撮合補綴、支那の撰述となすに足らず、而して、正法眼藏を具ふるもの、卽ち不搽紅粉也風流、只要檀郎認得聲等の句の如き、皆第一義を解すと爲すを知らむ」とあつて、大に之を推賞して居るが、紀昀は「これ何の言語ぞや」といつて、全然、これを否定して居る。

張競辰永康所居萬卷堂

君家四壁如相如。（一）卷藏天祿呑石渠。（二）豈惟鄴侯三萬軸。（三）家有世南行祕書。（四）兒童拍手笑何事。笑人空腹談經義。未許中郎得異書。（五）且與揚雄説奇字。（六）清江縈山碧玉環。下有老龍千古閒。

張競辰永康、居るところの萬卷堂

君が家、四壁、相如の如し、卷いて、天祿を藏して、石渠を呑む。豈に惟だ鄴侯の三萬軸のみならむや、家に世南の行祕書あり。兒童、手を拍つて何事をか笑ふ、人の空腹にして經義を談ずるを笑ふ。未だ許さず、中郎の異書を得るを、且つ揚雄と奇字を説く。清江、山を縈る、碧玉環、下に老龍あつて、千古閒なり。

【字解】【一】相如 卽ち司馬相如、文君と共に成都に歸り、四壁立せしこと、前に謝郡人獻花の詩中に注して置いた。【二】天祿 下の石渠と共に皆漢の閣名、乃ち書を藏せし處。【三】鄴侯 唐の李泌、前に書軒の詩中に注して置いた。【四】世南行祕書 國朝雜事に「唐の太宗、出でて幸す、有司書を載せて以て從はむことを請ふ。帝曰く、須ひず、虞世南、ここに在り、行祕書なり」とある。【五】中郎 蔡邕、論衡を得て議論大に進みしこと、前に和陶答龐參軍、及び廣倅蕭大夫の詩中に注して置いた。【六】説奇

知君好事家有酒。　君が好事、家に酒あるを知り、
化(七)爲老人夜扣關。　化して老人となつて、夜、關を扣く。
留侯之孫書滿腹。　留侯の孫、書、腹に滿つ、
玉函寶方何用讀。　玉函寶方、何ぞ讀むを用ひむ。
濠(八)梁空復五(九)車多。　濠梁、空しく復た五車多く、
圯(一〇)上從來一編足。　圯上、從來、一編足れり。

字」前に復次韻謝趙景貺」の詩中に注して置いた。【七】化爲老人　王註には酉陽雜俎を引いて、開元中、雨を祈り、龍が老人に化して、救を孫思邈に求めしことを引き、又「或は曰く、張氏、實に龍の老人に化するに逢ふの事あり、亦た此を借りて之を用ふ」とある。【八】濠梁　惠子の事、前に觀魚臺の詩中に注して置いた。【九】五車　莊子に「惠子多才にして、その書五車」とある。【一〇】圯上　張良が圯上に於て老人から書を受けしこと、前に和張郎中及び同先生過湖州の詩中に注して置いた。

【題義】　說明に及ばぬ、揮麈後錄に據れば、張競辰は、華陽張德遠の父だといふこと、その他の事は、さツぱり分からぬ。

【詩意】　君が家は、四壁山立、さながら、司馬相如の舊宅の如く、何物もないが、唯だ天祿・石渠の兩書閣を卷いて呑んだかと思ふばかり、藏書だけは極めて豐富で、鄴侯の三萬軸のみでなく、行祕書と稱せられた虞世南に匹敵する位。兒童等は、手を拍いて、頻りに笑つて居るから、何事ぞと問へば、空腹でありながら、物物しく經義を論じて居るのがをかしいといつた。蔡邕が異書を得たのも、物の數ならず、しばらく、揚雄の爲に、あべこべに奇字を說いて聞かせることも出來る。眺めやれば、清江一道、山を紮つて碧玉の環の如く、その淵には、むかしから、老龍が住んで居る。君は、物數奇にも、家に酒を貯へて置く爲に、その龍が老人に化けて、夜ごと來て、門を叩くといふ話。君は、留侯の末裔であつて、素養も深く、書物は腹に一ぱいであるから、玉函に藏したる仙家の祕方などは、全く讀む必要もない。元來、濠梁に於て、莊子と魚の樂を論じた惠施の如きは、その書、五車に餘ることを誇つて居るが、何の役にも立たず、ただ精讀して善く運用するならば、圯上の一編だけでも、十分である。

【餘論】　紀昀は「亦た殊に淺易」といつて居る。

劉壯輿長官是是堂
劉壯輿長官の是是堂

開(一)燕言仁義。是非安可無。　開燕、仁義を言ふ、是非、安んぞ無かるべけむや。
非非義之屬。是是仁之徒。　非を非とするは義の屬、是を是とするは仁の徒。
非非近乎訕。是是近乎諛。　非を非とするは訕に近く、是を是とするは諛に近し。
當爲感麟(二)翁。善惡分錙銖。　當に麟を感ずる翁となつて、善惡、錙銖を分つべし。

抑爲阮嗣宗。臧否兩含糊。　抑も、阮嗣宗となつて、臧否、兩つながら含糊。

劉君有家學。三世道益孤。　劉君、家學あり、三世、道、益す孤なり。

陳古以刺今。紬史行天誅。　古を陳べて、以て今を刺り、史を紬いて天誅を行ふ。

皎皎大明鏡。百陋逢一姝。　皎皎たる大明鏡、百陋、一姝に逢ふ。

鶚立時四顧。何由攫羣狐。　鶚、立つて時に四顧、何に由つてか、羣狐を攫さむ。

作堂名是是。自說行坦途。　堂を作つて、是是と名づく、自ら說いて、坦途を行くと。

孜孜稱善人。不善自遠徂。　孜孜、善人を稱す、不善、自ら遠く徂く。

願君置座右。此語禹所謨。　願はくは、君、座右に置け、この語、禹の謨とするところ。

【字解】【一】閒燕　國語に「管子曰く、むかし、聖王の士を處するや、閒燕に就かしむ。閒燕すれば、父は父と義を言ひ、子は子と孝を言ふ」とあり、漢書貨殖傳に「士相與に仁誼を閒燕に言ふ」と見ゆ。【二】感麟翁　孔子を云ふ、前に寥極齋の詩中に注して置いた。【三】阮嗣宗　卽ち阮籍、前に阮籍嘯臺の詩中に注して置いた。【四】含糊　曖昧にして透徹せざること。【五】紬史　史實を引き出して對比する。【六】鶚立　李白の詩に鶚立重飛翩とある。【七】遠徂　遠ざかつて立ち去る、左傳に「羊舌職曰く、吾、これを聞く、禹、善人を稱すれば、不善人は遠し」とある。【八】座右　王註に「後漢の崔瑗、座右の銘あり」と見ゆ。

【題義】宋史に「劉義仲、字は壯輿、父恕、卒して七年、資治通鑑成るや、その勞を追錄して、義仲を郊廟齋郎に官す。政和中、汝州より召されて、編修官となり、京師に至る。權要に謁せず、未だ幾ならず、致仕して、廬山に歸る。一時の公卿、詩を賦し、三世、美を濟す、尤も易からずといふ」とあり、陳後山の是是堂記略に「劉子義仲、鉅野に佐たり、屋を架して以て居り、名づけて是是の亭といふ。その大父凝之、仕へしが、合はずして去り、廬山の下に老ゆ。その父道原、面のあたり、人の短長を數め、權貴を避けず、卒に窮して以て死す。而して、天下重きを歸す。今、劉の博覽偉辯、剗身苦思、すでに其世を嗣ぎ、善に向ひ、惡を讎とする、亦た其二父に減せずといふ」とある。この詩は、劉義仲の是是堂に寄題したので、長官といへば、その西江に令たる時であらう、但し、その何の邑たるかは分からない。

【詩意】閒燕の際、仁義の話をする以上は、他を是非することは、決して無い譯には行かぬ。それも決して惡いことではなく、非を非とするは義の屬、是を是とするは仁の仲間である。しかし、非を非とすれば、訕るに近く、是を是とすれば、諛ふに近く、そこで、或は之を差控へやうとする人があるので、かの獲麟に感じた孔子の如く、善惡に就いて、極めて微細な處まで辨別して、これを判定するか、然らざれば、阮籍の如く、善しとするも、惡しとするも、兩つながら、曖昧にして置く外はない。劉君は、家學を傳へ、すでに三世に亙つて、道、益す孤、他に其類なく、古しへを陳べて今を諷刺し、史上の事實に對して天誅を行はれる。たとへば、皎皎たる大明鏡が照らすと、大抵の物は醜陋で、美

人は滅多に無きが如く、鶚が立つて、時に回顧する外、羣狐を擾亂せしむるものなきと同じである。そこで、堂を作つて、是是と名づけ、自分では坦途を行く積り、孜孜として善人を稱揚すれば、不善人は、自然と遠ざかつて去る譯である。願はくは、君よ、これを座右の銘とすべく、善人を稱すれば、不善人は遠ざかるといふのは、取りも直さず、禹の讜訓であつて、必ず之を學ばねばならぬ。

【餘論】紀昀は「太だ理路に渉る」といつて居る。

絕句

柴桑春晚思依依。　柴桑、春、晚れて思依依、
屋角鳴鳩雨欲飛。　屋角の鳴鳩、雨、飛ばむと欲す。
昨日已收寒食火。　昨日、すでに收む、寒食の火、
吹花風起却添衣。　花を吹くの風、起つて却つて衣を添ふ。

【題義】絕句とは、格別、はツきりした題も設けられぬ場合に用ふるのが普通である。唐人中には、律の半ば出來たままの者を稱したこともあるが、後世では、さうでもない。

【詩意】柴桑の地、春すでに暮れ、思依依として盡きず、屋角には、鳩が鳴いて、雨が降らうとして居る。昨日、すでに寒食の火を收めたのに、花を散らす風が吹き起つて、寒さを催し、却つて、衣を添へしめる程である。

【餘論】紀昀は「小しく情致あり、然れども、東坡の吐屬に似ず」といつて居るが、いかさま、さうであらう。

夢中絕句

〔一〕楸樹高花欲插天。　楸樹の高花、天に插まむと欲す、
暖風遲日共茫然。　暖風遲日、共に茫然。
〔二〕落英滿地君方見。　落英滿地、君、方に見る、
惆悵春光又一年。　惆悵、春光、又一年。

【題義】この詩は、夢の中に作つた絕句である。

【詩意】楸の樹の高い梢に咲いた花は、天に插むが如く、その爲に、暖き風も、暮るるに遲き日影も、ともに、ぼんやりして居る。落花は、地上に鋪いて、君の御覽の通り、春光すでに盡きむとして、今年も、亦た惆悵することを免れない。

【字解】〔一〕楸樹　爾雅に「葉小にして皺あるは榎、葉大にして皺あるは楸」とあり、詩眼に「楸は將に夏ならむとして乃ち繁し」とあり、杜甫の詩に楸樹高花欲插天とある。〔二〕落英　落花に同じ。

【餘論】紀昀は「亦た東坡の語に似ず」といつて居る。

予昔作壺中九華詩、其後八年、復過湖口、則石已爲好事者取去、乃和前韻以自解云

予、むかし、壺中九華詩を作る。その後八年、復た湖口を過ぐれば、石、すでに好事者に取り去らる。乃ち前韻に和して、以て自ら解すと云ふ

江邊陣馬走千峰。　江邊の陣馬、千峰を走らす、

問訊方知冀北空。　問訊、方に知る、冀北の空しきを。

尤物已隨清夢斷。　尤物、すでに清夢に隨つて斷え、

眞形猶在畫圖中。　眞形、なほ畫圖の中に在り。

歸來晩歲同元亮。　歸り來つて、晩歲、元亮に同じく、

却掃何人伴敬通。　却掃、何人か敬通を伴はむ。

賴有銅盆修石供。　賴に銅盆の修石に供するあり、

仇池玉色自璁瓏。　仇池の玉色、自ら璁瓏。

【字解】【一】陣馬　戰馬に同じ。【二】冀北　名馬の產地。【三】尤物　すぐれた物、東坡の自註に「劉夢得、九華を以て造化の一尤物となす」とあつて、劉禹錫の九華山歌に、「九華山、自是造化一尤物、焉能籍甚手人間」とあるを指す。【四】畫圖　東坡の自註に「道藏に五嶽眞形圖あり」と見ゆ。道藏とは、道教關係の一大叢書で、佛教の大藏經に對して云ふ。【五】元亮　陶淵明の一字。【六】敬通　馮衍の字、前に與周李渉捏山の詩中に注して置いた。【七】銅盆　東坡の自註に「家に銅盆あり、仇池石を貯ふ、正綠色にして洞あり、水、背に達す。予、又かつて怪石を以て佛印師に供し、怪石供一篇を作る」とある。

【題義】予は、曩に湖口に於て、壺中九華といふ名石を見たから、その詩を作つた。然るに、八年後の今日、再び湖口を過ぎると、その石は、既に好事者に取り去られて仕舞つた。そこで、前詩の韻を用ひ、この詩を作つて、自ら遺憾に思ふ心を解いたといふのである。

【詩意】江邊の戰馬は、千峰を走らすが如く、その馬は、どこかへ往つて仕舞つて、問ひ尋ねると、冀北の野も爲に空しといふ有樣。折角の尤物は、清夢に隨つて、その跡を留めず、九華山の樣な其眞形は、圖畫の中に殘つて居る。身は、晩年、ここに歸り來つて、陶元亮の如く、妻妾に取り殘され、掃除などして相伴ふ人だになきは、まさしく、馮敬通の樣である。しかし、幸にも、銅盆の中には、長い石を貯へてあつて、仇池の名もゆかしく、玉の如く、自然に玲瓏として居るから、いささか、自ら慰めることが出來る。

次韻郭功甫觀予畫雪雀有感二首

郭功甫が予の畫雪雀を觀て感あるに次韻す　二首

早知臭腐卽神奇。　早く知る、臭腐は卽ち神奇、
海北天南總是歸。　海北天南、すべて是れ歸る。
九萬里風安稅駕。　九萬里の風、安んぞ稅駕せむ、
雲鵬今悔不卑飛。　雲鵬、今悔ゆ、卑く飛ばざるを。

【題義】郭功甫、名は祥正、當塗の人。その小傳は、前に郭祥正家詩の題註中に掲げて置いた。功甫の原作は、態態惠州にまで寄せたので、

平生才力信瑰奇。今在窮荒豈易歸。正似雪林枝上畫。羽翰雖好不能飛。

とあり。後に、東坡の北歸する時、又前韻を用ひて、左の詩を寄せた。

秋霜春雨不同時。萬里今從海外歸。已出網羅毛羽在。却尋雲跡帖天飛。

そこで、東坡は、取り敢へず、これに次韻したのである。

【詩意】大道の上より見て、臭腐は卽ち神奇であるといふことは、早くから知つて居つて、予は、今はじめて赦され、海北天南、これから愈よ歸り行くのである。たとへば、九萬里の風に駕するが如く、何處にか車を停むべき。この位ならば、雲井を度る鵬に比すべき身は、その初、なぜ低く飛ばなかつたかと、それを今更後悔するので、つまり、あまり高く飛んだものだから、歸るにも容易でない樣に成つたのである。

【字解】【一】臭腐　莊子に見ゆ、前に次韻魯直見贈の詩中に注して置いた。【二】稅駕　車を止める。

【餘論】乾隆御批に「謫宦を以て搏扶となし、卑飛を厚祿に擬し、偶ま不平の鳴を露はす、翻案獨絕」とある。但し、紀昀が「起句粗」といつたのは、大に當つて居る。

可憐倦鳥不知時。　憐むべし、倦鳥、時を知らず、
空羨騎鯨得所歸。　空しく羨む、騎鯨歸るところを得たるを。
玉局西南天一角。　玉局、西南天の一角、
萬人沙苑看孤飛。　萬人、沙苑に孤飛を見る。

【詩意】身は、倦飛の鳥の時を知らざるが如く、今でも、まごまごして居るので、かの鯨に跨つて、逸早く歸るところを得たるものを羨むことの果敢なさ。今次、わが提擧となりし玉局觀は、蜀の成都、卽ち西南の一角に在るので、人人は、沙苑に在つて、むかし徐佐卿が鶴に化して、遙に其方に飛

【字解】【一】騎鯨　李白の事、前に次韻讀杜詩の詩中に注して置いた。【二】玉局　前に送鄭豪及び過嶺の詩中に注して置いた。【三】沙苑　徐佐卿が鶴に化せし事、前に、白鶴峰新居欲成の詩中に注して置いた。

んで行くのを眺めた樣にして居るであらう。

次韻法芝舉舊詩一首　法芝の舊詩を擧ぐるに次韻す　一首

春來何處不歸鴻。　春來、何の處か歸鴻ならざらむ、

非復羸牛踏舊蹤。　復た羸牛の舊蹤を踏むに非す。

但願老師眞似月。　但だ願ふ、老師の眞に月に似たるを、

誰家甕裏不相逢。　誰が家の甕裏か、相逢はざらむ。

【字解】【一】何處不歸鴻　王註に「建中靖國の初、皆諸公の廢されたるものを起す、先生又請うて常州に歸るを得たり、この詩、蓋し以て興するなり」とある。【二】羸牛　王註に「先生、嘗て詩あり、法芝に興へて云ふ、閑斷如二羸牛一、步步跟二陳跡一と。故に今復た牛の如きに非すといふなり」とある。【三】眞似月　王註に「先生、法芝に興へて、又云ふ、老芝如二雲月一、炯炯時一出、と。故に今爾いふのみ」とある。【四】甕裏　馮應榴の案に「任註山谷集に、高僧傳、醋頭和尚の頌を引く、揭二起甕蓋一見二天下一、天下元來在二甕中一、甕中元來有二天下一と。甕裏の字に至つては、佛書に習見す」とある。

【題義】説明に及ばぬ。法芝、名は曇秀、その唱和の詩は、前に揚州惠州の卷中に見えて居る。

【詩意】春に成つてからは、何處へ往つても、歸る雁ばかりで、自分とても、最早、疲れた牛が舊い跡を踏むのではない。ただ願はくは、老師に於ても、本當に雲間の月の炯炯たるが如くあつて欲しいので、さうすれば、甕裏に比すべき天下に於て、到る處、相逢ふことが出來るであらう。

次舊韻贈清涼長老　舊韻に次して、清涼長老に贈る

過淮入洛地多塵。　淮を過ぎ、洛に入る、地に塵多し、

舉扇西風欲汚人。　扇を擧ぐれば、西風、人を汚さむと欲す。

但怪雲山不改色。　但だ怪しむ、雲山、色を改めざるを、

豈知江月解分身。　豈に知らむや、江月の分身を解するを。

安心有道年顏好。　安心、道あれば年顏よし、

遇物無情句法新。　物に遇ふも無情、句法新なり。

送我長蘆舟一葉。　われを送る、長蘆舟一葉。

笑看雪浪滿衣襟。　笑つて看る、雪浪の衣襟に滿つるを。

【字解】【一】西風欲汚人　庾亮の事、前に王廷老退居の詩中に注して置いた。【二】雲山　王註に「これ以て清涼長老を言ふなり。杜子美の詩、河漢不レ改レ色、而して、意は、多塵の中に在つて之を見るを以て、故に怪むべきなり」とある。【三】長蘆　前に、僕所レ至未三嘗出二游一の詩中に注して置いた。

【題義】説明に及ばぬ。清涼長老は、前に卷三十七に贈詩があつて、その題下に注して置いた。

【詩意】これより淮を過ぎて洛に入る途すがら、塵埃多く、さながら、かの王導が、扇を西風に擧げて、庾亮の塵、人を汚すといつた樣であらう。しかも、この間、長老が雲山の如く、その色を改めざるは、不思議であるが、予は、江月が何處にでも在るが如くに、分身する方法を知らぬから仕方がな

い。さはれ、安心の道を得れば、老いても顏が澤やかであるし、物に遇ふも絕えて情を動かさざれば、詩を作つても、句法が新警である。これから、蘆にまがふ一葉の舟で、予を送つて呉れたならば、雪の如き波がしらの衣巾に注ぐのを笑ひながら、眺めて行くであらう。

睡起聞米元章冒熱到東園送麥門冬飲子

睡起、米元章の熱に冒さるるを聞き、東園に到りて、麥門冬飲子を送る

一枕清風直萬錢。　一枕の清風、直萬錢。
無人肯買北窗眠。　人の肯て北窗の眠を買ふなし。
開心暖胃門冬飲。　心を開き、胃を暖む、門冬の飲、
知是東坡手自煎。　知る是れ、東坡が手自ら煎るを。

【語義】東園は、常州に在るだらうといふこと。そして、常州には、東坡所有の田園がある。麥門冬は、本草別錄に「葉は韮の如く、根は麥に似て鬚あり、冬を經て凋まず、故に又忍冬と名づく」とある。この詩は、睡さめし時、米元章が熱病に苦んで居ることを聞いたから、東園に到著せし後、忍冬の煮汁を送り、仍つて、これを賦したといふのである。

【詩意】一枕の清風は、萬錢を値すべく、これを買つて、樂しげに北窓に眠る人はない。君が熱病に苦んで居るのは、まことに御氣の毒である。そこで、胸を開き、胃を暖めて、一日も早く全快する樣にと、忍冬を煮た飲料を送呈するので、これは、東坡自身が煮たので、その心づくしの程を汲み取つて貰ひたい。

【餘論】紀昀は「覺に是れ藥店の榜子」といつて居る。卽ち藥屋の看板の樣だといふので、辛辣ながら、まことに痛快で、且つ氣が利いて居る。

夢中作寄朱行中

夢中の作、朱行中に寄す

舜不作六器。誰知貴璵璠。　舜、六器を作らずんば、誰か璵璠を貴ぶを知らむ。
哀哉楚狂士。抱璞號空山。　哀いかな、楚の狂士、璞を抱いて空山に號ぶ。
相如起睨柱。頭璧與俱還。　相如、起つて柱を睨し、頭璧、與に俱に還る。
何如鄭子產。有禮國自閒。　何ぞ如かむ、鄭の子產、禮あり、國、自ら閒なるに。
雖微韓宣子。鄙夫亦辭環。　韓宣子を微かつすと雖も、鄙夫、亦た環を辭す。
至今不貪寶。凜然照塵寰。　今に至るまで、寶を貪らず、凜然として塵寰を照らす。

【字解】〔一〕六器　五等諸侯の持つ玉。〔二〕璵璠　即ち寶玉。〔三〕楚狂士　卞和の事、前に袁公濟和ニ詩の詩中に注して置いた。〔四〕相如　即ち藺相如、前に銅劍易レ硯の詩中に注して置いた。〔五〕鄭子產　左傳に「晉の韓宣子、環あり、その一、鄭商に在り。宣子、これを鄭伯に謁ふ。子產、與へずして曰く、大國の求、禮以て之を斥くるなくんば、何の饜くことかあらむ。宣子、私に子產に覲して曰く、子、起に命じて、かの玉を舍かしむ、これ我に玉を賜うて、吾が死を免れしむるなり、敢て手に稽きて拜せざらむや」とある。

【題義】朱服、字は行中、東坡と游ぶに坐して、海州團練副使に貶せられ、徽宗の初には、廬に守として廣に移つた。この詩は、東坡絕筆の作で、その事を正言するを欲せざるより、わざと夢中の作に託したのである。

【詩意】人の才は、玉の如きものである。もし舜が六器を作らなければ、誰か寶玉の貴ぶべきを知るべき。楚の卞和が璞を抱いて、空山に哭して居たのは、氣の毒であつたし、藺相如は、起つて柱を睨み、やがて、その頭と璧とは、無事に趙に歸つて來た。鄭の子產は、禮を守りしが故に、その國は、自然しづかであつたが、相手が韓宣子でなくとも、鄙夫も、環を辭したであらう。予は、今に至るまで、この寶を貪らず、つまり、この才を世用に充てむが爲に刻苦したので、凜然として、この塵の世を照らす上は、亦た以て賀すべしである。

答ニ徑山琳長老一

徑山の琳長老に答ふ

與レ君皆丙子（一）。各已三萬日（二）。　君と皆丙子、各すでに三萬日。

（三）一日一千偈。電往那容レ詰。　一日一千偈、電往、那ぞ詰るべけむや。

大患緣レ有レ身。無レ身則無レ疾。　大患は身あるに緣る、身なければ疾なし。

平生笑ニ羅什一。神咒（四）眞浪出。　平生、羅什を笑ふ、神咒、眞に浪りに出づ。

【字解】〔一〕丙子　景祐三年。〔二〕三萬日　東坡の死せし建中靖國元年七月二十八日に至るまで、實に二萬三千四百六十日、三萬は大數を擧げたのである。〔三〕一日一千偈　晉書に「鳩摩羅什、師に從つて經を受け、日に千偈を誦す」とある。〔四〕神咒　晉書に「鳩摩羅什、未だ終らず、少日、四大愈えざるを覺ゆ、乃ち口に三番神咒を出し、外國弟子をして之を誦せしめ、以て自ら救ふ。未だ力を致すに及ばず、轉た危殆を覺ゆ、ここに於て、疾を力め、衆僧と別を告ぐ」とある。

【題義】東坡の疾を示せし時、徑山長老の維琳といふ坊主は、之を問うて、左の一偈を示した。

扁舟駕ニ蘭陵一。自援舊風日。君家有ニ天人一。雄雄維摩詰。我口呑ニ文殊一。千里來問レ疾。若以レ默相酬。露柱皆笑出。

そこで、東坡は、その韻を用ひて、この詩を作つたので、後二日、終に長逝した。時に歲六十六。

【詩意】君と共に、丙子の年の生まれであるから、すでに三萬日を經過した。この間、每日一千偈を誦したが、歲月は電の如く往き、格別詰ることも出來ぬ。大患は、此身あるに因り、身さへ無ければ、疾も亦た無い筈である。かく悟り澄まして、かの鳩摩羅什が、疾革らむとせし時、神咒を唱へ出し

たのは、まことに下らぬ事であると、平生笑つて居たが、今にして、愈よそれと思ひ當つたことである。

【餘論】紀昀は「この一卷、皆冗漫淺易の作、蓋し是に至つて、菁華竭く」といつて居るが、何は兎もあれ、長逝の年、六十六歳の作であるから、致方の無いことであらう。

蘇東坡詩集　卷四十六　帖子口號詩

今體詩　六十五首

春帖子詞

皇帝閤六首

靄靄龍旂色、瑲瑲木鐸音。
數行寬大詔、四海發生心。

靄靄たり龍旂の色、瑲瑲たり木鐸の音。
數行、寬大の詔、四海、發生の心。

【字解】【一】龍旂　龍を畫いた天子の御旗。【二】木鐸　書經に「每歲孟春、遒人、木鐸を以て路に狥ふ」とあつて、その傳に「遒人は宣令の官、木鐸は金口木舌、文敎を振ふ所以」とある。【三】寬大詔　後漢書に「立春の日、寬大の詔を下して曰く、三公に制詔す、春に方つて、東作、始を敬し、微を愼め」とあり、又侯霸傳に「光武、霸を徵して尙書令に拜し、前世の善政法度、時に益あるものを條奏せしめて、皆これを施行す。每春、寬大の詔を下し、四時の令を奉ず、皆霸の建つるところなり」とある。【四】發生心　爾雅に「春を靑陽となし、發生となす」とあり、王冰の素問註に「六氣十八候、皆靑陽、發生の令を布く、故に生を發ふものは、必ず謹んで天時を奉ず」とある。

【題義】帖子は賀帖、祝日に際して、朝廷の向向に上るので、多くは、近體の詩を用ふることが、

この頃の慣例に成つて居る。この春帖子は、東坡が翰林學士たりし時、哲宗の元祐三年の立春に際し、皇帝・太皇太后・皇后・皇太妃の四處に分つて、それぞれ奉呈したのである。何故、皇帝閣といふ様に、各々閣の字を付けたかといふと、閣は居室の傍なる小座敷で、書物・器玩などを貯藏する處、もと皇帝・太皇太后等に獻するのであるが、直接に名ざすのは失禮である處から、閣に向つて呈出するといふのである。

【詩意】龍旂の色は、靄靄として霞をこめ、木鐸の音は、琅琅として鳴り響いて居る。例に因つて、敷行に寫した寛大の詔を發布されたのは、春に成つて、四海の萬物が發生する自然の心に負かす、まことに、結構なことである。

【餘論】紀昀は「節閣の詩、體制に限られ、東坡と雖も、亦た長を見るところなし」といつて、この卷を通じて、すこしも評語を著けて居ない。そこで、予も亦た之に倣うて、一一批評することを避けて置く。

暘谷賓初日。清臺告協風。
願如風有信。長與日俱中。

暘谷、初日を賓し、清臺、協風を告ぐ。
願はくは、風の信あるが如く、長く日と俱に中せむ。

【字解】【一】暘谷　暘は明、日が出て天下はじめて明かなる故に云ふ、日の出づる處。【二】賓　導く。【三】協風　立春の融風。

【詩意】暘谷に於ては、朝日を迎へ、奇麗に掃除した高臺には、長閑けき春風が初めて音なつた。願はくは、この風の信あるが如く、且つ長しへに、太陽と共に中天に位して、決して沒し去ることの無い様にありたいものである。

草木漸知春。萌芽處處新。
從今八千歲。合抱是靈椿。

草木、漸く春を知り、萌芽、處處に新なり。
今より八千歲、合抱、これ靈椿。

【字解】【一】合抱　兩手でかかへる。【二】靈椿　列子に「上古に大椿といふものあり、八千歲を以て春となし、八千歲を以て秋となす」とあり、又莊子にも見えて居る。

【詩意】草木は、次第に春を知つて、新しい芽は、處處に萌して來た。これより八千歲の高壽を保つて、一かかへもある様に生長するのは、卽ち大椿であらう。

聖主憂民未解顏。
天教瑞雪報豐年。
蒼龍挂闕農祥正。

聖主、民を憂へて、未だ顏を解かず、
天、瑞雪をして豐年を報せしむ。
蒼龍、闕に挂つて、農祥正しく、

【字解】【一】解顏　ほほ笑む。【二】蒼龍　星の名で、農事を司る。【三】耤田　天子親耕の禮、宋史禮志に「耤田の禮、宋初、歲ごとに常に講

老稚相呼看藉田。 老稚、相呼んで、藉田を看る。

ぜず。雍熙四年、はじめて儀注を評定し、耕田を除して先農壇となし、郊後の吉亥を以て、皇帝親ら先農を享し、三獻を備へ、三推の禮を行ふ。景德以後、制に因つて損益し、更に享殿を假して思文殿となす」とある。

【詩意】わが聖天子は、民を憂へて、ほほゑみもせずに居られた處が、天は瑞雪を降して、豐年を報せしめた。やがて、蒼龍の星が高く宮門の上に挂り、農事の佳祥、正しきを示すと、そこで、親耕の禮を行はれ、老少輩相呼んで、その盛儀を拜觀に出かけることであらう。

昨夜東風入律新。 昨夜、東風、律に入つて新なり、
玉關知有受降人。 玉關、知る降人を受くるあるを。
聖恩與解河湟凍。 聖恩、與に解く河湟の凍、
得共中原草木春。 共にするを得たり、中原、草木の春。

【字解】【一】入律 月令の疏に「律、太簇に中る、惟れ正月の氣を主る、宜しく東風と凍を解くべし」とある。【二】玉關 卽ち玉門關、前に「聞洮西捷報」の詩中に注して置いた。【三】河湟 甘肅省中に於ける黄河附近の地で、古しへより膏腴を以て知られて居る。前に「和王晉卿」の詩中に注して置いた。

【詩意】今日は、立春であつて、東風は、昨夜すでに新に太簇の律に叶うて吹き度り、玉門關では、北夷の降人を受け付けることであらう。やがて、聖恩は、爲に河湟の凍を解き、ここも、中原と同じく、草木欣欣として、春に榮えることであらう。

翰林職在明光裏。 翰林の職は、明光の裏に在り、
行樂詩成拜舞中。 行樂の詩は成る、拜舞の中。
不待驚開小桃杏。 待たず、驚いて小桃杏を開かしむ、
始知天子是天公。 はじめて知る、天子は是れ天公。

【詩意】翰林學士は、その職務として、明光宮中に奉仕し、ここに拜舞して、行樂の詩を上つた。すると、まだ待たぬ間に、桃だの、杏だのが遽てて咲き出したので、して見ると、天子は取りも直さず、天公で居らせられることが分かつた。

太皇太后閣六首　太皇太后閣　六首

琱刻春何力。 琱刻、春、何の力ぞ、
欣榮物自知。 欣榮、物自ら知る。
發生雖有象。 發生、象ありと雖も、
覆載本無私。 覆載、本と私なし。

【字解】【一】瑀琱 彫刻に同じ。【三】發生 前首に見ゆ。

【題義】宋史に「宣仁聖烈高皇后、英宗、婚を濮邸に成す、神宗立つて、尊んで皇太后となし、哲宗立つて、尊んで太皇太后となす」とある。

【詩意】彫刻して、花を咲き出さしむるに就いて、春は何の力あるべき、欣欣として榮えるのは、物それ自身に備はつた作用である。發生の象は、歷然として明かであるが、天は覆ひ、地は載せ、もとより、公平無私のものである。

小殿黃金榜。珠簾白玉鉤。小殿、黃金の榜、珠簾、白玉の鉤。

一聲雙日蹕。春色滿皇州。一聲、雙日の蹕、春色、皇州に滿つ。

【字解】【一】小殿 延和殿を云ふ。【二】黃金榜 金を塗つた立札。【三】雙日蹕 この太皇太后は、哲宗卽位の初、攝りに同じく政を聽き、十日に二日づつ前殿に出御に成つた。【四】春色 これは謝脁の全句である。

【詩意】延和殿に於ては、黃金の立札があり、珠簾は卷き上げられて、白玉の鉤で止めてある。太后が、警蹕の聲に隨つて、ここに出御されると、長閑けき春色が皇州に滿つる樣な想がする。

仗下春朝散。宮中晝漏稀。仗下、春朝散じ、宮中、晝漏稀なり。

兩廂休侍御。應下讀書幃。兩廂、侍御を休め、應に讀書の幃を下すなるべし。

【字解】【一】仗下 仗は儀仗。【二】春朝 春の日の朝會。【三】宮中 太皇太后は崇慶宮に居られた。【四】兩廂 太皇太后の御居間の左右なる部屋をいふ。

【詩意】儀仗の立てる邊に、退出して、春の日の朝會が散ずると、崇慶宮の中、極めて靜かにして、晝は水時計の音さへも稀に聞こえる位。やがて、侍御の者どもは、御暇を賜はつて、兩廂に休息して居るが、太皇太后は、幃を下して、讀書を成さつて居られるであらう。

五日占雲十日風。五日に雲を占し、十日に風、

憂勤終歲爲三農。憂勤終歲、三農の爲にす。

春來有喜何人見。春來喜あり、何人か見る、

好學神孫類祖宗。好學の神孫、祖宗に類す。

【字解】【一】五日 五風十雨てふ語に本づいたので、前に、「答同僚賀雨」の詩中に注して置いた。占雲は、卽ち雨ふること。そこで、馮應榴の案に「先生の詩、倒用に似たり、或は訛刊に係る」とある。【二】三農 卽ち平地山澤、前に西新橋の詩中に注して置いた。【三】好學 哲宗好學の事、前に九月十五日「賜御書」の題下に注して置いた。

【詩意】五日目には、雲を占うて雨を候し、十日目には、風の吹くのを待つて居るといふ樣に、終年

憂勤されるのは、三農の爲である。春來、喜ぶべきことがあるが、宮外、何人か之を見るべき、神孫、卽ち今上の學を好まれることは、祖宗に類し、やがて、太平の治を望むべきは、まことに結構なことである。

共道十年無臘雪(一)　共に道ふ、十年、臘雪なしと、
且欣三白(二)壓春田　且つ欣ぶ、三白の春田を壓するを。
盡驅南畝扶犂手　盡く、南畝扶犂の手を驅りて、
稍發中都(三)朽貫(四)錢　稍く發す、中都朽貫の錢。

【字解】【一】臘雪　臘月の雪。【二】三白　雪が三寸降り積むこと、前に江上値ㇾ雪、及び次二韻陳四一の詩中に注して置いた。【三】中都　都中に同じ、卽ち汴京。【四】朽貫錢　貫はさし、貯藏久しきを經、さしが朽ちたと云ふ義。宋史に「哲宗元祐三年春正月、廣惠倉を復す。雪寒、京西の穀五十餘萬石を發し、その直を損して、以て民を紓くし、上元の游幸を罷む」とあつて、この首は、卽ちこの事を記したのである。

【詩意】最近十年の間、臘月に雪の降つたことなく、いつも、春になると、少し降つて、麥に宜しく、まことに目出たい。そこで、盡く驅つて南畝の農夫を發して、耕作に從事せしめ、都に貯へてあるさしの朽ちた錢を發して、彼等に支給された。

不獨清心能省事　ひとり、心を清くして、能く事を省くのみならず、
應緣克己自銷兵　應に己に克つて、自ら兵を銷すに緣るなるべし。
傳聞塞外千君長　傳へ聞く、塞外の千君長、
欲趁新年賀太平　新年を趁うて、太平を賀せむと欲するを。

【詩意】今日、清平の治は、唯だ上に在る方方が心を清くし、事件を生せぬ樣にされた爲めのみではなく、その一は、己に克つて、侵略を事とせず、自然、武器を鑄潰したにも因るであらう。傳聞すれば、塞外なる多くの君長どもは、皆これに感激し、新年を待ち、來朝して、太平の御祝ひを申し上げやうとして居る。

皇太后閣六首

寶冊(一)瓊瑤重　新庭松桂香　皇太后閣　六首
寶冊、瓊瑤重く、新庭、松桂香ばし。
雪消春未動　碧瓦麗朝陽　雪、消えて、春、未だ動かず、碧瓦、朝陽に麗かなり。

【字解】【一】寶冊　尊號を上りし御沙汰書、宋史に「尊號の册命、大臣、册文を撰し、及び册寶に書し、官を遣して、天地祖宗社稷に告げしむ。皇太后の册禮には、天子、嗣皇帝と稱す、餘、槪ね尊號の儀の如し」とある。

【題義】宋史に「欽聖憲肅皇后は、宰相敏中の曾孫なり。神宗、潁邸に於て安國夫人に封じ、卽位、立てて皇后となし、哲宗立ち、尊んで皇太后となす」とある。

【詩意】皇太后宣下の寶冊は、瓊瑤を以て飾られて重く、新宮の庭上には、松桂が香を含んで居る。雪消ゆるも、春景色は、まだ動かぬ樣であるが、碧瓦の上に朝日の麗はしく輝くを見れば、流石に、暖かくして長閑である。

瑞日明天仗。仙雲擁壽山。瑞日、天仗に明かに、仙雲、壽山を擁す。

倚欄春晝永。金母在人間。倚欄、春晝永く、金母、人間に在り。

【字解】【一】天仗　宮中の儀仗。【二】倚欄　一に猗蘭に作つた方が正しい樣である。洞冥記に「景帝、芳蘭閣を改めて猗蘭殿となす。後、王夫人、武帝を此殿に誕む」とある。【三】金母　西王母傳に「金母は、神洲伊川に生まる、陰靈の氣を主り、西方を理むるを以て、亦た王母と號す」とある。

【詩意】目出たき日影は、階下の儀仗を照らし、さながら、仙雲が壽山を擁するが如くである。猗蘭殿に比すべき深宮の中、春の日、愈よ長く、さながら、西王母が人間に來降した樣である。

朝罷金鋪掩。人間寶瑟塵。朝、罷んで金鋪掩ふ、人間、寶瑟の塵。

欲知慈儉德。書史樂青春。慈儉の德を知らむと欲し、書史、青春を樂む。

【字解】【一】金鋪　黄金を敷き伸ばして飾としたる扉。

【詩意】朝會、すでに罷めば、皇太后は、御居間に御歸りになつて、黄金を飾れる扉を閉され、寶瑟は、久しく御せざるに因つて、塵を帶びて居る。しかし、慈悲勤儉の德の何物なるかを知らうとして、春の日長に、古しへの書史を御覽せられるのは、一しほ結構の事で、方今の至治も、まことに偶然でないことが分かる。

仙家日月本長閒。仙家の日月、本と長しへに閒なり。

送臘迎春亦偶然。臘を送り、春を迎ふ、亦た偶然。

翠管銀罌傳故事。翠管銀罌、故事を傳へ、

金花綵勝作新年。金花綵勝、新年を作す。

【字解】【一】翠管銀罌　杜甫の詩に「口脂面藥隨恩澤、翠管銀罌下九霄」とある、翠管は笛、銀罌は酒壺。【二】綵勝　彩つた絹の造花、前に立春日詞中の詩中に注して置いた。

【詩意】天上の日月は、本來長しへに淸閒であつて、臘を送り、春を迎ふることなどは、偶然である。しかし、笛を吹き鳴らしつつ、銀の酒壺を賜はることが、先例に成つて居るし、金花や、彩絹の造花を簪して、新年を祝ふのは、さすがに美美しいことである。

（一）彤史年來不絕書。　彤史、年來、書を絶たず、
（二）三朝德化（三）婦承姑。　三朝の德化、婦、姑を承く。
宮中侍女減（四）珠翠。　宮中の侍女、珠翠を減じ、
雪裏貧民得（五）袴褶。　雪裏の貧民、袴褶を得たり。

【字解】（一）彤史　新唐書に、「宮官に彤史二人あり、正六品」とある。つまり、奥祐筆といつた樣なものである。（二）三朝　英宗・神宗・哲宗の三世をいふ。（三）婦承姑　新婦は、何事につけても、姑女を承け繼ぐといふこと。（四）珠翠　翠は翡翠の羽、妝飾に供する。（五）袴褶　股引の類、馮應榴の案に「宋史、向皇后傳、愛民崇儉の事を聞けば、喜、色に形はる、この二句を以て相證すべし」とある。

【詩意】奥祐筆は、年來、書くことを休めず、日日、記錄を旨とし、そして、三朝德化の然らしむるところ、婦は姑女を承け續ぎ、皇太后は、太皇太后の盛德に倣つて居られる。されば、節儉を第一とし、宮中の侍女は、珠翠の飾りを減じ、その代り、雪に惱む貧民どもは、股引を賜はつたといつて喜んで居る。

（一）邊庭無事（二）羽書稀。　邊庭、事なくして、羽書、稀なり、
閒遣詞臣進小詩。　閒に詞臣を遣して、小詩を進む。
共助至尊歌喜事。　ともに至尊を助けて喜事を歌ひ、
今年春日得春衣。　今年春日、春衣を得たり。

【字解】（一）邊庭　即ち邊塞、邊境。（二）羽書　羽檄、至急を要する警報。

【詩意】今しも、邊境無事にして、急を報ずる羽書も極めて稀なる折から、皇太后より詞臣を遣し、小詩を進めて、乙夜の覽に供せしめられる。そこで、天子を助けて、民の窮苦を救ふ樣な目出たき事どもを歌はしめむとし、今年の春、人民一同、春著を得ぬものはなく、大に喜んで居るといふことが第一に奏上された。

皇太妃閣五首

皇太妃閣　五首

（一）葦桃猶在戶。（二）椒柏已稱觴。　葦桃、なほ戶に在り、椒柏、すでに觴を稱ぐ。
歲美風先應。朝囘日漸長。　歲美にして、風、先づ應じ、朝より囘つて、日、漸く長し。

【字解】（一）葦桃　葦で綯つた繩と、頭が桃の形をした人。風俗通に「上古の時、荼與・鬱壘の兄弟二人あり、性能く鬼を執らふ。度朔山桃樹の下に於て、百鬼を簡閱し、無道にして妄りに人の禍害を爲さば、縛するに葦索を以てし、執らへて以て虎に食はす。ここに於て、縣官、常に臘除夕を以て、桃人を飾り、葦茭を垂れ、虎を門に畫く、皆前事に追放し、以て凶を禦ることを效ふなり」とある。（二）椒柏　元日の酒には、椒花柏葉をひたす故に云ふ。

【題義】宋史に「欽成朱皇后は開封の人、熙寧の初、宮に入つて哲宗を生み、德妃に進む。哲宗立ち、尊んで皇太妃となす。時に、宣仁欽聖の二太后、皆尊に居る、故に稱號未だ極まらず。元祐三年、宣

仁詔す、春秋の義、母子を以て尊しと。ここに於て、輿蓋伏衞冠服、悉く皇后に侔し」とある。

【詩意】葦茭桃人は、元の儘、まだ戸に殘つて居るが、ここに元旦になつたので、椒花柏葉をひたした酒を酌んで、觴を擧げる。歳の美なることは、風が、第一に應驗を顯はし、朝會が畢つて還御になると、日は次第に長く、後宮の中は、殊の外のどかである。

甲(一)觀開千柱。飛樓擢九層。　甲觀、千柱を開き、飛樓、九層を擢んづ。
雪殘烏鵲喜。翔舞下觚(二)稜。　雪、殘して烏鵲喜び、翔舞して觚稜を下る。

【字解】(一)甲觀　第一の殿閣を云ふ。宋史に「朱皇后、閣に卽いて殿を建て、出入は宣德東門に由る、百官、牋を上つて殿下と稱し、居るところを名づけて聖瑞宮となす」とある。(二)觚稜　宮殿の屋根をいふ。

【詩意】新築の聖瑞宮は、千本の柱で建てた大結構であるが上に、高樓は九層を爲して、雲霄に擢んでて居る。雪の消えたのは、春の日影暖きを知るべく、烏鵲の類は、喜んで翔舞しつつ、屋根の上に降つて來る。

孝心日奉東(一)朝養、　孝心、日に奉ず東朝の養、
儉德應師大(二)練風。　儉德、應に師とすべし大練の風。
太史新年瞻瑞氣。　太史、新年、瑞氣を瞻る、
四(三)星明潤紫宮中。　四星、明潤、紫宮の中。

【字解】(一)東朝　漢書に「惠帝、東、長樂宮に朝す、時に呂太后、長樂に居る。後世、太后を稱して東朝となす、蓋、これに本づく」とある。(二)大練　後漢書馬皇后紀に「常に大練を衣、裙、緣を加へず」とあつて、註に「大練は厚繒なり」とある。(三)四星　晉註に「漢書天文志、中宮天極星、その一、明かなるものは、太一の常居なり。後句四星、末の大星は正妃、餘の三星は後宮の屬なり。これを環つて匡衞する十二星は藩臣、皆紫宮といふ」とある。

【詩意】皇太妃は、孝行の心厚く、日ごとに、皇太后に朝して、供養を怠らず、その儉德は、むかし大練を衣た馬皇后の風を師とされて居るのであらう。太史が新年に天象を觀ると、瑞氣立ちこめ、後宮に應ずる四星は、その光、明潤にして、紫宮の中に竝び、奧向の肅清なることは、これを以て概見すべしである。

九(一)門挂月未催班。　九門、月を挂けて未だ班を催さず。
清(二)禁風和玉漏閒。　清禁の風は、玉漏に和して閒なり。
崇(三)慶早朝銀燭下。　崇慶早朝、銀燭下る、
珮環聲在五(四)雲間。　珮環の聲は、五雲の間に在り。

【字解】(一)九門　宮城の門は九重なるが故に云ふ。(二)清禁　宮中を云ふ。(三)崇慶　太皇太后の居殿、前に見ゆ。(四)五雲　五色の彩雲。

【詩意】宮城九重の門には、なほ殘月を挂けて、まだ班列を催さず、宮中を吹く風は、水時計の音と

共に極めて靜かである。太皇太后の崇慶殿に於ては、早朝の儀、方に畢つて、銀燭すでに撤せられ、歸り行く太妃の環佩の聲は、縹緲たる五色の雲間に聞こえて居る。

東風弱柳萬絲垂。東風、弱柳、萬絲垂る、
的皪殘梅尚一枝。的皪、殘梅、尚ほ一枝。
(一)繭館乍欣蠶浴後。繭館、乍ち欣ぶ、蠶、浴するの後、
(二)禖壇猶記燕來時。禖壇、猶ほ記す、燕、來るの時。

【字解】【一】繭館 蠶を飼ふ處、三輔黃圖の宮闕疏に「蠶所を繭館といふ」とあり、禮記に「下三宮夫人、世婦の吉なるもの、蠶を蠶室に入れしめ、種を奉じて川に浴す」とある。【二】禖壇 禮記月令に「仲春の月、玄鳥至る、至るの日、太牢を以て高禖を祀る」とあつて、註に「燕は、施生の時を以て來り巣ひ、堂宇に入つて孚乳す、嫁娶の象なり」とあり、宋史禮志に「高禖、仁宗、有司に詔し、壇を南郊に築き、春分の日、以て青帝を祀る。詩の克禋以祓の義に本づく。禖を以て從祀するは、古しへ禖を爲すの先に報ずるなり」とあり、政和新儀に「簡狄・姜嫄を以て從配す」とあり。查註に「哲宗は朱太妃の所出、故に玄鳥商を生むことを以て之に比す」とある。

【詩意】春風に吹かるる若柳は、萬縷の絲を垂れ、梅花は、的皪として、なほ一枝を殘して居る。繭館に於ては、蠶、すでに出で、禖壇に於ては、燕、早くも來り、春は、愈よ深くして、まことに長閑である。

夫人閣、四首

夫人閣　四首

(一)綵勝鏤新語。(二)酥槃滴小詩。綵勝、新語を鏤め、酥槃、小詩を滴る。
昇平多樂事。應許(三)外庭知。昇平、樂事多く、應に外庭の知るを許すべし。

【字解】【一】綵勝 前に見ゆ。【二】酥盤 酥は牛酪、その澤やかなるをいふ。槃は盤。花を活けた水盤を云ふのであらう。【三】外庭 内庭、即ち御奥に對して云ふ。

【題義】宋史に「仁宗の苗貴妃、元祐六年薨す。周貴妃、徽宗の時、年九十三にして薨す。即ち神宗の武賢妃、亦た大觀元年薨す」とあるから、元祐の初には、皆、宮中に在つた。その外、宋史に、「馮貴妃は東平の人、はじめ郡君に封せらる。養女林美人、幸を神宗に得、燕越二王を生み、婕妤に進む」とあつて、元祐の初には、矢張、宮中に居られた。夫人とは、この中、どれを指したか分からない。

【詩意】彩絹の造花には、新らしい文句を鏤め、花を活けた水盤からは、小詩が滴れて出さうに思はれる。長閑けき太平の御世には、深宮、樂事多く、そして、外庭に知られることを妨げないのは、愈よ結構である。

細雨曉風柔。春深入御溝。細雨、曉風柔かに、春は深くして御溝に入る。

已漂新荇沒。猶帶斷冰流。　すでに新荇を漂はして沒せしめ、なほ斷冰を帶びて流る。

【字解】【一】新荇　荇は俗に花蓴菜と稱する。

【詩意】細雨の中、曉風柔かに吹き渡り、春は御溝に入つて、すでに深い。漾漾たる波は、新に出た花蓴菜を漂はして沒せしめ、そして、解けて碎くる斷氷を押し流して居る。

扶桑初日映簾昇。　扶桑の初日、簾に映じて昇り、

已覺銅缾暖不冰。　すでに覺ゆ、銅缾の暖かくして冰らざるを。

七種共挑人日菜。　七種、ともに挑ぐ人日の菜、

千枝先鬭上元燈。　千枝、先づ鬭る上元の燈。

【字解】【一】扶桑初日　前に王維奥道子畫、及び贈三妙善師」の詩中に注して置いた。【二】七種　荊楚歳時記に「正月七日を人日となし、七種の菜を以て羹となす」とある。【三】千枝　鄭嵎の津陽門の詩の自註に「韓國、千枝の燭龕を爲る、高さ八十尺、上元の夜ごとに之を燃やす、千光日を奪ひ、百里の内、皆望見すべし」とある。

【詩意】扶桑に上りし朝日は、珠の簾に映じ、銅缾は暖かにして、最早冰らぬ樣である。正月七日には、七種の菜を摘み、十五日上元の夜には、千枝の燈を燃やし、ともに、舊例を守つて、その都度、儀式を行はれるのは、流石に尊く見える。

雪消鴛瓦已流澌。　雪は消えて、鴛瓦、すでに澌を流し、

風暖犀盤尚鎭帷。　風は暖かにして、犀盤、なほ帷を鎭す。

縹緲紫簫明月下。　縹緲たる紫簫、明月の下、

璧門桂影夜參差。　璧門の桂影、夜參差。

【字解】【一】鴛瓦　鴛鴦瓦の略、鴛鴦の形を刻したる瓦。【二】犀盤　犀角で造つた平たい盤、重しに代用する。【三】璧門　白璧門の略、もとより固有名詞ではなく、唯だ美辭として用ひたのであらう。【四】桂影　木の影を指したのであらう。【五】參差　長短不揃の貌。

【詩意】雪は消えても、鴛鴦瓦上、なほ解けた氷を流し、風は暖かなれども、相變らず、犀盤を以て帷の重しとしてある。明月の下、紫簫の聲は、縹緲として響き度り、宮門の樹影は、參差として不揃の樣に見える。

端午帖子詞　端午帖子詞

皇帝閣六首　皇帝閣　六首

盛德初融後。潛陰未姤時。　盛德、初めて融なるの後、潛陰、未だ姤せざるの時。

侍臣占易象。明兩作重離。　侍臣、易象を占し、明兩、重離を作す。

【字解】【一】盛德　月令に「孟夏の月、某日立夏、盛德火に在り」と見ゆ。【二】未姤　易に「一陰、五陽の下に伏す、名づけ

て陥と爲す」とあつて、夏至の卦。ここでは、まだ其處まで進ぜざる時を指す。【三】明兩　易の離卦の象に「明兩、離と作る、大人、以て明を繼ぎ、四方を照らす」とある。

【題義】舊註に「元祐三年」とあつて、卽ち前の立春帖子と同年の五月五日に上つたのである。

【詩意】盛德、はじめて融にして、すでに立夏を過ぎ、潛陰、未だ五陽の下に伏するに至らず、漸く夏至に近からむとする時、侍臣は、易象を以て占をなし、明兩、重離をなす五月五日を以て、例の如く、御祝をすることに成つた。

采秀擷羣芳。爭儲百藥良。　秀を采つて、羣芳を擷し、爭つて、百藥の良を儲ふ。
太醫初薦艾。庶草驗蕃昌。　太醫、初めて艾を薦め、庶草、蕃昌を驗す。

【字解】【一】百藥良　藝文類聚に夏小正を引いて「この日、衆藥を蓄採して、以て毒氣を蠲除す」とある。【二】太醫　後漢書の少府所屬に太醫令がある、卽ち侍醫頭。【三】薦艾　荊楚歲時記に「端午の日、艾を採つて人となし、門戶の上に懸け、以て毒氣を禳ふ」とある。【四】庶草　書經の洪範に「五者來り備はり、各〻其の敍を以て庶草蕃廡」とあつて、その疏に「風を須てば風來り、雨を須てば雨來り、各〻次序を以てすれば、衆草木蕃滋して豐茂」とある。

【詩意】ここに、五月五日に際し、羣芳の中より、その秀を擇んで摘み、爭つて、多くの藥草の精良なるものを貯へることに成つた。侍醫頭は、艾草を薦め、これを以て、庶草の蕃昌を驗することにした。

微涼生殿閣。習習滿皇都。　微涼、殿閣に生じ、習習、皇都に滿つ。
試問吾民慍。南風爲解無。　試に問ふ、吾が民の慍、南風、爲に解くや無や。

【字解】【一】吾民慍　尙書大傳に見えたる舜の歌に、南風之薰、可三以解二吾民之慍一とある。

【詩意】微涼は殿閣に生じ、習習として、ひろく皇都に滿つるを覺える。吾が民が慍つて居るにしても、南風が爲に之を解くや否や、試に問うて見たいと思ふ。

西檻新來玉宇風。　西檻、新に來る玉宇の風、
侍臣茗椀得雍容。　侍臣の茗椀、雍容を得たり。
庭槐似識天顏喜。　庭槐、識るに似たり、天顏の喜ぶを、
舞破淸陰作兩龍。　淸陰を舞破して、兩龍と作す。

【字解】【一】玉宇　大空。【二】茗椀　査註に「接するに、宋制、侍講・侍讀官、例、酒を賜ひ、茶を賜ふ。本集、侍立邇英の詩、上尊初破早朝寒、茗椀仍沾講舌乾の句あり」と見ゆ。【三】淸陰　査註に「子由の入侍邇英の詩、槐龍對舞覆衣冠、自註に云ふ、邇英閣の庭前に雙槐あり、甚だ高く、しかも、柯葉、地を覆うて龍蛇の如し、講官、その下に進對す」とある。

【詩意】西の欄干には、大空を度る涼風が、新に吹き來り、侍臣は、茗椀を賜はつて、雍容と打澄まして居る。庭前の槐樹も、天顏の喜を知れるが如く、樹が舞うて動けば、淸陰爲に破れ、二つの龍の

蟠屈する樣に見える。

講餘交翟轉廻廊。　講餘、交翟、廻廊に轉じ、
始覺深宮夏日長。　はじめて覺ゆ、深宮、夏日の長きを。
揚子江心空百鍊。　揚子江心、空しく百鍊、
只將無逸鑑興亡。　只だ無逸を將て、興亡を鑑す。

【字解】〔一〕交翟　翟は雉の羽で造つた團扇の如きもので、天子移御の時は、これを交叉して差し翳す。〔二〕百鍊　異聞集に「天寶中、揚州、水心鏡を進む、背に盤龍あり、鏡匠呂暉、爐を移し、五月五日を以て揚子江心に于て之を鑄る。後、大旱、これを祀れば雨を得」とあり、白居易の百鍊鏡の詩に江心波上舟中鑄、五月五日日午時とある。〔三〕無逸　書經の篇名、周公、成王を戒むるの辭。

【詩意】儒臣の進講が畢ると、天子は、羽團扇を差し翳し、廊を廻つて、そこらを歩ませられ、深宮の中、夏の日の長きを始めて悟られた。揚子江心で、百たび鍛鍊して、御用の鏡を鑄るが、それよりも、書經の無逸を誦して、興亡を鑑み、殷周の先王が敢て康からざりしに法られむことを希望する。

一扇清風灑面寒。　一扇の清風、面に灑いで寒し、
應緣飛白在冰紈。　應に緣るべし、飛白の冰紈に在るを。
坐知四海蒙膏澤。　坐に知る、四海、膏澤を蒙る、
沐浴君王德似蘭。　沐浴す、君王、德、蘭に似たるに。

【字解】〔一〕飛白　唐書に「太宗、長孫無忌・楊師道に謂つて曰く、五日、舊俗、必ず服玩を用ひて相賀す、朕、今君を賀せむ。飛白二枚、庶はくは、清風を動かし、以て美德を揚げむ」とある。冰紈は白絹、それで造つた團扇で、その上に飛白の字を書いたのであらう。〔二〕德似蘭　楚辭に浴蘭湯兮沐芳とある。

【詩意】團扇の吹き送る清風は、顏に灑いで寒く、それといふも、飛白の御書が絹地に書いてあるからであらう。今や、四海の內、膏澤を蒙らざるなきは、かの蘭湯に比すべき君王の德化に沐浴して居るからである。

太皇太后閣六首

太皇太后閣　六首

漸臺通翠浪。暑殿轉清風。　漸臺、翠浪に通じ、暑殿、清風に轉す。
簾卷東朝散。金烏未遽中。　簾、卷いて、東朝散じ、金烏、未だ遽に中せず。

【字解】〔一〕漸臺　史記孝武本紀に「建章宮を作り、度して千門萬戶となす。前殿は、高さを未央に度す。その東は鳳闕、高さ二十餘丈。その西は唐中數十里、虎圈、其北に大池漸臺を治め、高さ二十餘丈、名づけて泰液といふ」とあつて、その註に「漸は浸なり、臺は池中に在つて水に浸さる」とある。〔二〕東朝　太后に朝すること、前に見ゆ。〔三〕金烏　太陽、淮南子に「日中に踆烏あり」と見ゆ。

【詩意】池中の臺は、木の影を漾はす翠浪に通じ、夏の御殿には、清風、吹き廻つて、すこしも暑さを知らぬ位。簾を卷き上げて、太后への朝參が濟むと、太陽は、まだ午前中で、遽に中天まで來て居

ない。

日永蠶收簇。風高麥上場。　日永くして、蠶、簇を收め、風高くして、麥、場に上る。

朝來耤田令。菰黍獻時芳。　朝來、耤田の令、菰黍、時芳を獻せしむ。

【字解】【一】收簇　蠶をして繭を造らしめる。【二】耤田　山堂考に「漢の文帝、はじめて耤田を開き、令丞を置き、國廟社稷の田を耕すを掌る。東漢及び魏は缺く。晉、復た置く。宋の元豐三年、耤田令を改めて、太常寺に隸す」とある。【三】菰黍　風土記に「午日、菰葉を以て稻米を裹んで粽となし、以て陰陽相包裹して、未だ分散せざるに象るなり」とある。

【詩意】日は長く、蠶は藁つとに收まつて、繭を造るに餘念なく、風は高くして、刈られた麥は、場内に乾してある。朝來、耤田の令丞は、時の物として、眞菰や黍を獻上した。

舞羽諸羌伏。銷兵萬彙蘇。　羽を舞はして諸羌伏し、兵を銷して萬彙蘇す。

只應黃紙誥。便是赤靈符。　只だ應に黃紙誥、便ち是れ赤靈符なるべし。

【字解】【一】舞羽　羽は舞の名。【二】諸羌　羌は西夷の名。【三】萬彙　彙は類。【四】黃紙誥　天子の詔敕。【五】赤靈符　抱朴子に「五月五日、赤靈符を作つて心前に著く」とある。

【詩意】羽を舞はして、諸羌、すでに伏し、兵器を鑄つぶして、萬物、はじめて蘇生し、まことに目出たき太平の折から、黃紙に書いた詔敕は、取りも直さず、惡魔を祓ふ赤靈符であらう。

令節陳詩歲歲新。　令節、詩を陳して、歲歲新なり、

從官何以壽吾君。　從官、何を以て吾が君を壽せむ。

願儲醫國三年艾。　願はくは、醫國三年の艾を儲へ、

不作沈湘九辯文。　作らず、沈湘、九辯の文。

【字解】【一】令節　目出たき節句、即ち五月五日。【二】醫國　國語に「上醫は國を醫す」とあつて、即ち上醫の義。【三】沈湘　屈原は湘水に投じて死んだ。【四】九辯　文選の註に「九辯は、宋玉の作るところなり。辯は變なり。九は陽數、道の綱紀なり。道德を陳說し、變を以て君に說くを謂ふなり。宋玉は、屈原の弟子、その師の忠にして放逐さるるを惜み、故に九辯を作つて、以て其志を述ぶるなり」とある。

【詩意】目出たき節句に詩を上り、年年新なるを競うて居るが、從臣輩は、如何なる言葉を以て、吾が君を壽がむとするか。願はくは、名醫の手で摘んで來て、三年を經た艾を貯へて置きたいので、湘水に沈んだ忠臣を弔ひし九辯の文などは、又と作らぬ樣にと念じて居る。

忠臣諒節今千歲。　忠臣の諒節、今千歲、

孝女孤風滿四方。　孝女の孤風、四方に滿つ。

【字解】【一】忠臣諒節　屈原の忠亮なる苦節。【二】孝女　曹娥を云ふ。下に見ゆ。【三】巫陽占昭夢

不復巫陽占郢夢。 復た巫陽、郢夢を占せず、
空餘仲御扣河章。 空しく餘す、仲御、扣河の章。

巫陽をして楚の國都たる郢に歸る夢を占はしめる。【四】 仲御扣河章 仲御は夏統の字、晉書の本傳に「母病む、洛に詣つて藥を市ふ。會ま三月上巳。士女、雲の如し。統、並に顧みず。賈充、怪んで之を問ふ、徐に答へて曰く、會稽の夏仲御なり、と。充、その土俗を問はしめ、又謂つて曰く、卿、よく土地間の曲を作すか。統曰く、孝女曹娥、年はじめて十四、その父、江に墮ちて尸を得ず、娥、天を仰いで哀號し、更ち水に投じて死す。父子、尸を喪ひ、後乃ち倶に出づ。國人、その孝義を哀んで、爲に河女の章を歌ふ。今、これを歌はむと欲す、と。ここに於て、足を以て船を扣き、聲を引いて喉囀すれば、清激慷慨、大風、應じて至り、雷電晝冥し。諸人相顧みて曰く、河女の音を聞いて、涕泗の交も流るるを覺えず、と。即ち伯姫の高行、目前に在るを謂ふなり」とある。

【詩意】 屈原忠亮の苦節は、今、すでに千歳を經、曹娥の比類なき遺風は、四方に流傳して居る。されば、ここに、巫陽をして郢に歸る夢を占はしむることなく、唯だ夏統が川舟を扣きつつ歌つたといふ河女の章を餘して居るだけである。

長養恩深動植均。 長養、恩は深く、動植均し、
只憂貪吏尚殘民。 只だ憂ふ、貪吏の尚ほ民を殘ふを。
外廷已拜梟羹賜。 外廷、すでに拜す、梟羹の賜、
應助吾君去不仁。 應に吾が君を助けて不仁を去るべし。

【字解】【一】 梟羹 史記孝武本紀及び漢書郊祀志の註に「五月五日、梟羹を爲つて百官に賜ふ、惡鳥の故を以て之を食ふなり」とあり、子由の端午帖子詞にも、百官知拜梟羹賜、肉去方知舜有功とある。

【詩意】 方今長養の恩は深くして、動植の物、ひとしく生育して居るが、只だ貪慾なる吏胥輩が、往往にして、人民を虐げるのが心配である。今日、外廷に於ては、すでに梟の吸物を頂戴したので、それにつけても、吾が君を助けて、不仁を去ることに力を盡さねばならぬ。

【餘論】 篇篇、大抵治國の事を道ひ、特に女性らしいことの見えぬのは、この太皇太后は、帝を補けて政を攝して居られたから、全く人主と同一視したのであらう。

皇太后閣六首
皇太后閣 六首

露簟琴書冷。琱盤饘餌新。 露簟、琴書冷かに、琱盤、饘餌新なり。
深宮猶畏日。應念暑耘人。 深宮、猶ほ日を畏る、應に念ふべし暑耘の人。

【字解】【一】 露簟 綺麗で澤澤しく、濡れた樣に見える竹むしろ。【二】 琱盤 玉を刻んで造つた皿。【三】 饘餌 唐韻に「饘は厚粥なり」とあり、開元天寶遺事に「宮中端午、粉團角黍を造り、琱盤の中に貯へ、小角弓を以て之を射、中るものは食ふを得」とある。

【詩意】 綺麗な竹むしろの上には、琴書までも、冷かに見え、琱盤の中には、端午の團子が新に調進

されてある。深宮の中に居てさへ、日光を畏れる位であるから、この暑さに際して、田間に耘る人の苦痛を念はれるであらう。

萬歲菖蒲酒。千金琥珀杯。
年年行樂處。新月挂池臺。

萬歲の菖蒲酒、千金の琥珀杯。
年年、行樂の處、新月、池臺に挂る。

【字解】【一】菖蒲酒　王氏衆書集註に「端午の日、菖蒲を以て、或は鏤にし、或は屑にして、酒に泛ぶ」とある。

【詩意】千代を壽ぐ菖蒲の酒を、見事な琥珀の杯に注いで賜はる、年年、目出たく祝ふ端午の長き日も、いつしか暮れて、新月が池邊の高臺に挂つて居る。

翠筒初裹楝。薌黍復纏菰。
水殿開冰鑑。瓊漿凍玉壺。

翠筒、はじめて楝を裹み、薌黍、復た菰を纏ふ。
水殿、冰鑑を開き、瓊漿、玉壺を凍る。

【字解】【一】裹楝　査註に「愼、案ずるに、仲子陵の五絲續命賦の楝葉結、采絲纏、註に云ふ、五月五日、屈原を祭る、竹筒に米を貯へ、楝を以て其上を塞ぎ、采絲、これを縛す、先生、正に此事を用ふ」とある。【二】薌黍　査註に「禮記、黍を薌合といふ。疏に云ふ、穀、熟なるものを黍と爲す、熟、すでに軟にして相合す、氣息又香ばし、故に薌合といふなり」とある。

【詩意】竹筒に米を入れて、楝葉で包み、黍の團子は、眞菰の葉で卷いてあつて、これが、端午の供へ物である。水殿の下には、池水、氷の鏡を開くが如く、結構な御酒は、玉壺の中に凍つて居る樣で、あたりの涼しさは、とても、この世とは思はれぬ位である。

祕殿扶疎夏木深。
雨餘初有一蟬吟。
應將嬴女乘鸞扇。
更助南風長棘心。

祕殿、扶疎として夏木深く、
雨餘、初めて一蟬の吟ずるあり。
應に嬴女乘鸞の扇を將て、
更に南風を助けて棘心を長ずべし。

【字解】【一】祕殿　奥御殿。【二】嬴女乘鸞扇　秦の弄玉が其夫蕭史と共に、鸞に乘じて昇仙する處を畫いた團扇、劉禹錫の詩に團扇復團扇、奉君清暑殿、秋風入庭樹、從此不相見、上有乘鸞女、蒼蒼蟲網偏、明年入懷袖、別是機中織とある。【三】南風長棘心　詩經に凱風自南、吹彼棘心とあつて、その疏に「凱樂の風は、長養の方より來り、彼の棘木の心を吹く、故に棘心盛長を得、以て寛仁の母、慈愛の情を以て、我が七子の身を養ひ、故に七子、皆、少しく長ずるを得たるを興す」とある。

【詩意】奥御殿の近くには、扶疎として、夏木が茂り合ひ、雨あがりに、初めて一蟬の鳴くのが聞こえる。皇太后は、嬴女の乘鸞を畫いてある團扇を手にし、かの七子の母が南風、棘心を長ぜしめた樣に、四海の人民を劬はつて、生育を全うせしめられることと恐察する。

（一）上林珍木暗池臺。

蜀產吳包萬里來。

不獨盤中見盧橘。

時于㮣裏得楊梅。

上林の珍木、池臺暗く、

蜀產吳包、萬里より來る。

ひとり、盤中、盧橘を見るのみならず、

時に㮣裏に于て楊梅を得たり。

【字解】【一】上林　宮中の御庭。【二】吳包　吳地よりの進貢。【三】盧橘　前に數ば見え、本義ではないが、東坡は、枇杷の事に用ひて居る。【四】㮣裏　ちまきのつと。【五】楊梅　やま桃。

【詩意】上林の見事なる木木は、茂り合つて、池邊の亭臺、ほの暗く見ゆる頃、吳蜀よりの進貢は、萬里の彼方から到達した。その品品は何かといへば、盤中に枇杷を盛りしのみならず、やま桃をちまきのつとに包んだのもあつた。

（二）閟楚遺風萬古情。

沅湘舊俗到金明。

翠輿黃繖何時幸。

畫鷁飛鳧盡日橫。

閟楚の遺風、萬古の情、

沅湘の舊俗、金明に到る。

翠輿黃繖、何の時か幸せむ、

畫鷁飛鳧、盡日橫ふ。

【字解】【一】閟楚　憫むべき楚國。【二】沅湘　沅水は湘水の支流で、その地方一帶を沅湘といふ。屈原の投死したのは、卽ち此處である。【三】金明　池の名。【四】翠輿　翡翠の羽で飾つた御駕。【五】黃繖　黃繖は日傘。【六】畫鷁　淮南子に龍首畫鷁とあつて、その註に「鷁は水鳥なり。その像を畫いて、船首に著く」とあり、王子年の拾遺記に「泛[illegible]雲鷁之舟」とあつて、或は鷁首に作つてあるが、音義、ともに同じ。【七】飛鳧　鳧を船首に畫いた舟、張正見の詩に「黃鶯逐鳥路、白雪下魚舟」とある。

【詩意】むかしの楚國の遺風は、今に傳はつて、萬古の情に堪へざらしめ、沅湘の舊俗は、端午に競渡（卽ち端艇競漕）を行ふので、宮中の金明池でも、矢張、さうすることに成つた。皇太后は、翠輿に駕し、黃繖をさしかけて、何時臨御に成るか、池の中には、畫鷁飛鳧、さまざまの舟が終日橫はつて、これを御待して居る。

皇太妃閣五首

（一）午景簾櫳靜。薰風草木酣。

誰知恭儉德。綵縷出親蠶。

皇太妃閣　五首

午景、簾櫳靜に、薰風、草木酣なり。

誰か知らむ、恭儉の德、綵縷、親蠶に出づ。

【字解】【一】午景　眞晝の日かげ。【二】草木酣　酣は盛りの頂點を過ぐること、但し、普通には眞盛りの義に用ひて居る。【三】綵縷　色どつた絲、端午には之を續命縷として用ふる。【四】親蠶　手づから飼はれた蠶、宋史禮志に「先蠶の禮、久しく廢す、眞宗、有司に詔して、故事を檢討せしむ。禮院言ふ、周禮、北郊に蠶するは、純陰を以てなり、漢、東郊に蠶するは、春桑生ずるを以てなり、請ふ、約れ故事に附し、壇を東郊に築かむと。政和禮局、請うて古制に倣ひ、先蠶壇側に於て蠶室二十七を築き、別に殿一區を構へて、親蠶の所となす、詔して、その議に從ひ、親蠶殿に命じ、無斁を以て名となす」とある。

【詩意】眞晝の日が當つて、簾櫳の中、いとも靜に、薰風吹き度つて、草木は、今しも盛に茂つて居

る。皇太妃は、恭儉の德を旨とせられ、端午に用ふる色絲も、御自身で飼はれた蠶から取つたものだといふことは、誰も知るまいが、まことに、有り難いことである。

雨細方梅夏。風高已麥秋。
應憐百花盡。綠葉暗紅榴。

【詩意】 細雨霏霏として、今しも、梅の實の熟する夏であるし、風は高く、すでに麥の秋を過ぎた。百花落ち盡し、綠葉茂り合つて、赤い石榴の花さへ暗きは、又一しほの風情がある。

雨細にして、方に梅夏、風高くして、すでに麥秋。
應に憐むべし、百花盡きて、綠葉、紅榴暗きを。

辟兵已佩靈符小。
續命仍縈綵縷長。
不爲祈禳得天助。
要令風俗樂時康。

兵を辟け、すでに靈符を佩びて小、
命を續ぎ、仍ほ綵縷を縈うて長し。
祈禳の爲に天助を得ず、
風俗をして時康を樂ましむるを要す。

【字解】【一】辟兵　査註に「裘元の新語、五月五日、五采の綸を繫け、これを辟兵符といふ」とある。【二】續命　即ち續命縷といひ、この色絲を卷きつけて居ると長生をするといふので、前に端午遊眞如の詩中に注して置いた。

【詩意】 すでに、小さな辟兵の靈符を帶び、その上に、長い續命の彩縷を縈ひつけて居る。何も、祈禳をして、天の冥助を得るにも及ばぬが、古い風習を尊重し、一般の人民をして、太平の時を樂ましめるのである。

玉盆沈李灔清泉。
金鴨噓空裊細煙。
自有梧楸障畏日。
仍欣麥黍報豐年。

玉盆、李を沈めて清泉灔たり、
金鴨、空に噓いて細煙裊たり。
自ら梧楸の畏日を障るあり、
仍ほ欣ぶ、麥黍の豐年を報ずるを。

【字解】【一】金鴨　鴨の形をなせる鍍金の香爐。【二】畏日　左傳に「趙盾は、夏日の如くして畏るべし」とあるに本づいて、夏の太陽を云ふ。【三】麥黍　月令に「孟夏には、農、乃ち麥を登せ、季夏には、農、乃ち黍を登す」とあつて、その註に「この時、黍、新に熟す。今、蟬鳴黍といふは、是れなり」とある。

【詩意】 玉盆に清泉を滿へて、赤い李の實をひたし置き、金鴨よりは、細煙裊裊として、空中に立ち登つて居る。御殿の周圍には、梧楸が茂つて居て、自然、夏の暑い日を遮り、折から、麥も、黍も、ともに豐年だといふ知らせがあつた。

良辰樂事古難同。　良辰樂事、古しへ同じうし難し、
繡繭朱絲奉兩宮。　繡繭朱絲、兩宮に奉ず。
仁孝自應禳百沴。　仁孝、自ら應に百沴を禳ふべし、
艾人桃印本無功。　艾人桃印、本と功なし。

【詩意】良辰と樂事とは、古しへより、兼ねることが出來ないのに、今之を併せたのは、まことに結構の至。この日太妃よりは、御自分で蠶を飼つて造つた繭と絲とを聖上・皇太皇后の兩宮に獻上される。かかる仁孝の德は、自然、種種の妖氛を禳ふべく、艾人だの、桃印だのは、本來、何等の效驗なきものである。

【字解】【一】百沴　沴は妖氣。【二】艾人　艾で造つた人形、戸外に掛ける。【三】桃印　桃の形を朱肉で押し、門戸の飾として惡氣を止める。

夫人閣四首

夫人閣　四首

肅肅槐庭午。沈沈玉漏稀。　肅肅、槐庭午なり、沈沈、玉漏稀なり。
皇恩樂佳節。鬭草得珠璣。　皇恩、佳節を樂み、草を鬭はして、珠璣を得たり。

【字解】【一】鬭草　歲時記に「五日、百草を鬭はすの戲あり」と見え、歐陽修の端午の詞に共鬭今朝勝、盈襜百草香」とある。

【詩意】肅肅として物靜かに、槐の茂れる庭には、日色方に亭午、深宮の中は、水時計の音さへ沈沈として、稀に聞こえる。今しも、皇恩を荷うて、この佳節を樂み、草を鬭はして、勝つた御褒美に珠璣を得たので、太平の折から、後宮の長閑けき有樣は、ざッと、かくの如くである。

節物荆吳舊。娛游禁掖閒。　節物、荆吳舊く、娛游、禁掖閒なり。
仙風隨晝箑。拜賜落人間。　仙風、晝箑に隨ひ、賜を拜して人間に落つ。

【字解】【一】仙風　仙界の風。【二】晝箑　箑は卽ち團扇、方言に「扇、關よりして東、これを箑といふ」とある。

【詩意】荆吳地方の特異なる端午の祝も、隨分久しいもので、今では、宮中でも之を行つて、この日は、娛游を旨として居る。一たび、晝團扇を搖かせば、仙界の風が吹く心持がするが、賤しい吾吾が、それを頂戴するのは、まことに有り難い仕合である。

五綵縈筒秫稻香。　五綵、筒を縈つて、秫稻香ばしく、
千門結艾鬢髯張。　千門、艾を結んで鬢髯張る。
旋開寶典尋風物。　旋ち寶典を開いて、風物を尋ね、

【字解】【一】五綵　五色の絲。【二】秫稻　もち米。【三】寶典　晉註に「隋書經籍志、杜臺卿の玉燭寶典二十卷」とあるが、必ずしも、こ

の書に限つた譯ではなく、儀式の事を書いた本を指すのであらう。【三】

要及靈辰共祓禳。　霊辰に及んで祓禳を共にするを要す。

霊辰　嘉辰に同じ。

【詩意】五色の絲で竹筒を縛り、その中には、もち米を入れ、又艾人は、隨處の門に掛つて、鬢髯ともに張るが如く見える。やがて、儀式の書物を調べて、折からの風物を尋ね、この嘉辰を幸に、惡魔拂ひの儀をも行はれる。

欲曉銅缾下井欄。　曉ならむと欲して、銅缾、井欄に下る、

鏗鍠金殿發清寒。　鏗鍠金殿、清寒を發す。

似聞人世南風熱。　聞くに似たり、人世、南風の熱するを、

日上牆東問幾竿。　日は牆東に上る、問ふ幾竿。

【詩意】夜あけに近く、銅の釣瓶が井欄を下つて、水を汲む聲が聞こえ、唯だでさへ、輝きわたれる金殿の裏では、一しほの清寒を覺える。この世界に、南風が吹き度つて、暑さの増すことを聞いて居られるものと見え、日は、牆東に上つて、すでに幾竿の高さに成つたと問はれることがあつた。

興龍節集英殿宴教坊詞致語口號

興龍節、集英殿宴の教坊詞、致語口號

臣聞、帝武造周、已兆興王之跡、日符祚漢、實開受命之祥、非天私我有邦、惟聖乃作神主、仰止誕彌之慶、集於建丑之正、瑞玉旅庭、爰講比鄰之好、虎臣在泮、復通西域之琛、式燕示慈、與人均福、恭惟皇帝陛下、睿思冠古、濬哲自天、煥乎有文、日講六經之訓、述而不作、思齊累聖之仁、東夏宅心、神人協德、卜年七百、方過曆以承天、有臣三千、咸一心而戴后、彤庭振萬、玉座傳觴、誦干戈載戢之詩、作君臣相悅之樂、斯民何幸、白首太平、猥以微生、親逢盛日、始慶猗蘭之會、願賡擊壤之音、下采民言、上陳口號。

【訓讀】臣聞く、帝武、周を造りて、すでに興王の跡を兆し、日符、漢に祚して、實に受命の祥を開く。天、わが有邦に私するに非ず、惟だ聖、乃ち神主と作る。仰止誕彌の慶、建丑の正に集まり、瑞玉、庭に旅し、ここに、比鄰の好を講ず、虎臣、泮に在つて、復た西域の琛に通ず。式つて燕して慈を示し、人と福を均しうす。恭しく惟みるに、皇帝陛下、睿思古に冠とし、濬哲天よりす。煥として文あ

り、日に六經の訓を講じ、述べて作らず、思、累聖の仁に齊し。夷夏、心を宅し、神人、德を協へ、年を卜する七百、方に曆を過ぎて以て天を承く。臣あり三千、咸な心を一にして后を戴く。彤庭、萬を振ひ、玉座、觴を傳へ、干戈載ち戢まるの詩を誦し、君臣相悅ぶの樂を作す。斯民、何の幸か、白首太平、猥りに微生を以て、親しく盛日に逢ひ、はじめて猗蘭の會を慶す。願はくは、擊壤の音に賡せむ。下、民言を采り、上、口號を陳す。

凜凜重瞳(一)日月新。　凜凜たる重瞳、日月新なり、
四方驚喜識天人。　四方驚喜して、天人を識る。
共知若木(二)初升(三)旦。　共に知る、若木、初めて旦を升すを、
且種蟠(四)桃莫計春。　且つ蟠桃を種ゑて、春を計る莫れ。
請(五)吏黑(六)山歸屬國。　吏を請うて、黑山、屬國に歸し、
給(七)扶黃(八)髮拜嚴宸。　扶を給して、黃髮、嚴宸を拜す。
紫皇應在紅雲裏。　紫皇、應に在るべし紅雲の裏、
試問淸都侍從臣。　試に問ふ、淸都侍從の臣。

【字解】(一) 重瞳　ひとみが二つある。古しへ、舜は重瞳であつた。前に贈妙善師の詩中に注して置いた。(二) 若木　淮南子に「若木は建木の西に在り、末に十日あり、その華、下地を照らす」とある。(三) 升旦　旦は朝日。(四) 蟠桃　前に彭祖廟及び次韻魯直見贈の詩中に注して置いた。(五) 請吏　史記大宛傳に「西南夷、吏を請うて入朝す」とある。(六) 黑山　山海經に「流沙、西南海に入る、黑水の山」とある。(七) 給扶　扶は介添、介抱人。南史宴[illegible]傳に「功を以て建安縣伯に封ぜられ、侍中太子詹事に除せらる。疾、職を解かむことを請ふ、許さず、尋いで、扶二人を給す」とあり、唐書に「玄宗、徐嶠を遣し、張果を邀へて都に至らしむ、辭して山に歸るや、扶侍二人を給す」とある。これは、當時の事實があるので、宋史文彥博傳に「元祐の初、司馬光、宿德元老を薦め、宜しく起して自ら輔くべしといふや、乃ち平章軍國重事を命じ、六日一たび朝し、一月兩たび經筵に赴き、恩遇、甚だ渥し」とある。(八) 黃髮　前に次韻李修孺の詩中に注して置いた。

【題義】興龍節は、宋の哲宗の誕生日、宋史の本紀に「十二月初七日は、帝の生日なり、禧祖の忌辰を避け、次日を以て興龍節となす」とあるから、十二月八日、そして、この詩の東坡の自註に「元祐二年」とある。宋の制度として、春秋聖節の三大宴には、餘興として雜劇を催し、小兒隊と女弟子隊とが相次いで進んで之を演ずることに成つて居る。その詳は、宋史の樂志、及び孟元老の東京夢華錄等に見え、宋史には「舞隊の制、その名各〻十、小兒隊凡そ七十二人、女弟子隊凡そ一百五十人」とあつて、その下に詳細なる次第書が見えて居る。この餘興に用ふる歌詞は、樂語と稱し、一に念語と稱する。宮中三大節の樂語は、はじめに、敎坊致語があり、次に口號があり、それから小兒隊が出て來て、その致語があり、次に女童隊が出て、その致語がある。これ等の樂語は、大抵、當時朝臣中の文學に名あるものに作らせたのである。ここに掲げたのは、元祐二年の興龍節に宴を集英殿に賜はつた時の樂語であるが、もとより、全體ではなく、敎坊詞の口號として七言律一首があるから、それを掲出する爲に、わづかばかりの前の部分を引き拔いたのである。その位ならば、その序とも見るべき

致語は、全く不必要である。されば、ここに致語があつても、解釋を略すことにする。致語は、つまり口上で、その口上が濟むと、この詩を一齊に合唱するのである。なほ查初白本以下、この詩の題を興龍節集英殿宴口號とし、その下に、幷に致語としてあるのは、甚だ宜しくない。この詩は、宴の口號ではなく、宴の餘興に於ける敎坊の致語及び口號であるから、王文誥の說に從つて、標題を改めた。なほ樂語の全文は、參考の爲に餘論の項に附記することにした。汴京宮室考に「大慶殿北に紫宸殿あり、西に垂拱殿あり、次の西に皇儀殿あり、又次の西に集英殿あり、宴殿なり」とあり、宋史の禮志に「宴饗は、凡そ春秋季の仲聖節、及び國に大慶あれば、皆大宴す。その日、殿庭には山樓を設け、排場して羣仙隊仗となし、宰相以下、殿に升つて酒を進む。各〻位に就き、酒九行、衣を更へ、花を賜ふこと差あり。大觀三年、議禮局、集英殿大宴儀を上る」とある。

【詩意】聖上は、凜凜たる重瞳が日月の如く新である處から、四方の億兆は、天人の如き御姿を見知つて、しきりに驚喜して居る。今は、御世の初めで、扶桑の若木に朝日が上つた樣であるが、この上とも、千代に八千代に打續き、さながら、三千年に一たび實るといふ蟠桃を植ゑて、幾年の春を經たか數へられぬ樣にありたいものである。刻下、天下太平にして、皇威遠方に及び、西の方、黑山の夷でさへも、態態、朝吏の派遣を請うて、甘んじて屬國となり、それから、天子は、元老を尊重されるから、黃髮の老臣は、曩に給はつた介添に扶けられて、紫宸殿に拜禮に參つた。天帝に比すべき我が聖上は、紅雲の裏に居らせられるに相違なく、試に、宮中に詰めて居る侍從の臣下に問うて見たいと思ふ。

【餘論】興龍節集英殿宴樂語の全文は、左の通りである。

敎坊致語

臣聞、帝武造レ周……………上陳二口號一、

口　號

凜凜重瞳……………侍從臣（以上、ここに掲載せし本文）

勾合曲

祝二堯之壽一、既罄二於歡謠一、象二舜之功一、願觀二於備樂一、羽旄在レ列、管磬同レ音、上奉二宸嚴一、敎坊合レ曲、

勾二小兒隊一

魚龍奏レ技、畢陳二詭異之觀一、齠齔成童、各效二回旋之妙一、嘉二其尙幼、有二此良心一、仰奉二宸慈一、敎坊小兒入レ隊、

隊　名

兩階陳二羽籥一、萬國走二梯航一、

問二小兒隊一

工師在レ列、各懷二自獻之能一、倀子盈レ庭、必有二可レ觀之技一、未レ知二來意一、宜二悉奏陳一、

小兒致語

臣聞、生民以來、未レ有二祖宗之仁厚一、上帝所レ眷、錫以二聖神之子孫一、孚佑二下民一、篤生二我后一、瞻二舜瞳之日月一、望二堯顙之山河一、若二帝之初達二四聰於無外一、如下川方至、傾二萬宇一以來同上、恭惟皇帝陛下、齊聖廣淵、剛健篤實、識二文武之大者一、體二仁孝於自然一、歌二詩思齊一、見二文王之所一レ以聖一、誦二書無逸一、法二中宗之不二敢康一、誕日載臨、輿情共祝、神筴授二萬年之算一、洛書開二五福之祥一、臣等嬉二游天街一、沐二浴皇化一、欲レ陳二舞蹈之意一、不レ知二手足之隨一、未二敢自專一、伏取二進止一、

勾二雜劇一

金奏鏗純、既度二九韶之曲一、霓裳合散、又陳二八佾之儀一、舞綴暫停、伶優間作、再調二絲竹一、雜劇來歟、

放二小兒隊一

游童率舞、逐二物性之熙怡一、小技畢陳、識二天慈之廣大一、清歌既闋、疊鼓屢催、再拜二天階一、相將好去、

勾二女童隊一

垂髫在レ列、斂レ袂稍前、豈知二北里之誠一、敢獻二南山之壽一、霓旌坌集、金奏方諧、上奉二威顏一、兩軍女童入レ隊、

隊名

君臣千載遇、歌舞八方同、

問二女童隊一

摻過屢作、旌旆前臨、顧二游女之何能一、造二彤庭一而獻レ技、欲レ知二來意一、宜二悉奏陳一、

女童致語

妾聞、瑞氣來翔、共紀二生商之兆一、羣龍下集、適同二浴佛之辰一、佳氣充レ庭、和聲載レ路、鞶出レ房而雷動、扇交レ翟以雲開、喜動二人天一、春還二草木一、恭惟、皇帝陛下、凝レ神昭曠、受レ命穆清、三后在レ天、宜二興王之世有一、四人迪哲、知二享レ國之無一レ窮、乃眷二良辰一、欲レ均二景福一、庭設二九賓之禮一、樂歌二四牡之章一、妾等幸覩二昌期一、獲レ瞻二文陛一、雖レ乏二流風之妙一、願輸二率舞之誠一、未二敢自專一、伏候二進止一、

勾二雜劇一

清淨自化、雖レ莫レ測二於宸心一、諒心雜陳、示二俛同二於衆樂一、金絲再舉、雜劇來歟、

放二女童隊一

分庭久立、漸移二愛日之陰一、振袂再成、曲二盡回風之態一、龍樓却望、鼉鼓屢催、再拜二天階一、相將好去、

この中、勾は引き出す、放は退出の義である。

興龍節集英殿宴教坊詞致語口號

興龍節、集英殿宴の敎坊詞、致語口號

臣聞、天所眷命、生而神靈、惟三代受命之符、萃于茲日、實萬世無疆之福、延及我民、候南極之祥輝、交北鄰之瑞節、同趨鎬燕、爭頌華封、恭惟、皇帝陛下、稽古溫文、乘乾剛粹、體生知而猶學、藏妙用於何言、故得六聖承休、三靈眷佑、德隆星暑、齊六符而泰階平、河行地中、錫九疇而彝倫正、屬誕彌之令旦、履長發之嘉祥、夙設九賓于庭、徧舞六代之樂、日無私於臨照、葵藿自傾、天有信於發生、勾萌必達、臣等濫塵法部、獲造彤墀、下采民言、得三萬里之謠誦、登歌壽斝、以八千歲爲春秋、不度蕪音、敢進口號。

【訓讀】臣聞く、天の眷命するところ、生まれて神靈。惟れ三代受命の符、この日に萃まり、實に萬世無疆の福、延いて我が民に及ぶ。南極の祥輝を候し、北鄰の瑞節に交はり、同じく鎬燕に趨り、爭つて華封を頌す。恭しく惟みるに、皇帝陛下、古しへを稽へて溫文、乾に乘じて剛粹、生知を體して猶ほ學び、妙用を何言に藏す。故に六聖の承休、三靈の眷佑を得たり。德は星暑より隆に、六符を齊しうして泰階平かに、河は地中を行き、九疇を錫はつて彝倫正し。誕彌の令旦に屬し、長發の嘉祥を履む。夙に九賓を庭に設け、徧ねく六代の樂を舞はしむ。日は臨照に私なくして、葵藿自ら傾き、天は發生に信あつて、勾萌必ず達す。臣等、濫りに法部を塵し、彤墀に造るを獲、下、民言を采つて、三萬里の謠誦を得、登つて、壽斝に歌ひ、八千歲を以て春秋となす。蕪音を度らず、敢て口號を進む。

風卷雲舒合兩班(一)。　風は卷き、雲は舒べて、兩班を合し、
曈曈瑞日映天顏。　曈曈瑞日、天顏に映す。
觀書已獲千秋鏡(二)。　書を觀て、すでに千秋の鏡を得たり、
積德長爲萬歲山(三)。　德を積んで、長しへに萬歲山と爲る。
臘雪未消三務(四)起。　臘雪、未だ消えずして三務起り、
(五)壬人不用五兵(六)閒。　壬人、用ひずして五兵閒なり。
相逢父老爭相賀。　相逢ふ父老、爭うて相賀す、
却笑華胥(七)是夢間。　却つて笑ふ、華胥、是れ夢間なるを。

【字解】【一】兩班　中書門下の兩省職員を云ふ。宋史職官志に「唐六典、中書・門下・尙書の三省合一。元豐五年、中書門下、はじめて分る。元祐の初、司馬光、請うて、合班、事を奏し、分省、事を治めしむ」とある。【二】千秋鏡　唐書張九齡傳に「はじめ、千秋節、王公、竝に寶鑑を獻ず。九齡、事鑑十章を上り、千秋金鑑錄と號し、以て諷諭を申ぬ」とある。【三】萬歲山　御庭の中なる築山の名であらう。杜牧の詩に「君王謙讓泥金事、蒼翠空高萬歲山」とある。【四】三務　左傳に「民その野に狎れて、三務、功を成す」とあつて、その註に「春夏秋、

「三時の務」とある。【五】壬人 宮闕の衞兵。【六】五兵 即ち五戎、五種の兵器、弓矢殳戈戟を合稱して云ふ。【七】華胥 黃帝が夢に神游せし處、前に和二蘇州太守一の詩中に注して置いた。

【題義】 この篇は、集中に何の年とも標記してないが、東坡は、元祐元年より三年中は、翰林に居り、そして、元年は大喪中で、興龍節にも、餘興の催しなく、二年の樂語は、前に揭げ、四年の三月に罷めて外に出たから、この樂語は、無論、三年十一月に作つたのであるし、且つ女童致語の中に、再覩二興龍之會一とあつて、その第二回たることは確實である。

【詩意】 風雲卷舒して、中書・門下の兩省の職員は、班を合して慶賀を述べ、瞳瞳たる目出たき日影は、天顏に映じて居る。獻上した書物の中には、張九齡の千秋金鑑錄に比すべきものがあるし、今後德を積まれて名にしおふ萬歲山の如くならむことを切望する。臘雪、未だ消えざるに、農民は、野良仕事にいそしみ、勤勉の俗、尤も喜ぶべく、宮闕の番兵でさへ、五種の兵器を全然用ひざるは、流石に太平の祥である。父老どもは、相逢うて、爭うて賀し、かの黃帝は、唯だ夢の中にのみ華胥の國に游び、今日、至治の御世、それが眼前に實現されしに及ばざることを笑つて居る。

【論論】 前例に循つて、この樂語の全文を左に擧げることにする。

敎坊致語

臣聞、天所二眷命一…………敢進二口號一、

口號

風卷雲舒…………是蔘間（以上、ここに揭載せし本文）

勾合曲

笙磬同レ音、考二中聲於神鼓一、鳥獸率舞、浹二和氣於敷天一、上奉二宸歡一、敎坊合レ曲、

勾二小兒隊一

羕技旅レ庭、振二歡聲於無外一、游童頌レ聖、陶二至化於自然一、上奉二皇威一、敎坊小兒入レ隊、

隊名

壤歌皆白髮、象舞及二靑衿一、

問二小兒隊一

跳二踉廣陌一、初疑二竹馬之游一、合二散彤墀一、忽變二驚鴻之狀一、欲レ知二來意一、宜二悉敷陳一、

小兒致語

臣聞、流レ虹啓レ聖、非二人力所一レ致之符一、湛レ露均レ恩、與二天下一共享二其樂一、旁行二海宇一、外薄二戎夷一、咸欣二載夙之辰一、共獻二無疆之祝一、恭惟、皇帝陛下、神武不レ殺、將レ聖多能、天生二德於予一、旣稟二狗齊之質一、人樂二告以一レ善、輔二成經緯之文一、法二慈儉於東朝一、紬二詩書於西學一、載臨二誕日一、俛答二輿情一、非レ爲二靡曼之觀一、庶備二太平之福一、臣等微生齠齓、學二樂父師一、就レ列紛紜、雖レ無レ殊二於鳥獸一、赴レ音

俛仰、亦少效於涓塵、未敢自專、伏候進止、

勾雜劇

樂且有儀、方君臣之相悅、張而不弛、豈文武之常、行欲佐歡聲、宜陳善謔、金絲徐韻、雜劇來歟、

放小兒隊

末按畢陳、下情無墜、既成文於綴兆、猶斂袂以回翔、再拜天階、相將好去、

勾女童隊

飛步壽山、起香塵於羅襪、散花御路、泛回雪於錦茵、上奉慈顏、兩軍女童入隊、

隊名

生商來瑞鳦、洛佛降羣龍、

問女童隊

玉座天臨、雖仙凡之有隔、翠鬟雲合、豈草木之無知、密邇天階、悉陳來意、

女童致語

妾聞、千里一曲、變澄瀾於濁河、萬歲三稱、隱歡聲於靈岳、天人竝應、夷夏來同、雖云北里之傚、敢獻華封之祝、恭惟、皇帝陛下、睿文冠古、神智無方、同堯舜之性仁、而能濟衆、陋成康之刑措、猶待積年、共欣建丑之正、再覩興龍之會、桑田東海、傾壽斝而未乾、汗竹南山、書頌聲而無極、妾等、幸緣賤藝、獲望威顏、振萬於庭、欲赴干旄之節、間歌以雅、庶諧笙磬之音、未敢自專、伏候進止、

勾雜劇

舞綴暫停、歌鐘少閟、必有應諧之妙、以資載笑之歡、上悅天顏、雜劇來歟、

放女童隊

振袂再成、曲盡回風之妙、分庭久立、漸移愛日之陰、再拜天階、相將好去、

坤成節集英殿宴教坊詞致語口號

坤成節、集英殿宴の教坊詞、致語口號

臣聞、視履考祥、既占懷月之夢、對時育物、必有繼天之功、方大火之西流、屬陰靈之既望、帝於是日、誕降仁人、意使斯民、咸歸壽域、共慶千秋之遇、得生二聖之朝、式燕示慈、與民同樂、恭惟、皇帝陛下、文思天縱、濬哲生知、力行湯禹之仁、常恐一夫之不獲、躬蹈曾閔之孝、故得萬國之

懽心、恭惟太皇太后陛下、道契天人、德超載籍、知人則哲、蓋帝堯之所難、修己安民、雖虞舜其猶病、風雲從而萬物覩、日月照而四時行、自然動植之咸安、莫知天地之何力、三宮交慶、羣后駿奔、寶鄰通四牡之歡、航海致重譯之贐、洞庭九奏、始識咸池之音、靈岳三呼、共獻後天之祝、臣等叨居法部、輒采民言、上瀆宸聽、敢陳口號。

【訓讀】 臣聞く、曆を視、祥を考へて、すでに月を懷にするの夢を占し、時に對し、物を育して、必ず天に繼ぐの功あり。大火の西流に方つて、陰靈の既望に屬す。帝、この日に於て、誕に仁人を降す、意、斯民をして咸な壽域に歸し、共に千秋の過を慶し、二聖の朝に生まるるを得せしめ、式つて燕して慈を示し、民と樂を同じうす。恭しく惟みるに、皇帝陛下、文思天縱、濬哲生知、力めて湯禹の仁を行うて、常に一夫の獲ざるを恐れ、躬づから曾閔の孝を蹈んで、故と萬國の懽心を得たり。恭しく惟みるに、太皇太后陛下、道、天人に契し、德、載籍に超え、人を知るは則ち哲、蓋し帝堯の難しとするところ、己を修め、民を安んずるは、虞舜と雖も其れ猶ほ病む。風雲、從つて萬物覩、日月照らして四時行はる。自然動植の咸な安くして、天地の何の力たるを知るなし。三宮交慶、羣后駿奔、寶鄰、四牡の歡を通じ、航海、重譯の贐を致す。洞庭九奏、はじめて咸池の音を識り、靈岳三呼、共に後天の祝を獻す。臣等、叨りに法部に居る、輒ち民言を采り、上、宸聽を瀆し、敢て口號を陳す。

三朝遺老九門前。（一）
又見承平大有年。
文母憂勤初化俗。（二）
曾孫仁孝已通天。（三）
史書元祐三千牘。（四）
樂奏坤成第一篇。
欲采蟠桃歸獻壽。（五）
蓬萊清淺半桑田。（六）

三朝の遺老、九門の前、又見る、承平、大に年あるを。文母憂勤、初めて俗を化し、曾孫仁孝、已に天に通す。史は書す、元祐三千の牘、樂は奏す、坤成の第一篇。蟠桃を采つて、歸つて壽を獻せむと欲す、蓬萊清淺、半ば桑田。

【字解】【一】九門 前に寒食雨の詩中に注して置いた。【二】文母 前に九月十五日の詩中に注して置いた、武王の母、即ち太任。【三】曾孫 哲宗は、仁宗の曾孫に當るが故に云ふ。【四】三千牘 前に送三千之姪の詩中に注して置いた。【五】蟠桃 前に、彭祖廟、及び次韻曹直見寄の詩中に注して置いた。【六】蓬萊清淺 前に留題仙都觀の詩中に注して置いた。

【題義】 宋史哲宗本紀に「詔して太皇太后の生日、七月十五日を以て坤成節となす」とある。この宣仁聖烈高皇后は、哲宗即位の初、政を攝し、女中の堯舜とさへ稱せられた御方であるから、その誕生日の祝は、特に盛であつたと見える。この題下、東坡の自註には「元祐二年七月十五日」とあつて、

卽ち初めての坤成節である。

【詩意】英宗・仁宗・神宗の三朝に歷仕した遺老どもは、九門の前に參候し、太平の御世の豐年なることを欣賀して居る。太皇太后は、文母の如く、憂勤して政を執り、能く民俗を化せしめ、聖上は、曾孫に當らせられ、その仁孝は、天に通ずるばかり、今日元祐の盛事は、やがて國史の上に於て、三千枚を費して、特筆大書されるであらう。この坤成節に際して、樂音の第一篇を奏するのも、目出たきことの限りである。そこで、蟠桃の實を摘んで來て、歸つて壽を上らうと思ふが、幸にも、蓬萊に通ずる海水は、清淺となり、おまけに、半は桑田に化したから、造作なく其處へ往けるであらう。

【餘論】蓬萊清淺は、謂はゆる滄桑の變で、もとより目出たからぬことであるが、上の如く解釋すれば、その意義は、疏通することと思ふ。但し、かくの如き陳意翻新の處を重視せざれば、居然として、衆愚の爲に誤解される虞がある。續通鑑長編に「元祐四年五月、蔡確、作るところの車蓋亭の詩を辨じて言ふ、古今の詩句、海、桑田に變ずるを用ふるもの稍く多し。只だ近年の如きは、蘇軾、坤成節大宴の詩語を作つて、亦た云ふ、欲下采二蟠桃一歸獻上壽、蓬萊清淺半桑田と。蓋し祝壽の辭にして、猶ほ之を用ふ、何ぞ之を此故事を用ひたりと謂ふを得む、尤も佳句に非ず、と。これより先、安燾、かつて同列に語つて曰く、海、桑田に變ずるの事、蘇軾、亦た嘗て用ひて、聖節樂語を作ると。ここに於て、確、果して軾を以て言となす、衆、皆燾の實は密に之を風するを疑ふなり」とある。なほ例に依つて、この樂語の全文を左に擧げることにする。

敎坊致語

臣聞、視レ履考レ祥…………敢陳二口號一、

口號

三朝遺老…………半桑田（以上、ここに掲載せし本文）

勾合曲

秋風協應、生二殿閣之微涼一、廣樂具陳、諧二金絲一而間作、欲レ觀二鳥獸之率舞一、願聞二笙磬之同音一、上奉二宸顔一、敎坊合レ曲、

勾二小兒隊一

朱干玉戚、本以象レ功、白叟黃童、皆知レ頌レ聖、盍下命二髫髦之侶一、來陳中舞勺之隊上、上侑二皇歡一、小兒入レ隊、

隊名

願同二千歲樂一、長奏二太平謠一、

問二小兒隊一

鎬京廣宴、方雲二集於縉紳一、沂水游童、忽覺二趨於庭廡一、雖レ云二小技一、必有レ可レ觀、咫二尺天顔一、悉言二汝志一、

小兒致語

臣聞、功存社稷、慶鍾高密之門、澤及本枝、天作太任之德、候西風之入律、藹瑞氣之盈庭、嘉與四方、同稱萬壽、恭惟皇帝陛下、文思稽古、濬哲在躬、日奉東朝之歡、率用家人之禮、以謂慈儉之化、無德而能名、保祐之功、如天之難報、惟流傳於歌舞、庶髣髴其儀、臣等雖在弱齡、久陶孝治、敢率垂髫之侶、共陳振萬之儀、不敢自專、伏取進止、

勾雜劇

鸞旗日轉、雉扇雲開、暫回綴兆之文、少進俳諧之技、來陳善戲、以佐歡聲、上樂天顏、雜劇來歟、

放小兒隊

青衿旅進、雖末技而畢陳、黃屋天臨、知下情之無壅、既成文於綴兆、爰整袂以徘徊、再拜天階、相將好去、

勾女童隊

彤壺漏箭、隨雞唱以漸移、絳節綵毫、聞鳳簫而自舉、宜召散花之侶、來陳回雪之妾、上奉宸歡、兩軍女童入隊、

隊名

金風回翠袖、玉琯倚清歌、

問女童隊

鳳歌諧律、方賁燕俎之歡、鷺羽分庭、忽集壽山之下、低鬟有待、振袖欲前、寄邇天階、悉陳來意、

女童致語

妾聞、塗山啓夏、來玉帛於萬邦、摯仲興周、祚本枝於百世、嘉辰共樂、壯觀一新、恭惟、皇帝陛下、舜孝自天、堯仁浹物、膺昊穹之成命、席累聖之詒謀、惟地勢坤永、載無疆之德、以天下養躬、持胥樂之觴、六樂在庭、百工奏技、妾等親逢盛旦、獲望嚴宸、藝雖愧於驚鴻、心已先於儀鳳、願陳舞綴、上奉天顏、未敢自專、伏取進止、

勾雜劇

鳳清羽蓋、日轉槐庭、欲賁載笑之歡、必有應諧之妙、暫回舞綴、少進詼諧、上悅天顏、雜劇來歟、

放女童隊

八音間作、既成皦繹之文、萬舞畢陳、曲盡回翔之態、望彤闈而却立、斂翠袂以言歸、再拜天墀、相將好去、

齋日口號

齋日口號（さいじつこうがう）

旋復陰陽、配五支于六幹、誕彌歲月、與元日為三中、神后降慶於當年、

曾孫效誠於茲旦、不煩巧歷、自契眞符、道俗謳謠、天人協應、太皇太后陛下、功高任姒、德配唐虞、上推顧託之心、下布仰成之政、寶慈與儉、蹈光憲之成規、却狄安邦、襲武烈之餘慶、三朝順履、萬壽維新、雖絳縣之老人、難窮甲子、如楚南之靈木、莫計春秋、臣賤等草茅、心傾葵藿、采民謳于擊壤、效樂語之陳詩。

【訓讀】旋つて陰陽を復し、五支を六幹に配す。誕に歳月を彌り、元日と三申となす。神后、慶を當年に降し、曾孫、誠を茲旦に效し、巧歷を煩はさずして、自ら眞符に契し、道俗謳謠、天人協應。太皇太后陛下、功、任姒より高く、德、唐虞に配す。上、顧託の心を推し、下、仰成の政を布く、慈と儉とを寶とし、光憲の成規を蹈み、狄を却け邦を安んじ、武烈の餘慶を襲ぐ。三朝順履、萬壽維れ新なり。絳縣の老人と雖も、甲子を窮め難く、楚南の靈木の如く、春秋を計るなし。臣、賤しきこと、草茅に等しきも、心、葵藿を傾く、民謳を擊壤に采り、樂語の陳詩に效ふ。

(一)媧皇得道自神仙。　媧皇道を得、自ら神仙、
(二)金母長生不計年。　金母長生、年を計らず。
甲子會逢三朔旦。　甲子、會ま逢ふ三朔旦、
歲星行看兩周天。　歲星、行く〳〵看る兩周天。
消兵漸覺腰無犢。　兵を消して、漸く覺ゆ腰に犢なきを、
種德方知福(三)有田。　德を種ゑて、方に知る福に田あるを。
(四)彤管何人書後會。　彤管、何人か、後會を書せむ、
椒花椿頌一時編。　椒花椿頌、一時に編す。

【字解】【一】媧皇　卽ち女媧、太皇太后に比す。【二】金母　卽ち王母、前に贈陳守道、及び春帖子皇太后閣の詩中に注して置いた。【三】福有田　法論に「父母に供するを恩田といひ、僧佛に供するを敬田といひ、疾病に供するを悲田といひ、すべて之を名つけて福田といふ」とある。【四】彤管　赤い軸の筆、前に再觀鄙園留題の詩中に注して置いた。

【題義】宋史に據ると、宣仁皇后は、元祐八年癸酉に崩せられて年六十二といへば、仁宗の明道元年壬申に生まれたのである。元祐四年正月元日は壬申で、その本命に當る處から、御祝として、在京、及び天下の僧尼・道士・女冠に齋飯を賜はり、道場を建て、七晝夜の間、賑はしく法事を行はれた。東坡の此作は、その時、上つたので、その形式は、樂語の破題に倣つたのである。

【詩意】女媧は、道を得て、自然に神仙といふべく、王母は、長生して、その年は、數へ切れぬ位。わが太后は、まさしく之に比すべきものである。今年の元旦は、丁度、その生年の甲子に當り、尊んで皇太后となられてから、歲星、再び廻つて、すでに二十四年目である。今や、天下太平にして、兵器を鑄つぶし、人民は、腰の邊に引きつれる小牛なきを物足らず思ひ、太后は、德を積んで、しきりに

福田を設置された。奧祐筆の中、何人が、赤軸の筆を執つて、この次の齋日を書し、且つ歳の初の椒花頌と長壽を祝する靈椿の頌とを物して、同時に呈上するであらうか。

集英殿春宴教坊詞、致語口號

集英殿春宴の教坊詞、致語口號

臣聞、人和則氣和、故王道得而四時正、今樂猶古樂、故民心悅而八音平、幸此聖朝、陶然化國、飭三農於保介、維莫之春、興五福於太平、既醉以酒、恭惟、皇帝陛下、乘乾有作、出震無私、憲章六聖之典謨、斟酌百王之禮樂、天方祚于舜孝、人已誦于堯言、故得彝倫敍而水土平、北流軌道、壬人退而蠻夷服、西旅在庭、稍寬中昃之憂、一均湛露之澤、方將麴糵羣賢、而惡旨酒、鼓吹六藝、而放鄭聲、雖白雪陽春、莫致天顏之一笑、而獻芹負日、各盡野人之寸心、臣猥以賤工、叨塵法部、幸獲望雲之喜、敢陳擊壤之音、不揆蕪才、上進口號。

【訓讀】臣聞く、人和すれば氣和、故に王道得て四時正しく、今樂は猶ほ古樂のごとし、故に民心悅んで八音平らぐ。幸に此聖朝、陶然國を化し、三農を保介に飭へ、維れ莫の春、五福を太平に興し、既に醉はしむるに酒を以てす。恭しく惟みるに、皇帝陛下、乾に乘じて作るあり、震に出でて私なく、六聖の典謨を憲章して、百王の禮樂を斟酌す。天、方に舜孝に祚し、人、すでに堯言を誦す。故に彝倫敍して、水土平かなるを得、北流、道に軌ひ、壬人退いて、蠻夷服し、西旅庭に在り、稍や中昃の憂を寬にし、一たび湛露の澤を均しくす、方に將に羣賢を麴糵にして旨酒を惡み、六藝を鼓吹して鄭聲を放たむとす。白雪陽春と雖も、天顏の一笑を致すなく、而して、芹を獻じ日を負ひ、各、野人の寸心を盡す。臣、猥りに賤工を以て、叨りに法部を塵し、幸に望雲の喜を獲、敢て擊壤の音を陳す、蕪才を揆らずして、上、口號を進む。

萬人歌舞樂芳辰。　萬人、歌舞して芳辰を樂む。
長養恩深第四春。(一)　長養、恩は深し第四春。
令下風雷常有信。　令下つて、風雷、常に信あり、
時來草木豈知仁。　時來つて、草木、豈に仁を知らむや。
璿璣(二)已正三階泰。(三)　璿璣、すでに三階の泰を正し、

【字解】【一】第四春　元祐四年なるが故に云ふ。【二】璿璣　史記天官書に「北斗七星は、謂はゆる璿璣玉衡、以て七政を齊ふ」とあつて、註に「斗の第一は天樞、第二は璇、第三は璣、第四は權、第五は衡、第六は開陽、第七は搖光。第一より第

（四）玉琯初知九奏均。　玉琯、初めて知る、九奏の均しきを。
更欲年年同此樂。　更に年年、この樂を同じうせむと欲す、
故應相繼得元臣。（五）　故と應に相繼いで元臣を得べし。

四に至るまでを魁となし、第五より第七に至るまでを杓となし、合せて斗となす。玉衡は杓に屬し、魁は璇璣たり」とある。【三】三階泰　又天官書に「魁下の六星、兩兩比するもの、名づけて三能といふ。三能、色、齊しければ君臣和す」とあつて、註に「泰階は三台なり」とあり、又黄帝泰階六符經に「三階平かなれば、陰陽和し、風雨時あり」と見ゆ。【四】玉琯　査註に「按ずるに、これ范景仁の新樂を指す。本集、和范景仁の詩、玉琯豁閒和黍香。自註に云ふ、審法、尺を以て律を生ず、今黍を以て律を定め、律を以て尺を生ず、と。宋史を以て之を考ふるに、范鎭、太府に請ひ、銅、律樂を鑄る。成帝、太皇太后と延和殿に御し、執政侍從に詔して、皆往いて觀せしむ、乃ち元祐三年の事、これより、朝會、皆これを用ふ。故に、先生の詩に玉琯初知九奏均といふなり」とある。九奏は、前に侍立邇英の詩中に注して置いた。【五】元臣　馮應榴の案に「宋史の哲宗本紀、元祐三年四月、呂公著を以て司空同平章軍國事となす、末句當に此を指すべし」とある。

【題義】宋史禮志に「春秋季仲及び聖節、凡そ大慶あれば、皆大に宴す。太平興國の後、止だ春宴を設く。淳化四年、陳靖上言す、宴は禮を以て成り、賓は賢を以て序す、その拜起、節を失し、宴饌、潔豐ならざるあらば、竝に嚴制を申ねむ、と。咸平三年、はじめて、春秋大宴を備設す。學士梁顥請ふ、春秋大宴小宴賞花の行幸を以て、次して四圖となし、閤門に頒下して遵守せしめむ、と。これに從ふ。故事、大宴の前一日、殿に御して百戲を閱す、これを獨看といふ。元豐八年、范祖禹、この日、神宗紀草を進むと言ひ、故に之を罷む。元祐三年、春宴を罷め、八月、秋宴を罷む。魏王、出でて殯し、翰林學士蘇軾、敎坊致語を進めざるの故を以てなり」とあつて、これは、魏王が哲宗の叔父だから、この年中は、喪に因つて宴を廢したのである。そこで、この樂語は、その翌元祐四年の分で、詩中にも特に第四春と斷つてある。

【詩意】今日は、仲春の宴を賜はる日で、萬人歌舞して、この目出たき時に逢ひしを樂み、聖上長養の恩深く、今年は、御宇第四回の春である。令一たび下れば、風雷と雖も、常に信あつて、その時を違へず、季節が來れば、草木は、自然に芽ぐんで、聖主の仁をだに知らぬ樣である。北斗は、位を正しくして、三台平かに、從つて陰陽和して風雨時あり、音律が新に定められて、九奏の樂も、すべて調つて居る。この上は、年年、この悅樂を同じうしたいといふので、相繼いで、元老の名臣を登庸されたのであらう。

【餘論】例に依つて、この樂語の全文を左に擧げることにする。

敎坊致語

臣聞、人和則氣和……上進口號、

口　號

萬人歌舞……得元臣（以上、ここに掲載せし本文）

勾合曲

太平無象、善萬物之得時、和氣致祥、喜八風之從律、大合鈞天之奏、克諧治世之音、上奉嚴宸、教坊合曲、

勾小兒隊

斑白之老、既無負戴之憂、髫亂之童、亦遂嬉游之樂、行歌道路、聯袂闕廷、仰奉宸慈、教坊小兒入隊、

隊名

初成莫春服、來獻太平謠、

問小兒隊

聚戲里閭、豈識九重之奧、成文綴兆、忽隨六樂之和、宜近彤墀、悉陳來意、

小兒致語

臣聞、春爲陽中、生物各遂其性、樂以天下、聖人豈私其身、故飮食盡忠臣心、而游豫爲諸侯度、方遲日之無事、姻嗣歲之有年、大啓璧門、肅陳燕豆、恭惟、皇帝陛下、道隆而德備、質文而性仁、總攬羣才、蓋天受之神策、澄淸庶政、故民獻以寶符、顧良辰樂事之難幷、宜羣臣嘉賓之竝集、廣場千步、方山立於衆工、大樂九成、固海函於雜技、臣等沐浴膏澤、詠歌昇平、幸以髫髦之微、得參舞羽之末、敢干宸聽、伏俟兪音、

勾雜劇

臚傳已久、陛楯將更、宜資載笑之歡、少進羣優之技、綏調絲竹、雜劇來歟、

放小兒隊

淸歌屢奏、蓋曲盡於下淸、妙舞載陳、示不遺於小物、既畢沛風之和、稍同沂水之歸、再拜天階、相將好去、

勾女童隊

燕和之樂、下侍於臣工、靡曼之觀、聊同於俚俗、審音而作、振袂稍前、上奉宸歡、兩軍女童入隊、

隊名

瑞日明歌扇、仙飈動舞衣、

問女童隊

工師奏技、侍衞聳觀、顧游女之何施、集彤庭而有待、欲知來意、宜悉敷陳、

女童致語

妾聞、聖人授民以時、王者與衆同樂、故倉庚鳴而蠶女出、游魚躍而靈沼春、蓋良辰豈易得哉、亦賢者而後樂此、伏惟、皇帝陛下、溫恭允塞、緝熙光明、學無常師、文武識其大者、仁能濟衆、堯舜其猶病諸、齊泰階之六符、走重譯之萬里、天人竝應、禮樂將興、豈惟塵士之賤微、敢度乾

坤之厖大、萬舞九奏、雖未象於成功、間歌三終、亦庶幾於頌德、欲殫末技、少效寸誠、
勾雜劇。
風斜御柳、既窮綺羅之觀、日轉庭槐、少進詼諧之戲、再調絲竹、雜劇來歟、
放女童隊。
翠袖風回、已盡折旋之妙、文茵霞卷、倘觀顧步之餘、再拜天墀、相將好去、

紫宸殿正旦教坊詞、致語口號

紫宸殿正旦の教坊詞、致語口號

臣聞、行夏之時、正莫加於人統、採周之舊、王方在于鎬京、惟吉月之布和、休庶工而未作、使華遠集、鄰好交修、萃簪笏于九門、來車書于萬里、將興嗣歲、以樂太平、恭惟、皇帝陛下、躬履至仁、誕膺眷命、法天地四時之運、民日用而不知、傳祖宗六聖之心、我無爲而自化、九德咸事、三年有成、始御八音之和、以臨元日之會、人神相慶、夷夏來同、臣等忝與賤工、得親壯觀、知輿情之願頌、顧盛德之難形、不度荒蕪、敢進口號。

【訓讀】臣聞く、夏の時を行ひ、正、人統に加ふるなく、周の舊を採り、王方に鎬京に在り。惟れ吉月の和を布く、庶工を休まして未だ作らず、使華遠く集まり、鄰好交修し、簪笏を九門に萃め、車書を萬里に來たし、將に嗣歲を興して、以て太平を樂まむとす。恭しく惟みるに、皇帝陛下、躬、至仁を履み、誕に眷命を膺け、天地四時の運に法り、民、日に用ひて知らず、祖宗六聖の心を傳へ、我、無爲にして自ら化す。九德咸な事、三年成るあり、はじめて八音の和を御し、以て元日の會に臨む、人神相慶し、夷夏來同す。臣等忝くも賤工に與かり、壯觀を親しうするを得、輿情の頌を願ふを知り、盛德の形はし難きを顧み、荒蕪を度らず、敢て口號を進む。

(一)九霄(二)清蹕一聲雷。　九霄の清蹕、一聲の雷、
萬物欣榮意已開。　萬物欣榮、意、すでに開く。
曉日自隨天仗出。　曉日、自ら天仗に隨つて出で、
春風不待斗杓回。　春風、斗杓を待たずして回る。
行看菖葉催(三)耕耤。　行く〱看る、菖葉の耕耤を催すを、
共喜椒花映壽杯。　共に喜ぶ、椒花の壽杯に映ずるを。
欲識太平全盛事。　識らむと欲す、太平全盛の事、

【字解】【一】九霄　查註に「道書に、赤霄・碧霄・青霄・玄霄・絳霄・黅霄・紫霄・練霄・縉霄を九霄となす」とある。
【二】清蹕　前に曾子開從駕の詩中に注して置いた。
【三】耕耤　籍田に耕すこと。
【四】雲臺　後漢明帝の時、功臣二十八人の像を臺上に畫いた。なほ前に和章七二の詩中に注して置いた。

振振鵷鷺滿二雲臺一。(四)　振振たる鵷鷺、雲臺に滿つ。

【題義】汴京宮室考に「大慶殿北に紫宸殿あり、朝を視るの前殿なり」とあり、宋史禮志に「大朝會は元日・五月朔・冬至を以てし、羣臣奉賀して壽を上る。もし事なくして朝を視ざれば、閤門に表賀す」とある。これは、元祐四年元旦の樂語である。

【詩意】天上に於ける警蹕の聲は、雷の如く、萬物は、欣欣として榮に向ひ、心意すでに開いて居る。朝日は、聖上の儀仗に隨つて共に出で、春風は、北斗の轉ずるを待たずして、早くも吹き度つて居る。やがて、菖蒲の葉が伸びて、藉田に親耕される樣にも成らうし、今日、椒花の壽杯に映ずるは、一同喜ばしく存ずることである。太平全盛の象は、百官が行列を整へ、振振たる鵷鷺の如く、雲臺の下に滿ちて居る一事を以てしても分かることである。

【餘論】例に依つて、この樂語の全文を左に掲げることにする。

敎坊致語

臣聞、行二夏之時一……敢進二口號一、

口號

九霄清蹕……滿二雲臺一（以上、ここに掲載せし本文）

勾合曲

東風應レ律、南籥在レ庭、餞レ臘迎レ春、方慶二三朝之會一、登レ歌下レ會、願聞二九奏之和一、上悅二天顏一、敎坊合曲

勾二小兒隊一

工師奏レ技、咸蹁躚以在レ庭、稱儒聞レ音、亦回翔而赴レ節、方資二共樂一、豈間二微情一、上奉二宸歡一、敎坊小兒入レ隊、

隊名

仙山來二絳節一、雲海戲二羣鴻一、

問二小兒隊一

六樂充レ庭、九賓在レ列、何彼垂髫之侶、欲レ陳二振袂之能一、必有二來誠一、少前敷奏、

小兒致語

臣聞、正月上日、萬彙所二以更新一、羣臣嘉賓、四方於レ是觀レ禮、雪方占二於上瑞一、風已告二於先春一、及二此良辰一、設爲二高會一、恭惟、皇帝陛下、子二來九有一、天覆二兆民一、煥乎其有二文章一、昭然若レ揭二日月一、安西都護、來輸二八國之琛一、南極老人、出效二萬年之壽一、還二圭璋於都使一、受二圖籍於春朝一、擊レ石摐レ金、奏二鈞天之廣樂一、跳レ毬舞レ索、戲二平樂之都場一、臣等沐二浴太平一、詠二歌新歲一、鼓二舞咸韶之韻一、蹌二揭鳥獸之間一、未二敢自專一、伏候二進止一、

勾二雜劇一

以雅以南、既畢陳二於衆技一、載色載笑、期レ有レ悅二於威顏一、舞綴暫停、優詞閒作、金絲徐韻、雜劇來歟、

放二小兒隊一

酒闌金殿、既均二湛露之恩一、漏滅銅壺、曲盡二流風之妙一、望二彤墀一而申レ悅、整二翠袖一以言歸、再二拜天階一、相將好去、

集英殿秋宴教坊詞、致語口號　集英殿秋宴の教坊詞、致語口號

臣聞、天無レ言而四時成、聖有レ作而萬物覩、清淨自化、雖レ仰二則于帝心一、豈弟不レ回、亦俛二同于衆樂一、屬二此九秋之候一、粲然萬寶之成、吾王不レ游、何以勞二農而休一レ老、君子如喜、則必大烹以養レ賢、恭惟、皇帝陛下、孝通二神明一、仁及二草木一、行二堯禹之大道一、守二成康之小心一、華夷來同、天地竝應、以爲福莫レ大二於無事一、瑞曷加二於有年一、南極呈レ祥、候二秋分一而老人見、西夷慕レ義、涉二流沙一而天馬來、嘉レ與二臣工一、肅陳二燕俎一、禮二元侯于三夏一、諧二庶尹于九成一、宣二示御觴一、聳二近臣之榮觀一、臚二傳天語一、溢二兩廡之歡聲一、臣等親覩二昌辰一、叨二塵法部一、采二諸言于擊壤一、助二瞽瞍之陳詩一、仰奉二威顏一、敢進二口號一。

【訓讀】臣聞く、天、言なくして四時成り、聖、作るあつて萬物覩る。清淨自ら化し、則を帝心に仰ぐと雖も、豈弟回ならず、亦た同を衆樂に俛す。この九秋の候に屬し、粲然として萬寶の成る、吾が王、游ばず、何を以て農を勞して老を休めむ。君子、もし喜ばば、必ず大に烹て以て賢を養はむ。恭しく惟みるに、皇帝陛下、孝、神明に通じ、仁、草木に及ぶ。堯禹の大道を行ひ、成康の小心を守り、華夷來り同じ、天地竝に應ず。以爲へらく、福は無事より大なるはなく、瑞、曷ぞ有年に加へむと。南極、祥を呈し、秋分を候して老人見はれ、西夷義を慕ひ、流沙を涉つて天馬來る。臣工と肅んで燕俎を陳するを嘉す。元侯を三夏に禮し、庶尹を九成に諧へ、御觴を宣示して、近臣の榮觀を聳え、天語を臚傳して、兩廡の歡聲を溢る。臣等、親しく昌辰に覩ひ、叨りに法部を塵す、諸言を擊壤に采り、瞽瞍の陳詩を助く、仰いで威顏を奉じ、敢て口號を進む。

霜霏二碧瓦一尙生レ煙、　霜は碧瓦に霏として、尙は煙を生じ、
日泛二彤庭一已集レ仙。　日は彤庭に泛んで、已に仙を集む。
靄靄四門多二吉士一、　靄靄として、四門、吉士多く、

【字解】【一】彤庭　赤い敷瓦の前庭。
【三】四門　四方の門。

熙熙萬國屢豐年。　熙熙として、萬國、屢ば豐年。

高秋爽氣明二宮殿一。　高秋の爽氣、宮殿に明かに、

元祐和聲入二管絃一。　元祐の和聲、管絃に入る。

菊有レ芳兮蘭有レ秀。　菊に芳あり、蘭に秀あり、

從臣誰和白雲篇。(三)　從臣、誰か和す白雲の篇。

【題義】續通鑑長編に「元祐二年九月丁卯、大に集英殿に宴す」とあつて、これは、その時の作である。

【詩意】霜は、殿上の碧瓦を溼して煙を生じ、日光は、赤い敷瓦の前庭に泛んで、百官は、すでに參著した。今しも、四門を開き、靄靄として吉士多く、加ふるに、萬國熙熙として、屢ば豐年を樂んで居る。淸爽なる秋氣の中に、宮殿は明かに見え透き、元祐の歌の和聲は、管絃に入つて、節調を調へる。菊には芳あり、蘭には秀あり、兩つながら、花を開ける折しも、侍從の臣下中、誰が漢武の白雲の篇に和して、その新作を進めるであらうか。

【餘論】例に依つて、この樂語の全文を左に掲げることにする。

敎坊致語

臣聞、天無レ言……敢進二口號一、

口號

霜霏二碧瓦一……白雲篇（以上、ここに揭載せし本文）

勾合曲

西風入レ律、開歌二秋報之詩一、南籥在レ廷、備擧二德音之器一、絃匏一倡、鐘鼓畢陳、上奉二宸嚴一、敎坊合レ曲、

勾二小兒隊一

皇慈下逮、磬二百執一以均歡、衆技畢陳、示二四方之同樂一、宜下進二垂髫之侶一、來修中乘翟之儀上、上奉二威顏一、敎坊小兒入レ隊、

隊名

登歌依二頌磬一、下管舞二成童一、

問二小童隊一

大君有レ命、肆陳二管磬之音一、童子何知、入籥二工師之末一、欲レ詳二來意一、宜二悉奏陳一、

小兒致語

臣聞、天行有レ信、歲得レ秋而萬寶成、君德無レ私、日將レ旦而羣陰伏、淸風應レ律、廣樂在レ庭、占二歲事於金穰一、望二天顏之玉粹一、沐二浴膏澤一、詠二歌升平一、恭惟、皇帝陛下、天縱聰明、日躋二聖知一、無二一

(三) 白雲篇　漢の武帝の秋風辭、秋風起兮白雲飛とあるを云ひ、その第三句に蘭有レ秀兮菊有レ芳とある。

物之失所、得萬國之驩心、雖擊壤之民、固何知於帝力、而後天之祝、亦各抒於下情、臣等幸以韶亂之年、得居仁壽之域、詠舞雩於沂水、久樂聖時、唱銅鞮於漢濱、空慙郢曲、願陳舞綴、少奉宸歡、未敢自專、伏候進止、

勾雜劇

朱紱玉瑄、屢進清音、華裾文竿、少停逸綴、宜進詼諧之技、少資色笑之歡、上悅天顏、雜劇來歟、

放小兒隊

回翔丹陛、已陳就日之誠、合散廣庭、曲盡流風之妙、歌鐘告闋、羽籥言旋、再拜天階、相將好去、

勾女童隊

錦薦雲舒、來九成之丹鳳、霞衣鱗集、隱三疊之靈鼉、上奉宸嚴、敎坊女童入隊、

隊名

香雲浮繡扆、花浪舞彤庭、

問女童隊

清禁深嚴、方縉紳之雲集、仙音嘽緩、忽霄珥之星陳、徐步香茵、悉陳來意、

女童致語

妾聞、鈞天廣樂、空傳帝所之游、閶闔清風、理絕庶人之共、夫何仙聖、靡隔塵凡、仰瞻八采之戚、共慶千齡之運、恭惟、皇帝陛下、乾健而粹、離明而文、規摹六聖之心、人將自化、儀刑文母之德、天且不違、樂茲大有之年、申以宗慈之會、虞韶既畢、夏籥將興、妾等分綴以須、審音而作、願俟工歌之闋、少同率舞之歡、未敢自專、伏取進止、

勾雜劇

枝鞉迭奏、干羽畢陳、洽聞舜樂之和、稍進齊諧之技、金絲徐韻、雜劇來歟、

放女童隊

羽觴湛湛、方陳既醉之詩、鼉鼓淵淵、復奏言歸之曲、裴蠻佇立、斂袂却行、再拜天階、相將好去、

黃樓致語口號　　黃樓の致語口號

百川反壑、五稼登場、初成百尺之樓、適及重陽之會、高高下下、既休畚鍤之勞、歲歲年年、共睹茱萸之美、恭惟、知府學士、民人所恃、憂樂以時、度餘力而取羨材、因備災而成勝事、起東郊之壯觀、破西楚之淫名、賓客如雲、來四方之豪傑、鼓鐘殷地、竦萬目之觀瞻、實與徐民、長爲佳話、

【訓讀】百川、壑に反り、五稼、場に登る、初めて、百尺の樓を成し、適ま重陽の會に及ぶ、高高下

下、すでに畚鍤の勞を休め、歲歲年年、ともに茱萸の美を睹る。恭しく惟みるに、知府學士、民人の恃むところ、憂樂、時を以てし、餘力を度つて羨材を取り、備災に因つて勝事を成し、東郊の壯觀を起し、西楚の淫名を破る。賓客、雲の如く、四方の豪傑を來し、鼓鐘、地に殷にして、萬目の觀瞻を竦て、實に徐民と、長く佳話を爲す。

一新柱石壯巖闉。　一たび柱石を新にして巖闉壯なり、
更値西風落帽辰。　更に値ふ、西風、落帽の辰。
不用游從誇燕子。　用ひず、游從、燕子に誇るを、
直將氣燄壓波神。　直に氣燄を以て波神を壓す。
山川尙遶當時國。　山川、尙ほ遶る當時の國、
城郭猶飄廣陌塵。　城郭、猶ほ飄る廣陌の塵。
誰凭闌干賞風月。　誰か闌干に凭つて、風月を賞す、
使君留意在斯民。　使君、意を留むるは斯民に在り。

【字解】【一】巖闉　莊嚴なる城門。【二】落帽辰　孟嘉の故事、前に壬寅重九の詩中に注して置いた。【三】燕子　關盼盼の居た燕子樓、前に和趙郎中見贈の詩中に注して置いた。【四】壓波神　王文誥の案に「熙寧十年、河、澶淵を決す、公、すでに城を完うして以聞す。明年、神宗、勅を降して奬諭し、錢を賜ひ、粟を發す。因つて、徐城を改築し、城門に就いて大樓を築り、堊するに黄土を以てし、これを名づけて黄樓といふ、土、能く水を剋するを以てなり」とある。【五】廣陌　廣い大道。

【題義】これは、元豐元年九月九日、徐州に在つた時に作つたので、この日、大に樂を黃樓に合して、この詞を歌つたとのことで、その形式は、例の樂語の前の部分だけで、前に見えた齋日口號と同じく、この以下、すべてさうである。第十七卷に九日黃樓の詩があつて、同時の作に係り、そして、樓の由來等は、詳しく、その題下に注して置いた。從前、これは、東坡が代作したものといひ、馮應榴の案に「致語口號、皆人に代つて作るところ、この篇、亦た然り、恭惟の語を玩んで見るべし」とあるが、又一說として、同案に「家大人云ふ、致語口號、恐らくは、竟に是れ、他人、先生に贈り、而して、誤つて本集に入るもの」とある。

【詩意】柱石を一新して城門を改造し、見事に出來上つたのが、卽ち黃樓で、今日、落成式を行ふに際し、恰も西風に帽を落す重陽の佳辰に當つた。されば、ともに游んで、燕子樓の故跡を誇るに及ばず、直に氣燄を以て波神を壓し、土を以て水を防ぐの意を寓してある。山川は、依然として、當時の國を遶れども、城郭の中には、大路の塵を飄して居る。誰が此處なる欄干に倚つて、風月を賞するか。使君の意を留めて憂勤されるのは、專ら斯民に在るから、區區として、嬉游を恣にするのは、宜しくないのであらう。

趙倅成伯母生日致語口號　趙倅成伯の母、生日の致語口號

昔年占夢、適當重九之佳辰、今日獻香、願祝大千之遐算、慶婦姑之同日、雜茱萸以稱觴、殺雞已效于龐公、翦髮敢賚於陶母、但某叨居樂部、忝預年家、不度蕪材、上塵口號。

【訓讀】 昔年、夢を占して、適ま重九の佳辰に當り、今日、香を獻じて、願はくは、大千の遐算を祝せむ。婦姑の同日を慶し、茱萸を雜へて、以て觴を稱ぐ。雞を殺して、已に龐公に效ひ、髮を翦つて敢て陶母に賚せむや。但だ、某、叨りに樂部に居り、忝くも、年家に預る、蕪材を度らずして、上塵口號。

今朝壽酒泛黃花。　今朝、壽酒、黃花を泛ぶ、
鬱鬱葱葱氣滿家。　鬱鬱葱葱、氣、家に滿つ。
願得唐兒(一)舞一曲。　願はくは、唐兒の舞一曲を得む、
莫嫌國小(二)向長沙。　嫌ふ莫れ、國小にして長沙に向ふを。

【字解】【一】唐兒　史記五宗世家に「長沙定王發の母唐姫は、故の程姫の侍者、唐兒、子を生む、因つて、命じて發といふ。孝景の前二年を以て、皇子を用つて長沙王となす。その母、微にして寵なきを以て、故に卑溼貧國に王たり」とある。【二】國小　漢書註に「後二年、諸王來朝す、詔あり、更る前んで壽を稱して歌舞せしむ、定王、但だ袖を張つて小しく手を擧ぐるのみ。左右、その拙を笑ふ。上、怪んで之を問ふ。對へて曰く、臣の國、小にして地狹く、回旋するに足らず、と。帝、乃ち武陵・零陵・桂陽を以て益す」とある。變爾閒評に「東坡の口號斷句に云ふ、願得唐兒舞一曲と。舞ふものは、乃ち長沙王發、唐兒に非ず、亦た東坡の錯誤なり」とある。

【題義】 これは、熙寧九年九月九日、密州に在つて作つたので、この時、趙成伯は、東坡の下役であつて、その唱和は、第十四卷に見えて居る。この詩は、その母の生日を賀して作つたので、後二句に唐兒の事を引用したのは、その出づるところ微なるに因つて、爲に嘲を解いたのである。

【詩意】 今日は、重陽の佳節であるのを幸に、お祝の酒に菊の花を浮べ、佳氣は、鬱鬱葱葱として、家に滿ちて居る。願はくは、むかしの唐兒に比すべき母刀自に、一さし、心ゆくばかり舞をして貰ひたいので、刀自の生まれが微賤だから、定王が長沙の小國に封せられたといふ樣に、倅まで、あまり立身しないといふ譯でもないことを知らせたい。

【餘論】 字解の項に述べた通り、唐兒舞一曲は、誤用に近いが、上の如く解すれば、意義の疏通しないことも無い。王文誥は更に辭を費し「漢書禮樂志、唐山夫人の樂は、卽ち安世樂、武德・文始・四時・五行の舞を分奏す。上句、唐兒舞一曲は、唐山の事を兼用するに係る。本集、これに似て、事實を串用すること、甚だ多く、合せ讀まば、その義、自ら見はれむ。但だ、肉を爛汗の裏に取り、氣を以て之に勝たば、竝にその雞豚狗彘たるを計らざるなり。亦た獨り、公、凡そ才大にして法密なるのみな

らす、筆雋に、手忙迫せざるものは、皆肯て句を逐うて一事を板用し、その平を以てせざるなり。鑾膈閒許に謂ふ、舞ふは乃ち長沙王發、唐兒に非ず、東坡の錯誤と。これ乃ち小兒強ひて解事を作す、今删る」といつて居るが、どうも、牽強に過ぎる嫌がある。

王氏生子致語口號　王氏生子の致語口號

人中五日、知織女之暫來、海上三年、喜花枝之未老、事協紫衙之夢、歡傾白髮之兒、好人相逢、一杯徑醉、伏以某人女郎、蒼梧仙裔、南海貢餘、憐謝端之早孤、潛炊相助、歎張鎬之沒興、遇酒輒歡、采楊梅而朝飛、擘青蓮而暮返、長新玉女之年貌、未厭金膏之掃除、萬里乘桴、已慕仲尼而航海、五絲繡鳳、將從老子以俱仙、東坡居士、尊俎千峰、笙簧萬籟、聊設三山之湯餅、共傾九醞之仙醪、尋香而來、苒天風之引步、此興不淺、炯江月之升樓。

【訓讀】 人中五日、織女の暫く來るを知り、海上三年、花枝の未だ老いざるを喜ぶ。事は紫衙の夢に協ひ、歡は白髮の兒を傾く。好人相逢ひ、一杯徑に醉ふ。伏して以みるに、某人女郎は蒼梧の仙裔、南海の貢餘、謝端の早く孤なるを憐み、潛に炊いで相助く、張鎬の沒興を歎じ、酒に遇へば輒ち歡ぶ。楊梅を采つて、朝に飛び、青蓮を擘いて、暮に返る。長しへに、玉女の年貌を新にし、未だ金膏の掃除を厭せず。萬里、桴に乘じ、すでに仲尼を慕うて海を航し、五絲の繡鳳、將に老子に從つて以て俱に仙せむとす。東坡居士、尊俎千峰、笙簧萬籟、聊か三山の湯餅を設け、共に九醞の仙醪を傾く、香を尋ねて來り、苒として天風の歩を引く、この興淺からず、炯たる江月の樓に升る。

羅浮山下已三春。　羅浮山下、すでに三春、
松筍穿階晝掩門。　松筍、階を穿つて、晝、門を掩ふ。
(一)太白猶逃水仙洞。　太白、猶ほ逃る水仙洞、
紫簫來問(二)玉華君。　紫簫、來り問ふ玉華君。
天容水色聊同夜。　天容水色、聊か夜を同じうし、
(三)髮澤膚光自鑑人。　髮澤膚光、自ら人を鑑す。
(四)萬戸春風爲子壽。　萬戸の春風、子の壽を爲す、

【字解】【一】太白　續仙傳に、「孫思邈、太白山に隱れて道を學ぶ、偶ま出でて、牧牛の童、小蛇を殺すを見る。すでに傷いて、血を出す。思邈、身を脫して之を救ひ、藥を以て封裹し、草中に放つ。復た月餘、出でて行く、一白衣の少年を見る、馬を以て之を載せ、倩に行くこと飛ぶが如く、一城郭に至る、儼として王者の居の若し。少年、思邈を延いて

坐看滄海起揚塵。　坐して看る、滄海の起つて塵を揚ぐるを。

入り、一端正の美貌を見る、給帽緋衣、侍從、甚だ衆し、俄頃にして、延いて宮闕の内に入り、中年の女子を見る、一青衣の小兒を領して出で、辭して曰く、この兒癡騃、人に傷損せらる、敎に賴つて害を免る、と。思邈、かつて青蛇を救ひした者記し、卽ち此は何の所たるを許るなり。潛に左右に問ふ。曰く、これ涇陽水府なり、と。留連三日、その子に命じ、龍宮藥方三十首を取つて、先生に與へよ、これ眞道者、以て世を濟ひ、人を救ふべしといふ。俄に復た僕馬を命じ、送つて山に歸らしむ、深く自ら異となす」とある。【三】玉華君　雲笈七籤に「天皇上尊は、是れ上淸眞人の典禁主、玉華仙女の母、故に玉華三元君と號するなり」とある。【四】髮澤膚光　左傳に「むかし、有仍氏、女を生む、黰黑にして甚だ美、光、以て鑑すべし」とあつて、その註に「髮膚の光色、以て人を照らすべし」とある。【五】萬戶春　酒の名、前に初到二惠州一の詩中自註に見えて居る。【六】滄海起揚塵　前に看潮の五絕中に注して置いた。

【題義】王文誥の案に「紹聖三年春中、王子霞の爲に作る。時惟れ、子霞、公に從つて南遷し、惠に居ること三載、ここに、子霞の生日に因つて作る。子霞、この年、年三十四、七月に至つて病んで沒す。致語に據れば、王氏は卽ち子霞なり。但し、子霞、惠に在つて、竝に未だ子を生ます、而して、致語の三山湯餅、亦た子を生むを指さす。口號を觀るに、子を生むに及ばずして、以て壽を爲して結となす、信に生日の詞たり、各註、皆、王氏生子口號に作り、本集、亦た王氏生子致語口號に作る、竝に誤れり、今改定す」とあつて、題を王氏生日致語口號と改めてある。

【詩意】君は、羅浮山下なる此處惠州に來て、すでに三年を過ぎ、その居る處には、松や筍が階を穿つて亂生し、そして、晝でも門を閉ぢて居る。君は、太白山に隱れて居た孫思邈が、涇陽水符に逃れしが如く、そして、紫簫を吹きつつ、玉華君に比すべき母君を訪はれるであらう。今日は、天容水色、ともに澄み渡つて居るから、君と共に、留賞、この夜を同じうすべく、そして、君の髪の澤と肌の色とは、照り輝いて、人を照らすばかり。その深く道に參透せしことは、言はずもがな。そこで、春風にゆかりある萬戶春の美酒を酌んで、君の爲に、誕生日の御祝をなし、滄海が淺くなつて、塵を揚ぐることなどは、冷眼に見過ごして、すこしも拘はぬことにして置かう。

寒食宴提刑致語口號　寒食の宴、提刑の致語口號

良辰易失、四者難并、故人相逢、五斗徑醉、況中年離合之感、正寒食清明之間、時乎不可再來、賢者而後樂此、恭惟提刑學士、才本天授、學爲人師、事業存乎斯民、文章蓋其餘事、望之已試於馮翊、翁子暫還於會稽、知府學士、接好鄰邦、締交册府、莫逆之契、義等於天倫、不腆之辭、意勤於地主、力講兩君之好、可無七字之詩、欲使異時傳爲盛事。

【訓讀】良辰失ひ易く、四者并せ難し、故人相逢ふ、五斗徑に醉ふ。況んや、中年離合の感、正に寒食清明の間なるをや。時か、再び來るべからず、賢者にして後に此を樂む。恭しく惟みるに、提刑

學士、才、本と天授、學は人の師となり、事業、斯民に存し、文章、蓋し其餘事。望之、すでに馮翊に試みられ、翁子、暫く會稽に還る。知府學士、好を鄰邦に接し、交を冊府に締し、莫逆の契、義、天倫に等しく、不腆の辭、意、地主に勤む。兩君の好を講ずるを力め、七字の詩なかるべけむや、異時をして傳へて盛事と爲さしめむと欲す。

雲間畫鼓疊春雷、　雲間の畫鼓、春雷を疊み、
千騎尋芳(一)戲馬臺。　千騎、芳を尋ぬ戲馬臺。
半道已逢山(二)簡醉、　半道、すでに逢ふ山簡の醉ふに、
萬人爭看謫(三)仙來。　萬人、爭うて看る謫仙の來るを。
(四)淮西按部威尤凜、　淮西、部を按じて、威、尤も凜、
(五)歷下懷仁首重回。　歷下、仁を懷うて、首、重ねて回らす。
還把(六)去年留客意、　還た去年、客を留むるの意を把つて、
折花臨水更徘徊。　花を折り、水に臨んで、更に徘徊。

【字解】【一】戲馬臺　本集徐州上皇帝書に「その城、三面水に阻まれ、樓堞の下、汴泗を以て池となす。ひとり、その南、車馬を通ずべし、而して、戲馬臺在り、その高さ十仞、廣袤百步」とある。【二】山簡醉　前に東湖の詩中に注して置いた。【三】謫仙來　前に讀杜詩の詩中に注して置いた。王文誥の案に「李公擇、徐に至る、公、方に出でて蝗を督す。公擇、三詩を爲り、立どころに公を促して還る。故に、答詩に云ふ、簿書鞞鼓不知春、佳句相呼賴故人、寒食德公方上冢、歸來誰主復誰賓」と。この時、正にその初めて到りし時の情事を道ふ」とある。【四】淮西按部　王文誥の案に「時に、公擇、齊州より淮南西路提點刑獄に徙り、司を舒州に置く、卽ち今の皖江なり」とある。【五】歷下懷仁　歷下は今の濟南、王文誥の案に「公、この日、公擇と約して飲む詩に云ふ、齊人愛公如子產、見嗜臥路呼不還」と。宋史李常傳「齊に盜多く、半歲の間、七百人を誅す、奸、匿るるところなし」とある。【六】去年留客　東坡は熙寧九年十二月を以て、密州より河中府に徙らむとし、十年正月、齊州に至り、その時、公擇を訪うた。そこで、去年留客といつたのである。

【題義】元豐元年三月、李公擇は、齊州を罷めて、淮南西路提點刑獄に轉じ、その赴任の途中、徐州に立寄つて、東坡を訪問すると、東坡は、爲に盛宴を張り、公擇をして、儒生の酸氣を一洗すといはしめた位、そこで、東坡は更に此詩を作つたのである。

【詩意】君の此地に來るを迎へて、雲間に轟く畫鼓は、春雷を疊めるが如く、やがて、千騎勢よく乘り込んで、芳を尋ねつつ、名だたる戲馬臺に登つた。その有樣は、半道にして山簡の醉へるに逢ふが如く、人人は、李白の如き謫仙人が來たかと思つて、爭つて看とれて居る。君は、今度、淮西の提刑に成つて、その所管を巡按するとのことで、威風凜凜として見え、歷下の人民は、仁政を懷うて忘れず、君も亦た重ねて首を回らすことであらう。去年、君に引き留められて、御世話に成つた御厚意が思ひ出で、ここに、花を折り、水に臨んで、去りがてにして居る次第である。

309
65

終